

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

鳥取県鳥取市

# 本高古墳群

本高古墳群

鳥取県教育委員会

2010

鳥取県教育委員会

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

鳥取県鳥取市

# 本高古墳群

2010

鳥取県教育委員会



調査地遠景（北から）



前方後円墳（14号墳）の側面観（北から）



1 調査地上空から鳥取平野を望む



2 14号墳 調査状況（北東から）



1 14号墳 墳丘検出状況（東から）



2 14号墳墳頂部埋葬施設1・2 調査状況（俯瞰：写真上が西）



1 北支群墳丘検出状況（北東から）



2 12号墳埋葬施設 土器枕, 鉄剣（北西から）



1 14号墳埋葬施設3 小型仿製内行花文鏡出土状況（南東から）



2 14号墳埋葬施設3 出土玉類





1 13号墳埋葬施設1・2 調査状況（南西から）



2 17号墳埋葬施設1・2 検出状況（東から）



17号墳埋葬施設2出土土器棺

# 序

山陰自動車道は鳥取市を起点とし、山口県美祢市を終点とする、延長約380キロメートルの高速道路であり、国土交通省により整備が進められているところです。

鳥取県内の事業区間である「鳥取西道路」は、鳥取市本高から同市青谷町青谷を結ぶ延長19.3キロメートルの区間であり、その改築事業に伴う事前の発掘調査を平成20年度から当教育委員会が実施しています。平成21年度からは、財団法人鳥取県教育文化財団に現地での発掘作業や出土遺物等の整理作業、報告書作成を委託して調査を進めてきました。

このうち本高古墳群では、古墳時代前期から中期にかけての古墳7基を調査し、本高14号墳が山陰地方最古級の前方後円墳であることが明らかになるなど重要な発見がありました。本書はその発掘調査成果をまとめたもので、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。また、本高14号墳は国土交通省の御理解と御協力により現地で保存されることが決定し、これから将来的な保存・活用の方策を検討していくことになります。

また、発掘調査成果は現地説明会のみならず、地元公民館での講演会ならびに展示会の開催を通し、地元を中心として多くの方々に紹介してきました。このような取り組みは、先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することとして、現在に生きる私たちの重要な責務と考えております。

本書をまとめるに当たり、国土交通省鳥取河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御助言、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成22年9月

鳥取県教育委員会

教育長 横 濱 純 一



# 例 言

- 1 本書は、一般国道9号（鳥取西道路）改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所から委託を受け、平成21年度に実施した本高古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 本高古墳群の所在地は、鳥取市本高字神子ヶ谷ノ一他。調査面積は4,720㎡。  
現地調査は、平成21年6月に表土掘削に着手し、平成21年12月に終了した。遺物整理は、現地終了後引き続き3月末日まで行った。
- 3 本調査の略号は「本高古墳群09」である。
- 4 調査は、財団法人鳥取県教育文化財団の中森、岡戸、田中、大川を担当とし、安西工業株式会社の支援を受けて行った。安西工業株式会社の現場代理人は、榊 孝治、支援調査員は山村貴輝（7月まで）、久富正登、入江剛弘、有馬啓介（7月から）、調査補助員は黒田和英（10月）、山本雅則（10月から）、東 貴之（11月から12月まで）である。
- 5 遺跡の図面作成は、原則として安西工業株式会社が担当し、財団法人鳥取県教育文化財団が補佐した。
- 6 遺跡の写真撮影は、安西工業株式会社と財団法人鳥取県教育文化財団が行った。
- 7 遺物実測及び浄書は、財団法人鳥取県教育文化財団の文化財主事と整理作業員が行った。
- 8 遺物の写真撮影は財団法人鳥取県教育文化財団の文化財主事が行った。
- 9 本書の執筆は、財団法人鳥取県教育文化財団の調査担当者である岡戸、田中、大川で分担し、大川が編集した。
- 10 本調査に係る図面、写真や出土した遺物については、鳥取県埋蔵文化財センターで保管しており、広く利用されることを希望する。
- 11 調査では、渡邊貞幸（島根大学名誉教授）、高田健一（鳥取大学地域学部）、西村 強（鳥取大学工学部）の各先生に現地にて調査指導を頂いた。また、鳥取県文化財保護審議会委員（史跡・埋蔵文化財部会）の各先生にも現地において調査指導を頂いた。
- 12 鉄製品のレントゲン写真については鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得た。
- 13 鏡の復元、保存処理については、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
- 14 現地及び報告書の作成に当たっては、下記の方々、機関から御指導、御助言、御支援いただいた。記して感謝いたします。

岩本 崇（島根大学）、植野浩三（奈良大学）、加川 崇（鳥取市教育委員会）、工楽善通（大阪府立狭山池博物館）、高野 学（羽曳野市教育委員会）、高橋公一（高槻市教育委員会）、高橋浩二（富山大学）、玉井 功（大阪府教育委員会）、田中清美（財団法人大阪市文化財協会）、谷口恭子（鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財センター）、中山和之（鳥取市）、東方仁史（鳥取県立博物館）、前田 均（鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財センター）、水野正好（財団法人大阪府文化財センター）、山上 弘（大阪府教育委員会）、山本三郎（兵庫県立考古博物館）、渡辺丈彦（文化庁）、松尾正彦（本高地区区長）（順不同）

# 凡 例

- 1 本遺跡および本書では、国土座標第V系により地区割り設定を行っている。  
平面図では方位が座標北を示し、図中にはXとY座標軸がm単位で表記される。
- 2 標高は、海拔標高で示した。
- 3 本報告書に使用した地図は、国土地理院発行（1/25,000、大日本帝国陸地測量部作成1/20,000地形図）、鳥取市作成都市計画図（1/5,000）を縮小、加筆して使用した。
- 4 古墳番号は鳥取市の遺跡台帳を踏襲する。  
埋葬施設の番号については、前後関係や位置を勘案して付加した。また、当初埋葬施設と認識していなかった遺構については、埋葬施設と判明した時点で新たな遺構番号に変更し、旧番号と併用した。旧番号と新番号の対照については第三章に示した。  
古墳と直接関連しない遺構については、番号は連番とし、その後ろに種類を付加して表現した。
- 5 本書で使用する土壌色は、小山正忠、竹原秀雄編著『新版標準土色帖』を使用して命名した。
- 6 遺構平面図についての縮尺は統一していない。
- 7 古墳規模の計測は近藤義郎編『前方後円墳集成』に準じた。
- 8 遺物は出土地点、種類を問わず通し番号を付し、挿図と写真図版に共通する。  
縮尺は土器、石製品は1/4、鉄製品は1/3、玉類は1/1で示した。  
土器の断面については、土師器は白塗り、須恵器は黒塗りとした。また、赤彩の範囲、石器の磨面は薄い網掛けで表現した。
- 9 本書の中で研究の現状から勘案して不適当な表現がみられた場合は、すべて報告者の責に帰するが、他意のあるものではない点御容赦願いたい。
- 10 本書における遺構、遺物の時期決定は、以下の文献を参考としている。

## 【参考文献】

谷口恭子、前田均1991「第4章 まとめ 第1節 遺物について 土器」『岩吉遺跡Ⅲ—中小河川改修事業大井手川改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』鳥取市教育委員会、鳥取市遺跡調査団

谷口恭子2000「因幡における弥生時代後期から庄内式併行期の土器について」『庄内式土器研究 XXⅡ』庄内式土器研究会

田辺昭三編1981『須恵器大成』角川書店

森岡秀人、西村 歩編2006『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター

# 目次

序文

例言

凡例

目次・挿図目次・表目次・付図・写真目次・巻頭図版目次・図版目次

<b>第I章 調査の経緯</b> .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	(岡戸・大川) 1
第2節 調査の経過 .....	(岡戸) 3
第3節 調査体制 .....	(岡戸) 7
<b>第II章 遺跡の位置と歴史的環境</b> .....	(大川) 8
第1節 本高古墳群の位置 .....	8
第2節 本高古墳群の地理的環境 .....	9
第3節 本高古墳群の歴史的環境 .....	9
<b>第III章 調査の方法</b> .....	(岡戸) 15
第1節 現地調査 .....	15
第2節 整理作業 .....	18
<b>第IV章 調査の成果</b> .....	(大川) 20
第1節 調査の概要と基本層序 .....	20
第1項 調査の概要 .....	20
第2項 基本層序 .....	25
第2節 12・22号墳の調査 .....	(岡戸) 27
第1項 概要 .....	27
第2項 12号墳 .....	31
第3項 22号墳 .....	35
第4項 出土遺物と築造時期 .....	39
第3節 13・14・19号墳の調査 .....	43
第1項 概要 .....	(大川) 43
第2項 14号墳 .....	(大川・岡戸) 44
第3項 19号墳 .....	(岡戸) 71
第4項 13号墳 .....	(岡戸) 77
第5項 出土遺物と築造時期 .....	(大川) 89

第4節 17・18号墳の調査	95
第1項 概要	(岡戸) 95
第2項 17号墳	(田中) 97
第3項 18号墳	(田中) 105
第4項 出土遺物と築造時期	(田中) 113
第5節 その他の遺構	(大川) 115
第1項 概要	115
第2項 遺構外出土遺物	117

## 第V章 総括 118

第1節 本高古墳群の展開	118
第1項 はじめに	(岡戸) 118
第2項 古墳出土土器の検討	(大川) 118
第3項 立地	(岡戸) 121
第4項 墳丘と群の構成	(岡戸) 122
第5項 埋葬施設	(岡戸) 124
第6項 副葬品	(岡戸) 128
第7項 まとめにかえて ～ 本高古墳群の展開 ～	(岡戸) 129
第2節 本高14号墳の歴史的評価	(大川) 130
第1項 はじめに	130
第2項 築造過程と墳丘の復元	130
第3項 鳥取平野における前期古墳の動向	134
第4項 まとめにかえて ～ 因幡における前方後円墳の導入 ～	138

## 第VI章 結語 (大川) 142

写真図版

抄録

### 挿図目次

第1図 鳥取西道路路線図と調査地の関係	2	第9図 調査前の本高古墳群(調査前測量図)	21
第2図 遺跡の位置(鳥取市の位置)	8	第10図 本高古墳群全体図(遺構配置図)	23
第3図 遺跡周辺の地形	10	第11図 古墳の立地(墳丘断面図)	24
第4図 遺跡分布図	12	第12図 堆積の状況	26
第5図 調査地周辺の古墳群	14	第13図 12・22号墳 墳丘 平, 断面図	28
第6図 調査地区割り模式図	15	第14図 12号墳 墳丘 平, 断面図	29～30
第7図 調査地の呼称, 地区割りと 地層観察用畔位置図	16	第15図 12号墳 埋葬施設 平, 断, 立面図	33
第8図 遺構養生の範囲	19	第16図 12号墳 埋葬施設 遺物出土状況図	34
		第17図 22号墳 墳丘 平, 断面図	36



第18図	22号墳 周溝内 遺物出土状況図	37	第43図	13号墳 埋葬施設 1 断面図	81
第19図	22号墳 埋葬施設 平, 断面, 立面図	38	第44図	13号墳 埋葬施設 1 平, 立面図	83 ~ 84
第20図	12・22号墳 埋葬施設 出土遺物 (鉄製品, 土器)	40	第45図	13号墳 埋葬施設 2 平, 立面図	86
第21図	12・22号墳 周溝 出土遺物 (鉄製品, 土器, 石製品)	41	第46図	13号墳 埋葬施設 2 遺物出土状況図	87
第22図	13・14・19号墳 墳丘 平, 断面図	45 ~ 46	第47図	14号墳 埋葬施設 3 出土遺物 (鏡, 玉類)	90
第23図	14号墳 墳丘 平, 断面図	47	第48図	13号墳埋葬施設 1・2, 14号墳埋葬施設 4 ~ 6 14号墳周溝 出土遺物 (土器)	91
第24図	14号墳 旧表土層, 盛土の範囲	49	第49図	13号墳埋葬施設 2, 14号墳埋葬施設 4, 19号墳埋葬施設 出土遺物 (鉄製品)	92
第25図	14号墳 壇状部の盛土状況図	50	第50図	17・18号墳 墳丘 平, 断面図	96
第26図	14号墳 後円部周溝 土層堆積状況図	51	第51図	17号墳 墳丘 平, 断面図	99 ~ 100
第27図	14号墳 後円部墳頂部 埋葬施設確認トレンチ配置図	53	第52図	17号墳 埋葬施設 1 平, 断面図	101
第28図	14号墳 後円部墳頂 埋葬施設 1・2 検出状況と断面図	54	第53図	17号墳 埋葬施設 1 平, 立面図	103 ~ 104
第29図	14号墳 後円部墳頂 埋葬施設 2 断面図 .....	55	第54図	17号墳 埋葬施設 2 平, 断面図	105
第30図	14号墳 前方部 埋葬施設 3・4 平, 断面図	57 ~ 58	第55図	18号墳 墳丘 平, 断面図	107
第31図	14号墳 前方部 埋葬施設 3 平, 断, 立面図	60	第56図	18号墳 埋葬施設 1 平, 断, 立面図	109
第32図	14号墳 前方部 埋葬施設 3 遺物出土状況図 (1 / 5)	61	第57図	18号墳 埋葬施設 2 平, 断面図	110
第33図	14号墳 前方部 埋葬施設 4 平, 面図	62	第58図	18号墳 埋葬施設 2 平, 立面図	111
第34図	14号墳 前方部 埋葬施設 4 断面, 遺物出土状況図	63	第59図	17号墳埋葬施設 2 出土遺物 (土器)	112
第35図	14号墳 周辺部 埋葬施設 5 平, 断, 立面, 遺物出土状況図	65 ~ 66	第60図	17号墳埋葬施設 1・2, 18号墳埋葬施設 1・2, 18号墳周溝 出土遺物 (鉄製品, 土器)	113
第36図	14号墳 周辺部 埋葬施設 6 平, 断面, 遺物出土状況図	69 ~ 70	第61図	40土坑 平, 断面図	115
第37図	19号墳 墳丘 平, 断面図	72	第62図	ピット群平面図	116
第38図	19号墳 墳丘 断面図	73	第63図	その他の出土遺物 (土器, 石器, 鉄製品) .....	117
第39図	19号墳 埋葬施設 平, 断面図	75 ~ 76	第64図	本高古墳群 埋葬施設関係出土土器	119
第40図	13号墳 墳丘 平面図	78	第65図	本高古墳群出土土器編年	120
第41図	13号墳 墳丘 断面図	79	第66図	本高古墳群全体図	123
第42図	13号墳 埋葬施設 1・2 平, 断面図	80	第67図	本高古墳群 埋葬施設	125
			第68図	本高古墳群 埋葬施設出土副葬品	127
			第69図	14号墳 墳丘三次元 鳥瞰図および周溝, 墳丘の築造	131
			第70図	14号墳復元案	133
			第71図	鳥取平野の前方後円墳分布	137
			第72図	本高古墳群全体図…写真図版裏	

## 表 目 次

表 1	出土土器を中心とした古墳の変遷	120	表 4	鳥取平野の主な前方後円墳	137
表 2	本高古墳群一覧表	123	表 5	山陰地方の主な前方後円墳	139
表 3	鳥取平野における前期古墳群と要素	136			

## 付 図

付図 1	本高古墳群全体図	付図 2	14号墳 墳丘 平, 断面図
------	----------	------	----------------

## 写真目次

写真1	調査地から見た中国横断自動車道 姫路鳥取線……………	1	写真5	現地指導の様子（10月1日）……………	6
写真2	現地説明会資料……………	5	写真6	14号墳 埋葬施設3出土小型仿製内行花文鏡 ……………	90
写真3	広報誌「鳥取西道路の遺跡を掘る」 （本高古墳群の誌面）……………	6	写真7	14号墳 埋葬施設3出土小型仿製内行花文鏡 （部分）……………	90
写真4	現地説明会の様子（11月28日）……………	6			

## 巻頭図版目次

巻頭図版1	調査地遠景（北から）			出土状況（北西から）	
巻頭図版2	14号墳の側面観（北から）		巻頭図版6	1 14号墳埋葬施設3 小型仿製鏡出土状況（南東から）	
巻頭図版3	1 調査地から鳥取平野を望む 2 14号墳調査状況（北東から）		2 14号墳埋葬施設3出土玉類		
巻頭図版4	1 14号墳墳丘検出状況（東から） 2 14号墳墳頂部埋葬施設1・2 調査状況（俯瞰：写真上が西）		巻頭図版7	1 13号墳埋葬施設1・2調査状況 （南西から） 2 17号墳埋葬施設1・2検出状況 （東から）	
巻頭図版5	1 北支群墳丘検出状況（北東から） 2 12号墳埋葬施設土器枕，鉄剣		巻頭図版8	17号墳埋葬施設2出土土器棺	

## 図版目次

図版1	1 調査地遠景（調査前，南西から） 2 調査地遠景（調査後，南西から）		2 22号墳周溝出土遺物		
図版2	1 古墳群調査状況（俯瞰：写真上が北） 2 北支群調査状況（北東から）		3 22号墳周溝土層断面（東から）		
図版3	1 12・22号墳墳丘検出状況（北東から） 2 12・22号墳墳丘検出状況（南東から）		図版9	1 22号墳埋葬施設検出状況（南西から） 2 22号墳埋葬施設棺内遺物出土状況 （北東から） 3 22号墳埋葬施設鉄剣出土状況（北東から） 4 22号墳埋葬施設出土鉄剣	
図版4	1 12号墳墳丘土層断面（北から） 2 12号墳墳頂部調査状況（南西から）		図版10	1 14号墳墳丘（調査前，北から） 2 14号墳墳丘検出状況（北から）	
図版5	1 12号墳埋葬施設棺痕跡検出状況 （南東から） 2 12号墳埋葬施設棺内遺物出土状況 （北西から） 3 12号墳埋葬施設鉄剣出土状況（東から） 4 12号墳埋葬施設土器枕，鉄剣出土状況 （西から） 5 12号墳埋葬施設鉄鏃出土状況（北東から） 6 12号墳埋葬施設刀子出土状況（南西から）		図版11	1 14・19・13号墳調査状況 （俯瞰：写真上が南） 2 14号墳墳丘検出状況（北東から）	
図版6	1 12号墳埋葬施設出土遺物 2 12号墳埋葬施設出土土器 3 12号墳周溝出土土器		図版12	1 14号墳後円部検出状況（北東から） 2 14号墳前方部からみた後円部（東から）	
図版7	1 22号墳墳丘，周溝検出状況（南西から） 2 22号墳墳丘検出状況（南から） 3 22号墳調査状況（南西から）		図版13	1 14号墳墳頂壇状部検出状況（東から） 2 14号墳北側くびれ部検出状況（南東から） 3 13・14号墳周溝および後円部検出状況 （南西から）	
図版8	1 22号墳周溝遺物出土状況（南東から）		図版14	1 13・14号墳周溝土層断面（南から） 2 13・14号墳周溝北側検出状況（南東から） 3 13・14号墳周溝南側検出状況（東から）	
			図版15	1 13・14号墳周溝（南から） 2 13・14号墳周溝出土遺物 3 14号墳前方部北側斜面土層断面（北西から）	

	4	14号墳前方部前端盛土,旧表土(東から)	図版24	1	19号墳墳丘検出状況(南西から)
	5	14号墳前方部前端斜面土層断面(南から)		2	19号墳埋葬施設棺痕跡検出状況(西から)
図版16	1	14号墳墳頂墳状部検出状況(南東から)		3	19号墳埋葬施設棺内調査状況(西から)
	2	14号墳埋葬施設1・2調査状況 (俯瞰:写真上が西)	図版25	1	19号墳埋葬施設掘方完掘状況(西から)
図版17	1	14号墳埋葬施設1・2調査状況 (南東から)		2	19号墳埋葬施設棺痕跡,遺物出土状況 (西から)
	2	14号墳埋葬施設2棺内埋土検出状況 (北西から)		3	19号墳棺内出土鉄製品
	3	14号墳埋葬施設2土層断面(北から)		4	19号墳埋葬施設完掘状況(北から)
	4	14号墳埋葬施設2土層断面(南東から)	図版26	1	13号墳墳丘検出状況(南東から)
図版18	1	14号墳前方部埋葬施設調査状況 (俯瞰:写真上が西)		2	13号墳埋葬施設1・2調査状況 (南西から)
図版19	1	14号墳埋葬施設3・4調査状況(東から)		3	13号墳埋葬施設1板石検出状況 (南西から)
	2	14号墳埋葬施設3棺内埋土土層断面 (北西から)	図版27	1	13号墳埋葬施設1板石下部検出状況 (南西から)
	3	14号墳埋葬施設4棺内埋土土層断面 (北西から)		2	13号墳埋葬施設1南辺小口(西から)
図版20	1	14号墳埋葬施設3棺内埋土検出状況 (東から)		3	13号墳埋葬施設1掘方完掘状況 (南西から)
	2	14号墳埋葬施設3遺物出土状況(東から)		4	13号墳埋葬施設1遺物出土状況 (南西から)
	3	14号墳埋葬施設3 小型仿製内行花文鏡,玉類出土状況 (東から)		5	13号墳埋葬施設1出土土器
図版21	1	14号墳埋葬施設3管玉出土状況 (南東から)	図版28	1	13号墳埋葬施設2棺内遺物出土状況 (南西から)
	2	14号墳埋葬施設3小口痕検出状況 (東から)		2	13号墳埋葬施設2棺内遺物出土状況 (西から)
	3	14号墳埋葬施設4完掘状況(東から)		3	13号墳埋葬施設2南小口痕検出状況 (南西から)
	4	14号墳埋葬施設3完掘状況(東から)	図版29	1	13号墳埋葬施設2出土遺物 13号墳埋葬施設2出土鉄剣 (1:切先表,繊維痕,2:切先裏,木痕跡, 3:柄,目釘穴,繊維痕)
	5	14号墳埋葬施設4鉄製品出土状況 (南東から)	図版30	1	17・18号墳墳丘検出状況(北から)
	6	14号墳埋葬施設4土器出土状況 (南東から)		2	17・18号墳墳丘検出状況(西から)
	7	14号墳埋葬施設4出土遺物	図版31	1	17号墳墳丘検出状況(東から)
図版22	1	14号墳埋葬施設5完掘状況(北東から)		2	17号墳墳丘土層断面(南東から)
	2	14号墳埋葬施設5灰層検出状況 (北東から)		3	17号墳埋葬施設1箱式石棺検出状況 (東から)
	3	14号墳埋葬施設5出土土器	図版32		17号墳埋葬施設1蓋石除去状況(東から)
	4	14号墳埋葬施設5土器出土状況 (南西から)	図版33	1	17号墳埋葬施設1棺内調査状況(東から)
図版23	1	14号墳埋葬施設6棺内調査状況 (北東から)		2	17号墳埋葬施設1遺物出土状況 (北東から)
	2	14号墳埋葬施設6掘方完掘状況 (北東から)		3	17号墳埋葬施設1出土鉄製品
	3	14号墳埋葬施設6土器出土状況 (俯瞰:写真上が南西)		4	17号墳埋葬施設1・2調査状況 (北東から)
	4	同上(北東から)	図版34	1	17号墳埋葬施設2土器棺検出状況 (南から)
	5	14号墳埋葬施設6出土土器		2	17号墳埋葬施設2土器棺内(東から)
				3	17号墳周溝出土土器
				4	17号墳周溝出土土器

- 図版35 1 18号墳墳丘検出状況（西から）  
2 18号墳埋葬施設1・2 検出状況（西から）
- 図版36 1 18号墳埋葬施設1・2 調査状況（西から）  
2 18号墳埋葬施設1 棺内短軸土層断面  
（北東から）  
3 18号墳埋葬施設1 土器出土状況  
（北東から）  
4 18号墳埋葬施設1 土器出土状況（南から）  
5 18号墳埋葬施設1 出土土器

- 図版37 1 18号墳埋葬施設2 蓋石検出状況（西から）  
2 18号墳埋葬施設2 棺内検出状況（東から）  
3 18号墳埋葬施設2 土器出土状況（東から）  
4 18号墳埋葬施設2 出土土器  
5 18号墳埋葬施設2 完掘状況（東から）
- 図版38 1 40土坑完掘状況（南から）  
2 ピット群完掘状況（俯瞰：写真上が南）  
3 遺構外出土遺物

## 第I章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯（第1図）

本高古墳群は、鳥取市を流れる千代川下流域西岸の丘陵部に展開する古墳群で、一般国道9号（鳥取西道路）の改築工事に伴って平成21（2009）年度に発掘調査を実施した。

山陰地方では、観光、物流などの地域活性化をめざした幹線道路ネットワークの形成、交通渋滞の解消、緩和、災害時の緊急輸送路確保などを目的とし、中国横断自動車道路姫路鳥取線や山陰自動車道と言った国土開発幹線道路の整備が進められている。鳥取市本高と鳥取市青谷町青谷を結ぶ全長19.3kmの鳥取西道路も山陰自動車道の一環となる事業である。

鳥取西道路の計画地内には多くの遺跡が存在している。建設に先立って、埋蔵文化財の取扱いについては国土交通省、鳥取県、鳥取市により協議がもたれ、まず、計画地内に存在する遺跡の状況を把握する必要性が確認された。これを受けて、平成17年度からは、計画地内の踏査による調査や鳥取市教育委員会による試掘、確認調査が逐次行われている。

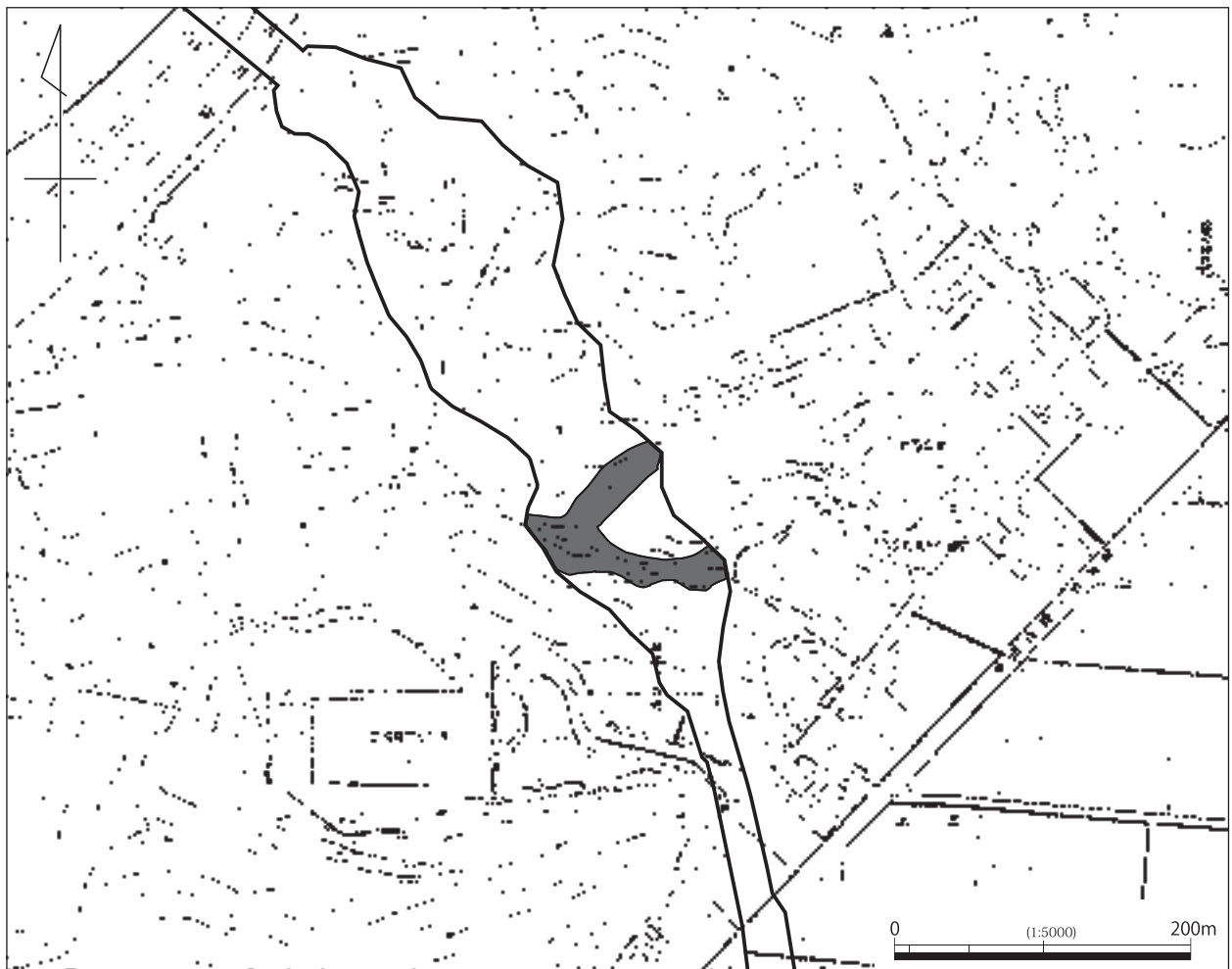
本高古墳群も、これまでに16基の古墳が確認されていたが、踏査の結果、さらに3基の古墳と低いながら古墳の墳丘状の盛り上がりが見られたため、より詳細な情報を得るため、平成20年度に鳥取市教育委員会により試掘、確認調査が行われた（註1）。

その結果、事業地内には大小8基の古墳が存在することが明らかとなった。この取扱いについては再度、国土交通省、鳥取県、鳥取市で慎重に協議を重ねられ、文化財保護法第94条による手続きを踏まえ、平成21年度に鳥取県教育委員会が、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所の委託を受けて発掘調査を実施した。発掘調査に当たっては、現場発掘作業、出土遺物の整理及び報告書の作成を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。さらに発掘作業、調査記録作業等について安西工業株式会社に発掘調査支援を再委託した。



（アミカケ部分が本高弓ノ木遺跡）

写真1 調査地から見た中国横断自動車道姫路鳥取線



第1図 鳥取西道路路線図と調査地の関係

## 第2節 調査の経過

### 事前調査

調査は、準備も含めて平成21（2009）年4月から開始した。調査地は、平成21年3月に国土交通省によって伐木作業が終了しており、まず詳細な現地の観察を行なった。

その結果、伐木以前にはわからなかったことが明らかとなった。特に14号墳は、側面からの観察やくびれ部状の地形などを確認したことにより、前方後円墳の可能性を想定できたことは、その後の調査を進める上で大きな成果となった。

また、12号墳周辺における墳丘状の盛り上りや、平坦面の存在、円墳とされていた17・18号墳が方墳である可能性が高くなったことなども、伐木後に得られた新知見である。

### 測量調査

本格的な調査は、5月に民間調査組織との調査支援業務契約が整った後開始した。

まず、現地確認を行い、伐木材の片づけや草刈り作業を実施したが、この段階で古墳の墳裾が明確となるものもあった。その後ただちに、基準点及び水準点、調査グリット杭を現地に設置し、5月12日に航空写真を利用した調査前の地形測量を行なった。しかし、写真測量だけでは地形や古墳の現況について表現することには限界があり、後日できあがった素図を参考に詳細な微地形等の補足測量を行なった。

完成した測量図（第9図）を検討すると、調査区南側に17号墳を中心に3基、中央部に14号墳を中心に3基、北側には12号を中心に3基、大小計9基の古墳の存在が推測された。また、前方後円墳の可能性が想定された14号墳については、北側のくびれ部が明瞭に観察できたほか、前方部端についても尾根地形をカットした状況が確認できた。

### 墳丘の調査

この測量成果をもとに地層観察用畔を設定し、6月8日から人力による表土掘削に着手した。

表土掘削は北東、北西端から着手し、随時、地層観察用畔に沿ってトレンチを掘削し、堆積状況を把握しながら調査を進めた。

このトレンチによって、尾根頂部には堆積が少なく、斜面下方に向かって徐々に地層の堆積が厚くなることが確認された。しかし、調査を進める上で基準となる古墳築造以前の地表面、土壌化した旧表土層の存在がなかなか確認できず、着手当初はより慎重な掘削となった。

7月になると、古墳がその姿を徐々にあらわしてきた。調査地北側では、12号墳の周溝が確認されたほか、新たに22号墳が12号墳に接するように検出された。調査地中央部では、13・14号墳の周溝周辺の調査を重点的に行い、周溝内の堆積の状況を把握した。

8月からは、14号墳の調査を中心に行ない、当墳は尾根地形を巧みに利用して墳丘を整形した全長63mの前方後円墳と確認でき、墳形などの特徴から築造時期は古墳時代前期と推測した。また、山陰地方での前方後円墳の調査事例が少ないことから、より慎重に調査を行うため、9月16日には鳥取大学准教授 高田健一先生に、10月6日には島根大学 名誉教授 渡邊貞幸先生に、12月3日には鳥取県文化財保護審議会委員（史跡・埋蔵文化財部会）に古墳に関する現地指導、9月30日には鳥取大学准教授 西村強先生に地滑りに関する地形の現地指導をいただいた。また、明けて2月18日には文化庁 渡辺丈彦文化財調査官に古墳群の評価について指導をいただいた。

10月前半には、調査区南東端の17・18号墳を除き、各古墳の墳丘が検出され、10月21日に1回目

の航空撮影を行ない、墳丘図も作成した。このような作業進捗の中、国土交通省に対し、14号墳の現地保存を要望するよう検討していたことから、14号墳後円部の埋葬施設については、埋葬施設掘方の検出と棺構造を把握するための最小限な調査に留めることとなった。

### 埋葬施設の調査と現地説明会の開催

埋葬施設の調査は各古墳墳丘検出状況の航空撮影終了後、10月後半から随時行った。また、17・18号墳周辺の調査も調査体制を強化してこの時期から着手した。

埋葬施設からは、枕に転用した土器や鉄製品が出土し、時期決定の大きな手掛かりを得ることができた。特に、14号墳の前方部くびれ部平坦面に造られた埋葬施設5からは小型丸底壺が出土し、14号墳の築造時期が古墳時代前期中葉までさかのぼることが推測され、当墳が、山陰地方における出現期の前方後円墳である蓋然性が高くなった。

このような調査成果を受け、11月28日には現地説明会による一般公開を行なった。現地説明会当日はあいにくの雨模様であったが、地元を中心に123名の参加者があった。なお、雨のため足元がぬかるみ、調査地全体を見学するには安全性の確保が困難であると判断し、当日は見学地を限った公開に留めた。事前に、マスコミを通じて「山陰地方で最古級の前方後円墳発見」と大きく取り上げられ反響を呼んでいただけに、調査の詳細を多くの人に実見してもらえず、残念な結果となった。

12月に入ると現地調査は終盤を迎え、12月2日に調査地全体の航空撮影（第2回目）を行った後、14号墳前方部やその周辺、17・18号墳の埋葬施設の調査を中心に行なった。

このうち、特に14号墳の中心埋葬施設に最も近い位置に造られた前方部の埋葬施設3からは、本古墳群で唯一となる小型仿製内行花文鏡のほか、玉類が出土し、後円部に築かれた中心埋葬施設の内容を考える上で示唆を与える資料を得ることができた。

また、調査全体を通しては、調査地内の古墳は、その立地から3グループに分かれ、微妙に時期差をもつとともに、埋葬施設の形態及び副葬品も各グループで特徴があることもわかってきた。

### 現地片づけ

12月の中旬には、埋葬施設の調査もほぼ終了し、盛土の残存する12・17号墳の墳丘調査を行うとともに、現地保存にかかる保存協議の過程にある14号墳の墳丘を保護するために、ブルーシートを貼る仮養生作業を行ない、12月22日に現地における全作業を終了した。

なお、調査前の古墳の基数は、円墳6基、墳形不明2基の計8基だったが、調査の結果、計7基となった。詳細は、12・13・17・18・19号墳が方墳、14号墳が前方後円墳と確認され、新発見として22号墳（方墳）が加わった。因みに、20・21号墳は古墳ではないことも判明した。

### 整理作業

現地調査終了後は、美和調査事務所で遺物整理作業に着手し、遺物の接合、復原、実測を直営で実施した。また、鳥取県埋蔵文化財センターで鉄製品のX線撮影を行って細部観察に資したほか、専門機関に委託して、鏡の応急的な保存処理を行なった。

一方、現地で作成した図面や写真などをもとに遺構の再検討を行ない、復原された土器、副葬品等もあわせて検討することによって、当古墳群の築造時期や群構成、地域における古墳群の位置づけを行なった。また、遺物、記録資料等の収納も行い、平成22年3月31日に遺物整理作業を終了した。



現地説明会資料 平成21年11月28日(土)

## 本高古墳群の調査

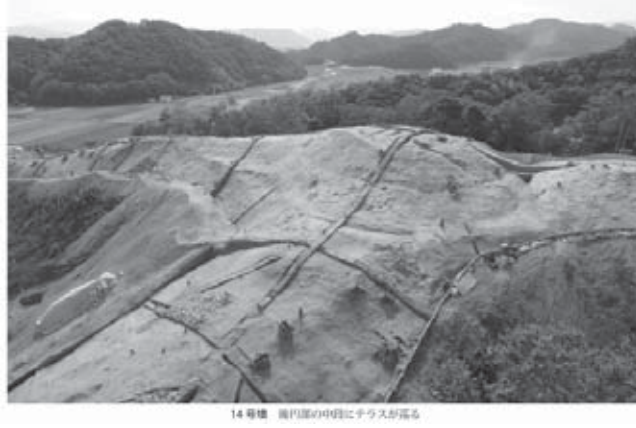
08鳥取県教育文化財団 調査室 美和調査事務所  
〒680-1133 鳥取市殿太12番地(旧鳥取南陵高校美和分校内)  
TEL: 0857-51-7553 FAX: 0857-51-7550  
メールアドレス: matsuki@pref.torijp

財団法人鳥取県教育文化財団では、一般国道9号(鳥取西道路)道路改築工事に先立って鳥取市本高の丘陵部につくられた本高古墳群の調査を行っています。今年5月から開始した発掘調査では、古墳時代前期～中期(1700～1000年前)につくられた大小計8基の古墳を確認しました。

なかでも当古墳群の中心的存在で、鳥取平野を一望できる場所にある「本高14号墳」は、山陰地方で最古級となる前方後円墳(全長60m)であることがわかりました。

そのほかの7基の古墳は、前方後円墳を中心とした尾根上につくられています。いずれの古墳も方墳で、埋葬施設には木棺、竊穴石棺、土器棺が用いられ、副葬品として鉄剣、鉄鏃、刀子などが納められていました。

調査で得られたこれらの成果は、山陰地方における古墳時代のはじまりを考える上で貴重な見解であり、山陰の古代史解明に大きな役割を果たすこととなるでしょう。



### 鳥取(平野)の大型前方後円墳

1 神前1号墳 (92m)
2 法郎原1号墳 (90m)
3 新12号墳 (88m)
4 下郷野2号墳 (77.3m)
5 神前3号墳 (77m)
6 山田1号墳 (62m)
7 穴島山3号墳 (62m)
8 本高古墳 (60m)・調査中
9 松原7号墳 (54m)
10 湯山山1号墳 (51m)

調査: 1991(後円部調査) 全長: 60m

本高14号墳 コンピュータで作成した3次元画像

後円部直径: 30m  
前方部直径: 20m  
前方幅: 13m(前方部幅)  
前方延長: 15m(この延長より前方部幅)

### 本高14号墳について

本高14号墳は、古墳の形状や周辺の埋葬施設から出土した土器の特徴から、古墳時代前期(4世紀前半)につくられたことが判明しました。確認されている限りでは、山陰地方で最古の前方後円墳となります。

3世紀に前方後円墳が発生した近畿地方に対し、山陰地方では4世紀まで前方後円墳や方墳がつくられてきました。そうした中で本高14号墳の発見は、山陰地方への前方後円墳の波及と、当地域の有力首長と近畿地方の関係性を考える上で重要なものとなります。

また、一般的な前方後円墳の特徴として、墳丘にテラス状の段を築き、墳輪を立てて高く、墳石で表面が覆われていることが挙げられます。しかし、本高14号墳では後円部に段があるものの、墳輪や墳石はありません。こうした特徴は、広く日本海沿岸地域に点在する前期の前方後円墳とも共通するものです。

時期	古墳時代前期	古墳時代中期	古墳時代後期
年代	3世紀後半～4世紀	5世紀	6世紀
畿内の主な古墳	葦原(280)・(800)・(817) 稲井原3号山(207) 津堂地山(208)	菅原御原山(425) (1000) 大山(426) (1000)	今城塚(335) 三瀬丸山(310)
鳥取県内	鳥ノ山4号(100) 井筒寺1号(23) 宮内墓塚(95)	三崎丸山(100) 前山4号(65)	石馬谷(67) 武原(54)
鳥取平野	本高14号(63)六郎山3号(63)	志都原1号(90) 神前1号(92)	赤磐(39)

※前段寺1号のみの前方後円墳。○・△は墳丘 単位はメートル

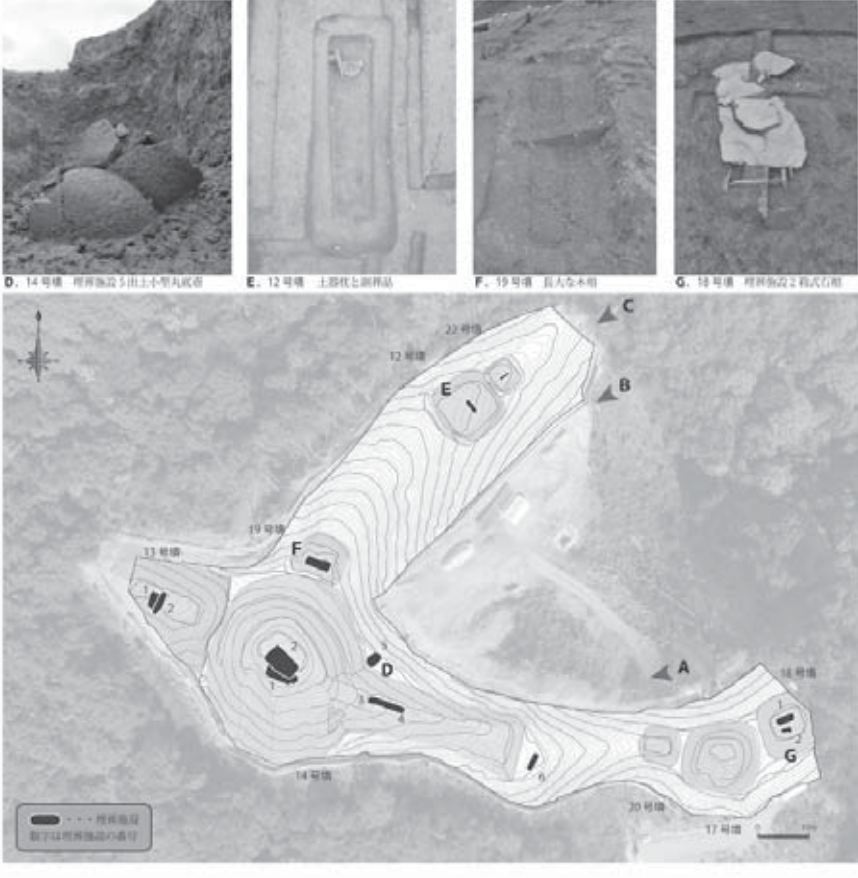
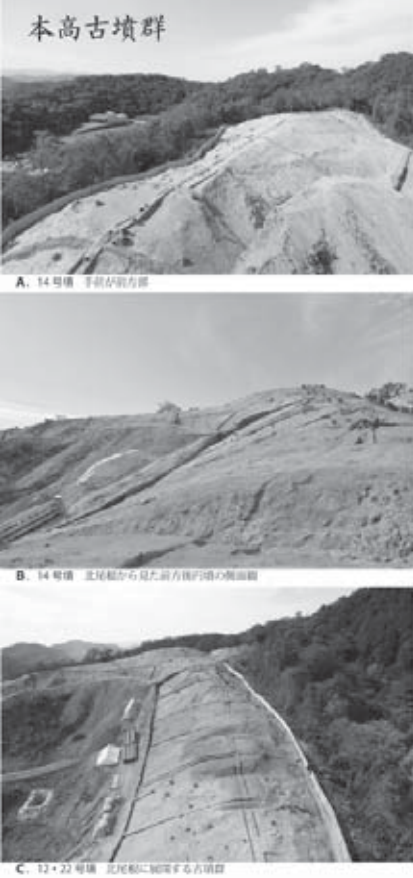


写真2 現地説明会資料

## ② 千代川を見下ろす古墳群

もろたかこふんぐん  
本高古墳群



眺望抜群！ 大型の前方後円墳確定

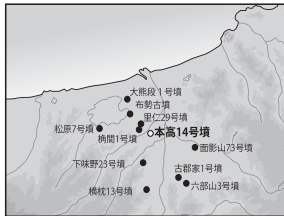
前回の発掘通信で、本高 14 号墳が前方後円墳である可能性が高いとお伝えしました。その後、古墳の形をくわしく調べた結果、前方後円墳であることが判明しました。鳥取市街地を中心とする鳥取平野に築かれた前方後円墳のなかで6番目の大きさ。なんと全長63m！古墳の上に立つと、眼下に鳥取平野が一望のもとに見渡せます。これほど大きな前方後円墳が全面発掘されたのは、鳥取県内でも初めてです。



北から本高 14 号墳を眺めた様子  
(全長 63m、後円径 36m×30m、前方部長 33m)

### 鳥取平野の前方後円墳ベスト 10

- 1 鶴間 1 号墳 (92m)
- 2 古郡家 1 号墳 (90m)
- 3 里仁 29 号墳 (81m)
- 4 下味野 23 号墳 (73.5m)
- 5 横枕 13 号墳 (70m)
- 6 本高 14 号墳 (63m)・六部山 13 号墳 (63m)
- 8 布勢古墳 (59m・国史跡)
- 9 松原 7 号墳 (54m)
- 10 面影山 73 号墳 (51m)



## ② 千代川を見下ろす古墳群

もろたかこふんぐん  
本高古墳群



鏡と玉が出土 被葬者は…

調査はいよいよ終盤。各古墳に設けられた埋葬施設の発掘を進めています。14 号墳の前方部につくられた埋葬施設からは、青銅製の鏡や、勾玉（まがたま）、管玉（くだたま）と呼ばれる石製の装饰品が出土しました。玉類は鏡の周辺で集中して出土しており、もとは葬られた人の首にかけられていたのでしょうか。鏡は直径 8cm の小型品で、ものを写す鏡面を上にして出土しました。今回、10 基を超える埋葬施設を調査しましたが、権力を表す鏡が副葬されていたのはこの埋葬施設のみで、葬られた人は前方後円墳の主と関係の深い有力な人物だったと考えています。副葬品は、古墳の時期や被葬者像を探る上で重要なヒントとなります。今後、出土遺物の詳細な調査をすることによって本高古墳群の実態がより明確になってくるでしょう。



写真 3 広報誌「鳥取西道路の遺跡を掘る」(本高古墳群の誌面)



写真 5 現地指導の様子 (10月6日)

写真 4 現地説明会の様子 (11月28日)



## 第3節 調査体制

発掘調査及び報告書作成は以下の体制で行った。

	平成21年度	平成22年度
鳥取県教育委員会		
教育長	中永 廣樹	横濱 純一
鳥取県教育委員会事務局文化財課		
課長	植田 司郎	植田 司郎
歴史遺産室長	中原 斉	中原 斉
課長補佐（兼主幹）	植木 敏郎	田貝 隆
副主幹	寺垣 仁志	福市 信
文化財係長	北浦 弘人	北浦 弘人
文化財主事	高尾 浩司	高尾 浩司
財団法人 鳥取県教育文化財団		
理事長	有田 博充	井上 善弘
事務局長	中村 金一	漆原 貞夫
事務職員（調査室と兼務）	岡田美津子	岡田美津子
調査室		
室長（美和調査事務所長と兼務）	松井 潔（*1）	松井 潔（*1）
次長	石本 富正	石本 富正
事務職員	福田早由里	福田早由里
美和調査事務所・調査第二担当		
副主幹	中森 祥（*1）	中森 祥（*1）
副主幹	岡戸 哲紀（*2）	
文化財主事	田中 正利（*1）	田中 正利（*1）
文化財主事	大川 泰広（*1）	大川 泰広（*1）

\*1 鳥取県教育委員会から派遣、\*2 財団法人大阪府文化財センターから派遣

発掘調査支援業者

安西工業株式会社

調査協力

国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所，財団法人大阪府文化財センター，鳥取市教育委員会，財団法人鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財センター，本高地区土地改良区，本高地区自治会，J A鳥取いなば鳥取広域共同育苗センター

註

- 1) 鳥取市教育委員会編2010『平成21（2009）年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』  
鳥取市教育委員会

## 第II章 遺跡の位置と歴史的環境

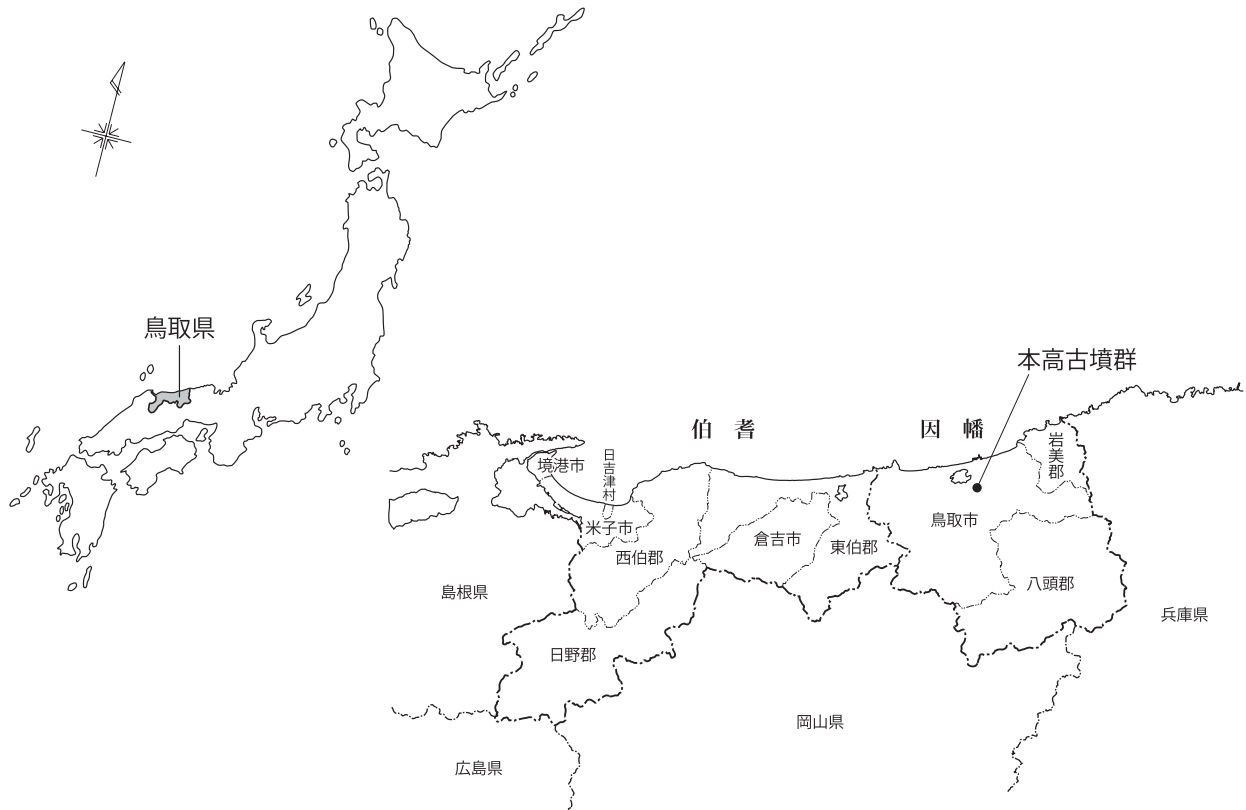
### 第1節 本高古墳群の位置（第2図）

本高古墳群の所在する鳥取県は、日本の西南部、中国地方に属する。東西に長い県域は、旧国名で東部は因幡国、中西部は伯耆国と呼称され、鳥取市の属する因幡国は東を但馬国、西を伯耆国、南を播磨国、美作国と接して形状は方形に近い。

鳥取市は古来より因幡国の中心として栄え、現在は市町村合併の結果、因幡国の約2/3の範囲を占める。県庁所在地として面積は765.66km<sup>2</sup>、人口は20万人余りを擁する「特例市」である。市域の三方は山に囲まれ、北には日本海を臨む鳥取砂丘が広がる。市の南側は中国山地が控え、岡山県、兵庫県の県境に接している。市の中央には中国山地を源とする一級河川の千代川せんたいがわが流れ、西岸には「長者伝説」で知られる、湖山池がある。

本高古墳群は、鳥取県鳥取市本高字神子ヶ谷ノ一他に所在する。古墳群は、JR鳥取駅から西南西約2.8km、海岸線から南へ約6km離れた尾根上に位置し、鳥取自動車道のインターチェンジから北方に目を向けた正面の尾根上にある。尾根は、千代川の支流である野坂川と有富川に挟まれており、古墳群は標高70.2m～52m（平地との比高差約62m～45m）に立地する。

本高集落は尾根の山麓斜面にあり、南北方向に細長く延びる。集落の前面には、有富川によって形成された沖積平野が広がり、豊かな田園風景をなしている。古墳群の南方眼下の沖積平野中には、古墳の築造とも時期が重なる本高弓ノ木遺跡を間近に臨むことができる（写真1）。近世、本高集落には鹿野街道の駅家が設けられ、伝承に残る一里塚は当時の様子を物語っている。



第2図 遺跡の位置（鳥取市の位置）

## 第2節 本高古墳群の地理的環境

### 周辺地形の様相（第3図）

鳥取市の北側に広がる鳥取平野は、第四紀沖積世に浸食谷が埋め立てられてできた沖積海岸平野である。平野の中央を南北方向に流れる千代川は、中国山地の沖ノ山（1,319.0m）に源を発し、袋川、野坂川等の支流と合流し、日本海に注ぐ。また、平野部の周囲は山地に囲まれており、北東部は千代川東岸に久松山（263.1m）、摩仁山（357.0m）などの低山地、南部は稲葉山（248.9m）から霊石山（334m）へと続く高原状の山地、南西部は高山（1,053.6m）を最高峰として北東方向に山地、丘陵地が広がっている。第3図を見ると海に注ぐ下流域や袋川等の支流は明治以降、大きく改修されていることがわかる。

本高古墳群は、高山から派生する尾根にあり、周辺は、南西―北東方向へ延びる谷底平野と同方向に延びる細長い尾根とが交互に織りなす特徴的な地形を呈している。長い年月を経て形成された尾根には、浸食、崩落による小規模な谷地形等が各所に認められる。

### 周辺の地質

当古墳群の周辺に延びる尾根の地質は、主に後期中生代の火山岩類からなる。調査地の基盤は中生代流紋岩で構成され、調査地の斜面に設けたパイロット道路の断面には、基盤の表層が強い風化作用を受けてできた赤褐色粘性土～砂質土の地層が観察できる。

### 古墳群からの眺望

調査地からは東、南方向へ眺望が開け、眼下に千代川、有富川及びその周辺や鳥取市の中心市街地をおさめ、さらに東奥に広がる邑美平野までを広範囲に見渡すことができる。合わせて東遠方に、鳥取平野周辺を取り囲む扇ノ山（1,310m）、久松山、霊石山等の山塊を一望できる。

## 第3節 本高古墳群の歴史的環境（第4・5図）

### 旧石器～縄文時代

鳥取平野周辺で旧石器時代～縄文時代草創期の遺物は少なく、黒曜石製の尖頭器が、浜坂地内の砂丘で採取されている以外、確認されていない。縄文時代前期末の大歳山式土器が、桂見遺跡（32）、美和古墳群（64）から少量出土しているが、この時期に伴う遺構は不明である。中期になると、浜坂地内の栃木山遺跡、鳥取市福部町の直浪遺跡、栗谷遺跡等が砂丘の後背地等、海岸寄りに展開する。栗谷遺跡は前期から後期に継続して営まれた遺跡で、出土した杓子等多様な木製品は、国の重要文化財に指定されている。後期になると湖山池南東岸の低湿地に遺跡が集中し、桂見遺跡、東桂見遺跡（31）、布勢第1遺跡（29）等が営まれる。特に桂見遺跡では、多くの遺物とともに2艘の丸木舟が、布勢第1遺跡では、高度な漆技術の存在を示す漆塗りの木製広口壺や腕輪が出土し、特筆される。

後期後半から晩期になると、湖山池沿岸のほか、千代川やその支流によって形成された自然堤防上等にも遺跡が広がる。山ヶ鼻遺跡（7）では後期後葉から晩期前葉の土器が出土している他、岩吉遺跡（51）、本高円ノ前遺跡（17）や古海遺跡（25）、古市遺跡（57）等、この頃の土器が出土した遺跡は点在するものの、大路川遺跡（62）で堅果類の貯蔵穴が検出された以外、明確な遺構を伴う遺跡は少ない。

鳥取平野では、縄文時代の集落像を明らかにしうる遺跡は少ないが、縄文時代後期から遺跡数が増加し、後期後半から晩期にかけて、自然堤防上や微高地へと人々の生活の場が拡大する傾向が窺える。



第3図 遺跡周辺の地形（○が調査地）

## 弥生時代

弥生時代前期の遺跡は、縄文時代晩期から継続して形成されるが、稲作農耕に関わる痕跡は確認されていない。岩吉遺跡、天神山遺跡（45）等、湖山池周辺の沖積地や海岸砂丘とその背後の低湿地に立地する遺跡が存在するものの、散発的な土器の出土を確認するのみで遺構の状況は詳らかでない。なかでも鳥取平野の中央に位置する岩吉遺跡は、前期から後期に断続的に営まれ、広範囲に広がることから千代川西岸の中心的な集落の一つとされる。

弥生時代中期中頃になると、自然堤防、丘陵及び台地の上に営まれる遺跡が徐々に増える。千代川西岸の古海遺跡、菖蒲遺跡（8）、湖山池南東岸では塞ノ谷遺跡（42）、千代川東岸の秋里遺跡（52）等がこの頃、自然堤防上に形成された遺跡である。中期中頃から営まれた遺跡は、河川の氾濫等による影響を受けてか、継続することなく断続的か一時期消滅する傾向にある。

中期後葉以降、湖山第2遺跡（48）、布勢第2遺跡、大梅遺跡（26）など丘陵や丘陵の裾部に集落が展開し始める。後期以降の桂見遺跡、北村恵犠谷遺跡（10）等で竪穴住居跡、掘立柱建物跡や土坑等が確認され、集落は古墳時代まで継続する。その他、鳥取平野の周辺では、湖山池南岸の高住字宮ノ谷や鳥取平野南部の越路字丸山で流水紋銅鐸が各1個見ついている。

一方、墳墓の状況に目を向けると、下味野古墳群（20）で中期の土壙墓、木棺墓を確認できるが、中期の墓制は不明な部分が多い。後期初頭には六部山古墳群（69）で土壙墓、釣山古墳群で甕棺が確認されているが、単発的である。後期前葉から平野周辺の丘陵に墳丘墓が築造され始め、滝山猿懸平墳墓群、紙子谷門上谷1・2号墓、服部墳墓群（18）がみられる。中でも門上谷1号墓は長辺24mの規模で26基の埋葬施設をもつ。一部の埋葬施設に舟底形木棺を採用し、ガラス製管玉や鉄刀などが出土しており、地域の有力首長の存在とともに、北近畿の首長墓との親縁性も窺える。

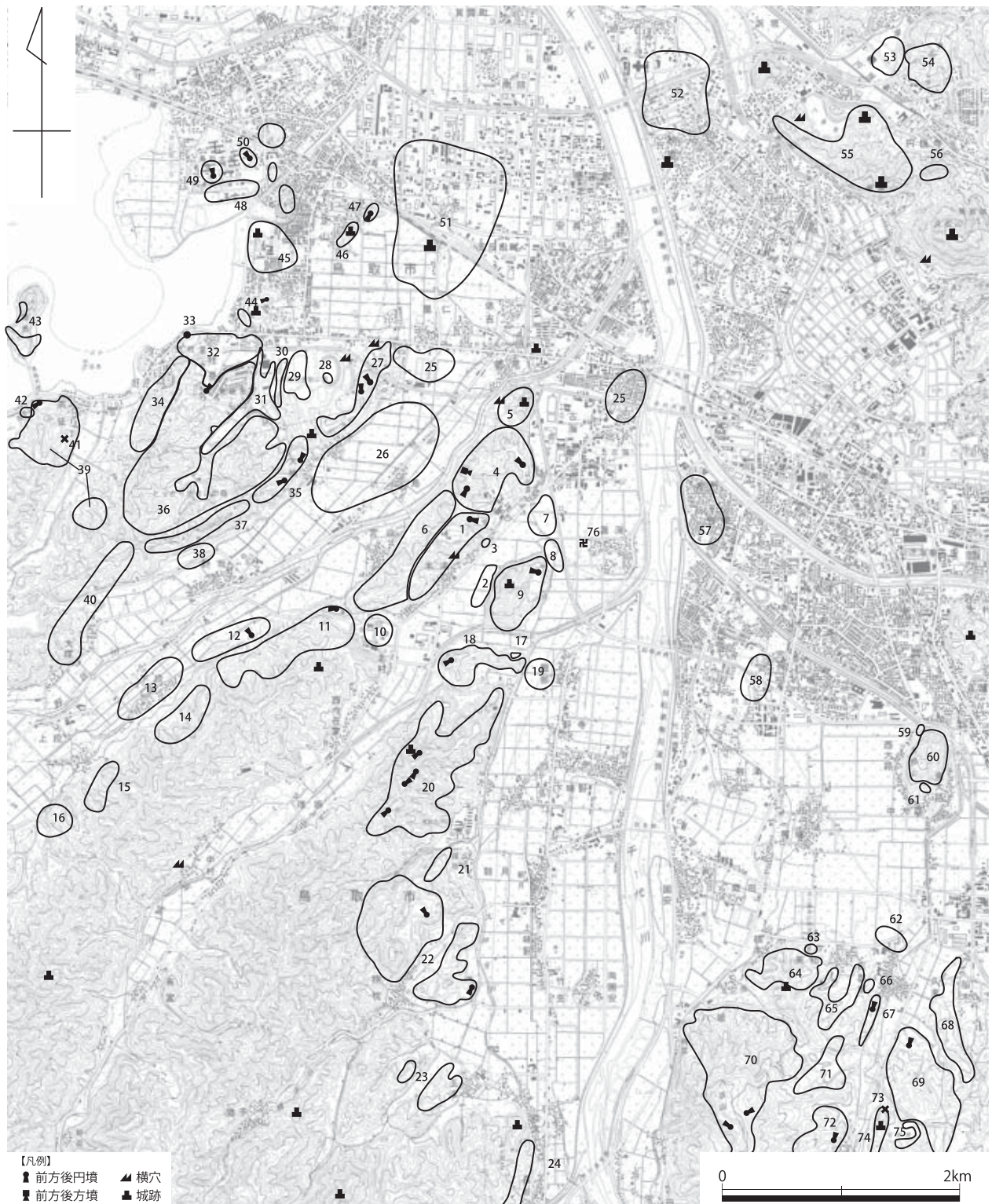
湖山池南東岸では、池を望む尾根上に墳丘墓が継続して築造される。この地域では、後期中葉の布勢鶴指奥1号墳丘墓（30）に始まり、西桂見墳丘墓（33）、桂見土壙墓群へ墳丘墓が継続する。布勢鶴指奥1号墳丘墓は、17.8m×10.6mの墳丘を持ち、埋葬施設に朱を敷き、木棺を納める。西桂見墳丘墓は、一辺約45mと県内でも傑出した規模を誇る。続く桂見土壙墓群は、一辺12mの方形に墓域を区画し、中心主体と見られる第1土壙墓からはガラス製勾玉、水銀朱等が確認されている。継続的に墳丘墓が築造されていることから、この地域に有力な集団が存在したことが窺えるとともに、墳丘墓の規模の格差から首長間の階層性を指摘する見解もある（註1）。

## 古墳時代

古墳時代に入ると、周囲の尾根上に古墳が築かれる。

鳥取平野周辺では、地域有力者の墳墓として前方後円墳が築造され始める。前期では、千代川西岸の本高14号墳（1：全長63m）、鳥取平野南部の六部山3号墳（69：全長63m）、古郡家1号墳（67：全長92m）が築造され、地域の首長墓と位置付けられる。中期の前方後円墳は、未調査のため時期が不明確なものも含むが、里仁29号墳（27：全長81m）、梅間1号墳（35：全長92m）等が湖山池南東岸にあり、他地域と同様、前方後円墳の規模が最大となる。また、周囲には前方後円墳の古海36号墳（4：全長67m）等もあり、大型前方後円（方）墳がこの地域に集中することが窺える。

後期の前方後円墳は、湖山池北東岸で布勢古墳（44：全長約59m）、大熊段1号墳（50：全長約45m）、三浦1号墳（49：全長約36m）が近接した範囲に築造される。いずれも突出した規模ではないが、後期に位置づけられるその他の前方後円墳は小規模なものが多く、釣山2号墳（全長26.4m）、



【凡例】  
 ■ 前方後円墳 ▲ 横穴  
 ■ 前方後方墳 ■ 城跡

- |                 |              |               |           |           |                 |               |
|-----------------|--------------|---------------|-----------|-----------|-----------------|---------------|
| 1 本高古墳群         | 2 本高弓ノ木遺跡    | 3 本高下ノ谷遺跡     | 4 古海古墳群   | 5 徳尾古墳群   | 6 宮谷古墳群         | 7 山ヶ鼻遺跡       |
| 8 菖蒲遺跡          | 9 釣山古墳群      | 10 北村恵儀谷遺跡    | 11 小森山古墳群 | 12 小森山遺跡  | 13 下段遺跡         | 14 下段古墳群      |
| 15 上段古墳群        | 16 上原古墳群     | 17 本高門ノ前遺跡    | 18 服部古墳群  | 19 服部遺跡   | 20 下味野古墳群       | 21 篠田古墳群      |
| 22 横枕古墳群        | 23 玉津古墳群     | 24 倭文古墳群      | 25 里仁遺跡   | 26 大柳遺跡   | 27 里仁古墳群        | 28 布勢第2遺跡     |
| 29 布勢第1遺跡       | 30 布勢鶴指奥墳墓群  | 31 東桂見遺跡      | 32 桂見遺跡   | 33 西桂見墳丘墓 | 34 倉見古墳群        | 35 柳間古墳群      |
| 36 桂見古墳群        | 37 野坂古墳群     | 38 野坂遺跡       | 39 高住古墳群  | 40 大塚古墳群  | 41 高住銅鐸出土地      | 42 塞ノ谷遺跡      |
| 43 青島遺跡         | 44 帆城遺跡・布勢古墳 | 45 天神山遺跡・天神山城 | 46 足山古墳群  | 47 石場山古墳群 | 48 湖山第2遺跡       | 49 三浦古墳群・三浦遺跡 |
| 50 大熊段古墳群・大熊段遺跡 | 51 岩古遺跡      | 52 秋里遺跡       | 53 覚寺遺跡   | 54 覚寺古墳群  | 55 雁金山古墳群       | 56 円護寺坂ノ下遺跡   |
| 57 古市遺跡         | 58 宮長竹ヶ鼻遺跡   | 59 西大路土居遺跡    | 60 大路山古墳群 | 61 大路山遺跡  | 62 久末・古郡家・大路川遺跡 | 63 橋本遺跡       |
| 64 橋本古墳群        | 65 美和古墳群     | 66 伊勢谷遺跡      | 67 古郡家古墳群 | 68 船木古墳群  | 69 六部山古墳群       | 70 八坂古墳群      |
| 72 姫路古墳群        | 73 越路銅鐸出土地   | 74 越路古墳群      | 75 空山古墳群  | 75 菖蒲庵寺   |                 |               |

第4図 遺跡分布図



横枕55号墳（22：全長23.2m）、面影山11号墳（全長26.5m）等と比較すると規模は大きい。

また、鳥取平野周辺の尾根にも前方後円墳が点在しているが、時期、内容とも不明なものが多い。

前方後円墳出現以前の有力者の古墳には、湖山池南東岸地域の桂見2号墳（36）、鳥取平野南部で美和32号墳（64）があり、いずれも方墳である。

前期の古墳群には、千代川西岸で松原古墳群、徳尾古墳群（5）、古海古墳群、本高古墳群（1）、釣山古墳群、横枕古墳群、倭文古墳群（24）、千代川東岸では美和古墳群、六部山古墳群等がある。古墳時代前期の古墳群は方墳に加え、円墳や箱式石棺等の新しい要素が導入されるが、古墳群または古墳が展開する尾根ごとに導入の様相が異なっている（註2）。

中期古墳群は、前期古墳より尾根のやや低い位置または尾根斜面部に築かれ、古墳同士の間隔は以前より密になり、その数は増加する。千代川西岸では里仁古墳群（27）、下味野古墳群、横枕古墳群、千代川東岸では六部山古墳群、広岡古墳群、紙子谷古墳群などがある。特に里仁古墳群は方墳でありながら、畿内の影響を強く受けた鱈付円筒埴輪が出土している。

後期古墳は、中期古墳よりも低い枝尾根や尾根の裾部にも築造される傾向にある。後期古墳の調査例は千代川東岸が多く、千代川西岸は少ない。合わせて後期古墳を象徴する横穴式石室は千代川西岸で、6世紀中葉の葦岡長者古墳（吉岡1号墳）、後葉の倉見9号墳（34）のほか、近年、松原古墳群内で確認された松原28号墳等が確認できるが、少数にとどまる。千代川東岸では新しい型式として「中高式天井石室」が採用されるが、この型式の横穴式石室は千代川西岸には認められず、千代川の東西で横穴式石室の様相が異なる。

集落については調査例が少なく、不明確な部分が多い。弥生時代から継続するものとして、湖山第1,2遺跡、桂見遺跡、西桂見遺跡、天神山遺跡等がある。また、本高弓ノ木遺跡（2）では前期の水路をはじめ、それに付属する木製構造物を確認している。本高下ノ谷遺跡（3）では、前期の水路等が確認されている。

## 歴史時代

古代の遺跡としては調査地の南東約1kmに白鳳時代の創建とされ、八頭町の土師百井廃寺と類似する瓦片が採集された菖蒲廃寺（76）や菖蒲遺跡、山ヶ鼻遺跡がある。このほか千代川西岸には墨書土器や木簡が出土した岩吉遺跡、木製祭祀具が出土した秋里遺跡（56）等がある。また古市遺跡では7世紀後半から平安時代にかけて掘立柱建物や奈良三彩小壺、墨書土器などが出土し、千代川とその支流の合流点にあり、遺跡の様相と立地から官営的な性格の遺跡と考えられる。

中世後期の鳥取平野周辺には、街道や河川を見下す尾根上に山城が点在している。城主名が伝えられるものは少ないが、湖山池東岸に立地する、屋敷と小高い山城部分を組み合わせた天神山城（45）は、室町時代に因幡の守護となった山名氏の本拠であり、当時の因幡の中心地であった。

近世、池田家の支配のもと、本高には鳥取から吉岡、鹿野を経て伯耆往来の青谷に至る鹿野往来の駅家が置かれ、交通の要衝となっていた。

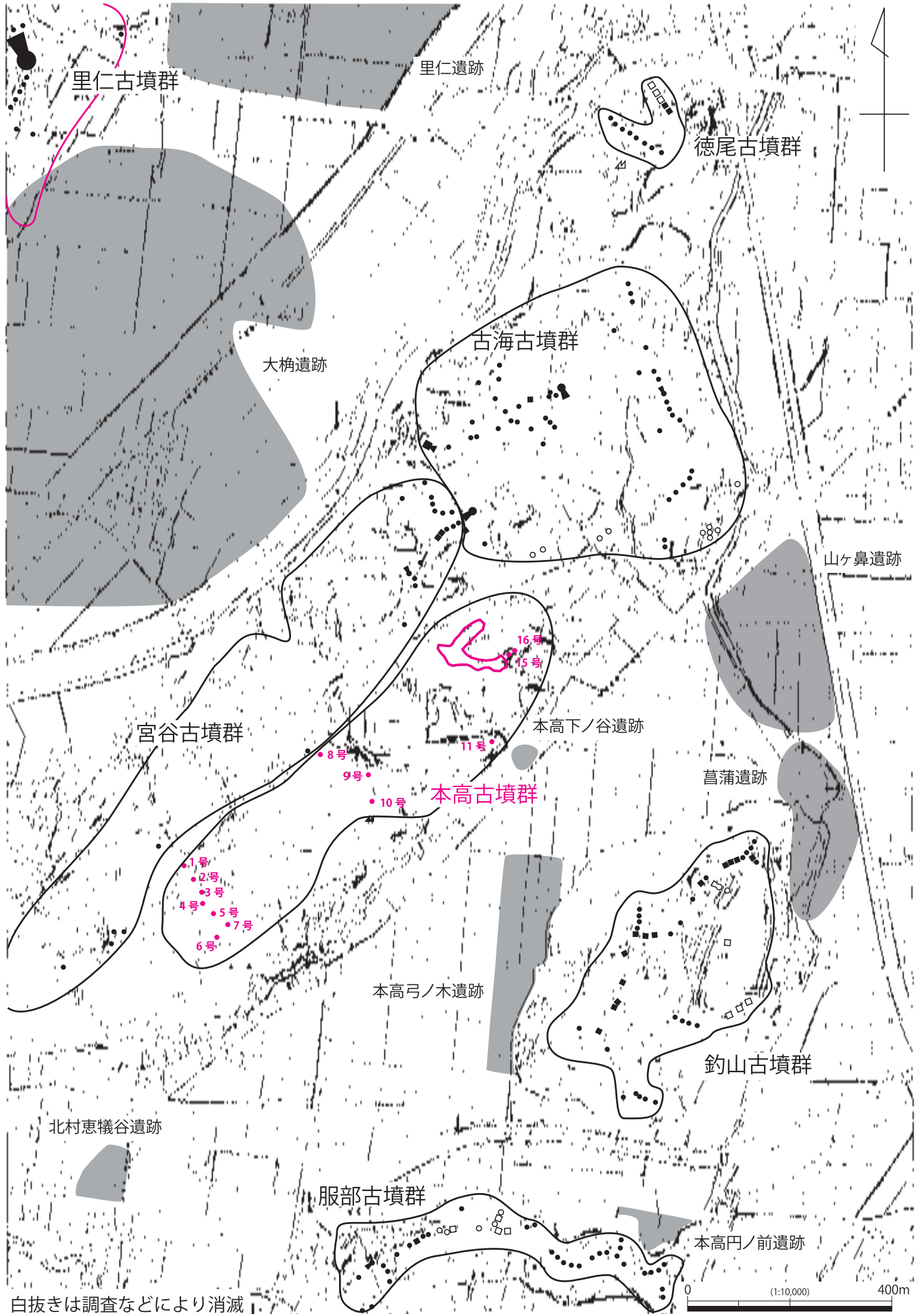
## 註

1) 松井 潔2006「弥生時代後期の地域社会」『調査研究紀要1』鳥取県埋蔵文化財センター

2) 小口英一郎、北 浩明、岩垣 命編2010『松原古墳群I』鳥取県埋蔵文化財センター

## 【参考文献】

鳥取県1972『鳥取県史 第1巻 原始古代』鳥取県



第5図 調査地周辺の古墳群

# 第三章 調査の方法

## 第1節 現地調査

### 調査区の設定 (第7図)

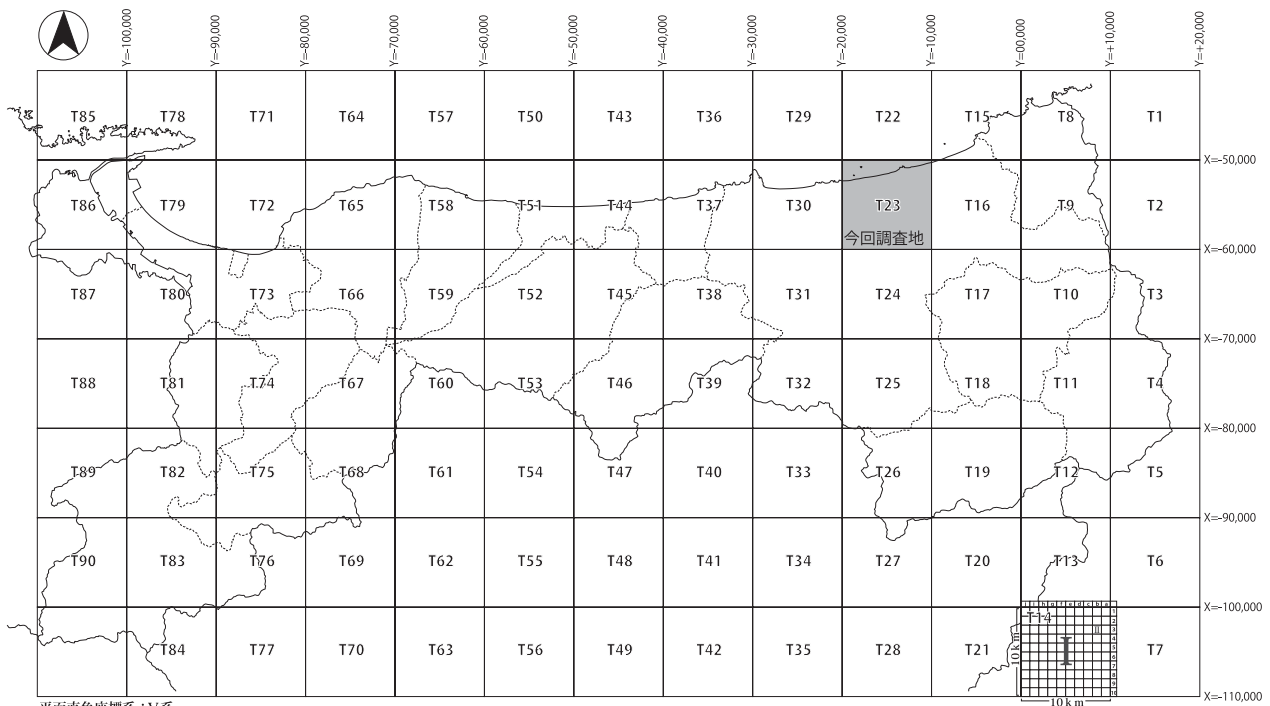
本高古墳群の調査地は、二股に分かれる狭い尾根上に古墳が展開する。調査では便宜上、13・14号墳、17・18号墳が築かれた尾根を「南支群」、12号墳が築かれた尾根を「北支群」と呼称して調査を進めた。

### 調査地の地区割り (第6・7図)

当財団では調査の標準化をはかるため、遺跡、遺構の位置表示、遺物の取り上げ等に使用する調査区割り(グリッド)を以下のとおりに定めて、調査を行なっている。

遺跡、遺構の位置は平面直角座標の第V系(世界測地系)を使用して表示する。

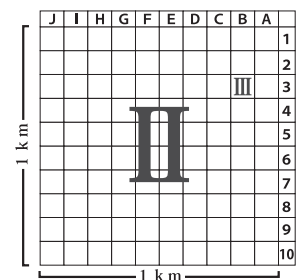
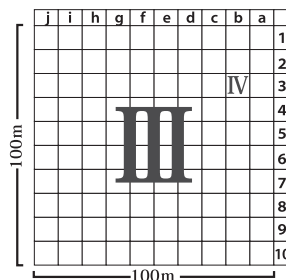
遺跡(調査地)内の地区割りは、鳥取県の全域を第6図に示したように、まず第I区画として10,000m×10,000mで1～91に区画する。次に第I区画内を100等分して1,000m×1,000mを作成、第II区画とし南北軸に1～10、東西軸にa～jまでの記号を付す。さらに第II区画を100等分して100m×100mを作成、第III区画とし南北軸に1～10、東西軸にA～Jまでの記号を付し、第



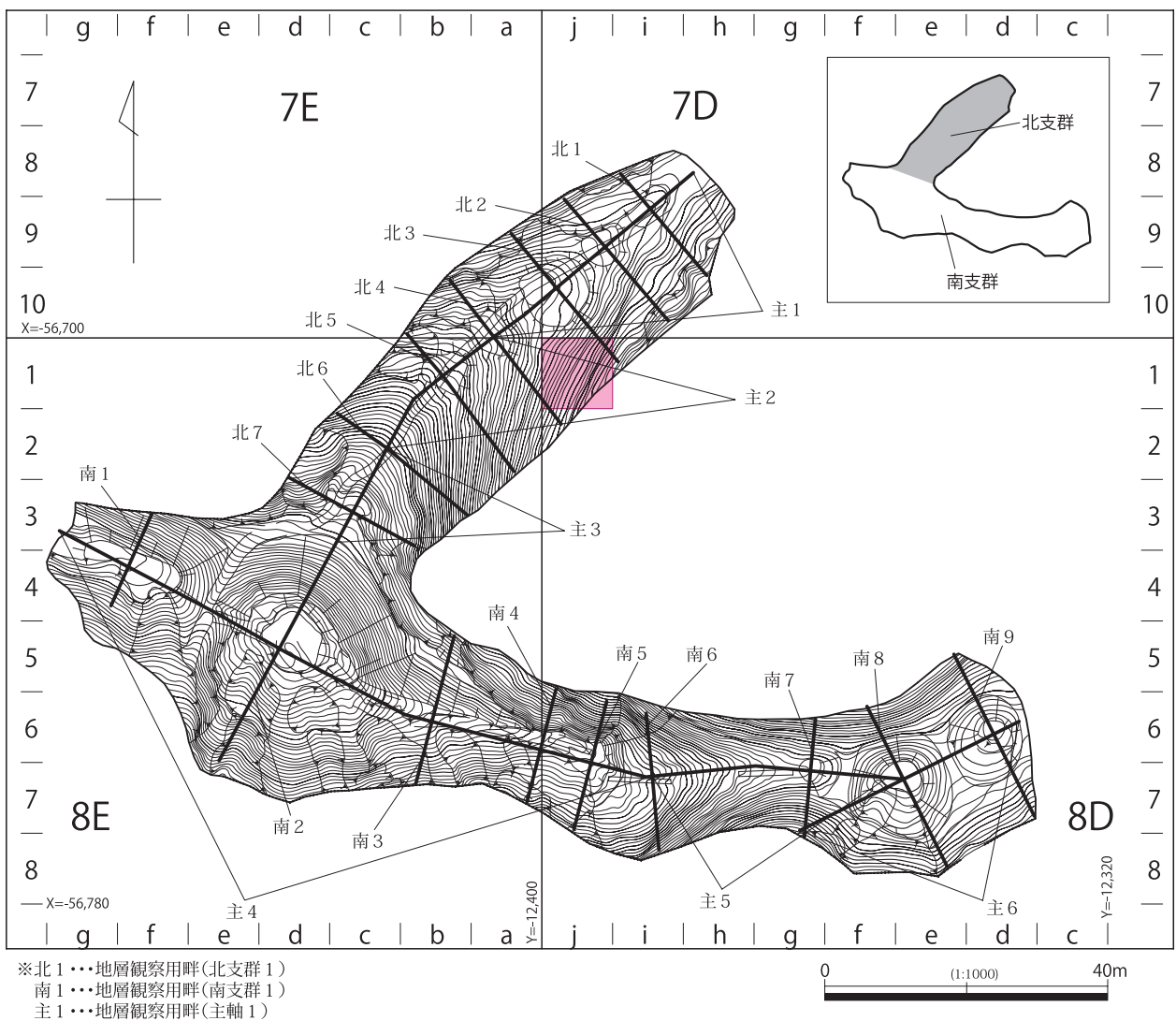
平面直角座標系：V系

N 36° 00' 00" を座標原点 (X=0, Y=0) とする  
E 134° 20' 00"

区画名称例				
区画の大きさ	10000m	1000m	100m	10m
単位区画	I	II	III	IV
区画名称	※区画北東の座標値に基づいて名称を付与する)			
例1. X=-57,430.00 Y=-12,810.00	<b>T23</b>	<b>8 c</b>	<b>5 I</b>	<b>4 b</b>
例2. X=-74,120.00 Y=+14,350.00	<b>T4</b>	<b>5 g</b>	<b>2 H</b>	<b>3 f</b>



第6図 調査地区割り模式図



第7図 調査地の呼称，地区割りと地層観察用畔位置図

IV区画として100m×100mの区画を100等分10m×10mの区画を作成する。この10m×10mの区画が遺物取り上げの最大単位となり，列（南北軸），行（東西軸）の順で数字（1～10），アルファベット（a～j）で表記し，区画を示す。

例を提示すると，第7図の赤網部分は「T23-7c-8D-1j」となる。

### 遺物の取り上げ

遺物の取り上げは，上記の地区割りを基本にして，10m×10mの単位で行っている。また，遺物の取り上げカード及び遺物取り上げ台帳にもこの地区名を必ず記入しており，地図上でも出土地点を示すことが可能となっている。

### 遺構番号と遺構種類の呼称

遺構の番号については，古墳という遺跡の性格上，統一化した番号の付加はしていない。

古墳については，古墳を構成する墳丘（盛土も含む），周溝，埋葬施設も含め，遺跡台帳に登録された番号をそのまま使用した。12号墳の埋葬施設は，12号墳埋葬施設となる。なお，一古墳に複数の埋葬施設が築かれた場合は，墳丘内における選地の状況や前後関係を考慮して番号を付した。

古墳に直接関連しない遺構については，検出順に1番から連続して遺構番号を付し，番号のあとに

遺構の種類を付加した。40番目に検出した遺構で、それが土坑であれば40土坑となる。

また、検出当初は古墳に関連しないと考えて調査を進めたが、調査が進捗した段階で埋葬施設となった遺構もある。これらの遺構は、埋葬施設と認識した時点で新旧の遺構名を併記し、調査を進めた。

本報告書では変更した新遺構名で報告するが、以下に旧遺構名と新遺構名の関係を明記しておく。

8－土坑 → 14号墳埋葬施設5

10－土坑 → 14号墳埋葬施設6

11－土坑 → 14号墳埋葬施設3，14号墳埋葬施設4

なお、関係各部署と協議の上、新たに発見した古墳については、遺跡台帳に記されている本高古墳群として登録された最終の古墳番号の次番号から番号を付し、古墳とされていたが、調査の結果、古墳ではなかったものについては欠番とした。

### 地層観察用畔の設定（第7図）

現地における地層観察用畔は、現地の地形観察や調査前測量図を検討し設定した。設定状況は第7図に示した。以下に設定状況について簡単に記す。

まず、現状で観察される古墳の中心を通るよう尾根頂部に沿って主軸を設定し、次に直角方向に斜面の堆積が把握できるよう、古墳中心部から谷部方向に向かって地層観察用畔を設定した。

14号墳については、前方後円墳の可能性を意識しながら前方部に横断する畔を三箇所設定した。

なお、古墳が築かれていない場所については、地形の変換線などを意識し、より良好な状況で地層の堆積が把握できるよう設定した。

### 掘削の方法

当遺跡の現況は、各所に古墳が点在し、起伏に富んだ地形を呈する。また、試掘結果や現況から、尾根頂部の地層の堆積は極めて薄いことが容易に認識された。このため、掘削は表土からすべて人力で行い、一部排土の移動除去に重機を使用した。

古墳墳丘の検出は、上記に示した地層観察用畔の断面を活用した。まず、畔に沿ってトレンチを設定し、周溝や墳丘盛土の状況、古墳築造面を考える上で重要となる土壌化した旧表土層を確認することに努め、これらを確認把握した後、平面的な掘削に移行し墳丘や周溝を検出した。

埋葬施設は、墳丘測量終了後に、慎重に平面的な検出作業を行った。多くの埋葬施設は墓壙掘方が容易に検出できたが、埋葬後に盛土が施されているものについては時間を要した。棺の検出も容易に検出できるものと困難なものがあり、状況に合わせて、サブトレンチを設定して調査を進めた。なおこのサブトレンチの設置は、最小限に留めるよう留意した。埋葬施設は、基本的にその掘方まで完掘し、埋葬施設の構築方法の把握に努めた。ただ、細部まで完全に明らかにできたものは少なく、特に、長大な木棺の小口部分の検出は困難であった。

埋葬施設内の埋土はすべて篩作業を行い、玉類等の微細遺物の収集を行った。その結果、数点の玉類と鉄製品の細片を収集することができた。

墳丘盛土の調査は、古墳築造以前の旧表土層直下まで掘り下げを行ない、墳丘の構築方法の把握に努めた。古墳時代以前の堆積については部分的にトレンチを掘削し、堆積の状況や遺構の有無の確認を行った。

なお、14号墳については関係機関と保存の協議が行われていたため、今回の調査では、後円部頂の埋葬施設2基については部分的な調査に留め、盛土の調査もその状況を把握するためのトレンチ調

査に限定した。

### 遺跡の図面

全体図は、調査前の段階と墳丘検出状況段階のものを作成した。縮尺はいずれも1 / 100で、コーナー間隔は0.2mである。測量方法は、調査前が写真測量、墳丘検出状況がトータルステーションを利用した電子平板で行なった。いずれも、細部については補足測量を行なっている。

地層観察用畔の断面図は縮尺1 / 20で作成し、その方法はトータルステーションと電子平板を活用した。埋葬施設に関連する平面、断面図は縮尺1 / 10、遺物の出土状況図については状況に合わせて縮尺1 / 2, 1 / 5, 1 / 10で作成した。実測方法は手測りによるものの他、効率化を図るため部分的にトータルステーションや簡易的な写真測量も活用した。

原図は連続番号を付加して管理している。基本的な登録の順番は、遺構配置図、全体図、地層観察用畔の断面図、各古墳の埋葬施設の図面、その他の遺構の順とした。

### 写真撮影

古墳の立地や墳丘の全体景観を表現するため上空からの写真は、ラジコンヘリにより調査前、墳丘検出時、埋葬施設検出時に撮影した。

各遺構の写真については、調査過程で必要に応じ撮影した。

記録フィルムは4×5判リバーサル、黒白、6×7判リバーサル、黒白、35mmリバーサル、黒白、デジタルデータの4種類である。4×5判以外はいずれも撮影日順に番号を付し、登録台帳を作成し管理している。なお、デジタルデータには撮影の諸データを写し込み、各フィルムカットの検索用資料の役割を持たせた。また、デジタルデータは各カットRAWデータとjpegデータの2種類を作成し保存している。

### 遺構の養生（第8図）

平成21年12月7日付けで、14号墳及びその周辺の遺構保存に伴い、鳥取県教育委員会から第8図に示した範囲についての遺構養生の指示があった。この指示に基づき、埋葬施設内はビニールシートを敷き土嚢で充填した。墳丘全体は、ブルーシートで覆い遺構面を保護した。

### 調査成果の周知（写真3・4）

調査成果の公開のため、11月28日（土）に現地説明会を実施した。

その他、地元向けの広報誌（毎月発行）を配布し、調査の成果を逐次公開した。その成果も現れたのか、本高地区をはじめ地元の皆さんの遺跡への関心が急速に高まり、当財団が実施した鳥取西道路関係の現地説明会（本高弓ノ木遺跡、松原古墳群、本高古墳群）にも、数多くの方々に参加いただいた。

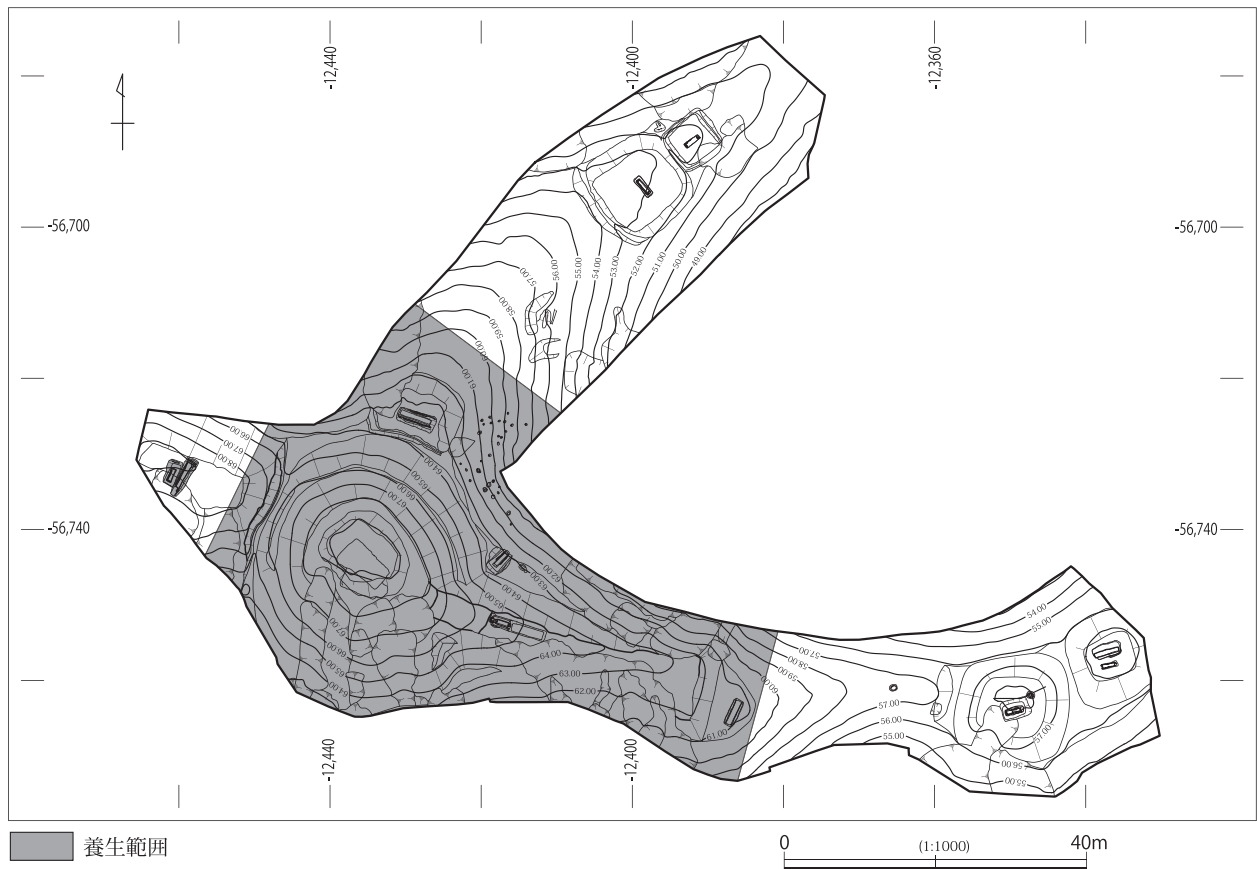
## 第2節 整理作業

### 土器の洗浄

土器の洗浄は基本的に現場作業と並行して行った。脆弱なものについては、現地取り上げ時に薬剤塗布による強化を施した後、洗浄している。

### 土器の接合、復原、実測

各古墳から出土した土器は劣化したものが多く、室内作業でも劣化の状況に応じてまず薬剤塗布による強化を行なった。その後、接合、復原を行なった後、実測作業を実施した。



第8図 遺構養生の範囲

### 鉄製品の実測

鉄製品は土落とし程度のクリーニングを施し、その後、鳥取県埋蔵文化財センターの機材を借用してX線撮影を行なった。このX線写真によって、錆で覆われている製品の細部が観察できたものもあり、実見とX線写真を参考に実測図を作成した。

### 保存処理

14号墳埋葬施設3から出土した小型仿製内行花文鏡は、ブロンズ部分が全く残っていないほど脆弱だったので、記録保存の前提となる応急の保存処理を財団法人元興寺文化財研究所に委託して行なった。

### 写真撮影

4×5判リバーサル、黒白、6×7判リバーサルフィルムにて調査担当者が撮影した。

### 遺構、遺物の検討

古墳の築造時期や各古墳の特徴を明らかにすることを目的に、各遺構や出土遺物の細かな検討を行なった。その成果は調査の成果、総括の章に記した。

### 収納

調査で得られた図面、写真の記録類、土器などの遺物はすべて登録して収納作業を行ない、各資料は活用に対応することを念頭に、随時検索できる状況で保管している。

## 第IV章 調査の成果

### 第1節 調査の概要と基本層序

#### 第1項 調査の概要

##### 調査地の地形（第1・5・9～11図）

本高古墳群は、本高集落の背後に位置する南西―北東に延びる尾根にある。周囲の尾根には複数の古墳群が展開しており、当古墳群の北側に古海古墳群、西側に宮谷古墳群がある。今回の発掘調査地は、本高古墳群の中で北側に位置する一群である（第5図）。

調査区内の地形は、頂部の平坦面がほとんどないやせ尾根地形で、尾根の斜面は急峻で谷地形へと下る。調査地は狭い尾根が北東、東方向の二股に分岐している。尾根の現況は、風雨等による浸食や地震の影響等が想定される地滑り地形が各所に認められる。特に南支群の南側斜面では等高線が緩やかに馬蹄形に凹み、崩落地形の特徴をよく表している。

調査地内の最高所は南支群の西端、13・14号墳の墳頂部付近で標高約70.2m。最高所と北支群の西側に伸びる西側の谷との比高差は約40m、南北支群に挟まれた中央の谷との比高差は約50mある。

##### 確認した古墳（第9・10・11図，付図1）

調査前に円墳6基、墳形不明2基と認識されていたが、現況を観察したところ、既に明らかとされた古墳のほか、平坦面を4箇所確認し、古墳がさらに増えることを想定した。このため、調査地の地層確認を行うために、まず尾根の長軸を通す地層観察用畔を設け、確認した古墳および古墳が想定される平坦面の中心に長軸畔に直交する横断畔を付設し、墳丘の状況、斜面地の堆積を観察した。

その結果、確認された古墳は7基。墳形も当初全て円墳とされていたが、本高14号墳は前方後円墳、他は方墳となった。古墳以外の遺構として土坑1基、ピット群を検出。このうち、40土坑は落とし穴であった。

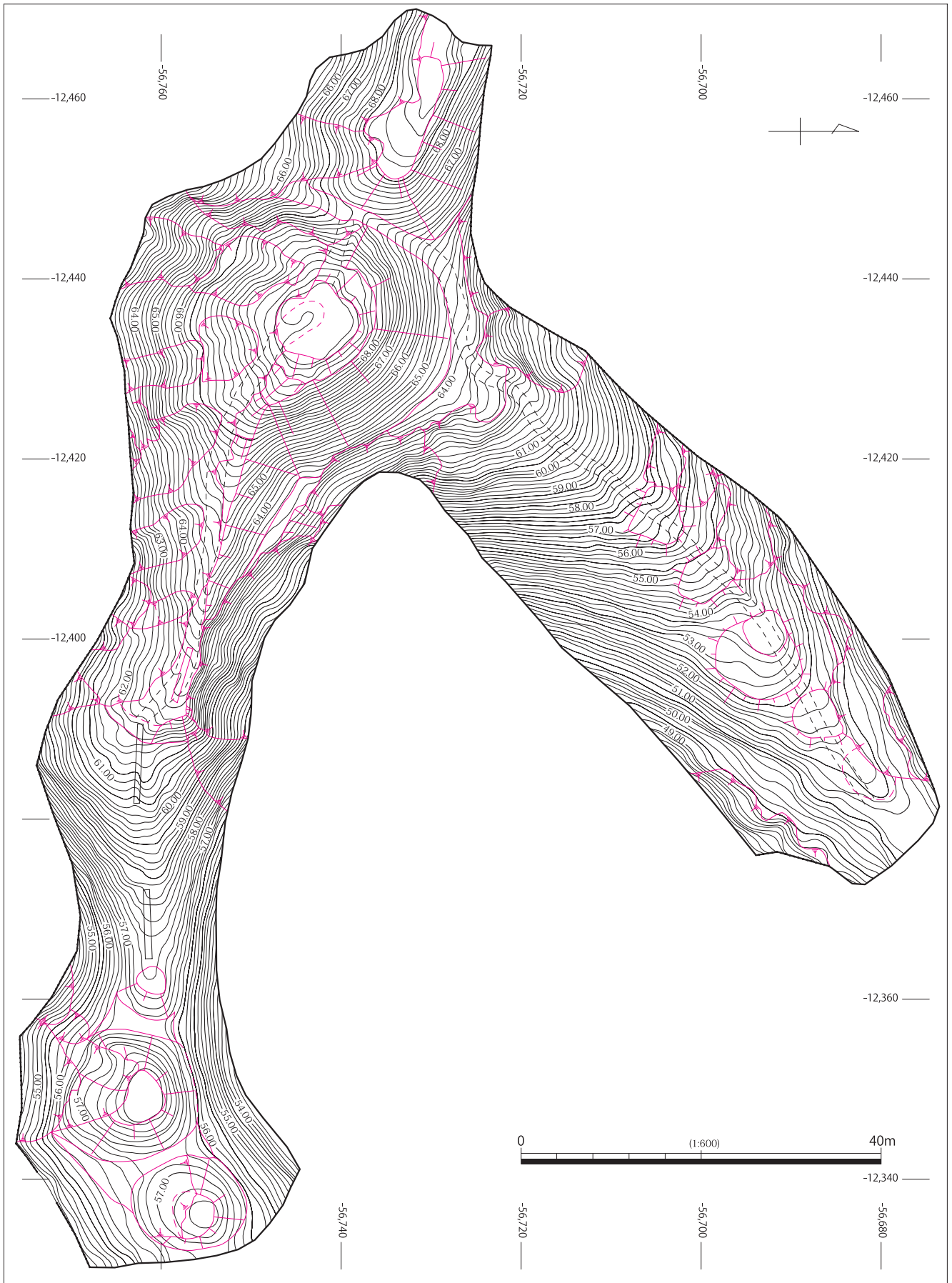
また、尾根に展開する古墳は、立地状況から以下の3つのグループに分かれ、それぞれ墳丘形態、埋葬施設等に特徴がある。

**A群** 前方後円墳（14号墳）とその周囲に築かれた方墳（13・19号墳）からなる。尾根の最高所で、眺望の優れた場所に立地する。なお14号墳から東へ下った標高約57.0mの位置に21号墳の存在が推定されていたが、単独の古墳ではなく、前方部の一部と判明した。

14号墳は、尾根筋に沿って築かれた柄鏡形を呈する前方後円墳で、全長63m。埋葬施設は、墳丘上及びその周辺で6基（後円部に2基、前方部に2基、北側くびれ部に1基、前方部前端の平坦部に1基）を確認した。

後円部で確認された2基の埋葬施設は、保存協議が併行していたため、部分的な調査に留めている。2基は切り合い関係があり、埋葬施設2が1より新しい。埋葬施設2は、棺埋土の上部と推定される面をトレンチで確認し、埋葬施設1は埋土の一部をトレンチで掘削したのみである。





第9図 調査前の本高古墳群（調査前測量図 1/600）

前方部に構築された2基の埋葬施設は、前方部の墳丘上に築かれ、長大な埋葬施設の掘方は墳丘主軸に沿う。長軸方向に掘方が切り合っており、埋葬施設3、埋葬施設4の順となる。埋葬施設3からは調査した古墳の中で唯一、小型仿製内行花文鏡1面が出土しており、墳頂部の埋葬施設に葬られた被葬者像が示唆される。埋葬施設4からはガラス小玉、鉄製品、土器転用枕（鼓形器台）が出土している。

墳丘の周囲に構築された埋葬施設5は、北側のくびれ部の平坦面、埋葬施設6は前方部前端的平坦面にある。埋葬施設5からは小型丸底壺、埋葬施設6からは土器転用枕（鼓形器台）が出土している。

13号墳は14号墳の西側にあり、周溝を共有する一辺約20mの方墳。墳頂部で埋葬施設を2基確認した。両者は隣接し、切り合い関係から埋葬施設1、埋葬施設2の順に構築されている。埋葬施設1は板石と土を組み合わせた特異な形態で、埋葬施設2は木棺である。埋葬施設1から鼓形器台の破片、埋葬施設2から土器転用枕（鼓形器台）のほか、鉄剣、鉄鎌、鉞が出土している。

19号墳は、後円部北側裾に接して造出状に張り出す約8.4m×12mの方墳。周溝は14号墳の後円部の円弧に沿って湾曲し、墳頂部で埋葬施設を1基検出した。埋葬施設からは土器転用枕（鼓形器台）のほか、鍬先が出土している。

**B群** 調査地の東端の標高57.0m付近に位置する。尾根筋に沿って西から17・18号墳となる。B群からは鳥取平野南部の眺望が開け、眼下に本高弓ノ木遺跡のある有富川周辺の平野部を眺め、平野部からは墳丘の盛り上がり良好に視認できる。

また、事前に行われた試掘調査で、17号墳の西隣に20号墳が推定されていたが、20号墳は古墳ではないことが判明した。

17・18号墳はともに方墳で、相対的に高さのある墳丘をもつ。両者とも副次埋葬施設をもち、木棺のほか、箱式石棺、土器棺が用いられ、埋葬施設の形態はバリエーションに富む。

17号墳は一辺約14m、墳頂部で箱式石棺、土器棺各1基を確認し、切り合い関係から埋葬施設1（箱式石棺）、埋葬施設2（土器棺）の順となる。副葬品として埋葬施設1から鉞、刀子が出土した。

18号墳は17号墳の東側に位置し、一辺約11m。埋葬施設として墳頂部で木棺、箱式石棺各1基を検出した。墳頂部の中心に位置する木棺を埋葬施設1、中心から外れる箱式石棺を埋葬施設2としている。埋葬施設1から甕、埋葬施設2からは土器転用枕（鼓形器台）が出土している。

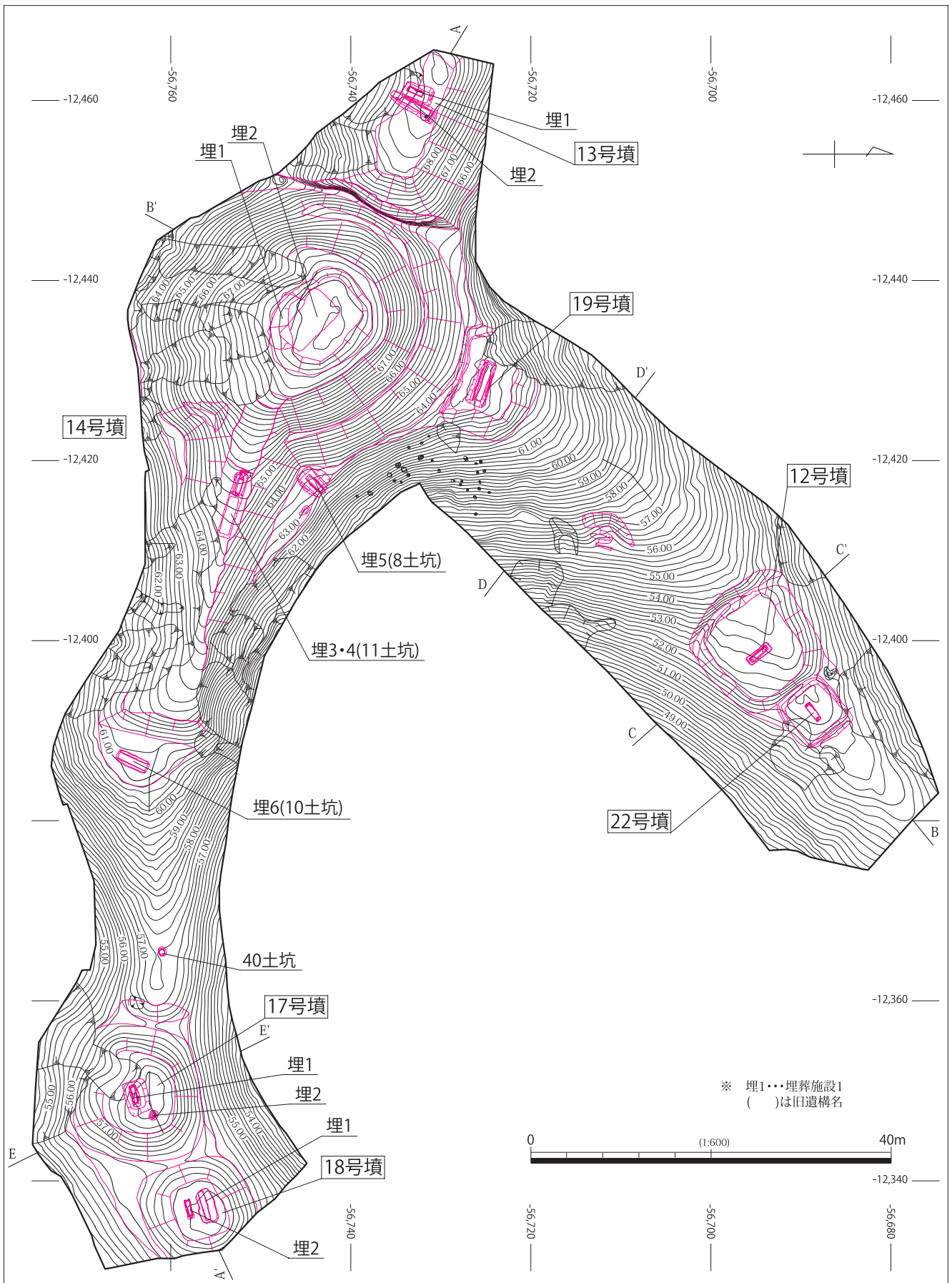
**C群** 調査地の北東側、12・22号墳が築かれる尾根は、14号墳後円頂部から北に下る。

12号墳は一辺15m、22号墳は一辺6mの方墳で、尾根の傾斜がややゆるやかな標高53.0m付近に並列して築造される。C群からは、東方向に見える平野への眺望は良好であるが、南東に位置するB群の尾根が高く南方向への眺望はきかない。

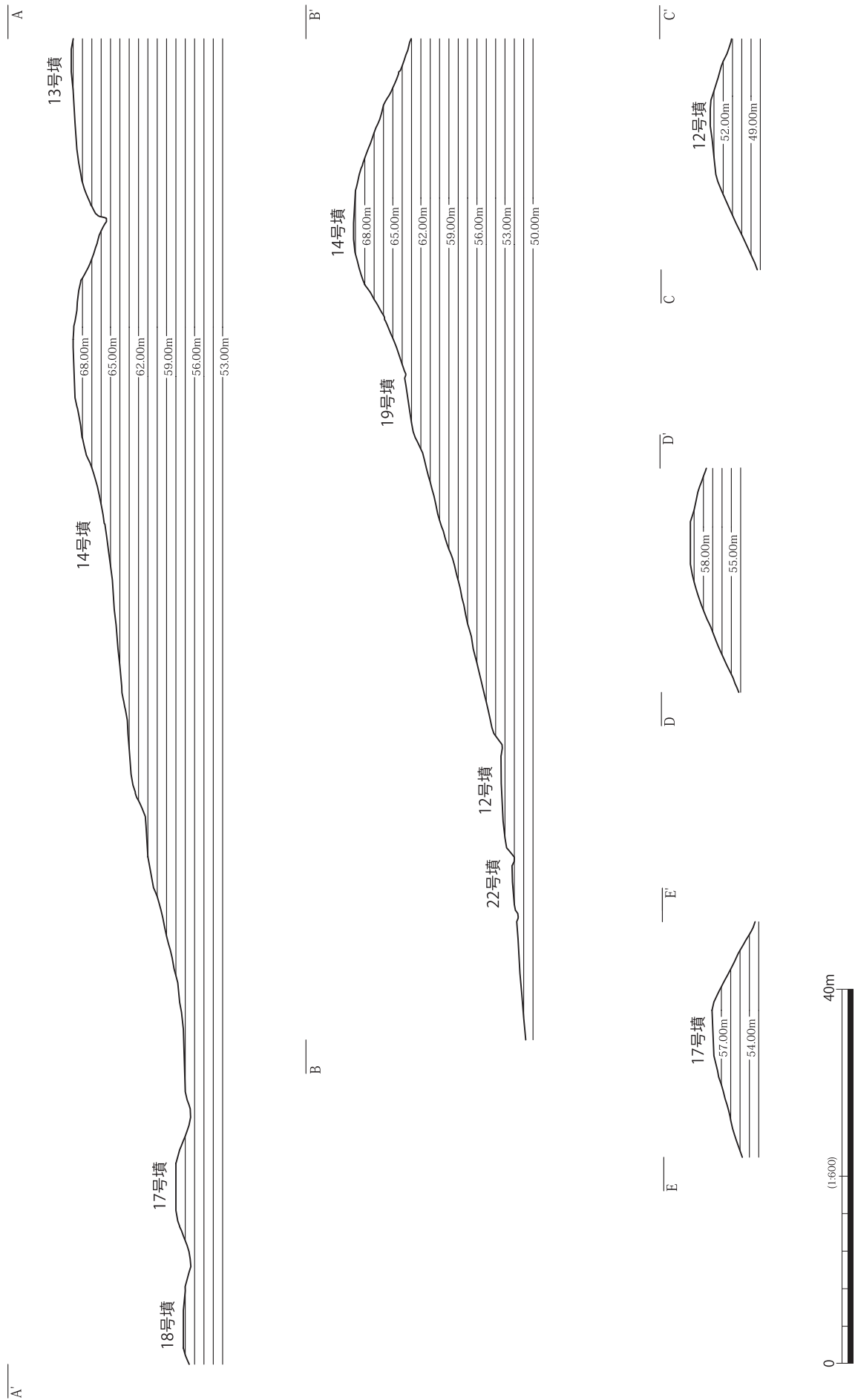
12・22号墳とも頂部平坦面が広い方墳で、B群と比べて墳丘は低い。周溝の一部を共有して両者は隣接する。埋葬施設は墳頂部で各1基検出し、12号墳の埋葬施設は尾根筋に対して直交方向、22号墳のそれは尾根筋に平行している。12号墳の埋葬施設からは土器転用枕（高杯）、鉄剣、鉄鎌、刀子、22号墳の埋葬施設からは鉄剣が出土している。

事前踏査では12号墳の1基だけが認識されていたが、現況を確認したところ、12号墳以外に4箇所平坦面が確認され、新規に古墳が存在する可能性を考えた。しかし、調査の結果、12号墳の北側で22号墳を1基確認したのみであった。

築造時期は出土遺物等からA群は古墳時代前期中頃から古墳が順次築造され、B群はA群よりやや後出する。C群は古墳時代中期中頃と考えた。



第10図 本高古墳群全体図（遺構配置図 1/600）



第11図 古墳の立地（墳丘断面図 1/600）

## 第2項 基本層序 (第12図)

### 基本層序

第1項で述べたように、調査地全体はやせ尾根地形。事前の試掘調査や伐木後の現況を確認したところ、尾根頂部では地層の堆積が薄く、斜面部に厚く堆積していることが容易に推測された。また、調査地内には植林の跡を示す腐植した立木が認められるものの、古墳構築以後、尾根が大きく改変された様子は見受けられなかった。

ここでは、堆積の状況を詳述する。なお、その状況は第12図に示した。

I層：腐植土直下の堆積層。調査地全体に堆積し、尾根頂部では5～10cm程度と堆積は薄い。谷に向かう斜面下方では厚く堆積する。明褐色～黄褐色系の土で、シルト～粗砂が混じる。

同層出土遺物には磨石、鉞等があるが、堆積時期は不明である。

II層：古墳築造後の堆積層。III層もしくはIV層の直上に堆積する。主に周溝埋土の上部や墳丘裾部から下方の斜面部に堆積し、墳丘盛土の崩落土等も含んでいる。調査地中央の谷に連なる斜面部では約20cmとやや厚く堆積する。明褐色～黄褐色系の土で、シルト～粗砂が混じる。

II層の堆積は時期を比定できる遺物が出土しておらず、古墳築造後としかわからない。

III層：古墳築造以前の旧表土層。IV層に相当する風化した基盤層、古墳構築以前の二次堆積層の上部が土壌化した層。褐色系の土で、シルトを主体とし、炭化物粒を含む。

主に古墳墳丘盛土の直下や、谷頭付近の斜面下方に分布し、調査地中央の谷頭付近にあるピット群は、III層の下面で検出した。

IV層：古墳築造以前の堆積層や基盤層。尾根の上部に認められる中生代流紋岩の岩盤やその上部の風化土、古墳築造以前に堆積した二次堆積層を含めている。尾根頂部は風化した岩盤が広がり、部分的に岩として露出する。

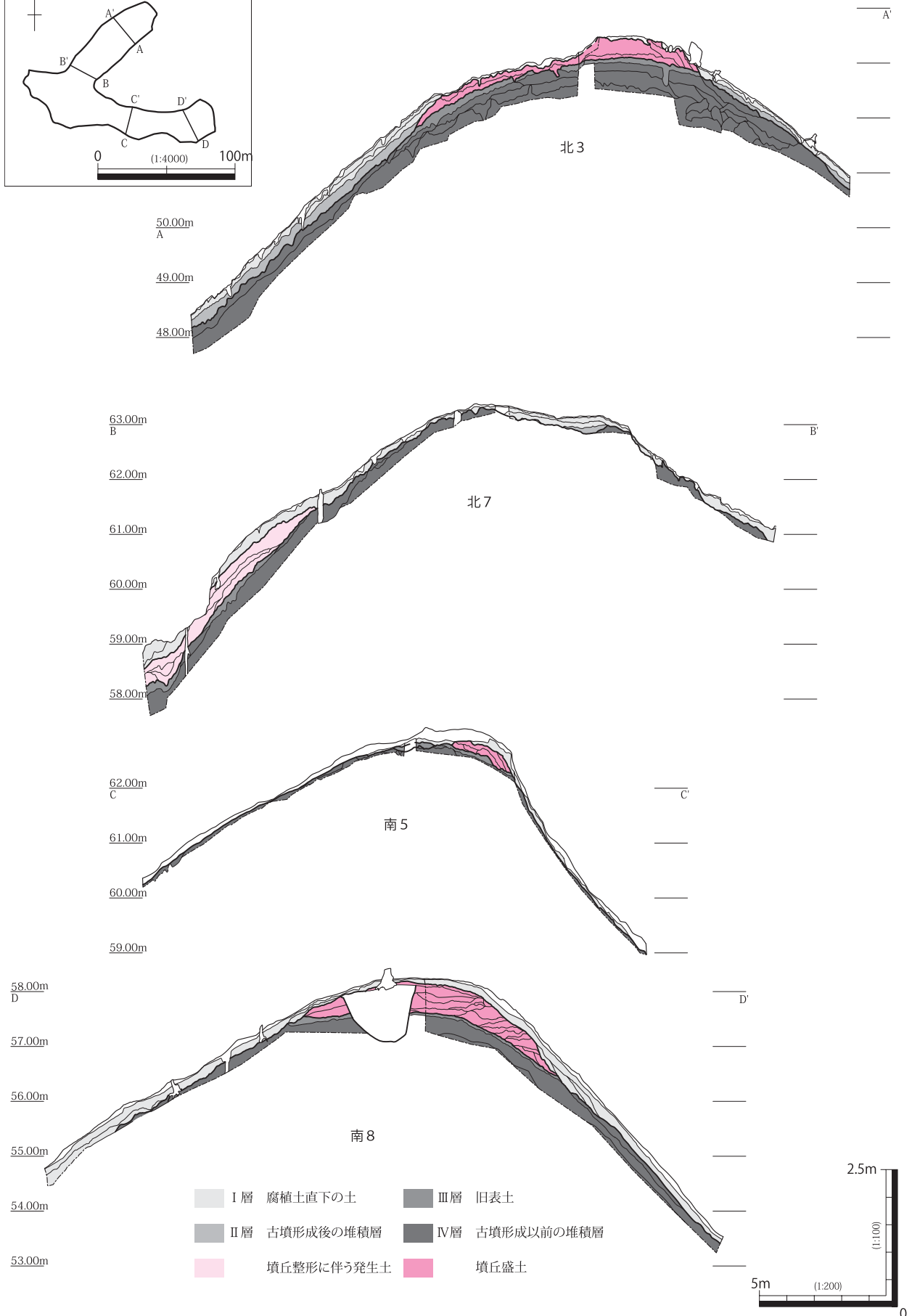
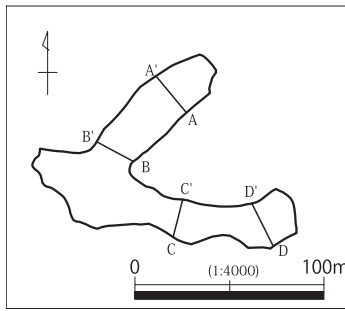
腐植土、I層は尾根頂部では堆積が浅く、斜面地では南北支群とも斜面下方ほど堆積が厚くなる。

II層は古墳築造後の堆積層で、主に北支群の稜線上や墳丘裾から斜面下方に広がる。斜面勾配が比較的緩やかな箇所には厚く堆積するが、崩落等の影響によってII層の堆積を確認できない箇所もある(第12図A-A', B-B')。

古墳築造以前の旧地表面を形成するIII層は、主に古墳盛土の直下(A-A')に広がる。また谷頭周辺(B-B')や、14号墳後円部南西斜面では、盛土に埋め立てられた谷地形に部分的な広がりが認められる。III層の分布範囲は限られており、尾根上では古墳の墳丘整形によって失われているか、崩落等によって流出していると考えた。

IV層は尾根の比較的高位から、腐植土やI層、II層直下で確認できる。尾根全体に崩落や地滑り、浸食の影響が認められ、古墳築造後、尾根全体の堆積作用はあまり進んでいないと推定できる。

なお、北支群の東側斜面には、I層とIII層の間に、III層以下の土をブロックとして含む地層が斜面下方に約50cmの厚さで堆積している(B-B')。この地層は谷頭周辺の狭い範囲に分布し、その高位には14号墳のくびれ部や19号墳がある。地層中にIV層やIII層の偽礫を多く含むことから、墳丘整形に伴う発生土を墳丘外側の斜面に廃棄したものと推定した。



第12図 堆積の状況 (縦1/100・横1/200)

## 第2節 12・22号墳の調査

### 第1項 概要（第10・11・13図，巻頭図版5，図版2～9）

#### 古墳が築造された尾根の特徴

12・22号墳は北支群の北東端に位置する。

古墳が築造された尾根は、ほぼ中央に頂部稜線が走り起伏は比較的少ない。標高は調査地北西端で52.2m，19号周辺で62.00m。約10mの比高差があるが，第10図でもわかるように，12号墳周溝南西端から19号墳にかけては急傾斜となり，12・22号墳は尾根の比較的緩やかな場所に選地されていることがわかる。

古墳周辺での谷部との比高差は15m前後であるが，南東斜面が谷部に向かって平均的に傾斜するのに対し，北西斜面は谷が狭小なため，調査地端から急傾斜となる。

南支群に築かれた17・18号墳周辺との比高差は約4m，本高弓ノ木遺跡が展開する南側平野部から12・22号墳を眺望することはできない。東側平野部からは，北支群と南支群との間に形成された谷地形を通じて墳丘の盛り上がりを確認することができる。

この尾根はさらに北東方向に向かって徐々に標高を下げながら延び，古墳状の隆起が数箇所確認される。

#### 調査前の古墳の状況（第9図）

**12号墳** 当墳の墳丘の盛り上りはわずかで，尾根頂部を境にして南側が一段低く平坦になる状況が観察され，墳丘南半部は，後世に改変されていることが読み取れた。周溝については完全に埋没し，その痕跡を窺うことはできなかった。ただ，17・18号墳が築かれた尾根上から12号墳を見ると，墳丘の盛り上りを認識できる。古墳の規模は12m前後と推定した。墳形については，低墳丘であり周溝が完全に埋没していたため不明であった。

**22号墳** 当墳は墳丘の盛り上りが全く認識できなかった。12号墳の北東側にわずかながら平坦面が存在したため，古墳の可能性は低いものの12号墳の付随的施設の存在などを意識して調査を進めることとした。その結果，この場所から小規模な方墳が新規発見された。

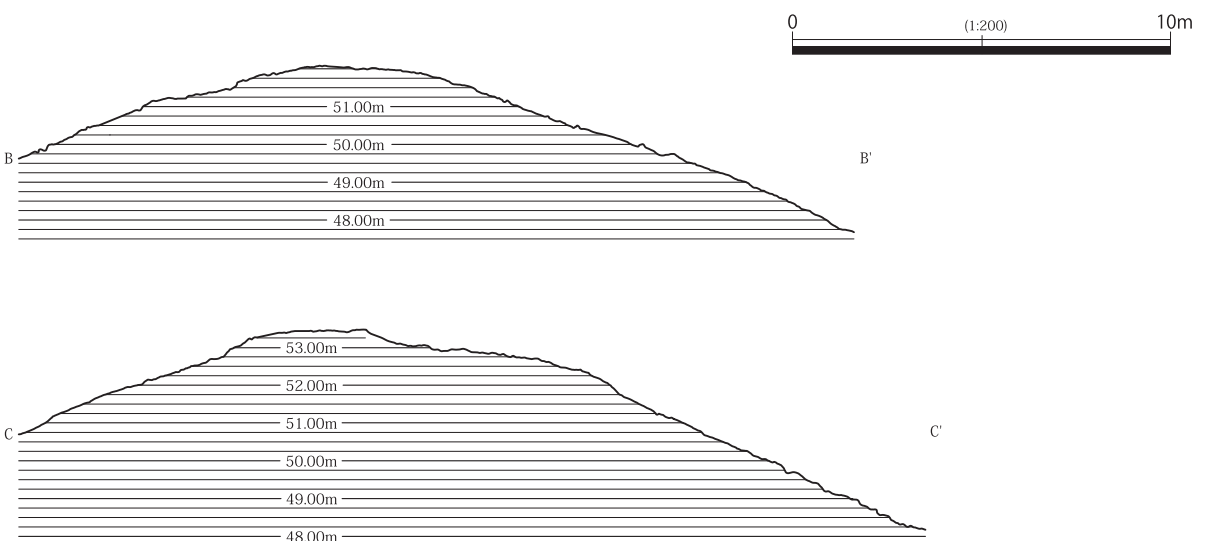
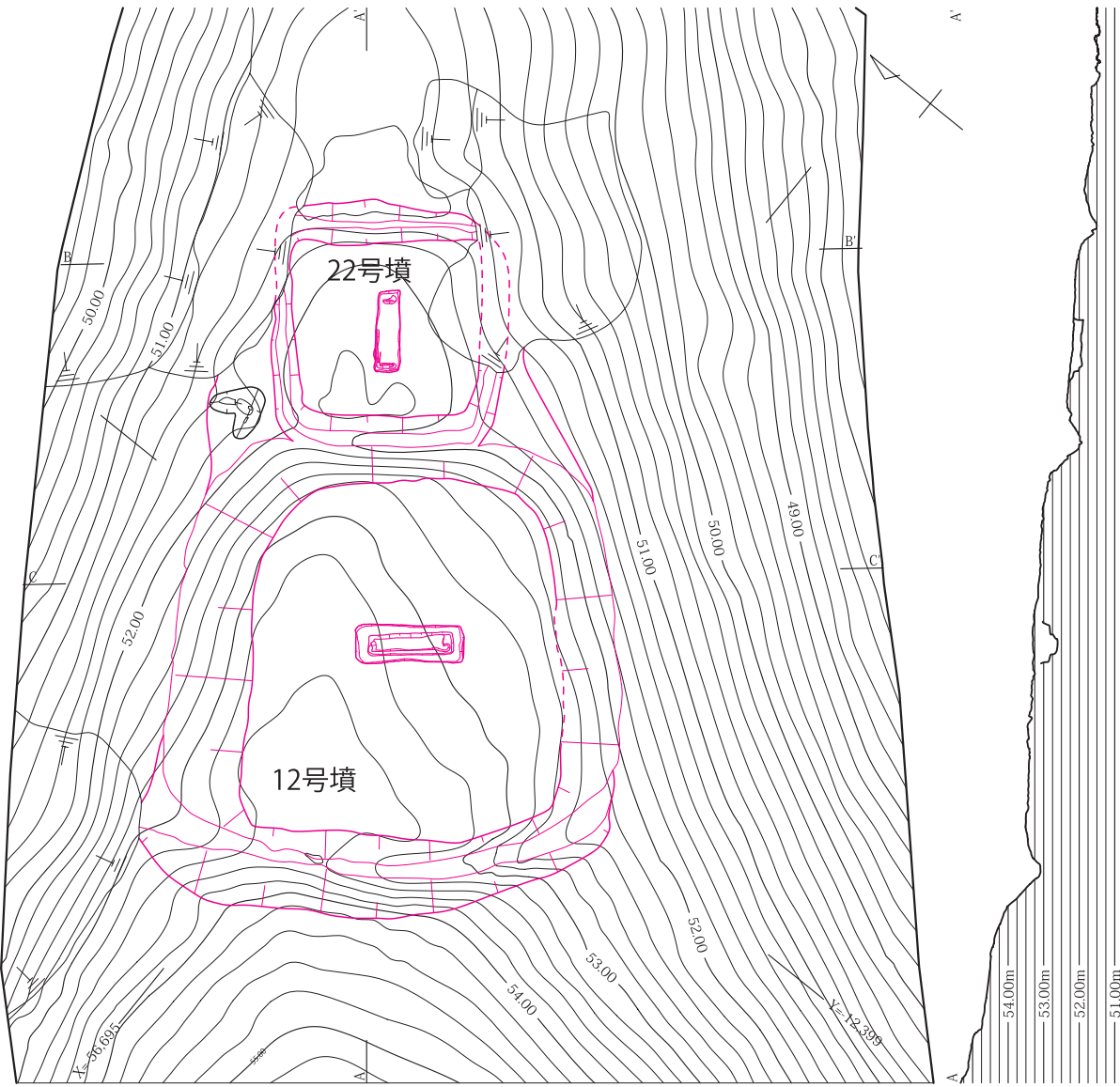
22号墳の北東では，調査地端にかけて尾根頂部で小規模な盛り上がりが認識できた。古墳の可能性が高いと判断して調査を進めたが，この周辺は大きな地形の改変を受けていることが，調査過程で明らかとなった。また，周辺からは，上層からではあるが，遺物も出土（第64図57）し，地形改変によって古墳が破壊された可能性も視野に入れて調査を進めた。しかし，尾根を切断する方法で掘削された周溝等，古墳の痕跡が確認できなかったことから，当該箇所には古墳は築造されていないと判断した。

#### 検出された古墳の関係性

調査の結果，12・22号墳の2基が確認された。各古墳の詳細については後述する。

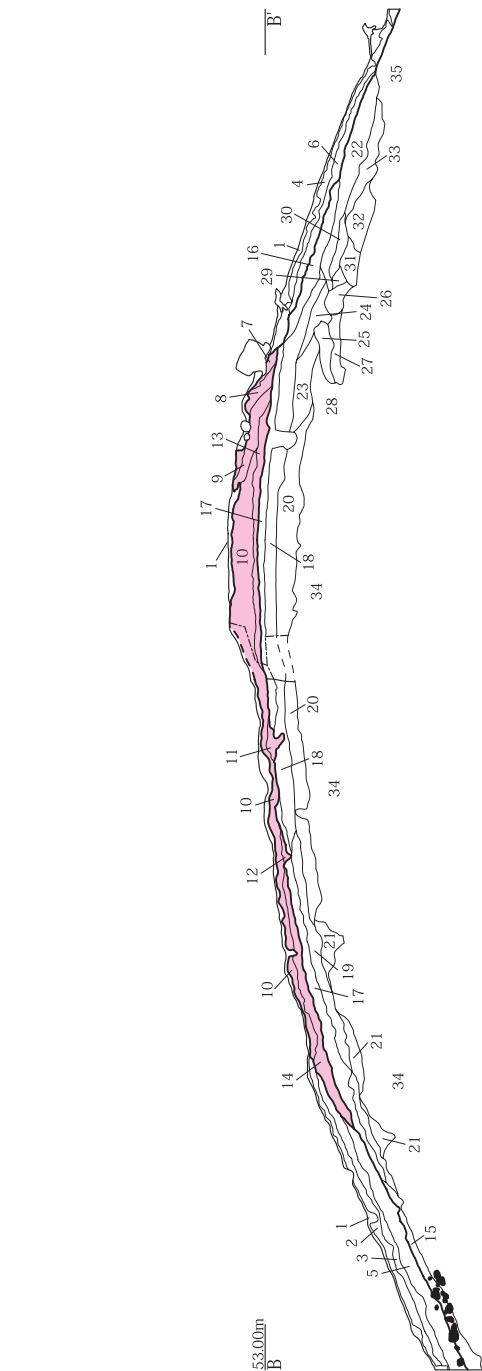
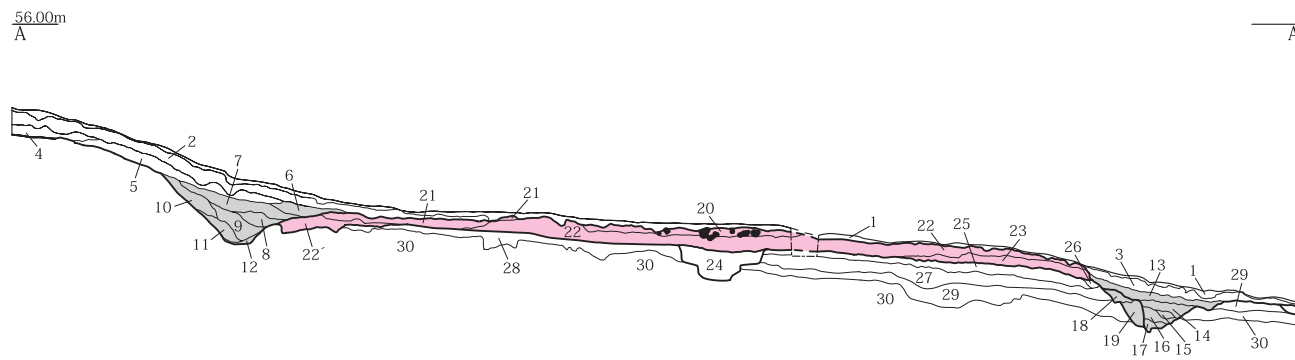
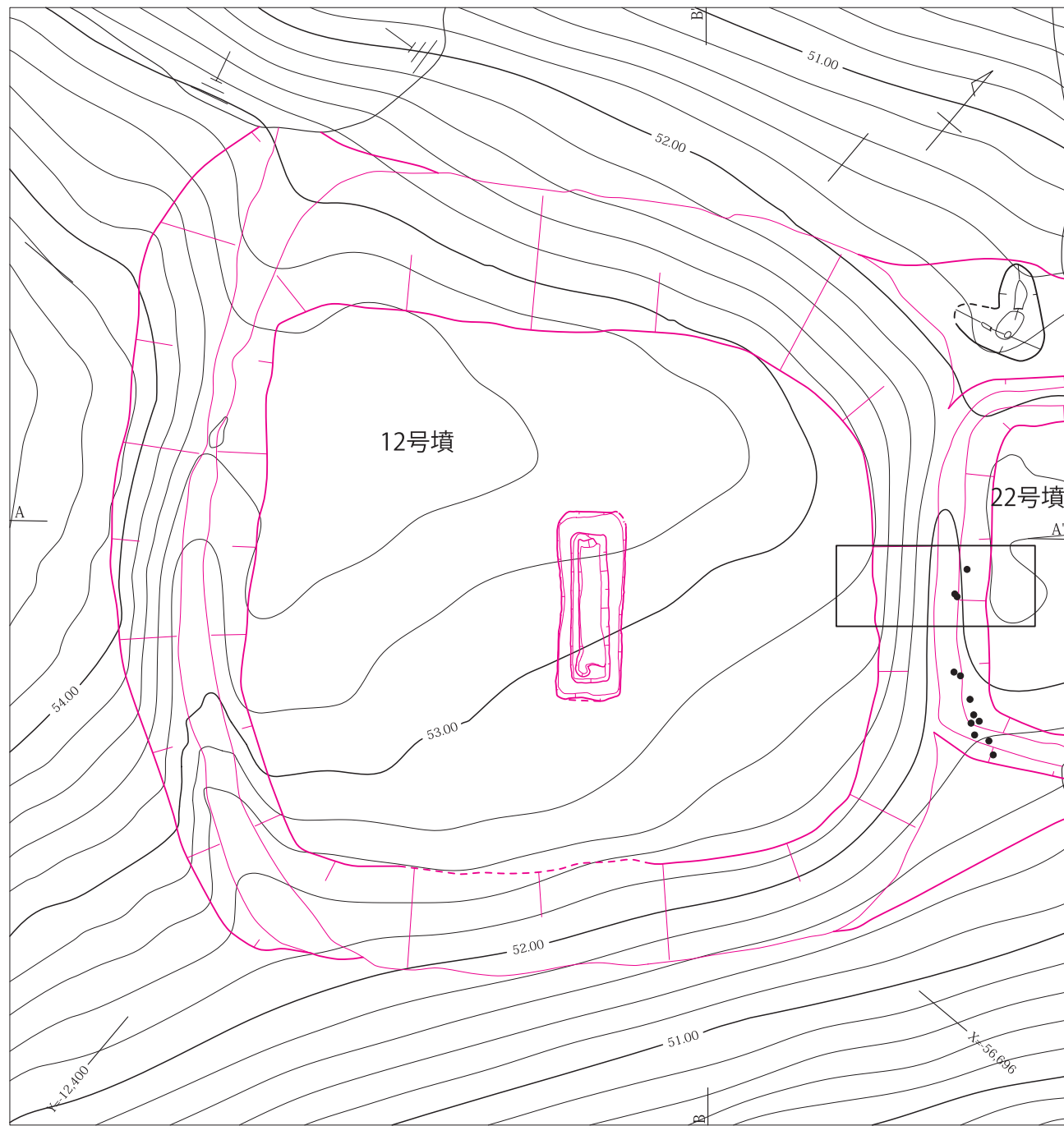
2基の古墳はいずれも方墳で，周溝を共有して築造されている。第10図の古墳群全体図からその立地状況を概観しても，この2基が当古墳群の中でひとつのグループとして捉えることができ，その関係性の強さは容易に推定される。

規模は12号墳に比べ，22号墳の面積はその約1／4程度である。立地の状況は，12号墳が尾根の幅が広く，高い場所に造られているのに対し，22号墳は尾根幅が狭く標高の低い場所に造られ，12号墳より立地条件が悪い。平面的な規模，選地状況からは12号墳の優位性が看取される。



第13図 12・22号墳 墳丘 平, 断面図 (1/200)





A-A'		B-B'	
1	腐植土	1	腐植土
2	I層 10YR6/8 明黄褐色シルト～粗砂混じり土	2	I層 10YR6/8 明黄褐色シルト～粗砂混じり土(粗砂多)
3	I層 10YR6/8 明黄褐色シルト～粗砂混じり土	3	I層 10YR6/8 明黄褐色シルト～粗砂混じり土(2に比べ粗砂少なく粘質強)
4	II層 10YR5/6 黄褐色粘質シルト	4	II層 10YR5/6 黄褐色粘質シルト(若干礫含)
5	II層 10YR5/6 黄褐色粘質シルト(4に比べしり弱)	5	II層 10YR5/6 黄褐色粘質シルト(粗砂混じり土(頂部粗砂多、下部少))
6	周溝埋土 7.5YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト(粗砂・小礫含・5より黒色化)	6	II層 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト(細かい礫含)
7	周溝埋土 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト(5・6に比べ均質)	7	II層 10YR5/6 黄褐色粘質シルト(礫含む粘質シルト)
8	周溝埋土 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト(土壌化顕著)	8	12号盛土 10YR5/8 黄褐色粘質シルト(若干細かい礫含む均質)
9	周溝埋土 10YR4/4 褐色粘質シルト(IV層ブロック・粗砂含む・土壌化顕著)	9	12号盛土 10R5/6 黄褐色粘質シルト(礫含むが22より少)
10	周溝埋土 10YR4/6 褐色粘質シルト(粗砂含む・下方ほど土壌化顕著)	10	12号盛土 10R5/6 黄褐色粘質シルト(礫含むが22より少)
11	周溝埋土 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト(下ほど粗・極粗砂多い)	11	12号盛土 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト
12	周溝埋土 7.5YR6/8 橙色細～粗砂(初期の堆積土)	12	12号盛土 10YR6/8 明黄褐色粘質シルト(均質な土・13と同一)
13	周溝埋土 10YR5/6 黄褐色粘質シルト(粗砂～小礫若干含)	13	12号盛土 10YR5/6 黄褐色粘質シルト(礫含むが22より少)
14	周溝埋土 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト(粗砂～小礫含・黒色化みられる)	14	12号盛土 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト(旧表土・均質で土壌化顕著)
15	周溝埋土 10YR4/4 褐色粘質シルト(土壌化顕著)	15	12号盛土 10YR7/8 黄褐色粘質シルト(しり弱)
16	周溝埋土 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト(14に比べ均質で礫少)	16	12号盛土 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト(礫多く含)
17	周溝埋土 10YR4/4 褐色粘質シルト(上部土壌化顕著)	17	12号盛土 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト(IV層ブロック若干含)
18	周溝埋土 10YR4/6 褐色粘質シルト	18	12号盛土 10R5/6 黄褐色シルト～粗砂混じり土(IV層ブロック・礫含)
19	周溝埋土 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト(均質)	19	12号盛土 10R5/6 黄褐色シルト～粗砂混じり土(IV層ブロック・礫多く含)
20	12号盛土 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト(礫多く含)	20	12号盛土 10YR6/8 明黄褐色粘質シルト(IV層ブロック含むが22より少)
21	12号盛土 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト(IV層ブロック若干含)	21	埋設施設埋土
22	12号盛土 10R5/6 黄褐色シルト～粗砂混じり土(IV層ブロック・礫含)	22	III層 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト(旧表土・均質で土壌化顕著)
23	12号盛土 10YR6/8 明黄褐色粘質シルト(均質)	23	III層 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト(25より黒色化弱い)
24	埋設施設埋土	24	IV層 10YR7/8 黄褐色粘質シルト(しり弱)
25	III層 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト(旧表土・均質で土壌化顕著)	25	IV層 10YR6/8 明黄褐色シルト～粗砂(粗砂が主・よくしまる)
26	III層 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト(25より黒色化弱い)	26	IV層 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト～粗砂(よくしまる)
27	IV層 10YR7/8 黄褐色粘質シルト(しり弱)	27	IV層 5YR6/4 にぶい橙色土(岩盤に近い)
28	IV層 10YR6/8 明黄褐色シルト～粗砂(粗砂が主・よくしまる)	28	
29	IV層 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト～粗砂(よくしまる)	29	
30	IV層 5YR6/4 にぶい橙色土(岩盤に近い)	30	

第14図 12号墳 墳丘 平, 断面図 (1/100)

築造の順については、平面的に読み取ることは難しいが、共有している周溝の埋土の状況から12号墳→22号墳で築造されたことを確認した。また、この周溝から出土した完形の高杯（第21図13）などの遺物は、その出土位置や層位から22号墳に伴うものと判断した。

## 第2項 12号墳（第13～16・20・21図，巻頭図版5，図版3～6）

### 1. 墳丘と周溝（第13・14図，図版3・4・8）

#### 墳丘

12号墳は方墳。墳丘規模は南西―北東軸で11.7m，南東―北西軸で約13m。墳頂部の標高は53.4m，墳丘高は北東側周溝底から1.3m。低墳丘墳と言える。

墳丘は尾根にほぼ直交する溝を掘削することにより，墳丘の南西辺と北東辺を整形し，掘削発生土を盛土として利用し形を整えている。

現状では，墳丘南東側は平坦に地形改変され，盛土の状況は把握できなかったが，北西側では良好な状況で偽礫状になった基盤層（IV層）を盛土したことが観察された。盛土の厚みは最も厚い墳丘中心付近で0.3～0.4mで，墳裾に向かって薄くなる。

墳丘の北西辺と南東辺は墳丘頂部平坦面から傾斜を保ちながら下降していくため，明確な墳丘裾は形成されていない。図示した当該墳丘裾ラインは掘削された周溝端，22号墳側と接する部分に見られる平坦面，断面観察による旧表土と盛土の関係を勘案して提示した。

墳頂部の盛土以前の地山整形については，古墳築造直前の地表面である土壌化した旧表土層の有無によってその状況がある程度わかった。

墳頂中心付近から北東側では明瞭に土壌化した旧表土層（第14図 A-A' 25層，B-B' 17層）の広がりを検出し，旧地表面を改変せず盛土していることがわかる。

一方，南西側については，古墳築造後に地形改変を受け，墳丘の残存状況は悪い。旧表土下のIV層上に盛土が行なわれていることを確認し，旧地表面を改変していることが窺えた。南西周溝外側と旧地表面が残存する墳丘北東端との比高差は0.8mある。旧地形を復元的に概観すると，12号墳が築かれた場所は尾根の傾斜が急傾斜から緩傾斜に変換する部分にあたり，傾斜の変わる旧地形を最大限に利用して南西周溝を掘削し，同時に埋葬施設構築のため旧地形を平坦に加工したと推定した。

なお，盛土除去面では墳丘築造に伴う祭祀の痕跡は検出されなかった。

#### 周溝（南西側周溝と北東側周溝）

周溝は尾根に直交して掘削している。

南西側周溝は尾根の頂部付近が最も深く，斜面地形に沿って浅くなる。周溝の外側は，若干円弧を描くように掘削されているが，墳丘側は直線的に整えられている。南西側周溝の規模は，頂部の最も広い場所で2.4m，断面形は緩やかな「V」字形を呈し，最深部で約1mである。埋土は大きく三層に大別される。最下層には古墳築造に近い時期に堆積したと考えられる土（第14図A-A' 12層）が見られ，その上層には土壌化を繰り返しながら土砂が堆積していった状況（第14図A-A' 7～11層）が看取される。さらにその上層には斜面の地形に沿うように土砂が堆積し（第14図A-A' 2～5層），周溝の痕跡を残さない地形が完成する。

北東側周溝は22号墳の南西側周溝と共有する。当周溝は22号墳の項で行なうため詳述はしないが，土層断面の検討の結果，22号墳が後に築造されたと考えた。また，積極的な根拠は少ないが，22号

墳の墳丘端はその平面形から12号墳の周溝の外側を利用していることも考えられた。

なお、墳丘北東辺の北側と南側に造られた三角形を呈する平坦面の祖形は12号墳築造時に造られ、22号墳築造段階に現状に整えられたと推定した。

### 出土遺物

遺物は南西側、北東側周溝のいずれからも出土している。

南西側周溝からの遺物の出土は少ない。北側墳丘裾から土師器高杯の脚部(第21図12)が出土した。出土位置から墳丘上に置かれていたものが転落したものと判断される。北東側周溝からは完形の土師器高杯(第21図13)などの遺物が出土したが、これらの遺物も22号墳の項で詳述する。

周溝から出土した遺物は少ない。出土状況から墳丘上で土器を用いた祭祀が行われたことが窺えるが、土器の多くは北西側の尾根谷部方向に転落した可能性もあり詳細は不明である。

## 2. 埋葬施設(第15・16・20・21図, 巻頭図版5, 図版5・6)

### 位置と検出状況

12号墳に築かれた埋葬施設は1基である。墳丘のほぼ中央に位置し、主軸はS-40°-Eで、墳丘長辺に直交する。高杯の杯部を枕として転用しており、頭位は南東とわかる。

調査では埋葬施設構築の段階として①「完全な盛土を施した後構築する」、②「一次盛土を施し埋葬施設構築, 埋葬後墳丘の整形を行なう」、③「盛土を施す以前に埋葬施設構築, 埋葬後に盛土を施す」の三つの方法を想定し、埋葬施設の検出作業を行なった。

まず残存する盛土上面で埋葬施設の検出を行なったが、埋葬施設を確認することはできなかった。次に盛土を徐々に掘り下げ、平面的に盛土の状況が変化する場所で検出を試みたが、確認できなかった。結局、埋葬施設を検出できたのは、盛土除去面、旧表土層上面であった。

このような調査状況から、12号墳は埋葬施設構築後に盛土を施す方法によって古墳が構築されていると判断した。ただ、調査過程で盛土と埋葬施設との土層関係を探る土層観察用畔の設定ができていない。断面と平面の両方で検証するのが最良であるが、今回は断面による検証ができていないことをここで記しておく。

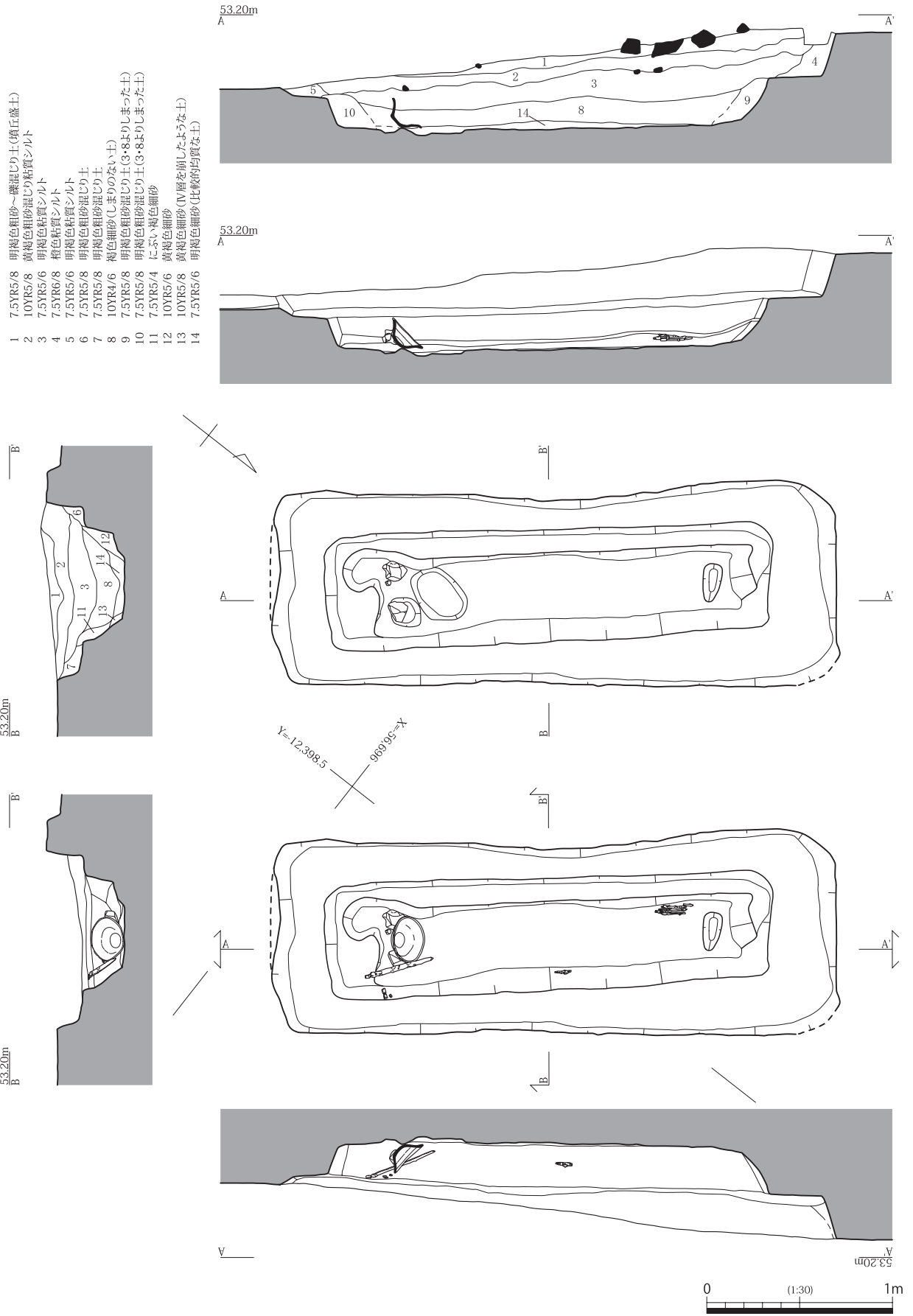
また、墳丘のほぼ中央部に基盤層を形成する礫が集中する場所があり、埋葬施設との関連性を想定して調査を進めた。礫の集中部と埋葬施設との平面的な位置関係は、頭位とは逆の北西端付近に当たる。礫を並べた様子は看取されず、集中するという表現が適切である。出土層位は盛土上層で、下層に集中する傾向は認められなかった。結局、埋葬施設との直接的な関係は不明であった。

### 構造

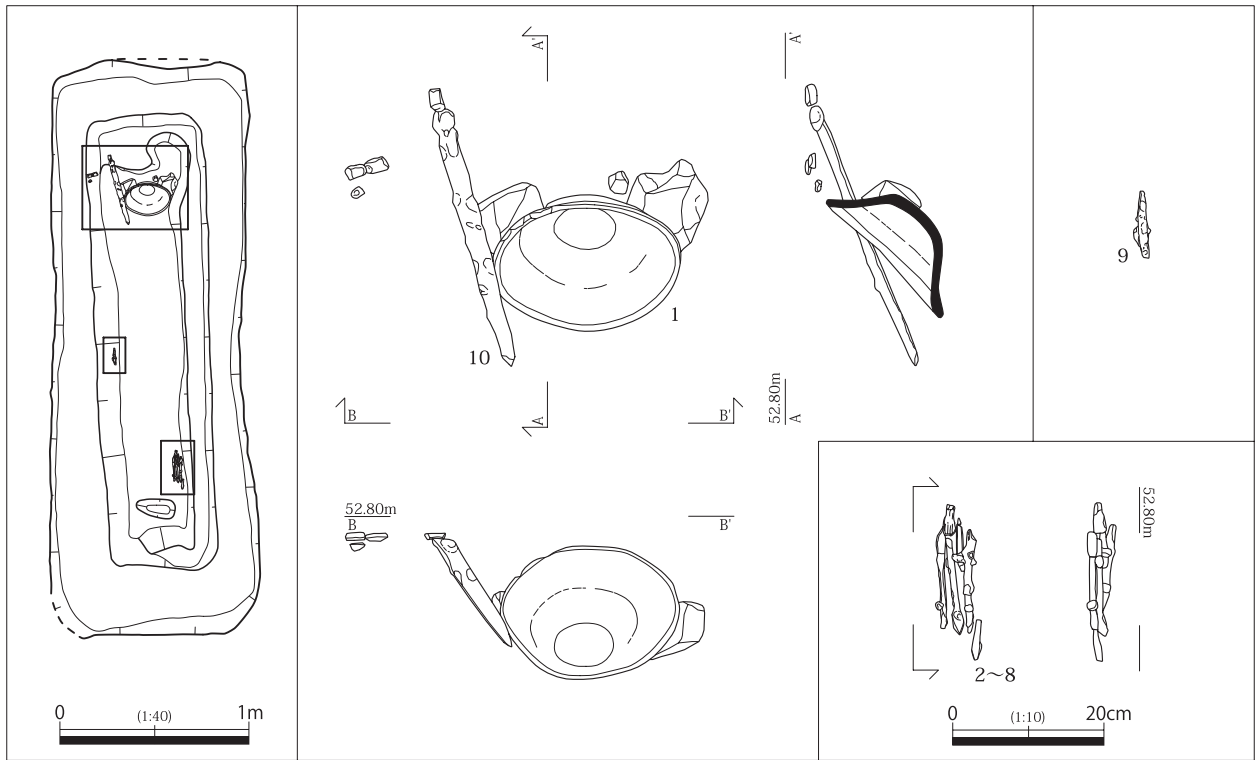
埋葬施設の掘方は長軸3.3m, 幅1.0~1.1m, 深さ0.3~0.5m。棺を納める部分は平坦面を造り出し二段に掘削する。棺構造は組合式木棺。

調査では、南東側約0.1m, 北西側約0.2m掘り下げた段階で棺の平面形を確認し、さらに側面では、部分的に木棺痕跡と考えられる変色部も確認した。棺内と推定される部分を慎重に掘削すると、南東隅で鉄剣の茎の一部が出土し、さらに掘削すると高杯の杯部を転用した枕を確認した。枕は二個の小石によって固定されている。この枕の底面の高さを棺底と推定し、調査を進めた。

棺内の掘り下げの過程では、上面で観察された木棺の痕跡はわからなかったが、棺内の埋土の状況を断面で観察した結果、両側端には木棺側板の痕跡の可能性のある層(第15図11・12層)が確認された。



第15図 12号墳 埋葬施設 平、断、立面図 (1/30)



第16図 12号墳 埋葬施設 遺物出土状況図 (1 / 10)

また、棺内最下層（14層）は均質な土で、枕が据えられた底面との関係から、この層の上面を床面と判断した。足位側にあたる棺底北西側で窪みを検出し、断面観察ではわからなかったが、この部分を小口板の位置と推定した。頭位側小口部の位置については平面、断面観察ではよくわからなかったが、鉄剣の棺内への落ち込んだ出土状況から、枕を据えられた場所より少し南東側と推定できた。このような状況から木棺規模を復元すると、長さ約1.8m、幅0.4～0.5mとなる。

なお、埋葬施設埋土は上の第15図1・2層が礫や粗砂を含み墳丘盛土が陥没したもの、3層が粒度の細かい堆積となり、木棺上の埋土の落ち込みと判断した。8層については3層と同様の可能性もあるが、しまりが弱く流入した土の可能性もある。

#### 枕と副葬品

出土遺物には、棺内と棺外のものがある。

棺内から枕に使用された高杯の杯部、鉄鏃、刀子が出土した。出土位置を第15・16図に示した。

枕として使用された高杯の杯部は、表裏面に赤彩が施されるが、破断面に赤彩が観察されないことから赤彩された土器を転用したものと推定している。

鉄鏃7点は、まとまった状況で出土している。比較的床面に近い場所で、鏃身を被葬者の頭と逆にに向けて出土した。矢柄は確認されなかった。刀子は1点、鉄鏃同様刃先を頭とは逆に向け、床面よりやや浮いた状況で出土した。鉄鏃は出土位置から判断して埋葬者の左足元、刀子は右腰のあたりに副えられたものと判断した。ただ、鉄鏃は矢柄が確認されなかったが、木質や木皮が巻かれたものもあり、矢として副えられた可能性が高い。

棺外から鉄剣1振が出土した。出土位置は枕の北西付近、頭部の右側にあたり、切先の方向は鉄鏃、刀子と同じである。剣先が棺内に落ち込むように出土しており、埋葬時は棺上に置かれていたものと判断した。

### 第3項 22号墳（第13・17～21図，図版7～9）

#### 1. 墳丘と周溝（第13・17～19図，図版7・8）

##### 墳丘

22号墳は方墳。12号墳の北東側に接して，周溝を共有する。周溝はほぼ全周し，墳丘規模を正確に把握できる。規模は南西－北東軸5.8m，南東－北西軸5.7m。当古墳群の中で，最も小規模である。墳頂部検出時の標高は51.2m，墳丘高は南西側周溝底から0.6m前後。12号墳同様，低墳丘墳と言える。

墳丘各辺は，周溝を掘削することによって直線的に形を整えている。

墳頂部は後述するが，埋葬施設の残存状況から墳丘上面が削られ，現状では12号墳側から北東に向かってわずかに傾斜するものの，ほぼ平坦となっている。地形改変により盛土は確認できなかったが，周溝を掘削し，その掘削土を盛土して墳丘を整形するのが通常古墳築造方法であり，22号墳も元来は盛土していたと推定した。ただ，周溝規模から盛土量は少量で，墳丘高も低いと推定する。

墳頂部の整形についても，盛土や旧表土層が残存していないため不明である。ただ，築造前の旧地形は，12号墳の北東端に残存する旧表土層（第17図19層）や残存する22号墳の墳丘基盤層との関係から，12号墳側から22号墳側に向かって徐々に低くなる地形が復元される。少なくとも12号墳側では土壌化した旧表土層の存在が推定できる。12号墳の築造方法を参考にすると，旧地形を利用し，埋葬施設を構築するために，墳頂部を部分的に平坦に整形したと判断している。

なお，22号墳の北東側は第IV層が南東側からさらに低くなる傾向が看取されるが，周辺には土壌化した旧表土層が残存していない。前述もしたが，22号墳の北東側は後世に地形改変されている。12号墳墳頂南東側も平坦に削られており，22号墳周辺は比較的広い範囲に地形が改変されていることがわかり，これは近年の山林開発に伴うものと推定している。

##### 周溝

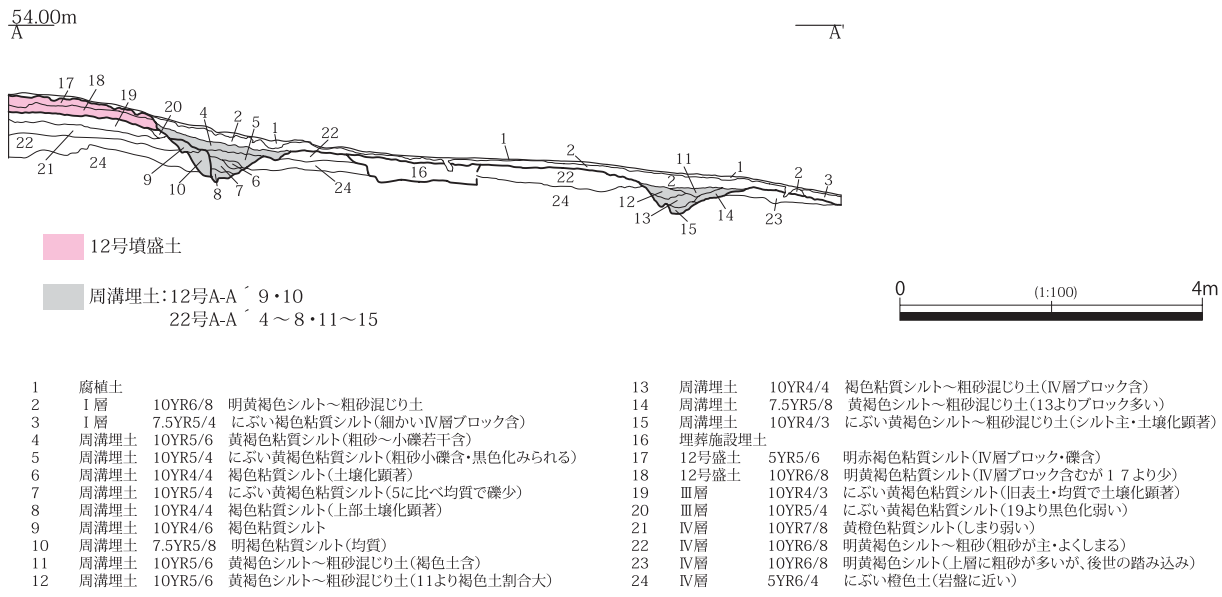
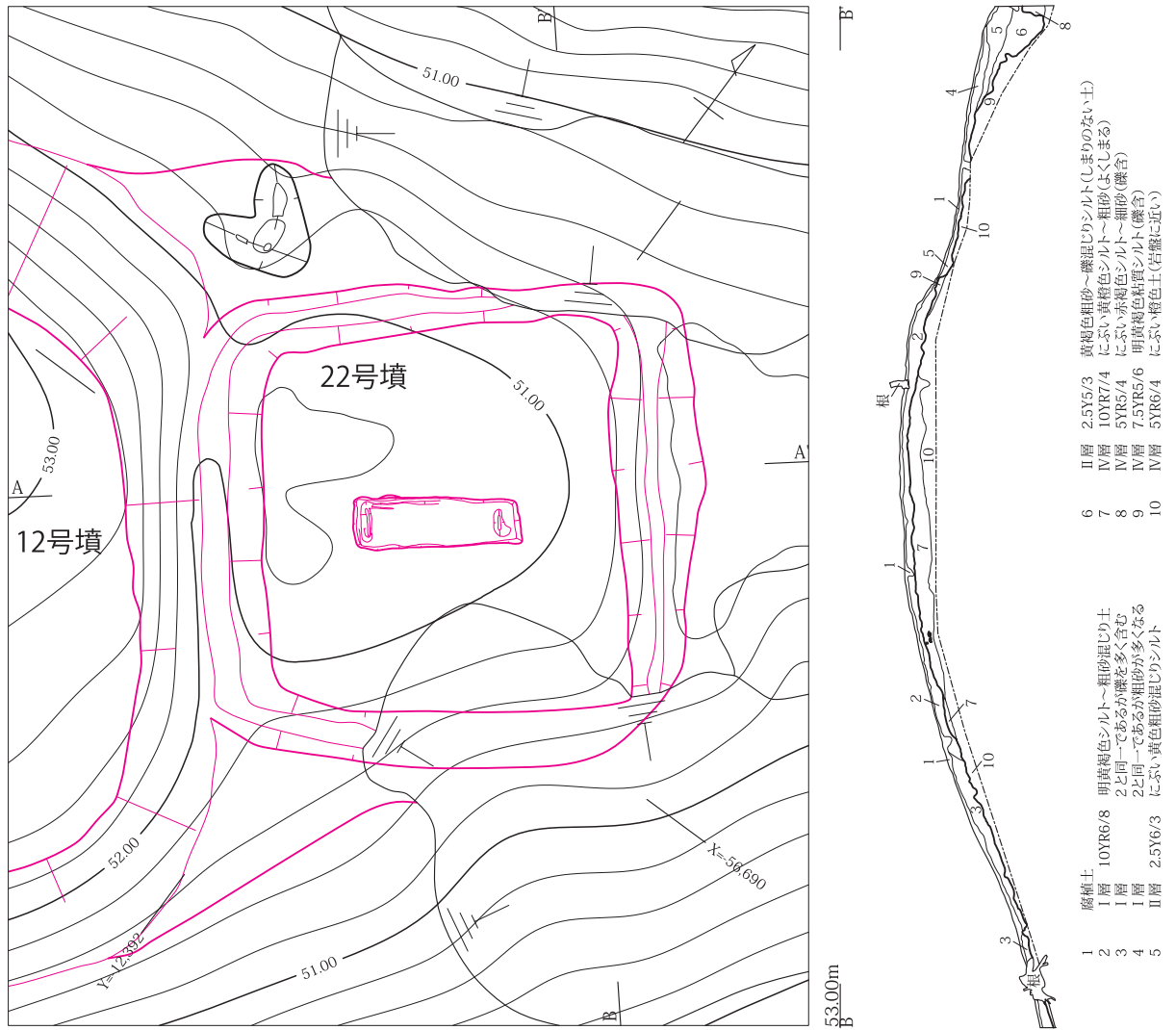
周溝はほぼ全周すると推定され，南西側は12号墳の周溝と共有する。尾根に直交する南西側と北東側は深く，尾根に沿って並行する北西と南東側は浅い。

小型墳で，尾根頂部付近の傾斜が緩やかな狭い範囲に築造したためか，尾根に直交する北東側周溝は墳丘側だけでなく外側も比較的直線的に掘削されている。南西側周溝も比較的直線的に伸びるが，これは12号墳と共有するためである。墳丘からの深さは尾根頂部付近の最深部で北東側0.4m，南西側で0.5m。

北東側周溝の埋土は大きく三層に大別される。最下層には土壌化したシルト～粗砂混じり土が堆積し，その上層は，弱い土壌化したシルト～粗砂が溝の窪みを平坦化するように堆積する。さらにその上層はI層と呼称する尾根全体に広がる土が覆う。いずれも人為的な埋土とは考えにくい。

南東側周溝は12号周溝と共有するが，断面を検討した結果，22号墳が後出すると判断した。重複する土層の関係は第17図（A-A'），図版8に示した。9，10層が12号墳の周溝埋土。12号墳の周溝がある程度埋まった段階で22号墳の周溝が掘削されたと判断した。ただ，10層は均質な土で，22号墳築造時の整地土であった可能性もある。22号墳の埋土は四層に大別される。最下層（8層）に土壌化が顕著なシルト層，その上層に土壌化を繰り返しながら，周溝が埋没する状況（5～7層）が看取される。さらに上層には12号墳の墳丘端まで堆積する粗砂～小礫が混じるシルト層，尾根全体を覆うI層が堆積する。

尾根に並行する周溝埋土は単一層で，褐色系のシルト層が堆積し，比較的早い段階に周溝が完全に



第17図 22号墳 墳丘 平, 断面図 (1/100)



第18図 22号墳 周溝内 遺物出土状況図 (1/20)

調査の成果  
第IV章

埋没したと推定した。

上記のように尾根に直交する周溝は、土壌化の作用が南西側と北東側で若干異なることがわかる。いずれも最下層で一旦表土化するものの、その上層では黒色化の強さが若干異なっていた。これは周辺の微地形や周溝規模などが堆積の速度に影響したものと考えている。

#### 出土遺物

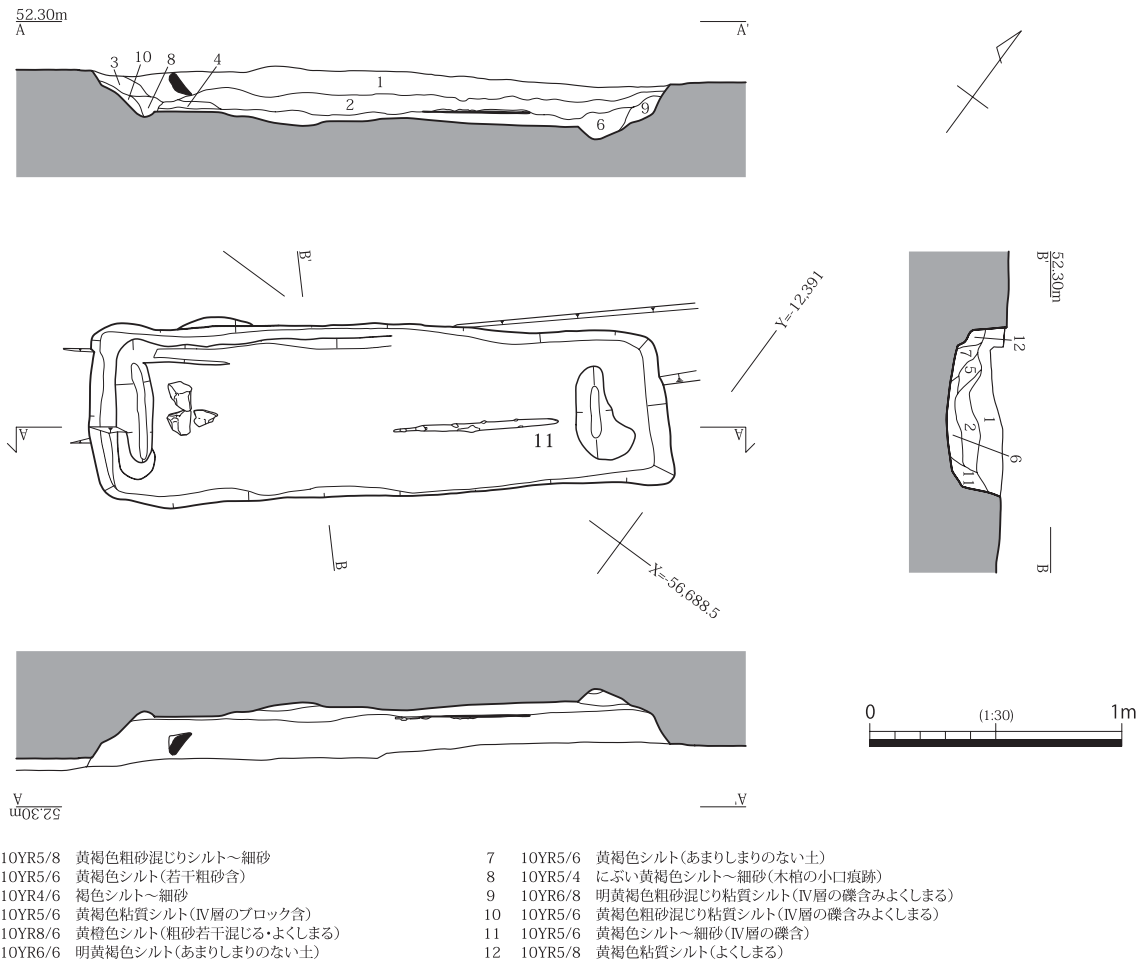
遺物は南西側周溝から出土した。出土分布は第14図にドットで示し、部分的な詳細は第18図に提示した。

南西側周溝からは砥石（第21図19）、完形の土師器高杯（13）、小型壺（17）、などが出土した。高杯（13）と砥石（19）、刀子（18）の出土位置は周溝ほぼ中央、出土層位は第17図A-A' 5層中である。第18図に示したように高杯は、杯部と脚部が接して出土し、刀子の茎部分は高杯の下部から出土した。砥石や刀子が出土しており、周溝内埋葬が行なわれていることも意識して調査を進めたが、その痕跡は確認できなかった。

高杯（14・15）、小型壺（17）、壺（16）は破片として出土。出土位置は22号墳側、中央南寄りから南コーナー付近。これらは出土分布の傾向から、22号墳に伴うものと判断した。

また、元来墳丘上にあったものか、周溝内にあったものかについては、いずれもが、周溝が埋没す





第19図 22号墳 埋葬施設 平，断，立面図（1／30）

る過程，しかもかなり上層で出土していることから，墳丘上に位置していたものが後に周溝に落ち込んだと考えた。

## 2. 埋葬施設（第19・20図，図版9）

### 位置と検出状況

22号墳に築かれた埋葬施設は1基である。墳丘のほぼ中央に位置し，主軸はS-57°-Wで，墳丘長辺にほぼ並行する。小石を用いて枕とし，頭位は南西とわかる。

調査では，当古墳は盛土及び旧表土が残存しないため，まず墳丘検出面で埋葬施設の検出を行なった。その結果，墳丘ほぼ中央で長方形の埋葬施設掘方を確認した。

墳丘は削られていることが認識でき，さらに埋葬施設もその上部は削られていることも予想されたため，この段階で棺底に近い可能性も視野に入れ，掘り下げは慎重に進めた。

なお，この段階で検出した掘方の状況は，IV層のやや明るい黄褐色土が広がる中に暗い黄褐色土が長方形に認識できる状況であった。また，南西側短辺と北西長辺は明瞭に検出できたが，南東長辺はやや不明瞭であったため，再検出を行ない，確実な検出に努めた。

### 構造

埋葬施設の掘方規模は，残存法量で長軸長は2.3m，幅は頭位側で0.7m，足側が若干狭く0.6m，深さは0.19～0.21m。棺構造は組合式木棺。

調査では徐々に掘り下げを行なうと，まず南西側で小石を1個検出した。当初，この小石が枕とは

認識できず、さらに埋土の掘り下げを行なった。その結果、頭位側で小口部、北西長辺で側部と推定できる基盤層のわずかな段が確認され、南東辺では側板あるいは側板の裏込めと考えられる痕跡（第19図11層）を確認した。

この段階で棺内を意識して掘り下げを行ない、深さ約0.2mで小口板を据えた痕跡と考えられる窪みを確認した。合わせて長軸土層観察用の畔を除去し、前記の小石と対となる小石を検出した。2個の小石は「V」字状になるよう平たい部分を上に向けて据えられていたため、枕であることを確認した。この石枕の出土位置からも埋葬施設上部は削られていると類推した。

断面や小口部の窪みから復原される木棺規模は、長軸約1.8m、幅約0.5m。高さは残存部で掘方検出面までで約0.2mであるが、構築時はもう少し高かったと考えている。

棺底については枕の底面、副えられた鉄剣の状況や横断面の観察によって検討した。最下層（6層）に黄褐色の均質なシルト層がある。この上面で鉄剣が出土し、上面の勾配が比較的平坦であることからここを棺底と判断した。

さらに、掘方の最底部は断面図で示したように、中央から足側は平坦であるが、頭位側は凹凸がある。掘方底面を整形して木棺を据えたことが考えられよう。なお、木棺の底板の有無については検証できなかった。

#### 副葬品

棺内から鉄剣一振（第20図11）が出土した。

平面的な出土位置を第19図に示した。棺中央より南東側、層位は棺底と考えた6層上面、2層中。ほぼ水平に置かれた状況で出土している。柄側を頭位に向け、埋葬者の右腰から足元に沿うように副えられたと復元できる。

剣には布繊維の痕跡が部分的に残存する。柄や鞘の痕跡は無く、剣身に直接巻かれている。出土時の剣の下面にあたる面に木質は観察されない。

### 第4項 出土遺物と築造時期

#### 1. 12号墳の遺物（第20, 21図, 図版6）

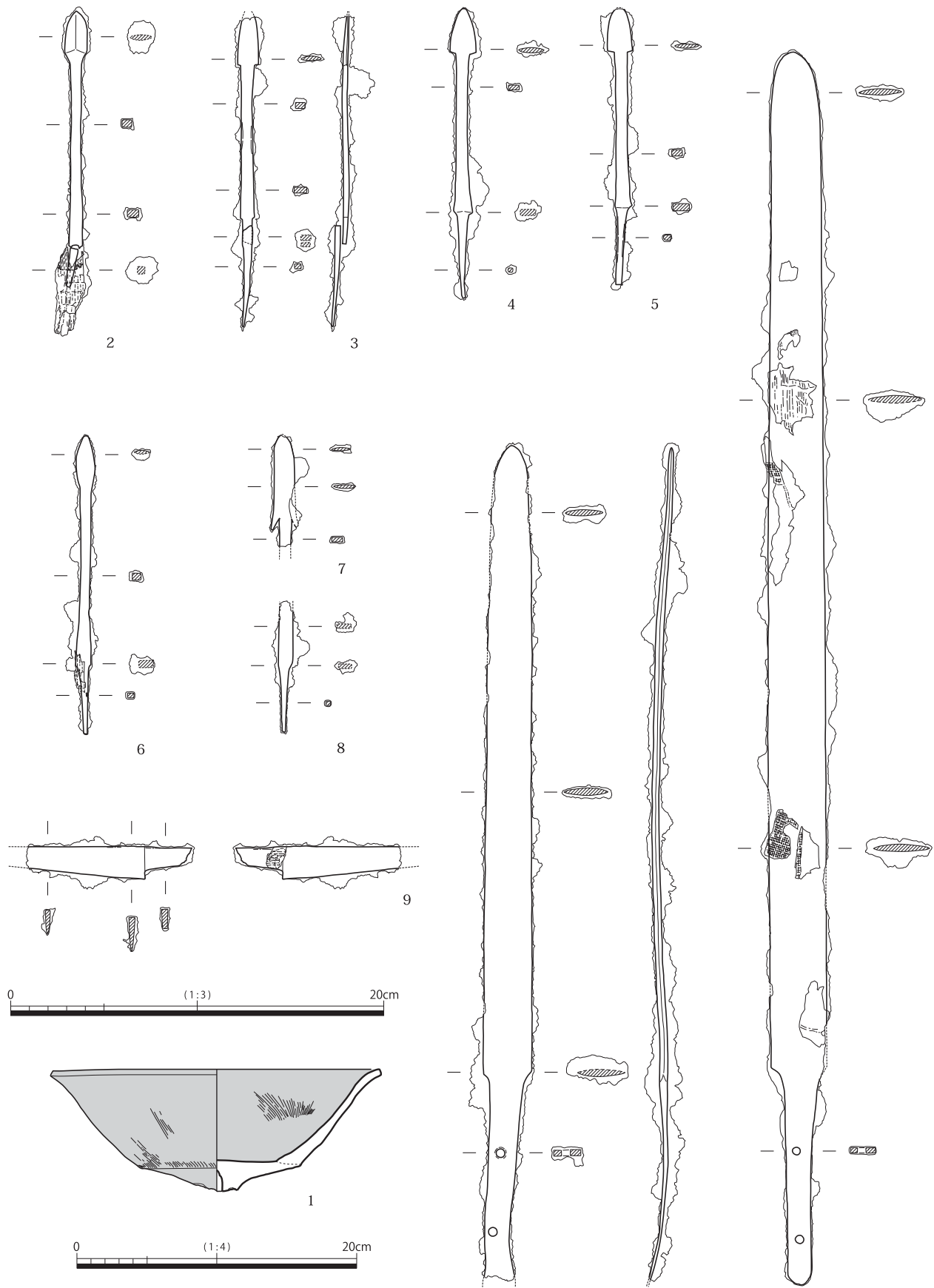
##### 棺内遺物

枕として使用された土師器高杯、副葬品として鉄鏃、刀子がある。

土器（第20図1, 図版6）高杯の杯部、完形品である。杯底部付近に明瞭な稜を有し、口縁部が直線的に大きく開く大型高杯。器面の残存状況は悪いが、内外面ともハケ目調整の後ナデ調整を施す。外面には赤彩が施される。内面も赤彩が施されていたと推定されるが、現状では底部にしか確認されない。なお、脚柱部破断面には赤彩はない。

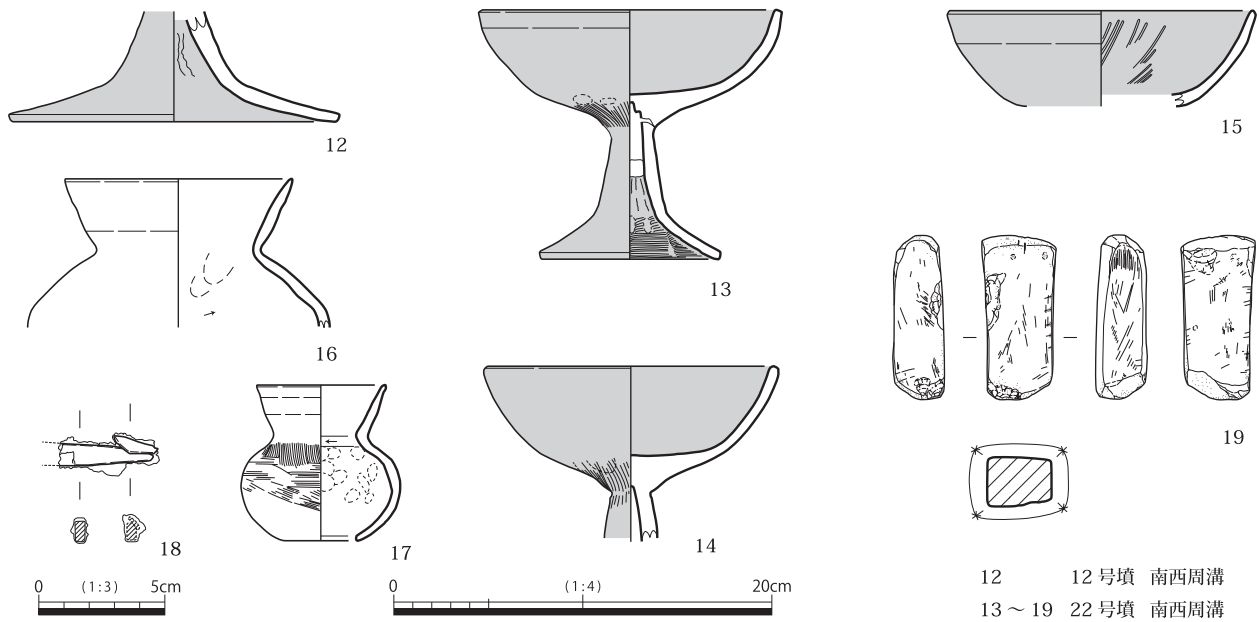
鉄鏃（第20図2～8, 図版6）7点図示しているが、7と8は同一個体の可能性が高い。

2～6は長頸鏃。2, 6は鏃身部が柳葉形をなし、2には鏃が観察される。鏃長は2が約17cm, 6が約16cm。頸と茎を分ける関はナデ関。2には茎部に樹皮の痕跡が残存しており、木皮が巻かれていたとわかる。3～5は鏃身部が三角形をなす。鏃長は3が約17cm, 5が14.9cm, 4が15.4cmとばらつきがあるが、鏃身から頸部長は4, 5が10.5～10.8cmと揃い、3は11cmを超えやや長い。鏃身部の形も4, 5は同一。3はこれらに比べ細長い。関は角関の範疇に分類されるが丸みをもつ。



- 1 12号墳 埋葬施設 枕
- 2～10 12号墳 埋葬施設
- 11 22号墳 埋葬施設

第20図 12・22号墳 埋葬施設 出土遺物 (鉄製品, 土器 1/3・4)



第21図 12・22号墳 周溝 出土遺物（鉄製品，土器，石製品 1/3・4）

7は欠損があるが、鍔身関に腸袂を持つ短頸鍔と考えられる。8は頸部から茎部の残存。茎部関はナデ関。

刀子（第20図9，図版6）刃先を欠く。現存長は8.8cm，復元長は約11cmとなる。残存刃部長は6.4cm，残存刃部幅は1.1～1.7cmで刃先に向かって狭くなる。背の厚さは0.3cm。茎部は長さ2.4cmで，目釘穴は無い。関は片関である。茎部片面には柄と推定される木質の一部が残存する。棺内からの刃先の出土はない。

#### 棺上の遺物

鉄剣（第20図10，図版6）茎部端の一部を欠くがほぼ完形。現存長は44.8cm。剣身部の長さは33.6cm，幅は中央付近で2.5cm，厚さ0.4cm。剣身部に鑄はみられず，断面形はやや扁平である。関はナデ関で，茎部には目釘穴を2箇所穿つ。茎部の現存長は11.2cm，幅は剣身部側の目釘穴付近で1.5cm。布の巻かれた痕跡，鞘，柄等の木質の痕跡は確認できない。

#### 周溝の遺物

土器（第21図12，図版6）高杯の脚部。裾が脚柱部から屈曲して大きく開く形態である。赤彩が内，外面に施される。

### 2. 22号墳の遺物

#### 棺内遺物

鉄剣（第20図11，図版9）完形品である。全長は65.9cm，当古墳群の出土品の中で最も大きい。剣身部の長さは54.3cm，幅は中央付近で3.0cm，厚さ0.4cm。剣身部に鑄はみられず，断面形はやや扁平である。関はナデ関。茎部は直線的で端部を丸く収め，2箇所の目釘穴を穿つ。長さは11.6cm，幅は中央付近で1.3cm。

剣身部には部分的に布が直接巻かれた痕跡が認められ，鞘入りではない状態で副葬されたことがわかる。茎部，目釘穴でも木質は観察できず，柄装着の有無は不明である。

### 周溝の遺物

土器（第21図13～17，図版8）13～15は椀形高杯。13は完形品で外面は杯部，脚柱部をミガキ，内面を粗い縦方向のミガキで仕上げる。屈曲して開く脚裾部は外面が横ナデで仕上げ，内面は粗いハケ調整をそのまま残す。全体に赤彩を施す。14，15は杯部片のみ残存している。両者とも13とほぼ同じ形態と考えられ，赤彩が施される。16は壺の口縁部から体部の破片。直線的な口縁部を持ち，口縁部は横ナデにより仕上げ，体部内面はヘラ削り後，上半部を部分的にナデ調整で仕上げる。17は小型壺で底部は焼成後に穿孔する。いわゆる布留期の小型丸底壺の系譜を引くものと考えられる。口縁部は横ナデで仕上げ，体部外面にはハケ目を施す。体部内面はナデであるが，頸部付近はヘラ削りを施す。残存状況が悪く，赤彩は確認できないが，おそらく行なわれていたであろう。

砥石（第21図19，図版8）長4側面に擦痕がある。古墳から砥石の出土例は知られているが，埋葬施設からの出土が多く，周溝からの出土例は少ない。全長は8.7cm，幅4.0cm，厚さ3.0cm。

刀子（第21図18，図版8）刀子の茎部と推定される。残存長は3，7cm。目釘穴は無い。

### 3. 築造時期

12，22号墳の特徴を再度簡単にまとめ，築造時期について言及する。

#### 墳丘，埋葬施設，出土遺物の特徴

まず立地である。12，22号墳は古墳群の中で標高が低く，さらに平野部からの眺望も他の群に比べると悪い尾根上に選地される。また，尾根頂部幅も狭く，当古墳群の中で好条件の場所を選地しているとは言えない。

墳丘は基本的に尾根に直交する溝を掘削し，その発生土で盛土を行い，形を整える方法で構築する。尾根の頂部幅も狭く，傾斜も緩やかで周溝の掘削土量に比例して盛土量も少ない。そのためか墳丘は低く，視覚的効果も弱い。

埋葬施設はいずれも墳丘中央に1基のみを築き，その後の副次埋葬は行わない。棺構造は，いずれも組合式木棺。木棺は13・19号墳に採用された長大な規模を有するものではなく，1.8m前後のものが採用される。枕は土器と石を用いるが，前期に通有な鼓形器台は転用されていない。これは12号墳の枕に転用された土器が，須恵器出現以後の古墳時代中期に所属するものであり，時期的にも符合する。

副葬品には武器と工具がある。このうち鉄鏃が時期を考える上での手掛かりとなる。出土鉄鏃は長頸鏃に分類され，この形態のものは古墳時代でも中期以降にその生産が活発となる。鉄剣については関が直関ではなく，いずれもナデ関である。これが時期的なものを反映しているかは不明である。

22号墳の周溝からは，比較的多くの土師器が出土している。これらの土器はいずれも古墳時代中期の範疇に入る。

#### 築造時期

調査では，12号墳が22号墳に先行して築造されたことが確認できた。しかし，出土遺物では型式差を認識することが難しく，非常に近接した時期に両古墳が築かれたことが窺える。築造時期については出土土器や鉄鏃から，古墳時代中期，須恵器出現以後，5世紀中～後葉と考えた。

つまり，当古墳群の中でも最も後出するものであり，当墳を築造する時には，好条件の場所はすでに選地されていた。その中でも古墳をいかに視覚的な好条件な場所を選地し，効率的に古墳を築造したか，その様子が調査からは読み取れた。

### 第3節 13・14・19号墳の調査

#### 第1項 概要 (第10・11・22図, 付図2, 巻頭図版2・3・4・6・7, 図版10～29)

##### 古墳が築造された尾根の特徴

13・14・19号墳は北支群の南端, 南支群の西端に位置する。

古墳が築造された尾根は二股に分かれる分岐点にあたり, 頂部稜線は尾根の中心からやや北に寄り, 緩やかに屈曲しながら東西方向に延びる。13・14・19号墳周辺は調査地内でも最高所にあたり, 標高70.2m。そこから尾根は東に向けて徐々に低くなり, 東端にあたる17・18号墳周辺では58.0mと約12mの比高差がある。第10図でもわかるように尾根は, 北支群との分岐点で一度幅広となるものの, 東へ向かうほど幅狭となっている。

尾根の斜面には窪地状の地形や, 小さな谷地形が連なっており, 地滑りや浸食の影響が南側斜面を中心に及んでいるものと推定できた。

周辺からは南, 東側への眺望が良好で平野部を広く見渡すことができる。東側の平野部からは, 13・14号墳の間に設けられた周溝が尾根を切断している状況や, 14号墳後円部の盛り上がりからでも視認することができる。

##### 調査前の古墳の状況 (第9図)

14号墳 事前踏査で直径20mの円墳と推定され, 現況からも高さ2m程度の円丘部が確認できた。円丘部とその西側を巡る周溝は埋没しているものの, 容易に周溝と把握できたが, 円丘部の東側に同等の周溝の痕跡は確認できなかった。さらに地形を細かく観察すると, 確認できた墳丘北東側はくびれており, 稜線, 平坦面は明瞭で, さらに尾根の東側で先端を段状にカットした状況が確認できた。

また, 墳頂部は直径8m程度の平坦面があり, 中央やや東寄りの位置で長さ約6.1m, 幅約3.0mの範囲が窪んでいた。埋葬施設の上部が棺の腐朽に伴って陥没している可能性を考えた。

特に北から見た墳丘の側面観は, 後円部としての円丘の高まり, 円丘から直線的に伸びる前方部の形状が視認でき, 後円部に比して前方部が極端に低いものの, 前方後円墳として側面観は確認できた。

しかし, 墳丘南側斜面を中心に地滑り, 浸食の影響が顕著で, 後円部, 前方部とも残存している墳頂平坦面が北側に偏る。このため墳丘の対称性をにわかに窺うことができず, 現況からは想定される墳丘主軸も直線的に通らなかった。さらに平面的に見ても想定される墳形は, 後円部に比して前方部が極端に狭長になる等, 前方後円墳として否定的な要素も認められた。

19号墳 14号墳の北側裾に接し, 方形に張り出した平坦面と斜面からなる。現況では墳丘の盛り上がりは顕著ではない。頂部の平坦面は, 13・14号墳間の周溝底面から続いており, 14号墳と墳丘を画する周溝は完全に埋没し, その痕跡を窺うことができなかった。さらに平坦面には道の痕跡, 斜面には崩落地形が確認され, 後世に改変されていると推定した。墳形については不明であった。

13号墳 周溝を挟んで14号墳の西側に位置する。周溝に区画され, 頂部平坦面は東西に長い長方形を呈することから, 方形の墳丘をもつことが容易に推定されたが, 対となる周溝は確認できなかった。合わせて, 墳丘南辺は崩落の影響で部分的に流失し, 墳丘北辺も谷地形に接して急斜面が続くため, 墳丘裾を示唆する傾斜変換線は確認できなかった。因みに, 13号墳の北西側の尾根は急に幅狭となるため, 13号墳に連続する古墳は認められない。

以上, 地形観察から, 14号墳については, 前方後円墳の可能性が高いと推定した。14号墳が円墳であったとしても, 規模, 立地条件からこのグループの中心的な古墳であることは容易に想定された。

13号墳は従属的な古墳または施設の可能性が考えられ、19号墳は平坦面や傾斜変換は確認できたが、墳丘を画する周溝等は認められず、13号墳同様、14号墳に従属する古墳か、14号墳に関連する造出状の施設と想定した。

### 検出された古墳の関係性

調査の結果、14号墳は前方後円墳、13・19号墳は方墳と確認した。各古墳の詳細については後述する。3基の古墳は周溝、墳丘裾の平坦面を共有して築造されている。第10図の古墳群全体図を見ても、この3基が当古墳群の中でひとつのグループと捉えることができ、相互の関係性の強さも窺える。

規模、墳形ともに14号墳が突出しており、当古墳群の中でも中心的な存在であることは疑いようがない。立地状況は、14号墳が尾根幅を広く利用できる場所に造られているのに対して、13号墳は14号墳よりやや高位の場所にあるものの、立地する尾根は痩せており、14号墳より条件は悪い。

また19号墳は、14号墳の後円部裾の平坦面に築かれており、14号墳の優位性は13号墳よりも顕著に看取される。

## 第2項 14号墳（第23～37、48図、巻頭図版2・3・4・6、図版10～23）

### 1. 墳丘と周溝

#### 【墳丘】

14号墳は柄鏡形の前方後円墳で、全長は63.7m。墳丘主軸は尾根に沿う。

墳丘は眺望の利点を生かした場所を選地し、後円部は調査地内で尾根幅を広く利用できる場所である。後円部は南北にやや長い楕円形。前方部はくびれ部から前方部前端までやや角度が開くものの、ほぼ直線的に延び、端部は開き気味である。

検出した後円部は長径36.7m、短径30.7m。後円頂部は標高約69.2m、後円頂径は14～11m。前方部はくびれ部から前端裾までの長さ33.2m。前方部上面はくびれ付近で標高66.28m、前方部前端で62.42m。

また、調査前と墳丘検出段階の側面観には大きな隔たりは無く、前方部も地形に沿って低いままであった（図版10）。後円部は二段築成で、二段目の墳頂には壇状部が築かれる。

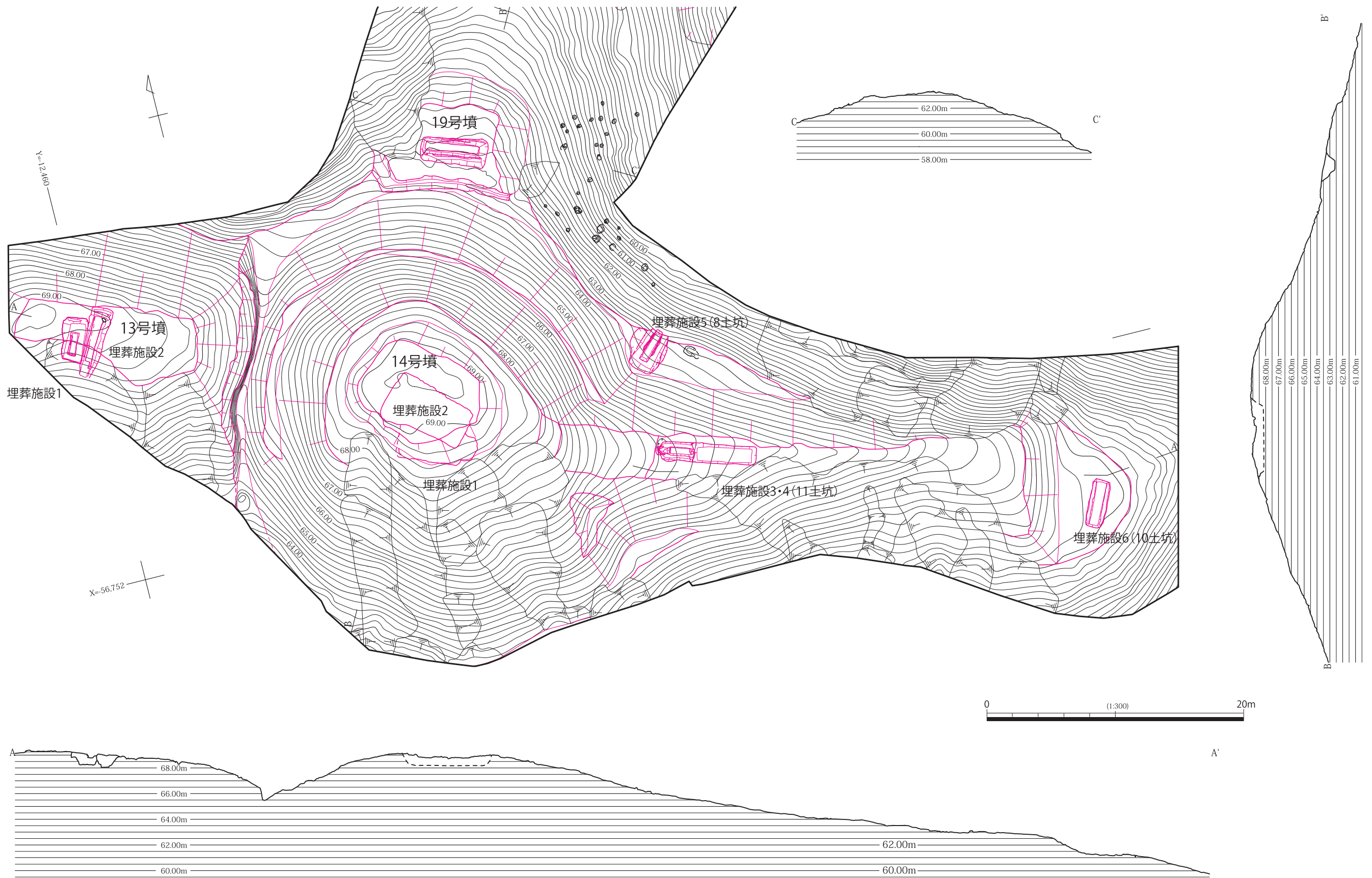
墳丘は旧地形を削り出すことによって大部分を整形し、盛土を部分的に行っている。なお、外表施設としての葺石及び埴輪の樹立は確認できなかった。以下細部について詳述する。

#### 【後円部】

**形状** 平面形は東西が短く南北が長いため、やや楕円形を呈する。北側墳丘斜面の中位にテラスが巡ることから、二段築成となる。

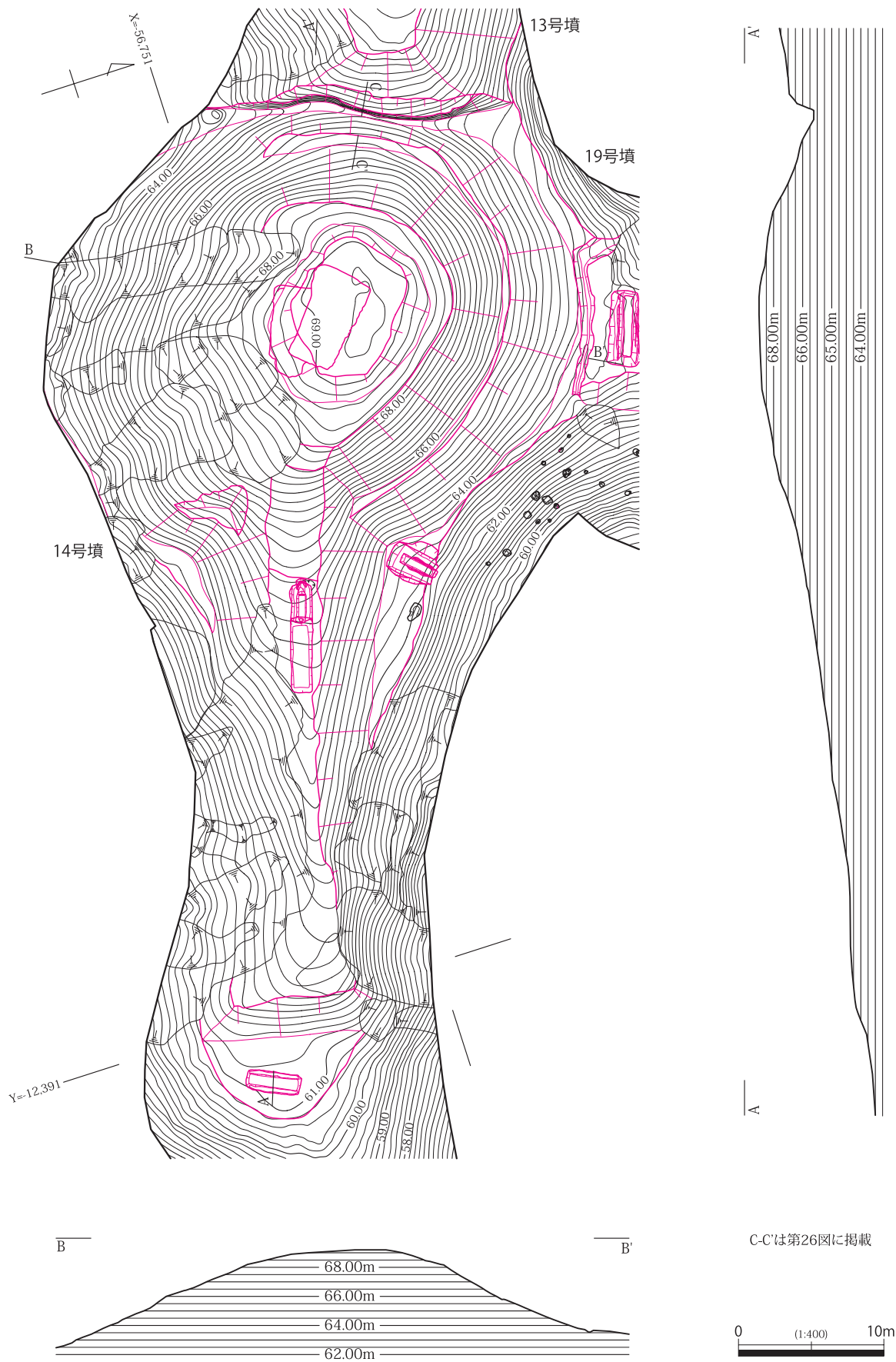
墳頂は平坦で、中央には壇状部が構築されている。壇状部の規模は南北の長径約9.1m、東西の短径約8.6m。墳頂部からの高さは約0.5m。平面形は東西に長い楕円形を呈する。

墳頂部では腐植土およびI層を除去して壇状部を検出した。壇状部は、墳頂部の周囲を削り出した土を利用し盛土している。検出した壇状部の上面は北から南へ傾斜しており、中央やや東寄りの位置に、長軸約6.1m、短軸約3.0mの範囲が窪んでいた。調査の結果、壇状部では2基の埋葬施設を確認し、上面で確認した窪みは、埋葬施設の埋土陥没に伴うものと判明した。



第22図 13・14・19号墳 墳丘 平, 断面図 (1/300)





第23図 14号墳 墳丘 平, 断面図 (1/400)

北側斜面の等高線は整った円弧を描き、斜面中位のテラスは、西側周溝上部から北側墳丘斜面をめぐる、くびれ部まで続く。これに対して後円部南側斜面では崩落、浸食による谷地形が南側へ数条走り、風化した岩盤とともに岩石が露出しているため、後世に墳丘が流出した可能性がある。

**盛土（第24図）** 墳丘の南西斜面には部分的な盛土を墳丘検出時に確認した。盛土の分布範囲は後円部南西斜面に限られており、その直下に旧表土（Ⅲ層）を確認できる（第24図）。盛土の範囲外は基盤であるⅣ層で墳丘を検出しており、盛土下の旧表土は墳丘上面よりも約0.4m下位に位置する。旧表土が北東から南西方向に傾斜することから、古墳築造以前にあった谷地形を埋めて墳丘を整形したと考えている（第24図）。

また、盛土直上に堆積するⅡ層は約0.6mと厚い。Ⅱ層中にはⅣ層の小礫が含まれ、盛土と類似した明褐色系のシルトが混じり、墳丘の流出土と推定した。現況でこの箇所は、円弧からやや突出した微地形を呈していた（第9図）。このことから、崩落などによって墳丘の一部が流出し、少なくともこの上方には盛土の存在が想定される。

#### 【テラスと周溝】

**テラス** 検出したテラスは、西側周溝の上部から北側くびれに至る標高66.4～65.6m、幅1.1～0.8m。周溝の上部が最大幅となる。後円部南側でもテラスの検出作業を行ったが、テラスは確認できなかった。くびれ部では、北側のテラスとほぼ同じレベルに位置する平坦面を南側で検出した。平坦面は三角形に窪んだ形状で、面の標高は約65.4m。南北の長さ約3.6m、東西約1.7mであった。

北側と同様のテラスが南側斜面で確認できなかった要因として、「①前方後円墳としての側面観は北側となる平野部が意識されているため、南側斜面はもともと設けられていなかった」、「②浸食が著しいため、本来盛土を施して、構築した平坦面が流出したため視認できない」ことが考えられる。

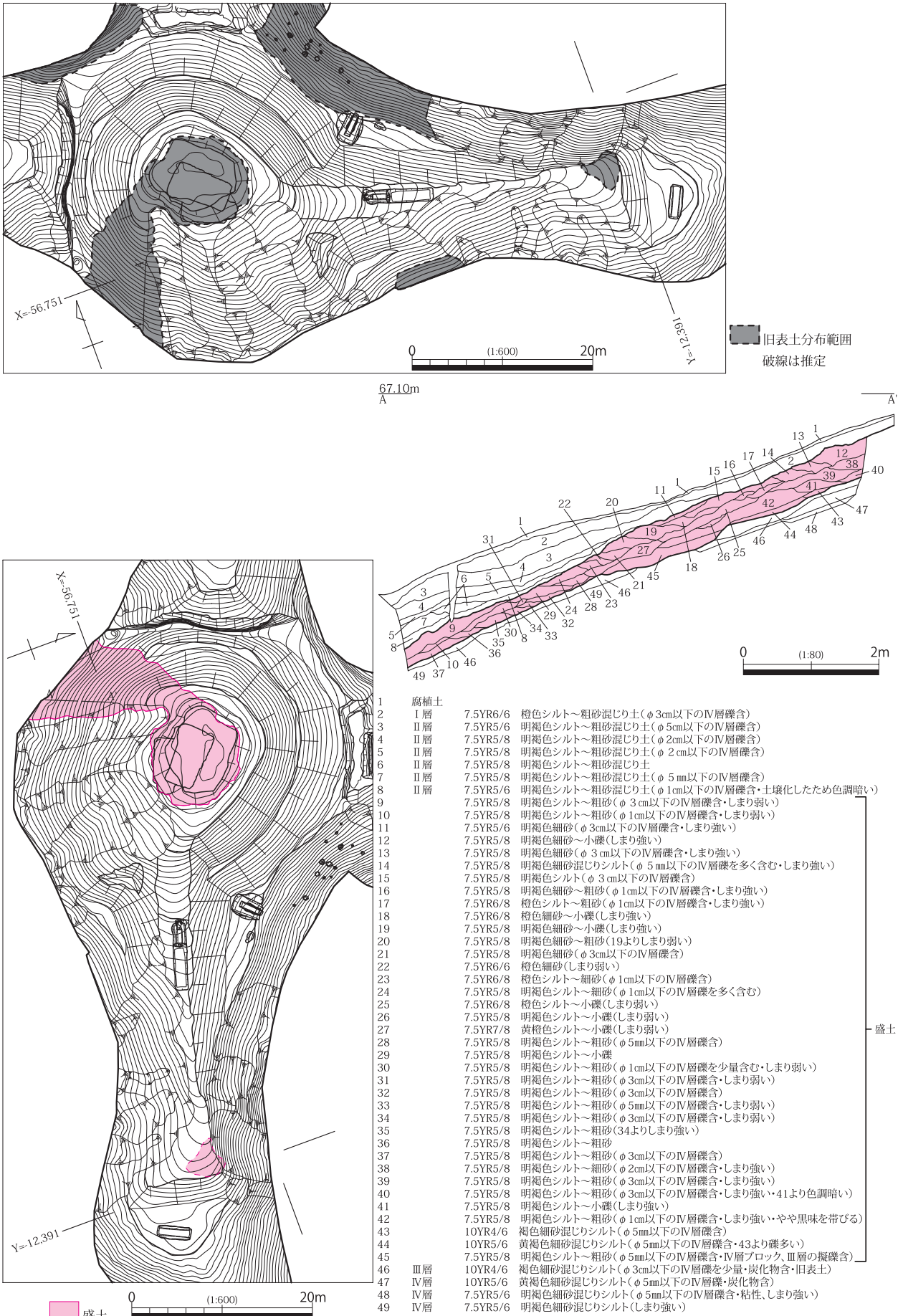
墳丘の流出状況は、後円部南西斜面で部分的に確認したのみで、他の地層観察用畔では流出状況を示す地層の堆積は確認できなかった。このため調査では①の可能性を推定した。

**周溝** 周溝は尾根の頂部付近が最も深く、そこから南北の斜面に向け浅くなる。周溝の外側は南から北に向かって円弧に沿って蛇行しながら伸び、北端はやや東に開くように掘削されるが、墳丘側は円弧に沿って整えられている。周溝の規模は北端の最も広い場所で約4.6m、中央が最も狭く約0.3m、南端で約1.8mとなる。横断面形は中央が極端に幅狭となり、概ね「V」字形を呈し、最深部で約3.6mの深さである。

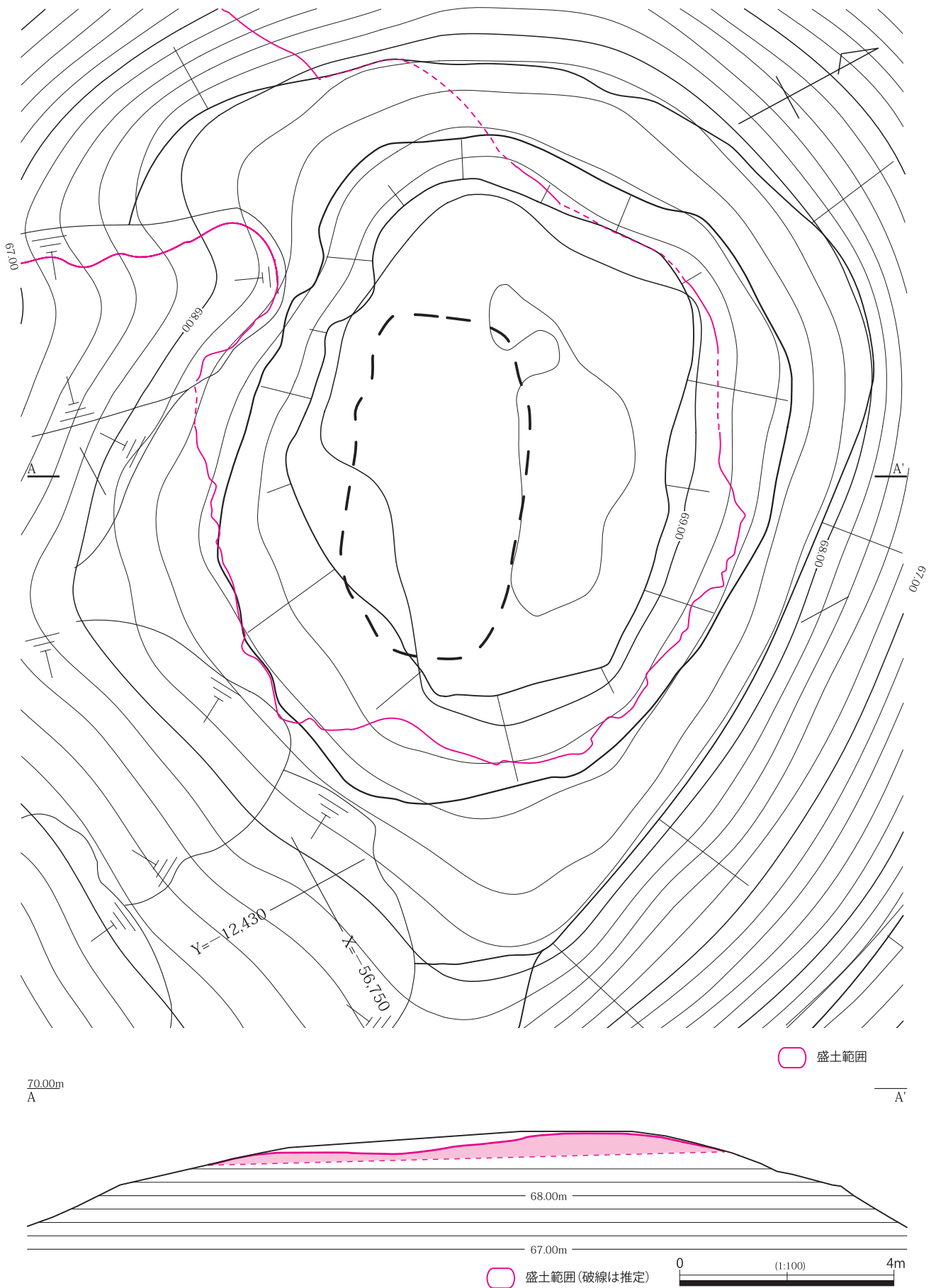
周溝の埋土は大きく2つに大別され、下層に基盤層（Ⅳ層）の礫が多く混じる砂質シルトが約0.6m、その上層には、粘性をもち、基盤の礫をまばらに含んだシルトが堆積する。埋土の堆積過程で部分的に土壌化した層（第26図7・8・24層）が認められ、土壌化層は上部ほど周溝断面の東側に偏る。これは、後円部側からの流出土がテラスに一度留まることから、西から東への供給が相対的に多いことに起因する。このため、埋没過程における周溝の底部が徐々に東側へ寄ると推定した。周溝埋土には切り合い関係が認められず、13・14号墳は周溝を共有していたと考えた。

なお、周溝による丘尾切断は14号墳の側面観を強調しており、東側の平野部からも尾根の切断は明瞭に認められる。後円部が強調されるよう視覚的効果も含めて掘削されたと推定している。

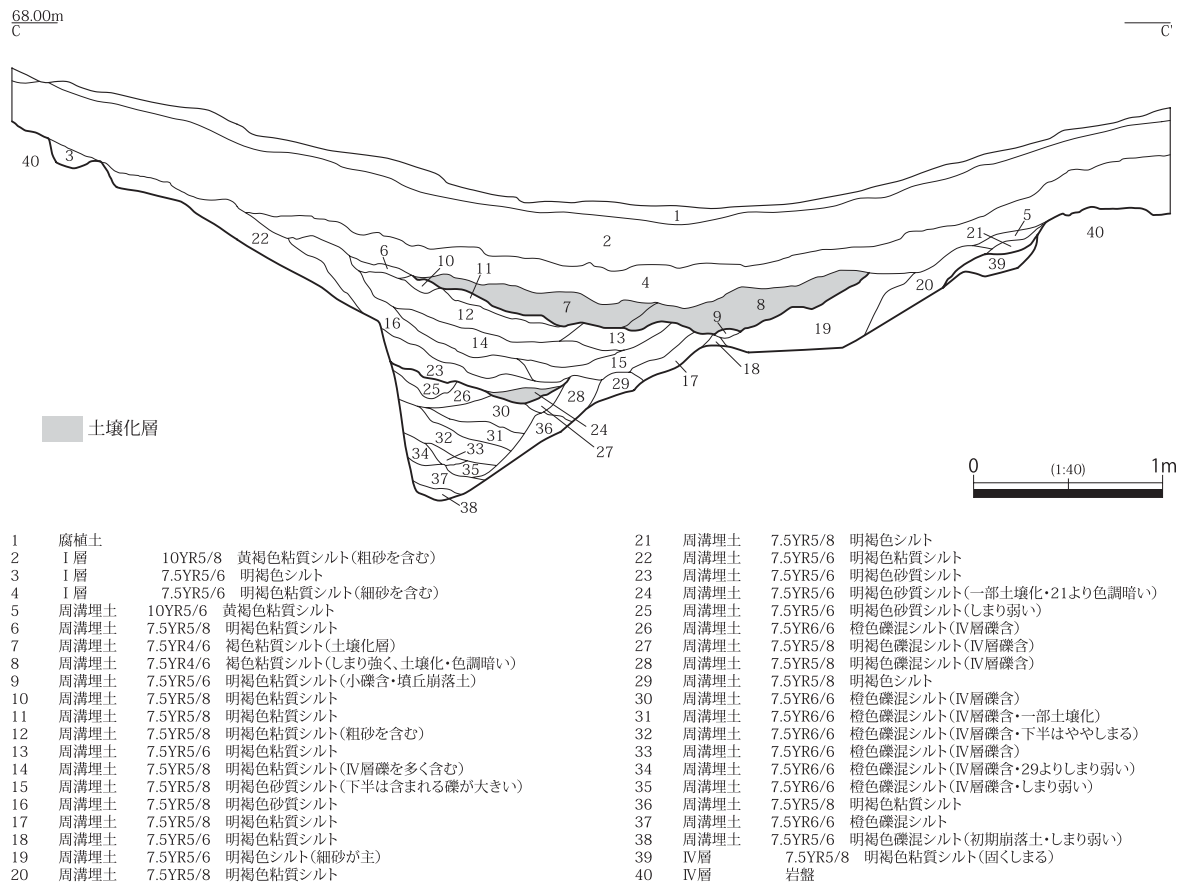
また、周溝の外側、13号墳南東側斜面には、標高約67.0、66.4m付近に上下2箇所の傾斜変換がある。下側の傾斜変換線で斜面の角度が大きく変化し、上側が約20°～31°に対して、下側が約77.5°となる。下側の傾斜変換線は、後円部中段のテラスとほぼ同じレベルにある。後円部墳丘側斜面の角度



第24図 14号墳 旧表土、盛土の範囲 (1/600)



第25図 14号墳 壇状部の盛土状況図 (1/80)



第26図 14号墳 後円部周溝 土層堆積状況図 (1/40)

は、テラスの上下でほぼ変わらず30°前後であるため、13号墳南東側斜面、14号墳後円部斜面が一連の作業で構築されたと考えた。このことについては第V章第2節で再述する。

### 出土遺物

周溝から出土した遺物は少ない。周溝埋土上層(第26図7・8層)から出土した土師器高杯(第49図39)、須恵器壺(40)を提示した。出土位置から13・14号墳に伴うものではないと判断した。

### 【くびれ部】

後円部と前方部を画するくびれ部裾には平坦面が取りつく。北側は、現況で後円部と前方部の斜面境界をなす稜線が直線的に墳丘裾まで走ることを確認し、くびれ部は旧状を留めていると推定した。

一方南側は、くびれ部全体が谷地形で、緩やかにくびれの形状を留めているものの、崩落の影響が強いと判断して調査を進めたが、検出の結果、北側と同様の平坦面を検出するに至っている。

**北側平坦面** 平坦面の東側は前方部の半ばで終息する。尾根幅が東に向かうほど狭くなり、その先の斜面は崩落が著しい。平坦面はくびれ部から前方部前端に向けて、検出時よりももう少し東へ延びていたものと推定する。

平坦面には盛土の痕跡は認められず、検出状況から自然作用による上面のわずかな流失はあるものの、面の形成後、人為的な地形改変を受けていないと判断した。残存する平坦面は三角形を呈し、前方部にとりつく長さは東西約14.0m、後円部側で南北幅約3.6mである。墳丘裾平坦面の標高は63.36mである。平坦面の北側は急峻な斜面をなしているが、旧表土層の広がり部分が部分的に確認でき

た。付図2(c-c')では旧表土層とⅡ層の間に、Ⅳ層の偽礫を含んだ地層(6~13層)を確認している。調査の過程で、この地層は旧表土の上部に堆積することを確認し、第1節で述べたように、墳丘築造に伴って発生した土と想定した。

なお平坦面の西端で墳丘裾に接して、埋葬施設5を検出した。

**南側平坦面** 墳丘主軸を介して、概ね北側平坦面と対称の位置にある。規模は東西約7.7m、南北約3.7m、面の標高は63.65mで、後円部の円弧から前方部の直線に沿う形状をわずかに残している。

平坦面は基盤層及び古墳築造以前の二次堆積層(Ⅳ層)の上面で検出し、周囲に盛土等の痕跡は確認できなかった。なお、調査の過程で当初崩落土としてⅠ層を除去した後、この二次堆積層(Ⅳ層)もⅠ層と認識して掘削したが、風化した岩盤の上方に厚く堆積し、固くしめること、斜面下方で旧表土層(Ⅲ層)を確認し、その下部に堆積する地層に連続することが判明した。このことから、Ⅳ層と認識し直している。よって、検出段階では、平坦面とその周辺は本来の墳丘上面から少し掘り下げた状態であることを断わっておく。

南北で検出した平坦面は比高差0.29mと近似した高さで、墳丘主軸を介して対称の位置にある。前述した後円部北側のテラスと南側の平坦部にも対称性が窺える。このことから、前方後円墳を築造する上で、墳丘の対称性が意識されていたことが推定できる。

#### 【前方部】

**形状** 平面形は前端でやや開くもののほぼ直線的に細長く伸びる。前方部の大部分は、痩せ尾根地形を生かして旧地形から削り出し、墳形を整えている。基盤層(Ⅳ層)上面で検出し、前端では部分的に盛土、旧表土(Ⅲ層)が確認できた。

前方部上面は後円部からスロープ状に延び、くびれ部付近でやや傾斜変換して前端に向けて低くなる。前端には下降する尾根をさらに急角度にカットした斜面を設け、前端東側に平坦面が取りつく。前端斜面は26°の傾斜をもって整形されている。

前方部の長さは墳丘主軸に沿って約33.2m。上面の幅はくびれ部付近で約3.65m、前方部前端で上端幅約8.4m、下端幅約10.2mとなる。前方部上面の北側縁は良好に遺存し、直線的に延びるが、南側側縁は崩落や浸食の影響を受けて不明瞭である。

前端に広がる平坦面は半月形を呈し、東西約7.7m、南北約3.7mで、上面はほぼ水平である。なお、埋葬施設6は平坦面の東端で検出した。

前方部北側裾部は中央から前端にかけて大きく抉れており、大きく地形が改変されている。南側縁はくびれ部付近で平坦面との傾斜変換線によって墳丘裾を推定できるが、崩落、浸食によって前端までは辿れない。

なお、前方部上面の後円部からスロープ状に延びる箇所では埋葬施設3・4を検出した。

**盛土** 前方部前端で一部確認した。盛土の確認にあたっては上層の腐植土が厚く堆積しており、掘削の過程で旧表土と盛土の違いが認識できなかった。その後、土層断面を再度確認した結果、盛土として認識した。この段階で旧表土を掘削していたため、盛土の分布は掘削した旧表土が概ね分布範囲と重複するものと推定し、その範囲を示している(第24図)。土層断面で確認した盛土の厚さは約0.2m。

墳丘築造時にどの程度盛土されていたのかは推測の域を出ないが、本来、検出した墳丘よりも前端周辺は高まっていたと考える。



第27図 14号墳 後円部墳頂部 埋葬施設確認トレンチ配置図 (1/200)

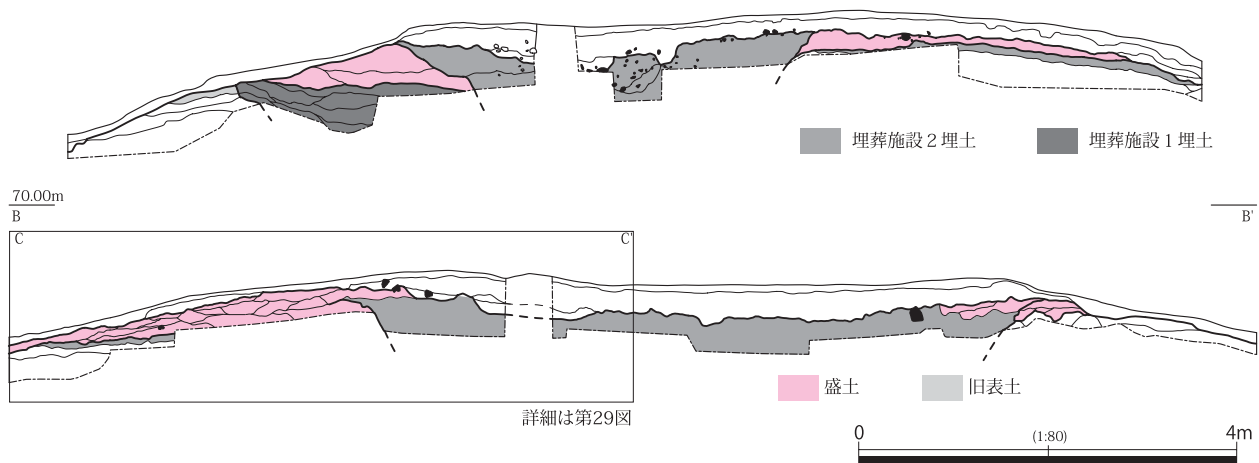
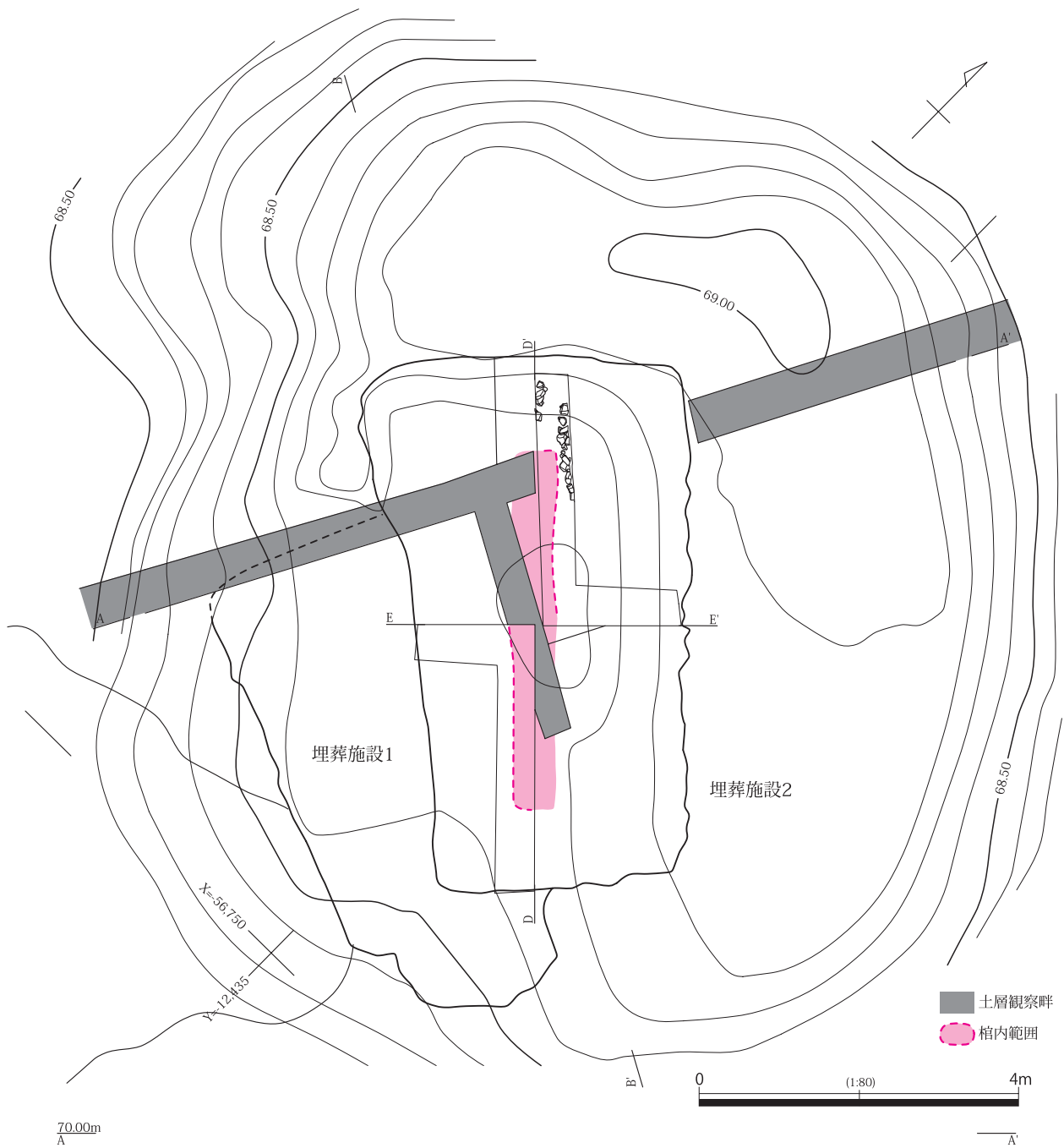
## 2. 墳頂部の埋葬施設 (第23, 27～29図, 巻頭図版4, 図版16・17)

### 位置と検出状況

壇状部には埋土を切り合う2基の埋葬施設が設けられている。壇状部南縁に位置する掘方を埋葬施設1、壇状部の中央で埋葬施設1の北長辺を切る掘方を埋葬施設2とした。

壇状部は盛土によって整形されており、埋葬施設と壇状部の関係には、「①盛土上面から墓壙が掘り込まれた場合」と、「②地表面から墓壙を掘り込み、埋め戻し後、上部に盛土を施して、墳頂壇状部が築かれる場合」の2つの構築パターンを推定して調査を行った。

埋葬施設の掘方埋土と壇状部の盛土は酷似しており、平面的な検出作業だけでは掘方検出は困難と予想された。このため新たに地層観察用の畔を設定し、断面で埋土を確認しつつ盛土を掘り下げて掘方の検出作業を行った。

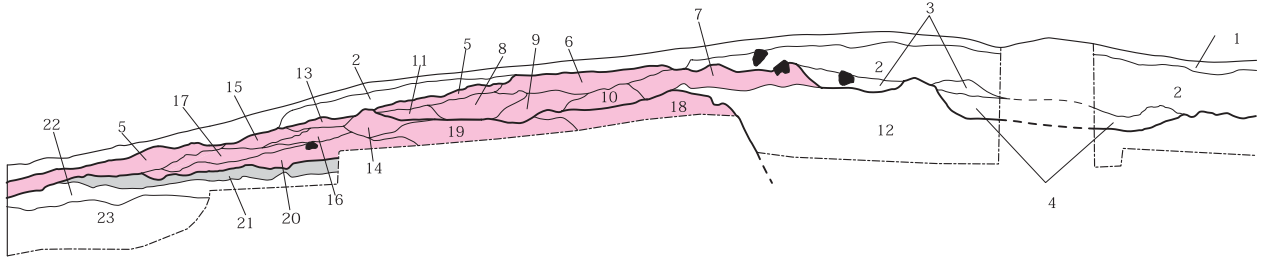


第28図 14号墳 後円部墳頂 埋葬施設1・2検出状況と断面図 (1/80)



70.00m  
C

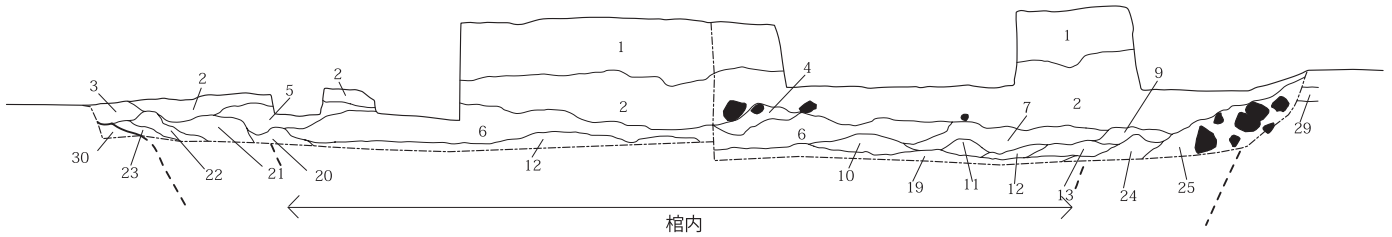
C'



- |             |                           |         |                                  |
|-------------|---------------------------|---------|----------------------------------|
| 1 腐植土       | 10YR5/8 黄褐色粘質シルト          | 13 盛土   | 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト                |
| 2 I層        | 10YR5/8 黄褐色粘質シルト(2より色調暗い) | 14 盛土   | 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト                |
| 3 I層        | 10YR5/6 黄褐色粘質シルト          | 15 盛土   | 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト(固くしまる)         |
| 4 I層        | 10YR5/6 黄褐色粘質シルト          | 16 盛土   | 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト(φ5mm以下のIV層礫多含) |
| 5 盛土        | 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト         | 17 盛土   | 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト(粗砂多含)          |
| 6 盛土        | 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト(固くしまる)  | 18 盛土   | 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト(粗砂多含)          |
| 7 盛土        | 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト(固くしまる)  | 19 盛土   | 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト                |
| 8 盛土        | 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト(固くしまる)  | 20 盛土   | 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト(固くしまる)         |
| 9 盛土        | 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト         | 21 III層 | 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト(旧表土)           |
| 10 盛土       | 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト(固くしまる)  | 22 IV層  | 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト                |
| 11 盛土       | 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト(IV層礫含)  | 23 IV層  | 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト(固くしまる)         |
| 12 埋葬施設2 墓壇 |                           |         |                                  |

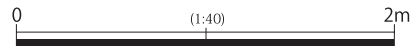
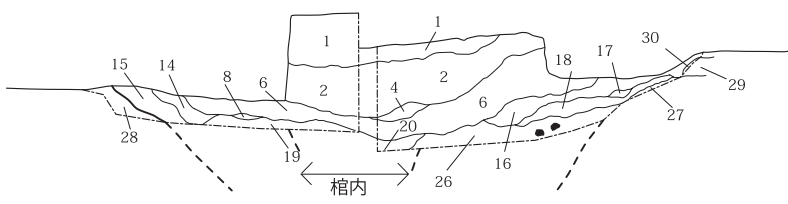
69.40m  
D

D'



69.40m  
E

E'



- |  |   |   |
|--|---|---|
| 1 I層   | 10YR5/8 黄褐色シルト～粗砂混じり土(シルトが主・IV層礫含)            | 16 7.5YR5/6 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫含)                  |
| 2 7.5YR5/8 明褐色シルト(IV層礫含)                       | 17 10YR5/6 黄褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主)               | 18 10YR5/6 黄褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫・ブロック含)              |
| 3 7.5YR5/8 明褐色シルト(4より礫少ない・しまり強い)               | 19 7.5YR5/8 明褐色シルト(IV層礫多含)                    | 20 7.5YR5/6 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫含・棺痕跡検出面直上の土・しまり強い) |
| 4 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主)              | 21 7.5YR5/6 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫多含・しまり強い) | 22 7.5YR5/6 明褐色シルト～細砂混じり土(細砂が主・IV層礫・ブロック含・しまり強い)        |
| 5 7.5YR6/6 橙色シルト～細砂混じり土(シルトが主)                 | 23 7.5YR5/8 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫含・しまり強い)  | 24 7.5YR5/8 明褐色シルト～粗砂混じり土(細砂が主・IV層礫含)                   |
| 6 7.5YR5/6 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫・炭化物含)      | 25 7.5YR5/6 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫含)        | 26 7.5YR5/8 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫含)                  |
| 7 7.5YR4/2 灰褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫含)          | 27 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主)            | 28 10YR4/6 褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・埋葬施設1埋土)                  |
| 8 7.5YR5/6 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫含)          | 29 III層                                       | 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト(旧表土)                                  |
| 9 7.5YR5/6 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫含)          | 30 IV層  | 岩盤  |
| 10 7.5YR5/8 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫多含)        |   |   |
| 11 7.5YR5/6 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫含)         |   |   |
| 12 10YR5/6 黄褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫含)          |   |   |
| 13 7.5YR5/6 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫含・9より色調暗い) |   |   |
| 14 7.5YR5/6 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫含)         |   |   |
| 15 7.5YR5/6 明褐色シルト(IV層礫多含・しまり強い)               |   |   |

第29図 14号墳 後円部墳頂 埋葬施設2 断面図 (1/40)

この結果、埋葬施設2の掘方が盛土の上面から掘り込まれていること、その掘方が埋葬施設1の北長辺を切ることを確認した(第29図)。

埋葬施設1の掘方は隅丸方形。検出段階の平面規模は長さ約6.3m、幅2.6m以上。掘方の長軸はN-66.5-Wで、墳丘主軸線に沿う。埋葬施設2の掘方長軸が墳丘主軸より北へ振れること、埋葬施設1より新しいことから、埋葬施設1を14号墳築造時の中心埋葬施設と推定した。

なお、埋葬施設1の掘方西辺は平面的に検出できていない。南長辺から延びる掘方ラインは地層観察用に設けたトレンチの底面で、旧表土(Ⅲ層)を切って南辺からL字に北側へ曲がる。このラインを延長すると、西辺は地層観察用の畔の中に納まると推定した。

また、土層断面から掘方南辺は、旧表土を掘り込んだ状況を確認している(第29図A-A')。

埋葬施設2の掘方は隅丸方形で、検出段階の平面規模は長さ6.68m、幅4.12m。本来掘方は盛土上面から掘削されており、本来の幅は4.4m程度に広がる。掘方の長軸はN-45°-Wで、埋葬施設1より北へ約21°ふれる。

なお、前述のとおり埋葬施設1,2については部分的な調査に留めている。

埋葬施設1(第23・28図, 図版16・17)

### 構造

地層観察用の畔に沿って、トレンチで一部掘方埋土を検出面から約0.5m掘り下げたが、埋葬施設の構造にかかる情報は十分得られていない。桂見2号墳(古墳時代前期)や、調査地の南に位置する服部17・18号墳(古墳時代前期)では、長軸約6mの長大な掘方に木棺を埋置している。根拠は薄い。掘方規模や板石など箱式石棺や竪穴式石室を類推する痕跡が確認できないことから、埋葬施設は木棺ではないかと想定している。

なお、土層断面の観察から、埋葬施設1の掘方埋土上部には壇状部の盛土が観察され、埋葬施設1の掘方を埋め戻した後、壇状部を整形したと推定した。

埋葬施設2(第23・28・29図, 巻頭図版4, 図版16・17)

### 構造

埋葬施設2の調査については、第I章第2節で述べたとおり、棺内埋土上面を確認した段階に留めている。

掘方検出後、その長短軸の交差点を起点に50cm幅でL、逆L字形にトレンチを設けて平面、断面の状況を検討しながら、掘り下げを行った。

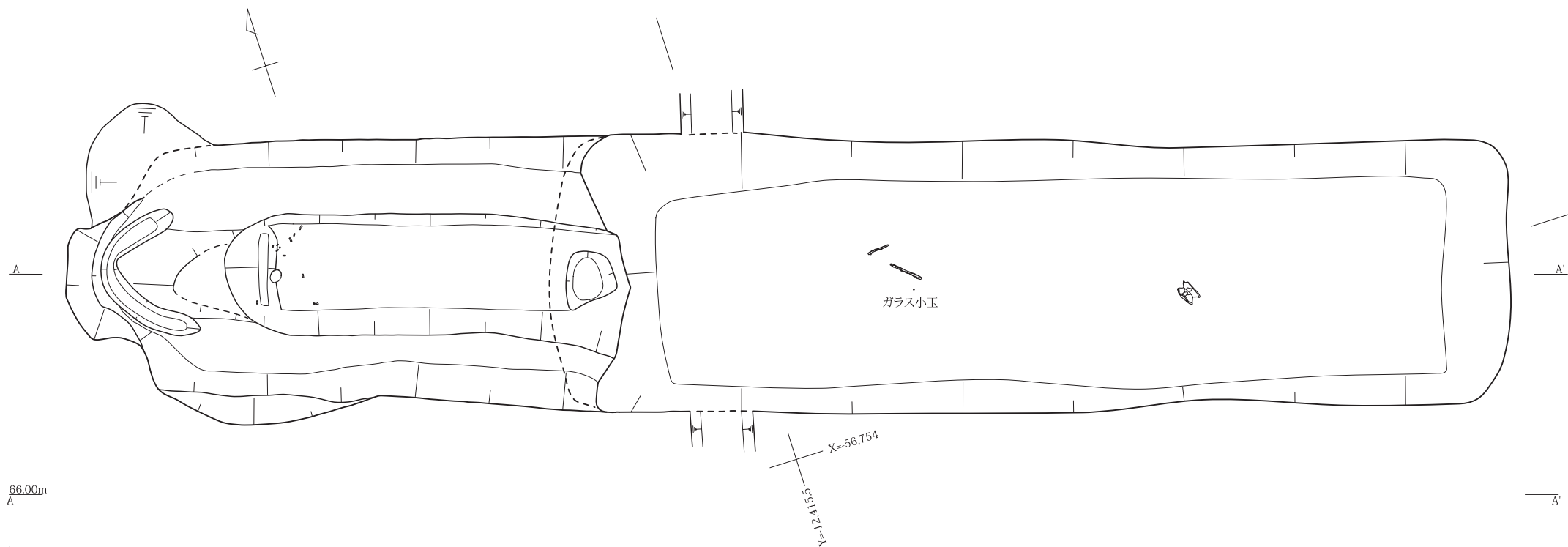
検出面から約40cm掘り下げた段階で、トレンチ内で黄褐色を基調とするシルト層に褐色を呈する変色部分を確認した。変色部分周辺を精査した結果、長軸約4.5m、短軸約0.6mの範囲に広がることを確認し、この層を棺内埋土と推定している。同層を上部および周辺の土と比較するとしまりが弱い。埋葬施設1と同じく長大な掘方内には、石棺や石室を想定する石材が確認できなかったことから、棺は木棺と想定している。

なお、長軸西側では、25層中に径10cm程度の垂角礫が集中する箇所が部分的に認められた(第29図)。上層にも類似した大きさの礫が混じるものの、集中する様相は認められなかった。平面的な広がりを確認していないが、この礫の集中は埋葬施設に関わる可能性もある。

また、現況で確認した窪地は壇状部検出時の窪地と重複しており、調査の結果、埋葬施設2の埋土陥没に伴うものと判明した。

壇状部と埋葬施設の構築過程の復元

壇状部は、旧地形を削って発生した土を盛土したと確認した。



- |    |          |  |    |          |  |    |          |                                       |    |          |                                    |
|----|----------|--|----|----------|--|----|----------|---------------------------------------|----|----------|------------------------------------|
| 1  | 10YR5/8  | 黄褐色細砂～粗砂混じり土(粗砂が主・棺陥没痕跡上に堆積)               | 16 | 7.5YR6/6 | 橙色シルト～粗砂混じり土(シルトが主・φ2cm以下のIV層礫含)           | 31 | 7.5YR6/6 | 橙色シルト～粗砂混じり土(粗砂が主・φ5cm以下のIV層礫含・しまり強い) | 46 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト(しまり弱い)                       |
| 2  | 7.5YR6/6 | 橙色細砂～粗砂混じり土(φ3cm以下のIV層礫含)                  | 17 | 7.5YR7/8 | 黄褐色シルト～粗砂混じり土                              | 32 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～粗砂混じり土(粗砂が主・φ3cm以下のIV層礫含・しまり強い) | 47 | 7.5YR5/8 | 明褐色シルト～細砂混じり土                      |
| 3  | 7.5YR6/6 | 橙色細砂～粗砂混じり土(φ3cm以下のIV層礫含)                  | 18 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層ブロックを含む)             | 33 | 7.5YR5/6 | 明褐色シルト～細砂混じり土(粗砂が主・しまり弱い)             | 48 | 7.5YR5/8 | 明褐色シルト～細砂混じり土                      |
| 4  | 7.5YR6/8 | 橙色細砂～粗砂混じり土(粗砂が主・φ3cm以下のIV層礫含)             | 19 | 7.5YR5/8 | 明褐色シルト～粗砂混じり土(粗砂が主・φ3cm以下のIV層礫を多く含む・しまり強い) | 34 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～粗砂混じり土(φ2cm以下のIV層礫含)            | 49 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～粗砂混じり土                       |
| 5  | 7.5YR6/8 | 橙色細砂～粗砂混じり土(粗砂が主・φ2cm以下のIV層礫含)             | 20 | 10YR5/8  | 黄褐色シルト～粗砂混じり土(粗砂が主・φ3cm以下のIV層礫含)           | 35 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～粗砂混じり土(シルトが主・φ1cm以下のIV層礫含)      | 50 | 7.5YR5/8 | 明褐色シルト～粗砂混じり土(48よりしまり弱い)           |
| 6  | 7.5YR6/8 | 橙色細砂～粗砂混じり土(粗砂が主・φ3cm以下のIV層礫を多く含む)         | 21 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～粗砂混じり土(φ2cm以下のIV層礫を多く含む・しまり弱い)       | 36 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～粗砂混じり土(シルトが主・φ2cm以下のIV層礫含)      | 51 | 10YR5/8  | 黄褐色シルト～粗砂混じり土(粗砂が主・しまり強い)          |
| 7  | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～細砂混じり土(シルトが主・φ1cm以下のIV層礫を含む)         | 22 | 7.5YR7/6 | 橙色シルト～粗砂混じり土(φ3cm以下のIV層礫を多く含む・しまり強い)       | 37 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～粗砂混じり土(シルトが主・φ2cm以下のIV層礫含)      | 52 | 7.5YR5/6 | 明褐色シルト～粗砂混じり土(φ3cm以下のIV層礫含)        |
| 8  | 7.5YR6/8 | 橙色シルト(φ5mm以下の礫を含み、固くしまる)                   | 23 | 7.5YR6/6 | 橙色シルト～粗砂混じり土(φ3cm以下のIV層ブロック・礫含)            | 38 | 7.5YR5/8 | 明褐色シルト～粗砂混じり土(シルトが主・3cm以下のIV層礫を多く含む)  | 53 | 7.5YR5/6 | 明褐色シルト～粗砂混じり土(シルトが主・しまり弱い)         |
| 9  | 7.5YR8/8 | 黄褐色シルト～細砂混じり土(φ1cm以下のIV層礫含)                | 24 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～細砂混じり土(φ1cm以下のIV層礫含・しまり弱い)           | 39 | 7.5YR5/8 | 明褐色シルト～細砂混じり土(粗砂が主・3cm以下のIV層礫含)       | 54 | 7.5YR7/6 | 橙色シルト～粗砂混じり土(φ1cm以下のIV層礫・IV層ブロック含) |
| 10 | 10YR6/6  | 明黄褐色シルト～粗砂混じり土(粗砂が主・φ3cm以下のIV層礫含)          | 25 | 7.5YR6/6 | 橙色シルト～粗砂混じり土(φ1cm以下のIV層ブロックを多く含む)          | 40 | 7.5YR5/6 | 明褐色シルト～細砂混じり土(粗砂が主)                   |    |          |                                    |
| 11 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～粗砂混じり土(シルトが主・φ2cm以下のIV層礫含・しまり弱い)     | 26 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～粗砂混じり土(φ2cm以下のIV層礫含・しまり弱い)           | 41 | 7.5YR5/8 | 明褐色シルト～細砂混じり土(粗砂が主・3cm以下のIV層礫含)       |    |          |                                    |
| 12 | 7.5YR8/8 | 黄褐色シルト～細砂混じり土(φ3cm以下のIV層礫含)                | 27 | 7.5YR7/8 | 黄褐色シルト～粗砂混じり土(粗砂が主・φ3cm以下のIV層礫含)           | 42 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～粗砂混じり土(シルトが主・φ3cm以下のIV層礫含)      |    |          |                                    |
| 13 | 7.5YR6/6 | 明黄褐色シルト～粗砂混じり土(シルトが主・φ5cm以下のIV層礫含・しまり弱い)   | 28 | 7.5YR7/6 | 橙色シルト～粗砂混じり土(粗砂が主・φ3cm以下のIV層礫含・しまり強い)      | 43 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～細砂(φ2cm以下のIV層礫含・しまり弱い)          |    |          |                                    |
| 14 | 10YR6/8  | 明黄褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・しまり悪い)                | 29 | 7.5YR5/8 | 明褐色シルト～細砂混じり土(粗砂が主)                        | 44 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～細砂(φ3cm以下のIV層礫含)                |    |          |                                    |
| 15 | 7.5YR6/6 | 橙色シルト～粗砂混じり土(シルトが主)7.5YR5/6 明褐色細砂(比較的均質な土) | 30 | 7.5YR5/6 | 明褐色シルト～細砂混じり土(粗砂が主)                        | 45 | 7.5YR6/8 | 橙色シルト～細砂(φ3cm以下のIV層礫・IV層ブロック含)        |    |          |                                    |

第30図 14号墳 前方部 埋葬施設3・4 平, 断面図 (1/30)

埋葬施設1は、壇状部南縁に位置している。埋葬施設1掘方南縁では、旧表土から掘り込まれた状況は確認したが、掘方が、そもそも壇状部盛土から掘り込まれたかどうかは確認できなかった。これは周辺が地滑り、崩落の影響を受けており、墳丘が流失している可能性が高いことによる。一方、南北軸の断面観察では埋葬施設1の埋め戻し土の上部に壇状部の盛土が確認できる。

また、埋葬施設2の掘方は盛土の上面から掘り込まれ、東西軸の断面観察からは(第28図B-B'詳細:第29図C-C'),掘方埋土上部に盛土(7層他)が一部認められることから、墓壙を埋め戻した後、壇状部を再度整形したものと推定した。

以上を踏まえると壇状部と埋葬施設の構築過程は次の①→③と考えられる。

- ① 旧地表から埋葬施設1の掘方を掘削する。
- ② 埋葬施設1を埋め戻した後に盛土を施して墳頂壇状部を整形する。
- ③ 埋葬施設2が壇状部上面から掘り込まれ、埋め戻し後、再度壇状部を整形する。

### 3. 前方部の埋葬施設(第30～34・47～49図, 巻頭図版6, 図版18～21)

#### 位置と検出状況

埋葬施設3・4は前方部の上面の中央から後円部に寄った、標高65.60～64.73mに位置する。掘方の長軸は墳丘主軸に沿う。掘方は前方部検出中に確認した。

現況ではこの上部に道状の痕跡が前方部の上面に通っていたこともあり、地形が改変された可能性があると考えたため、当初は、古墳築造後に掘られた土坑状の掘方と推定していた。

長軸断面を検討した結果、長軸方向で2つの掘方が切り合っていることを確認した。二つの遺構の壁面がほぼ垂直に掘り下げられていること等から、埋葬施設の可能性があるものと認識して調査を進めた。断面に見る掘方の切り合い関係から、後円部側の掘方が前方部前端側の掘方に切られる。新旧関係から後円部側に位置するものを埋葬施設3、それを切るものを埋葬施設4とした。

#### 埋葬施設3(第30～32・47図, 巻頭図版6, 図版18～21)

##### 構造

掘方は隅丸長方形、東短辺は底面の一部も埋葬施設4に切られており、長軸約3.0m以上、短軸約1.5mと推定できる。なお西短辺の中央は凸状を呈しているが、性格は不明である。

掘方は、棺を納めるため底面の中央部分をさらに掘り下げ、二段に掘削する。

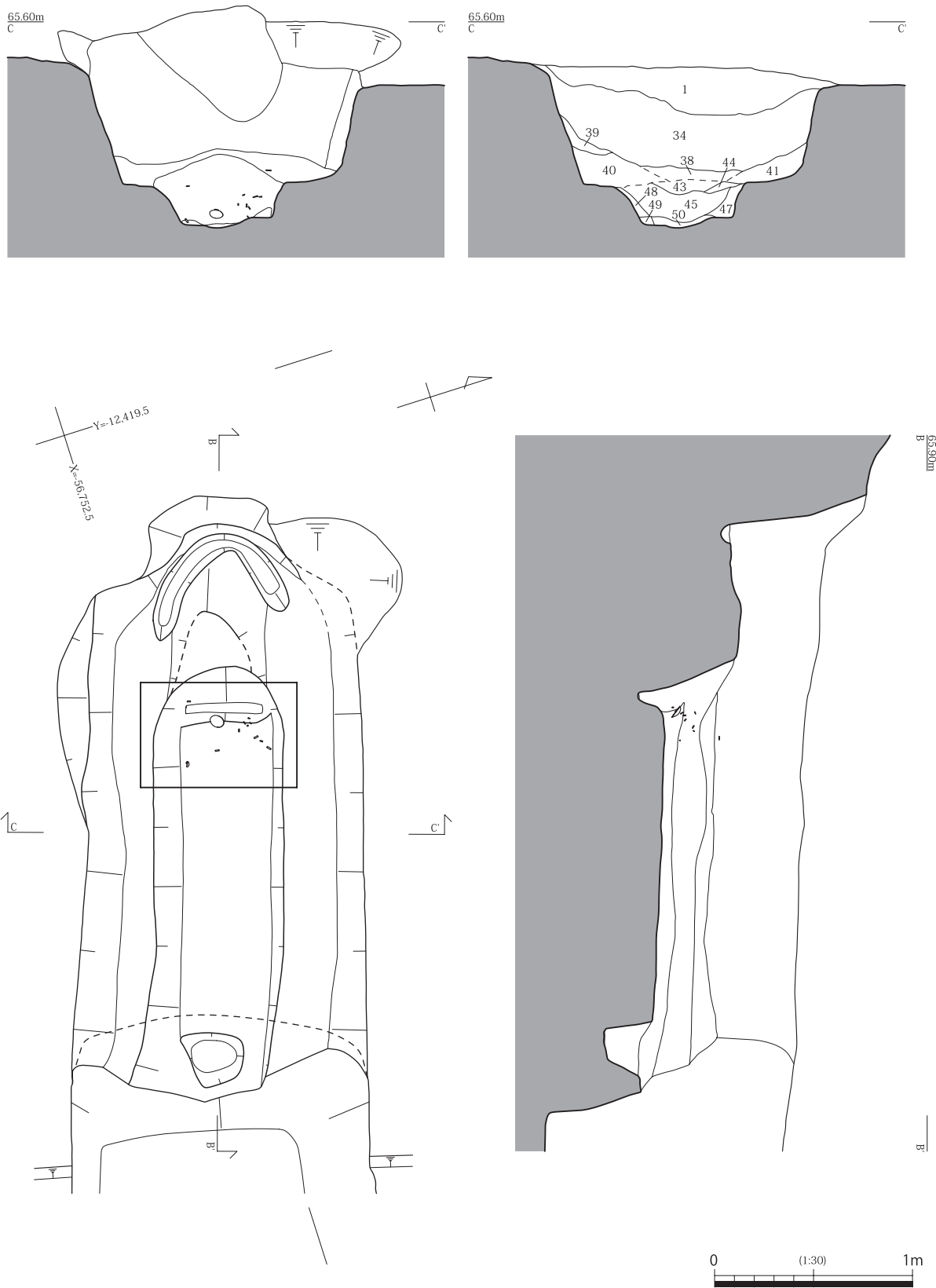
一段目の掘方の深さは西辺で0.56m、東辺で0.70m。西辺底面にはU字形の掘り込みが認められたが、性格は不明である。

二段目の掘方は長軸約2.5m以上、短軸0.6m、一段目底面からの深さは0.2m。横断面形は、逆台形で底面中央付近が窪む。二段目掘方の西辺に沿って、長軸に直交する0.1×0.5m、深さ0.1mの掘り込み、東側に長さ0.32×0.28m、深さ0.24mの掘り込みを確認した。二つの掘り込みは形状が異なるものの、底面のほぼ両端にあり、小口痕と推定した。小口痕から推定される棺内法は約1.5×0.4m程度。以下調査の過程を詳述する。

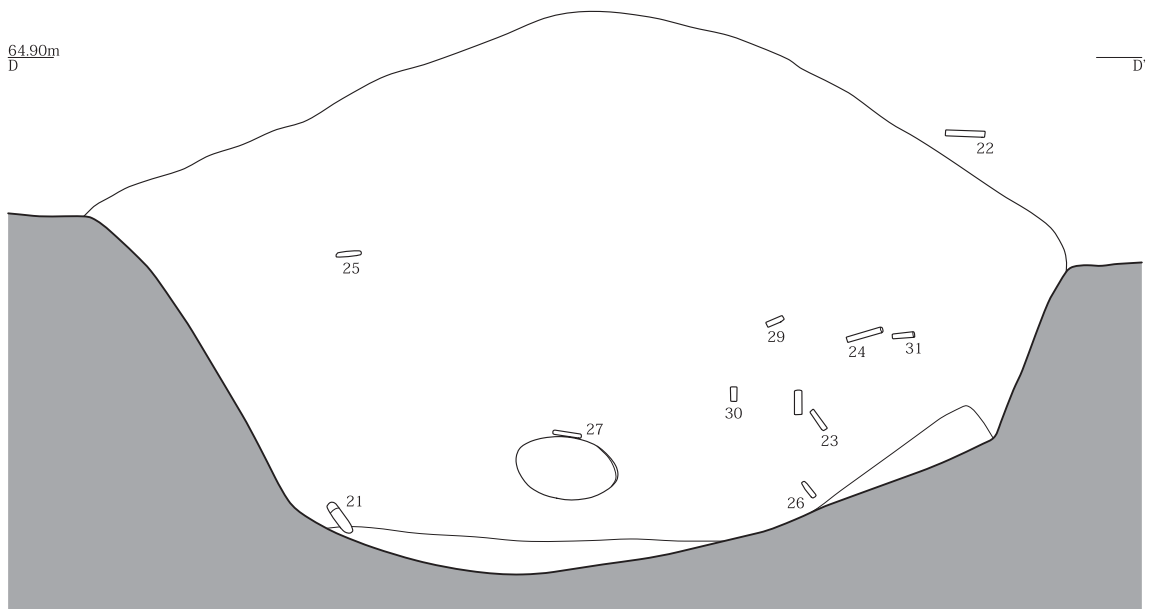
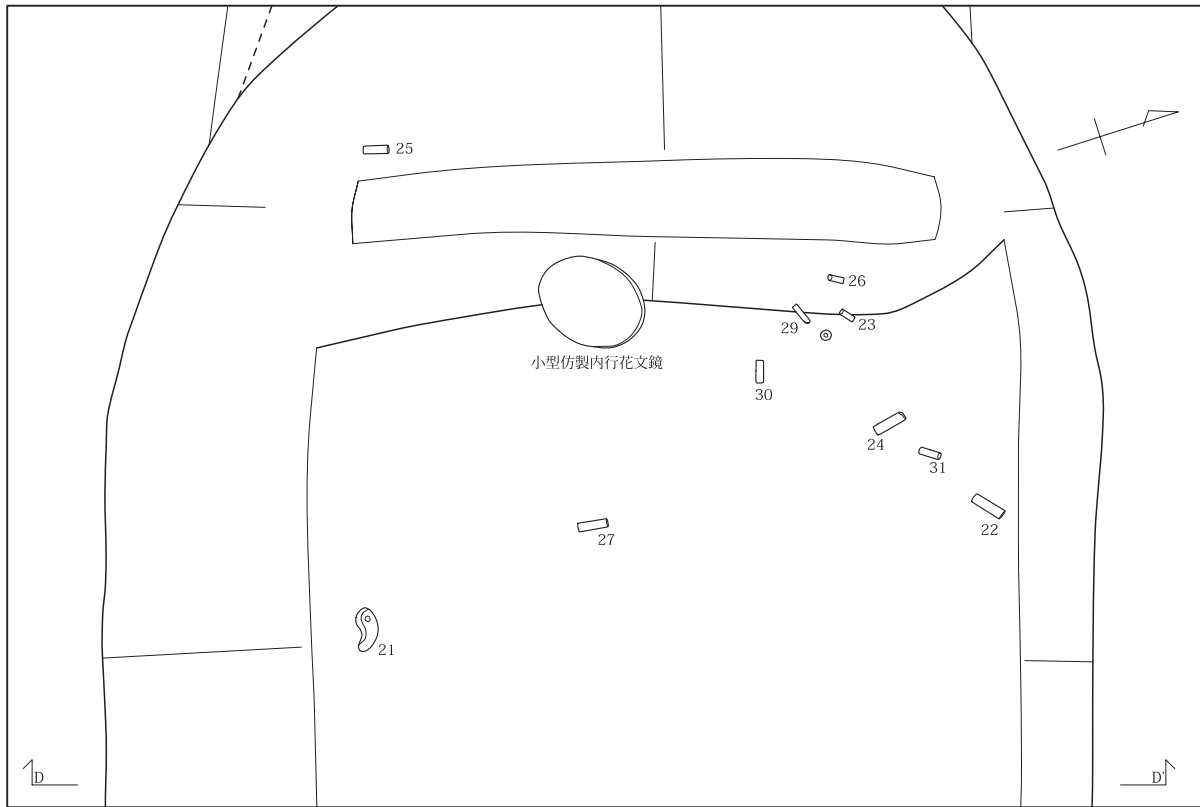
調査では掘方検出後、まず棺内陥没に伴う最終堆積土の確認を行った。掘方を検出した時に長軸方向に延びるI層の広がりを確認したが、明確ではない。

掘削の過程で一段目の掘方底面と同時に、二段目掘方の上面を検出した。この段階で二段目掘方北隅から管玉が1点出土している。

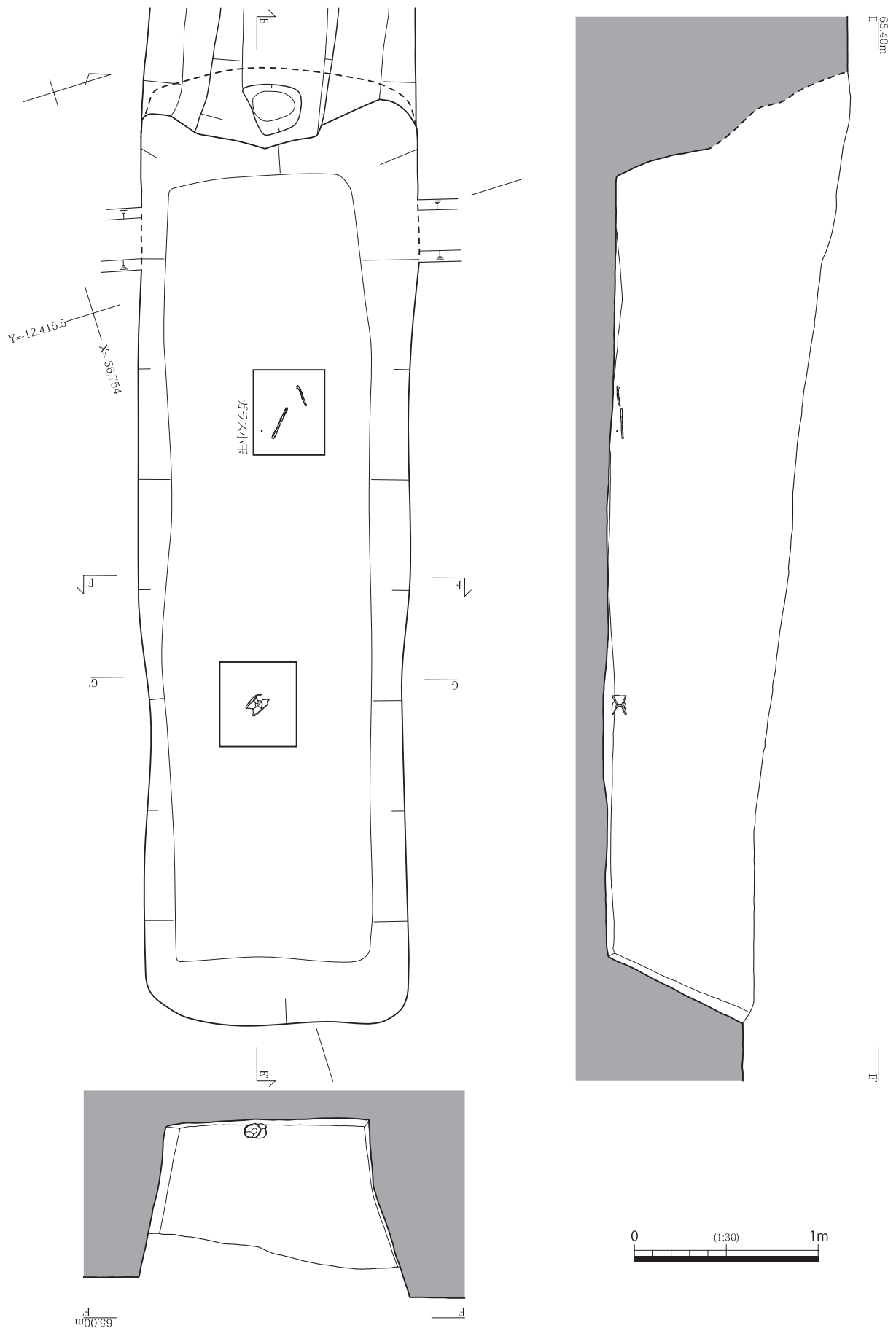
二段目掘方の埋土は、基盤層のブロックを多く含み、上層から下層にかけて土質は類似している。平面的に土質の違いを見出すことが困難であったため、棺痕跡を平面的に検出できていない。土層断面から棺内埋土と推定される43～46層(第31図43層以下)を確認し、これを挟む47・48層が棺の



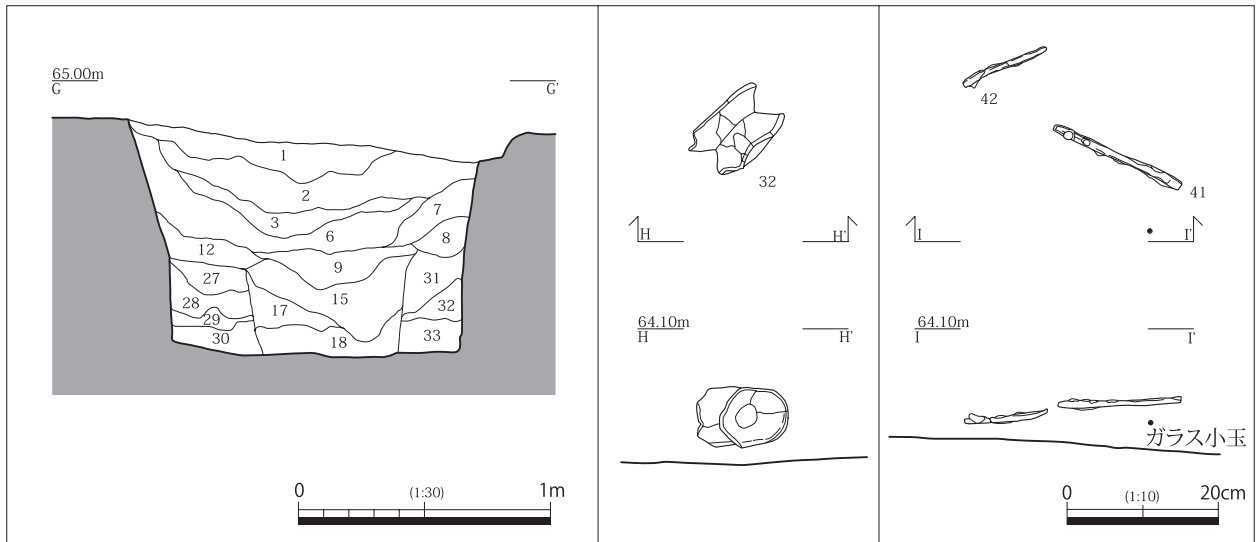
第31図 14号墳 前方部 埋葬施設3・4 平断, 立面図 (1/30)



第32図 14号墳 前方部 埋葬施設3 遺物出土状況図 (1/5)



第33図 14号墳 前方部 埋葬施設4 平, 立面図 (1/30)



第34図 14号墳 前方部 埋葬施設4 断面，遺物出土状況図 (1/30・1/10)

裏込めと推定した。また小口痕については断面で立ち上がりを確認できず，基盤層を掘り込んだ底面で痕跡を確認したのみである。

また，床面については，西側小口痕の上部で小型仿製内行花文鏡（第32図，第47図写真6・7）が出土し，その接地面と底面直上に堆積する均質なシルト層（50層）の上面がほぼ同じ高さとなることから，この層が棺底と推定した。

埋葬施設3の調査では，棺の構造を考える上で得られた知見は少ない。二段目掘方の底面が短軸方向で中央が窪んでいることから，底面が湾曲する棺構造を推定し，検出した小口痕跡の状況と合わせると割竹形木棺で両端を板でふさぐ形態ではないかと想定する。

### 副葬品

棺内からは小型仿製内行花文鏡，勾玉（第47図21），管玉（第47図22～31）が出土した。

小型仿製内行花文鏡は，西短辺の小口痕跡のやや内側，鏡面を上に向けて出土した（第33図）。鏡の周囲から管玉が出土しており，被葬者の頭位は西側，即ち，後円部が意識されたことがわかる。

管玉は，掘方埋土を篩にかけて検出したものを含めて合計13点出土している。ただし，材質がもろく，検出作業中に破損したため，図化できなかったものが2点ある。管玉の出土位置は，平面的に西側に集中するものの，出土した個々の高さには約25cmの高低差がある。

また，鏡の南側，底面付近で水晶製の勾玉が1点出土したが，埋土精査中に確認したもので，原位置からやや動いている。

### 埋葬施設4（第30・33・34図，図版18～21）

#### 構造

掘方の長軸は約5.2m，幅は1.5m，深さは西側で1.1m，東側で0.76m。主軸は埋葬施設3と同じく墳丘主軸とほぼ平行する。

掘方横断面形は箱形で，掘削の状況を細かく見ると，東西短辺，南長辺は下端部までほぼ直線的に掘削する。しかし，横断面で見ると北側壁面は上部を斜めに掘削し，壁面の中位で一度傾斜変換し，下部は垂直に掘削している。この傾斜変換については，埋葬施設6や19号墳埋葬施設と比較すると明瞭でないが，掘削深度を合わせて掘削した単位と考える。

また，掘方の長さ，深さが類似する19号墳の埋葬施設と比較すると，14号墳埋葬施設4は幅が狭い。19号墳の埋葬施設と同様の幅で掘方を掘削すると，前方部上側縁を壊すことになるため，掘方構築は，前方部の形状に制約されたと考える。



調査では、長軸方向に設けたトレンチで埋土を確認しつつ、徐々に掘り下げた。

埋土は基盤層（IV層）の礫を含んだシルト～粗砂を主体とし、しまりの弱い土が連続していた。土質の違いは僅かで埋土の区別は困難であった。

棺痕跡は、横断面で裏込めに相当する27～33層と棺内埋土（15～18層）との境が確認され、棺の立ち上がりが確認でき、推定される棺の幅は約0.6m。

小口痕は明確でないが、長軸断面（第30図）で掘方中央、底面直上に堆積する18層は均質なシルト層であり、その両端で同層を挟んで、ゆるやかに上方向へ傾斜する19・21層を確認し、棺小口に相当する立ち上がりと推定した。推定される棺の規模は長軸約2.1m、短軸0.6m。側板は掘方両端まで延びていた可能性が高いと想定する。

埋葬施設4の調査では、木棺の構造にかかる知見は全体に少ない。埋葬施設6や19号墳の埋葬施設と類似した構造と考えられることから、棺は長側板で小口板を挟みこむ組合式木棺と推定した。

遺物は掘方の西寄りの位置で鉈（第49図41・42）とガラス小玉、東寄りの位置から鼓形器台（第48図32）が、底面のやや上方から出土している。これらの出土位置から、棺床面は掘方底面よりやや上方にあったものと推定する。

#### 枕と副葬品

棺内からガラス小玉、鉈、鉄製品、鼓形器台が出土した。鼓形器台は打ち欠きが無く、横位で出土した。13・19号墳、14号墳埋葬施設6から出土した鼓形器台は、受部または底部を打ち欠いて枕としたもので、それらとは異なるが、被葬者頭部の固定を目的として置かれたものと考えた。

また、鼓形器台と反対の西側からは、ガラス小玉、鉈、鉄製品が底面のやや上方から出土した。東側の鼓形器台、西側から出土した装飾品のガラス小玉や鉈の位置関係から、被葬者は東と西に頭位がおかれ、対向位置に2人埋葬されたものと推定する。

両者が別に埋葬された可能性も考えられるが、土層にさらなる切り合い関係は認められないため、同時に埋葬されたと考えている。なお、ガラス小玉は検出段階で破損したため、図化できていない。

#### 4. 墳丘周辺の埋葬施設（第35～36・48図、図版22・23）

##### 概要

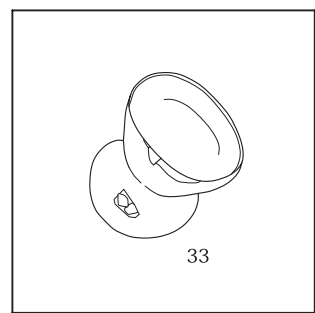
14号墳の北側くびれ部、前方部前端に広がる平坦面から各1基ずつ埋葬施設を検出した。前者を埋葬施設5、後者を埋葬施設6として報告する。

##### 埋葬施設5（第35・48図、図版22）

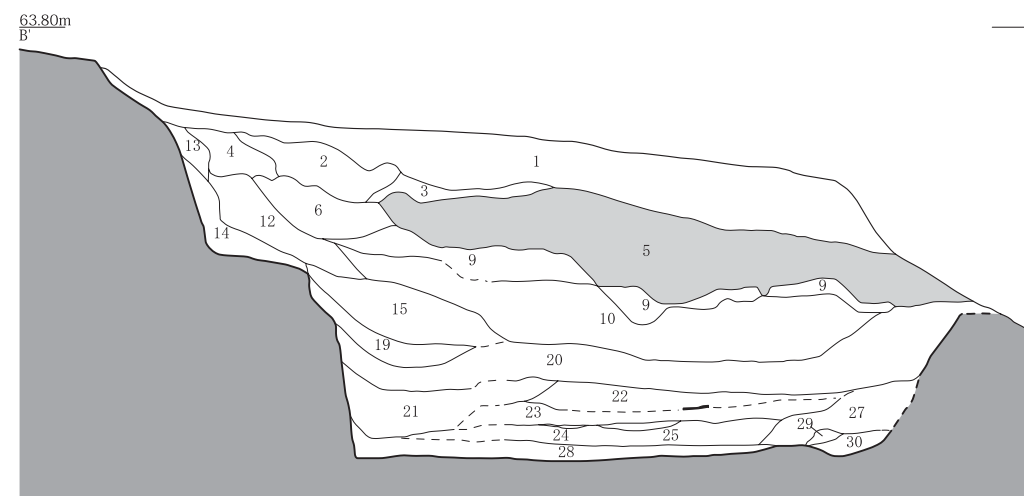
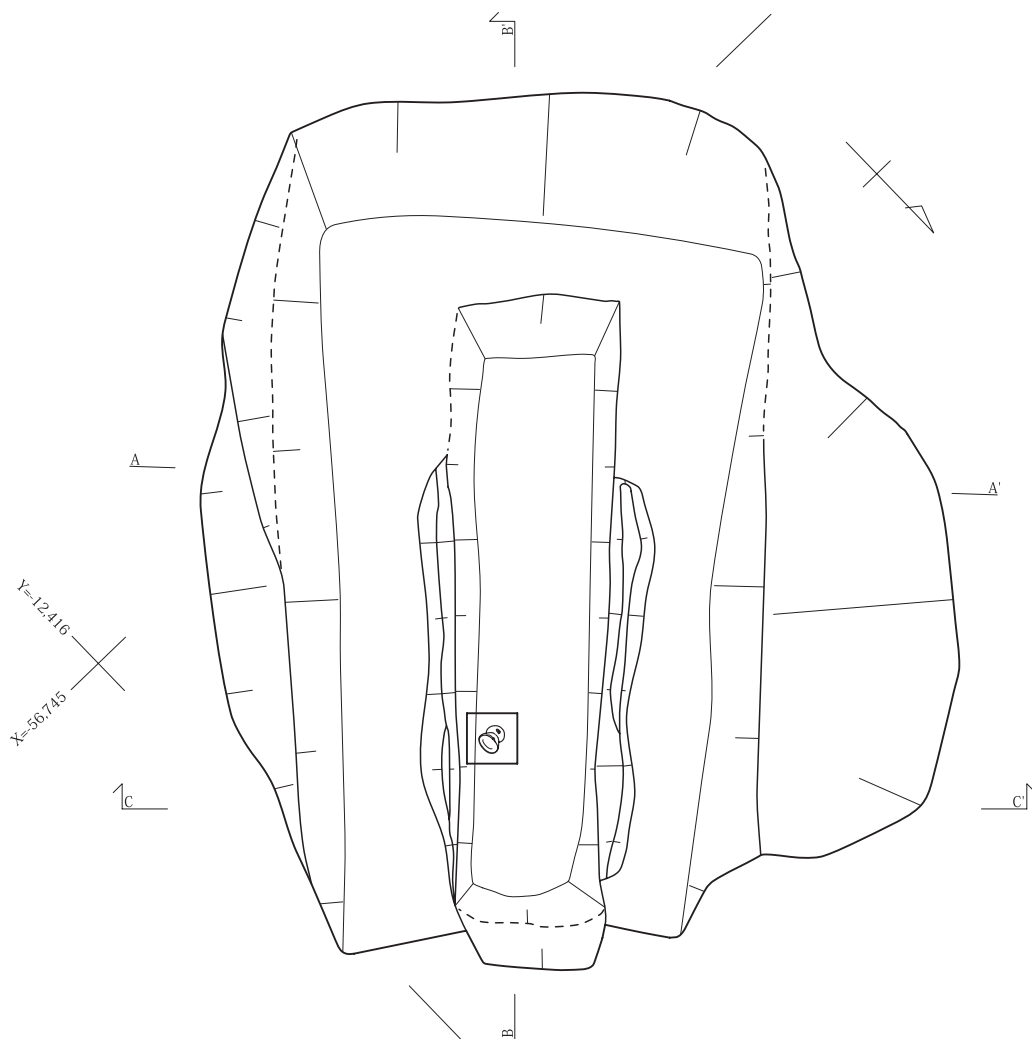
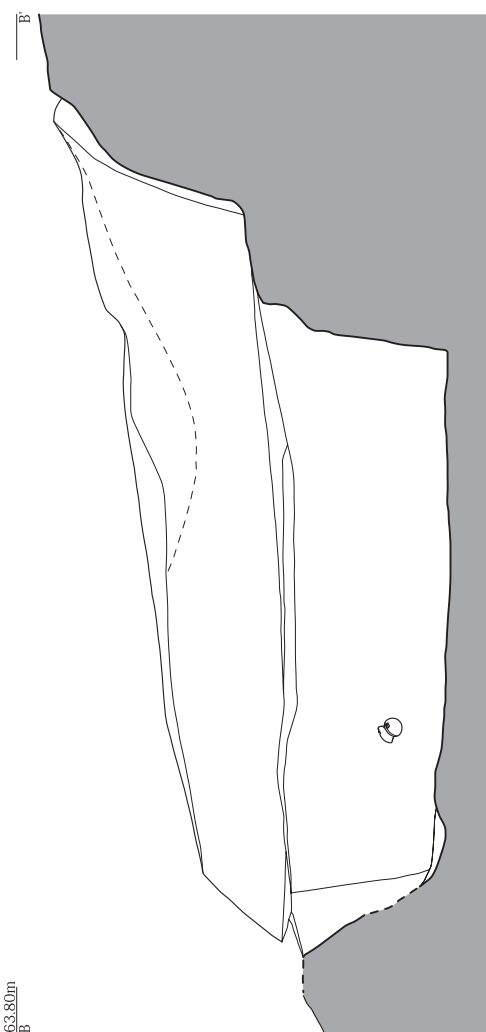
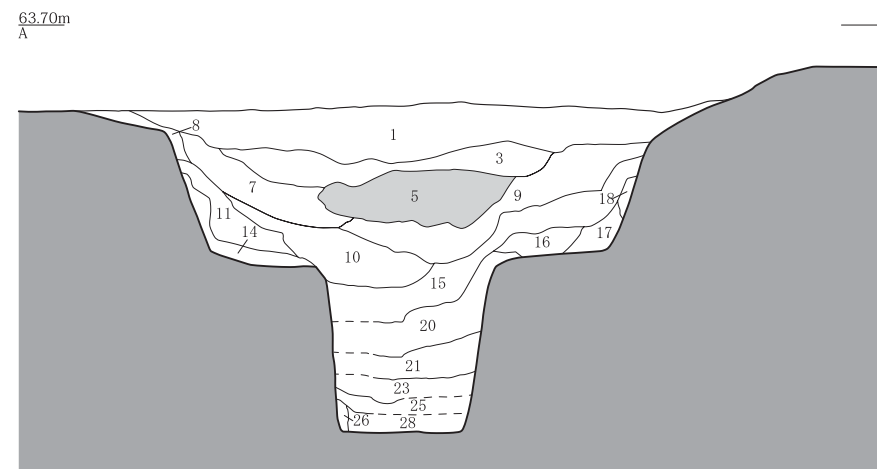
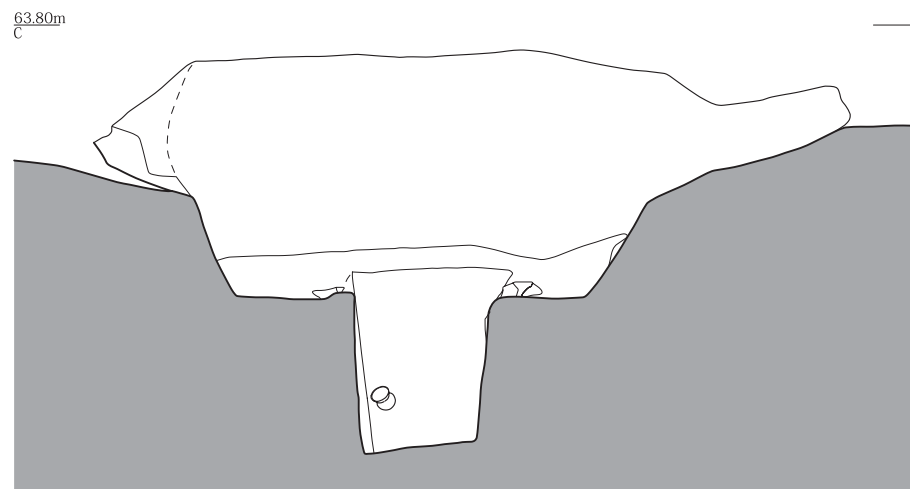
##### 位置と検出状況

埋葬施設5は、北側くびれ部の平坦面を検出した時点で隅丸方形の掘方を検出した。掘方は後円部の墳丘裾に隣接し、北西辺が外側へ張り出す。規模は長さ約3.5m以上、幅3.0mで、北東辺は斜面に接して流失している。主軸はS-45°-W。

平坦面を検出した段階で隅丸方形を呈するI層の広がり確認でき、掘方を検出した。埋葬施設上およびその周辺にも盛土は確認できなかった。平坦面は、検出状況から自然作用による上面のわずかな流失はあるものの、形成後、地形改変は受けていないと判断した。一方で北東辺に接する斜面は埋土の一部がかかり、断面では埋土中に炭片を含んだ灰の集中層が認められた。このことから、当初、この遺構は、古墳構築後、平坦面を利用して、後世に炭焼き等が行われた痕跡と想定していた。しかし、埋土掘り下げの過程で、灰層（第35図5層）の下部および壁面に被熱した痕が認められず、掘方中央に長方形を呈する二段目の掘方が検出できたため、埋葬施設に認識を改めた。



0 (1:5) 10cm



灰層

0 (1:30) 1m

- |    |          |   |    |          |                                      |
|----|----------|---|----|----------|--------------------------------------|
| 1  | 7.5YR6/6 | 橙色シルト～粗砂混じり土(細砂混じり土が主)                  | 16 | 7.5YR4/6 | 褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・φ1cm以下のIV層礫含)     |
| 2  | 7.5YR4/4 | 褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・黒色土ブロック含)            | 17 | 7.5YR5/8 | 明褐色シルト                               |
| 3  | 10YR5/4  | にぶい黄褐色シルト～粗砂混じり土(細砂混じり土が主・IV層ブロック含)     | 18 | 7.5YR4/6 | 褐色シルト                                |
| 4  | 7.5YR5/6 | 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・5mm以下の炭化物含・しまり弱い)   | 19 | 7.5YR5/6 | 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・15より色調暗い)        |
| 5  | 10YR2/2  | 黒褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・IV層礫・炭化物含・灰層)       | 20 | 7.5YR4/6 | 褐色粘質シルト                              |
| 6  | 7.5YR5/4 | にぶい褐色シルト～粗砂混じり土(細砂が主・φ1cm以下のIV層礫・ブロック含) | 21 | 10YR4/6  | 褐色粘質シルト                              |
| 7  | 7.5YR5/6 | 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・φ1cm以下のIV層礫・炭化物含)   | 22 | 10YR5/8  | 黄褐色細砂混じり粘質シルト                        |
| 8  | 5YR5/6   | 明赤褐色シルト～粗砂混じり土(粗砂が主・φ1cm以下のIV層礫含)       | 23 | 7.5YR5/8 | 明褐色シルト～粗砂混じり土(細砂が主・φ3cm以下のIV層礫・炭化物含) |
| 9  | 7.5YR5/4 | にぶい褐色シルト～粗砂混じり土(細砂が主・炭化物含)              | 24 | 10YR5/8  | 黄褐色シルト(φ1cm以下のIV層礫を含みしまり強い)          |
| 10 | 7.5YR5/6 | 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主)                    | 25 | 7.5YR5/6 | 明褐色シルト～粗砂混じり土(シルトが主・φ3cm以下のIV層礫含)    |
| 11 | 7.5YR5/6 | 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主)                    | 26 | 10YR6/8  | 明黄褐色シルト～粗砂混じり土(シルトが主・しまり強い)          |
| 12 | 10YR4/6  | 褐色シルト～粗砂混じり土(粗砂が主・φ3cm以下のIV層礫含)         | 27 | 7.5YR5/6 | 明褐色シルト～粗砂混じり土(シルトが主)                 |
| 13 | 7.5YR4/6 | 褐色シルト～粗砂混じり土(シルトが主)                     | 28 | 10YR6/8  | 明黄褐色シルト～粗砂混じり土(シルトが主・粘性・しまりともに強い)    |
| 14 | 5YR5/6   | 明赤褐色シルト～粗砂混じり土(粗砂が主・φ1cm以下のIV層礫含)       | 29 | 7.5YR5/8 | 明褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主・粘性・しまりともに強い)     |
| 15 | 7.5YR4/6 | 褐色シルト～細砂混じり土(シルトが主)                     | 30 | 10YR5/6  | 黄褐色礫混じりシルト(しまり強い)                    |

第35図 14号墳 周辺部 埋葬施設5 平断、立面、遺物出土状況図 (1/30・5)

## 構造

掘方は二段に掘り込まれる。一段目の深さは検出面から南西端で0.56m、北東端で0.34m。底面は長さ2.9m、幅1.75mである。

二段目の掘方は北東辺が一段目と同じく部分的に流失しており、残存している上端で長軸長2.68m、幅は南西辺で0.64m、北東辺は0.60m。一段目の底面からの深さは南西端で0.74m、北東端で0.56mである。

二段目掘方の埋土を掘削中、埋土の中位、22層中から小型丸底壺（第49図33）が出土した。出土状況から棺上に供献されたものとする。

さらに埋土の掘り下げを行うと、基盤層に掘り込まれた二段目掘方の底面は水平でなく、南西端が北東端より低い。その直上の28層は明黄褐色のシルトを主体とした均質な土で、上面がほぼ水平となる（第36図B-B'）。28層が二段目掘方の底面レベルを揃えていることから、28層上面が棺床面と推定した。また、東長辺の下部では壁面に沿って垂直に立ち上がる26層を確認し、側板痕に相当するものと推定した。

小口痕について土層断面の検討、掘方底面の精査を行ったが、北東端で基盤層がやや窪むことを確認したのみであり、不明瞭である。

二段目掘方底面の南西辺が幅0.60m、北東辺が0.48mとなり、南西辺が若干広い。また、南西辺が14号墳側に向いていることを合わせて頭位は南西と想定する。

埋葬施設5の調査では、断片的な根拠しか確認できていないが、以上の所見から側板を掘方壁に沿って設置した箱形の木棺と推定する。また、二段目掘方上縁に沿って中央から北東側が部分的に高まる。この高まりに木蓋をかけた可能性も考慮しておきたい。

## 副葬品

出土した遺物は小型丸底壺（第48図33）のみである。

二段目掘方中位から出土し、平面的な位置は想定される頭位の反対、足側に近い。口縁部を北西に向けて、傾いた状態で出土している。棺上に供献されたものが、棺蓋の腐朽に伴って棺内埋土中に落ち込んだものと推定する。

## 埋葬施設6（第36・48図，図版18・23）

### 位置と検出状況

埋葬施設6は、14号墳前方部前端に形成された半月状を呈する平坦面の先端付近に位置する。

主軸はS-25°-Wで、前方部前端裾にほぼ並行する。鼓形器台を用いて枕とし、頭位は南西とわかる。

調査では平坦面を検出した時点で、長方形の掘方が検出された。この平坦面は岩脈や粘質土の基盤層（IV層）が露出するが、掘方内はこのIV層がブロック状に入る埋土の広がりが観察でき、さらに中央付近では部分的に土壌化した箇所を確認した。

盛土は埋葬施設上およびその周辺でも確認できなかった。この平坦面は、検出状況から自然作用による上面のわずかな流失はあるものの、形成後、人為的な大きな地形改変は受けていないと判断され、埋葬施設も含め、築造時の状況をほぼ保っているものと考えた。14号墳のくびれ部墳裾平坦部に築かれた埋葬施設5でも盛土が施されておらず、当埋葬施設も含め、墳丘周辺に築かれた埋葬施設は全て盛土は施されていないと推定された。

また、この埋葬施設と14号墳の墳丘を画する溝のような施設についても確認されていない。

## 構造

埋葬施設の構造は、組合式木棺を掘方内に裏込めを施しながら納める形態。19号墳の埋葬施設と構築方法は共通するが、規模は19号墳に比べるとひとまわり小さい。

掘方規模は上端部長約3.8m、幅1.5m、下端部長3.4m、幅0.7m。深さは南端で0.78m、北端で0.70mとなるが、底面南端部が窪んでおり、全体的な底面のレベルはほぼ水平と見ることができる。木棺規模は推定復元で約3.1×0.5～0.6m、高さ約0.3～0.4m。小口位置が明確ではなく、棺内規模は長軸がもう少し短いと推定される。

掘方の断面形は、大きくみると逆台形を呈する。掘削の状況を細かく見ると、短辺は下端部まで直線的に掘削するが、長辺は上部をほぼ垂直に掘削した後、傾斜変化をもって勾配を緩やかにし、最下部を再度垂直に掘削していることがわかる。この長辺にみられる傾斜変換点は、19号墳埋葬施設に見られる段と同一で、掘方の掘削深度を合わせて、水平を保ちながら掘削するための掘削単位と考えられる。つまりこの掘方は、三段階にわけて掘削したことがわかり、さらに断面形からは、おおまかにではあるが、木棺の大きさに合うように微調整しつつ掘方幅を狭めていることも窺える。長大な木棺を納めるための工夫と考えられよう。

以下、棺構造については調査過程を示しながら詳述する。なお、第36図の木棺推定ラインは、検出状況、断面を勘案し、その上端部を示している。

調査では掘方検出後、まずトレンチで棺内陥没に伴う最終堆積土の確認を行った。平面で確認された土壌化が認められる第36図1層が該当する可能性が高いが、明確ではない。

さらに掘り下げを進めると、5・22層中でわずかな色の違いによる棺痕跡が検出された。ただ、この段階では長辺は比較的明確に認識されたが、小口にあたる短辺については不明瞭であった。このため、さらに若干の掘り下げを行い精査した。その結果、長辺ほど明確ではないが、小口付近の痕跡と推定されるラインを検出した。

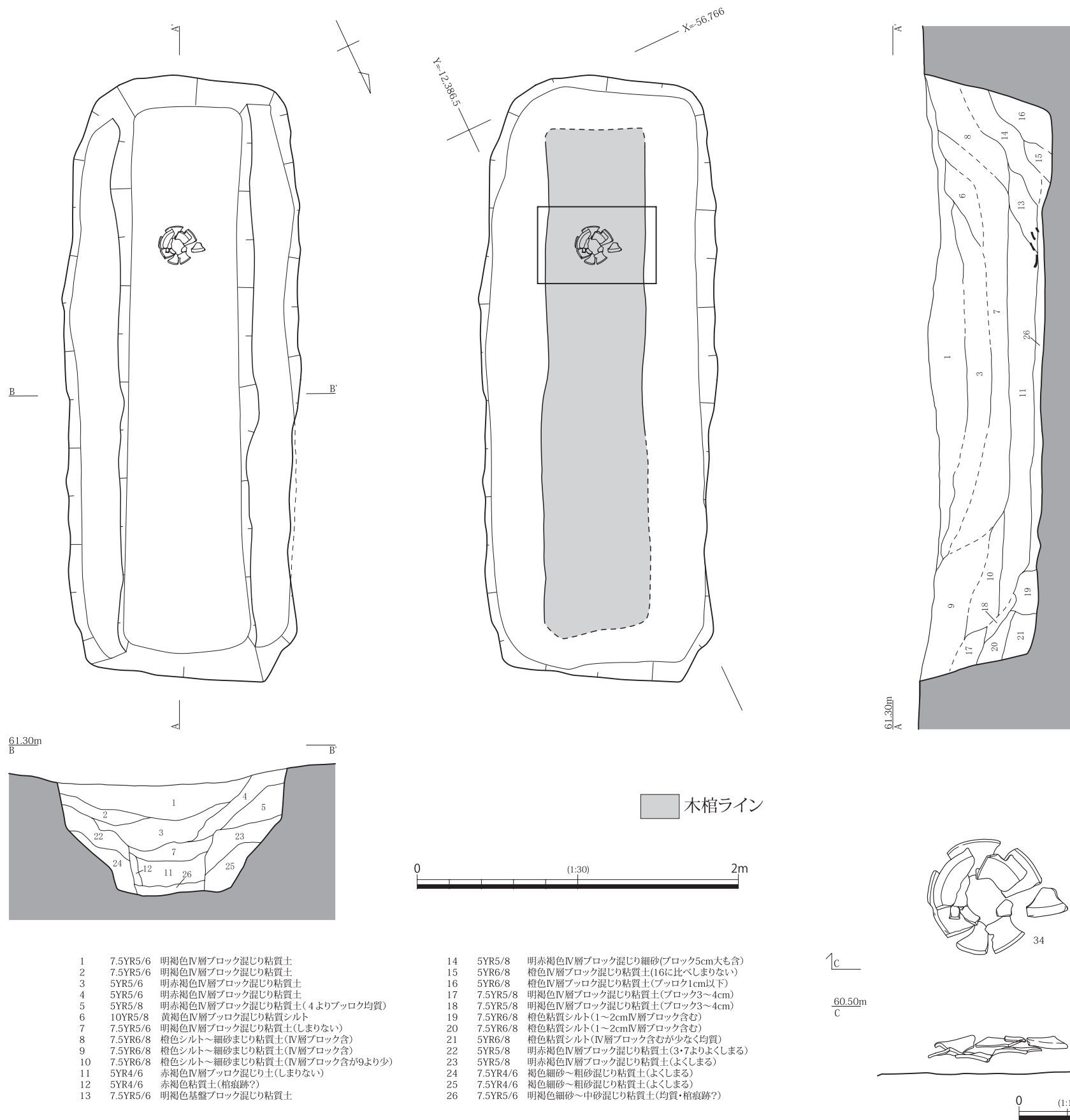
棺痕跡検出後、棺内の掘削を開始した。掘り下げの段階では、長辺のうち東側の立ち上がりは認識できたが、西側の認識は困難であった。小口部分も同様である。これは、棺内の埋土として検出した棺上の埋め戻し土と木棺側板の裏込め土に差異がないためである。

このような状況であったため、第36図に示した横断面により、棺の構造を把握するため、裏込め土にもトレンチを設定して検討を行った。断面を観察すると、棺と裏込めの状況が観察された。裏込め土の下部は、上部に比べIV層ブロックの単位が小さいことが観察され、下部には掘方掘削の発生土を細かくしたものを使用したと考えられた。また、東辺では、棺痕跡とも考えられる層（12層）が確認され、西辺は棺内掘り下げの段階で正確に調査できていないことも確認した（図版23の西長辺ラインは写真より少し中に入る。）。

小口板についても断面による観察を行ったが、把握できなかった。

床面については、枕として使用された鼓形器台が棺内南寄り出土し、この土器底部の接地面を床面とした。床面から掘方底部には細～中砂を含むが、ほぼ均質な粘質土が観察される。この粘質土については木棺の底板等の痕跡または床面形成のため整地土的なものの両者が考えられる。判断は難しいが、ここでは木棺底板の痕跡と考えている。

掘方底面まで完掘すると、部分的ではあるが、長側板を据えた痕跡が検出された。小口部分につい



第36図 14号墳 周辺部 埋葬施設6 平, 断面, 遺物出土状況図 (1/30・10)

ては若干窪むラインもあるが明確ではない。

埋葬施設6の調査で得られた知見は全体的に曖昧な部分が多いが、復元される埋葬施設の構造や構築手順は、19号墳の埋葬施設と類似すると考えられる。また、木棺の長辺の長さを考えると13号墳同様、長側板で小口板を挟み込む形態と考えるのが妥当である。

### 枕と副葬品

棺内からの出土遺物は、枕に使用した鼓形器台のみで、鉄製品等の副葬品は出土していない。

鼓形器台は、落ち込み土により押し潰されたような状況で出土した（第36図詳細図）が、頭部を据えるために口縁部の一部を欠いて使用した状況は現地でも観察できた。さらに土器を接合復元すると、底部を上にして枕として使用していることもわかった。

## 第3項 19号墳（第9・22・37～39・49図，図版24・25）

### 1. 墳丘と周溝（第9・22・37・38図，図版24・25）

#### 墳丘

19号墳は14号墳後円部の北東側に位置する方墳。14号墳の後円部墳端に接するようにして、旧地形を方形壇状に整形して墳丘とする。14号墳の付属施設のようにもみえるが、14号墳との境界は小規模な周溝によって区切られ、明らかに14号墳とは画されている。

墳丘規模は南西－北東軸で約8.4m，北西－南東軸で復元長約12m，墳高は北端部で約1mある。

調査前の現状を概観する（第9図参照）と、14号墳後円部墳端部から南支群の尾根に沿って平坦面があり、平坦面端から北東に向かって傾斜が変換していた。平坦面西寄りには後世に造られた道、西辺は崩落によって大きく地形は改変されていることが観察された。

まず頂部に沿ってトレンチを設定しながら、調査を進めた。

その結果、墳丘北斜面から北東コーナー部では部分的に盛土を施し（第37図13～15層）、方形に整えていることを確認し、この盛土端付近にある斜面下端の傾斜変換点が墳丘の北辺端として認識された。東辺については盛土の有無はわからなかったが、傾斜の状況からは削り出しによって整形されている可能性が高い。西辺は後世の崩落が著しく、残存していなかった。

頂部平坦部は、表土を除去した段階で第IV層が露出した。盛土や旧表土層は確認できなかった。また、現況でみられた道の部分を中心とした墳頂北西部は、第37図の墳丘測量図や第38図の断面図でもわかるが、窪み状に削られ、その残存状況は悪い。

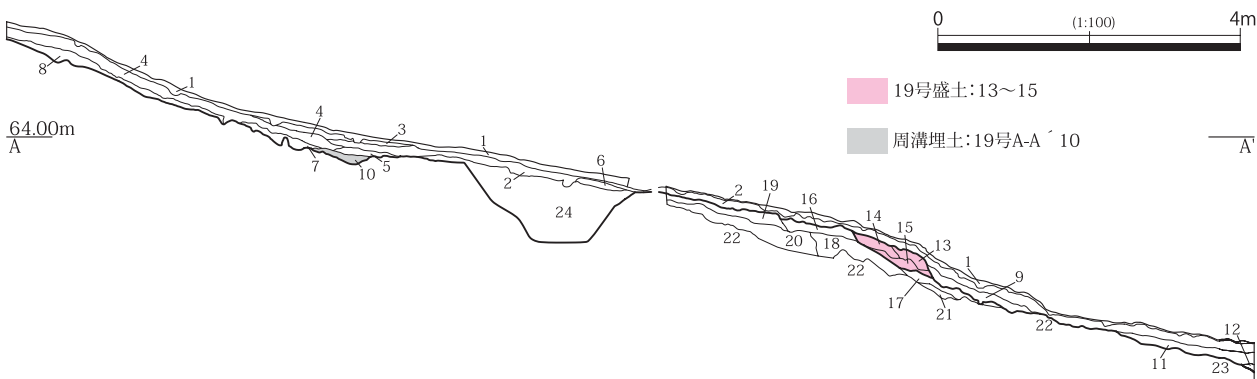
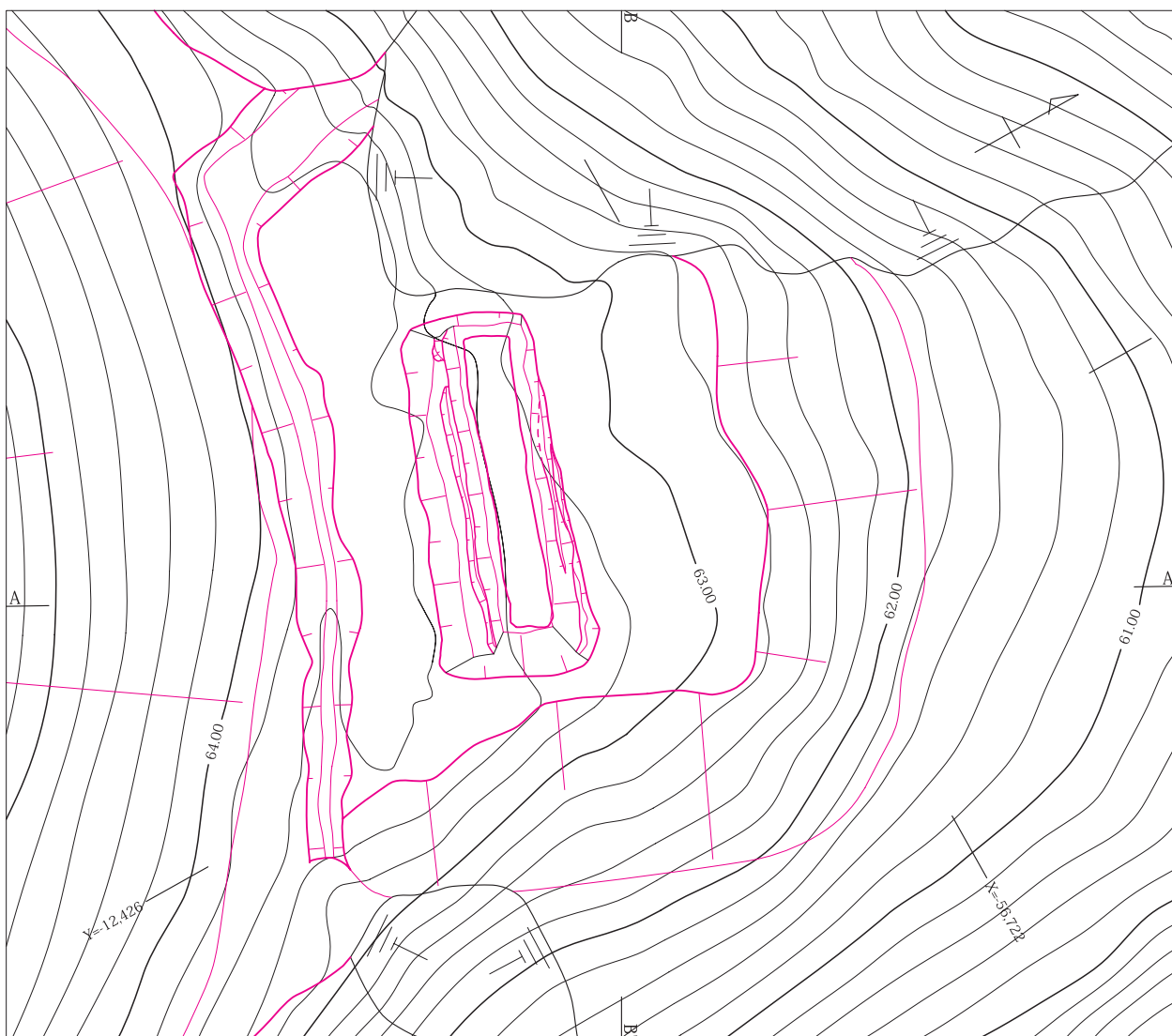
墳頂部盛土については現状では知ることはできないが、盛土されているとしても、埋葬施設の上部を含めた墳頂部の形を整える程度であったと推定している。

#### 周溝

周溝は14号墳裾端際に掘削され、尾根が下降する北側墳端にはない。小規模な溝で幅は約0.9m，深さ0.2m程度。14号墳の後円部裾端を沿うように走り、南西端で谷斜面に向かって屈曲する。北東端も谷に向かって屈曲していたと推定されるが、残存していない。

周溝埋土は単一層で、黄褐色のシルトから粗砂混じり土が堆積していた。14号墳の墳丘からの崩落土と推定され、比較的早い段階で周溝は完全に埋没したものと推定される。

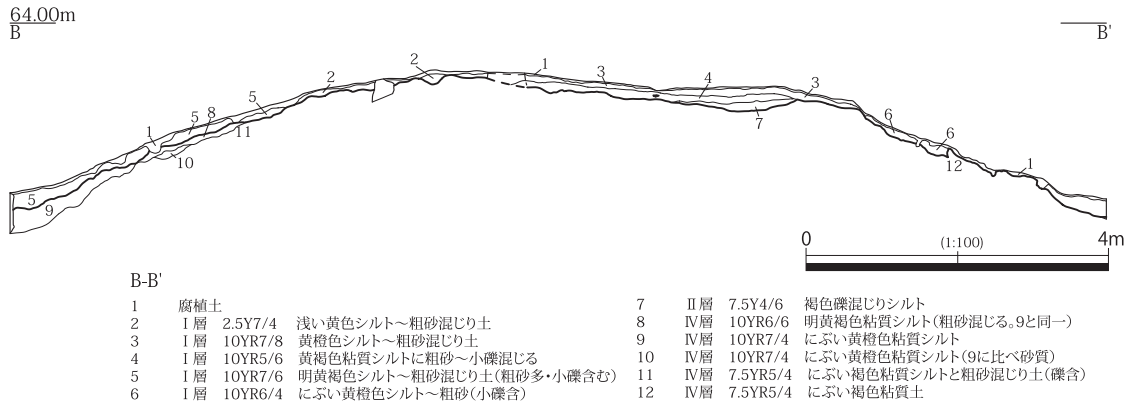
この周溝の存在により、19号墳は14号墳と明らかに区切られていることがわかり、屈曲するコーナー部を検出したことにより方形を意識していることもわかった。また、現状では側面からこの周溝



A-A'

- |    |      |    |        |          |                         |
|----|------|----|--------|----------|-------------------------|
| 1  | 腐植土  | 12 | II層    | 10YR5/4  | にぶい黄褐色粘質シルト(小礫含)        |
| 2  | I層   | 13 | 19号盛土  | 7.5YR5/6 | 明褐色粘質シルト~粗砂混じり土(IV層の礫含) |
| 3  | I層   | 14 | 19号盛土  | 10YR5/6  | 黄褐色シルト~粗砂混じり土(IV層礫含)    |
| 4  | I層   | 15 | 19号盛土  | 7.5YR5/8 | 明褐色粘質シルト~粗砂混じり土(IV層礫含)  |
| 5  | I層   | 16 | IV層    | 10YR6/8  | 明黄褐色粘質シルト~粗砂混じり土        |
| 6  | I層   | 17 | IV層    | 7.5YR7/4 | にぶい橙色粘質シルト              |
| 7  | II層  | 18 | IV層    | 7.5YR5/6 | 明褐色粘質シルト(IV層岩盤ブロック含)    |
|    |      | 19 | IV層    | 7.5YR5/4 | にぶい褐色粘質シルト~粗砂混じり土       |
| 8  | II層  | 20 | IV層    | 10YR7/4  | にぶい黄褐色シルト~細砂(よくしまる)     |
| 9  | II層  | 21 | IV層    | 5YR6/4   | にぶい橙色粘質シルト              |
| 10 | 周溝埋土 | 22 | IV層    | 10YR7/2  | にぶい黄褐色IV層ブロック混じり細砂~岩盤   |
|    |      | 23 | IV層    | 5YR6/4   | にぶい橙色粘質土に5YR4/8赤褐色の礫混じる |
| 11 | II層  | 24 | 埋葬施設埋土 |          |                         |

第37図 19号墳 墳丘 平, 断面図 (1/100)



第38図 19号墳 墳丘 断面図 (1/100)

をみることはできない。盛土の有無によりその景観は異なるが、盛土高はそれほど高くなかったと考えており、視覚的側面観は14号墳が意識されていた可能性が高い。

なお、周溝の平面形からは14号墳が19号墳に先行して築造されたと考えられるが、その築造時期は非常に近接する可能性が高い。

#### 出土遺物

墳丘上、周溝内からは古墳に関する遺物は出土していない。

### 2. 埋葬施設 (第39図, 図版25・26)

#### 位置と検出状況

19号墳に築かれた埋葬施設は1基である。墳丘平坦部のほぼ中央に位置し、主軸はW-21°-Nで、周溝に並行する。鼓形器台を用いて枕とし、頭位は北西とわかる。

調査では盛土、旧表土が残存していないため、まず墳丘検出面で埋葬施設の検出を行った。その結果、墳丘ほぼ中央でブロック状になった風化礫や、IV層の平面的な広がりを検出し、埋葬施設掘方と判断した。

12号墳に比べるとその規模ははるかに大きく、墳丘平坦面における埋葬施設の占める面積比率も高い。棺を納めるため、最低限の墳丘を確保しているようにもみえる。

また、掘方の北長辺は傾斜して低くなり、検出面の比高差は南と北で約0.5m (第37・39図) ある。これは、前述もしたが、墳丘頂部北西側が後世、地形改変の影響を最も受けた場所にあたり、埋葬施設の上部も大きく削られているためである。

#### 構造

埋葬施設の構造は掘方を掘削し、その中に裏込め土を施しながら組合式木棺を納める形態。

掘方平面形は長方形。規模は上端部長5.2m、幅は残存状況の良い東側で2.2m前後、下端部長4.4m、幅0.8m前後、深さは南長辺の残存状況が良好な場所で1.0m、北長辺の残存状況が悪い場所で0.5mである。

断面形は逆台形を呈し、底面は東側が0.1mほど高いがほぼ水平。短辺は直線的に掘削し、長辺は階段状に狭い段を設けて掘削する。この段は掘方を掘り下げる段階で掘削深度を合わせ、水平を保ちながら掘削するための単位と推定される。つまり、この掘方は大きく3段階にわけて掘削を行ったことがわかる。長大な掘方の底面を水平に仕上げるための工夫のひとつであろう。



また、段の端部や長辺と短辺のコーナー部分は鋭角で、掘削には鉄製の鍬などの農工具が使用されたことを想起させる。なお、端部が鋭角に残存していることは、掘方を掘削してすぐに埋葬を行い、埋め戻されていることも示唆している。

棺構造については、以下に調査経過を示しながら詳述する。

調査では掘方検出後、掘方内の面を水平に揃えるため、南半部から徐々に掘り下げを開始した。掘削を開始して間もなく、掘方中央部で木棺の痕跡と推定される長さ4.3m、幅0.7mの細長い長方形の変色部を検出した。

棺痕跡検出後は、棺内の掘り下げを行った。掘り下げの過程では、北長辺中央付近で側板の痕跡と考えられる粘質土（第39図13層）が一部確認された。この粘質土を手がかりに木棺の側壁の検出を試みたが、南側には粘質土がみられず、確認は困難を極めた。そのため、棺中央部に設定した畦の断面で確認を行ない、第39図の横断面に示した棺と裏込めの状況が認識された。

小口側については、平面的な棺痕跡を手がかりに検出を行ったが、第40図の断面図に示したように明確な痕跡を認識することが難しい状況であった。

棺床についてはきめの細かい粘質土が検出され、その上面で鼓形器台を転用した枕、副葬品の鉄製鍬先が出土したことにより、粘質土の上面を床面と判断した。粘質土の平面的な広がりには図示のとおりで、厚さは約1cm前後と薄い。また、粘質土の周辺には均質な土（27層）が広がる。

この粘質土の性格については、「木棺底板の痕跡」、「粘土床として意図的に敷いている」の両者が考えられる。ここでは、立地や基盤層の土質から、雨水等により当埋葬施設は湿潤な環境下であったことが窺え、その影響で棺材が腐食していく段階で粘質土が堆積した可能性が高いと判断し、木棺の底板の痕跡と考えた。粘土層が薄い理由も説明できよう。

この粘質土の上面を棺底と推定すると、小口板の場所はどうなのか。粘質土の上面及び基盤面でも小口板の痕跡を認識することはできなかった。粘土の広がる短辺端部付近とも考えたが、横方向から側板にかかる土圧との関係を考えて、13号墳埋葬施設2例（第45図参照）のように土圧を分散させるためにもう少し中央寄りに設置しているものと推定した。なお、長軸方向の断面観察による埋土からはその状況を知ることはできなかった。

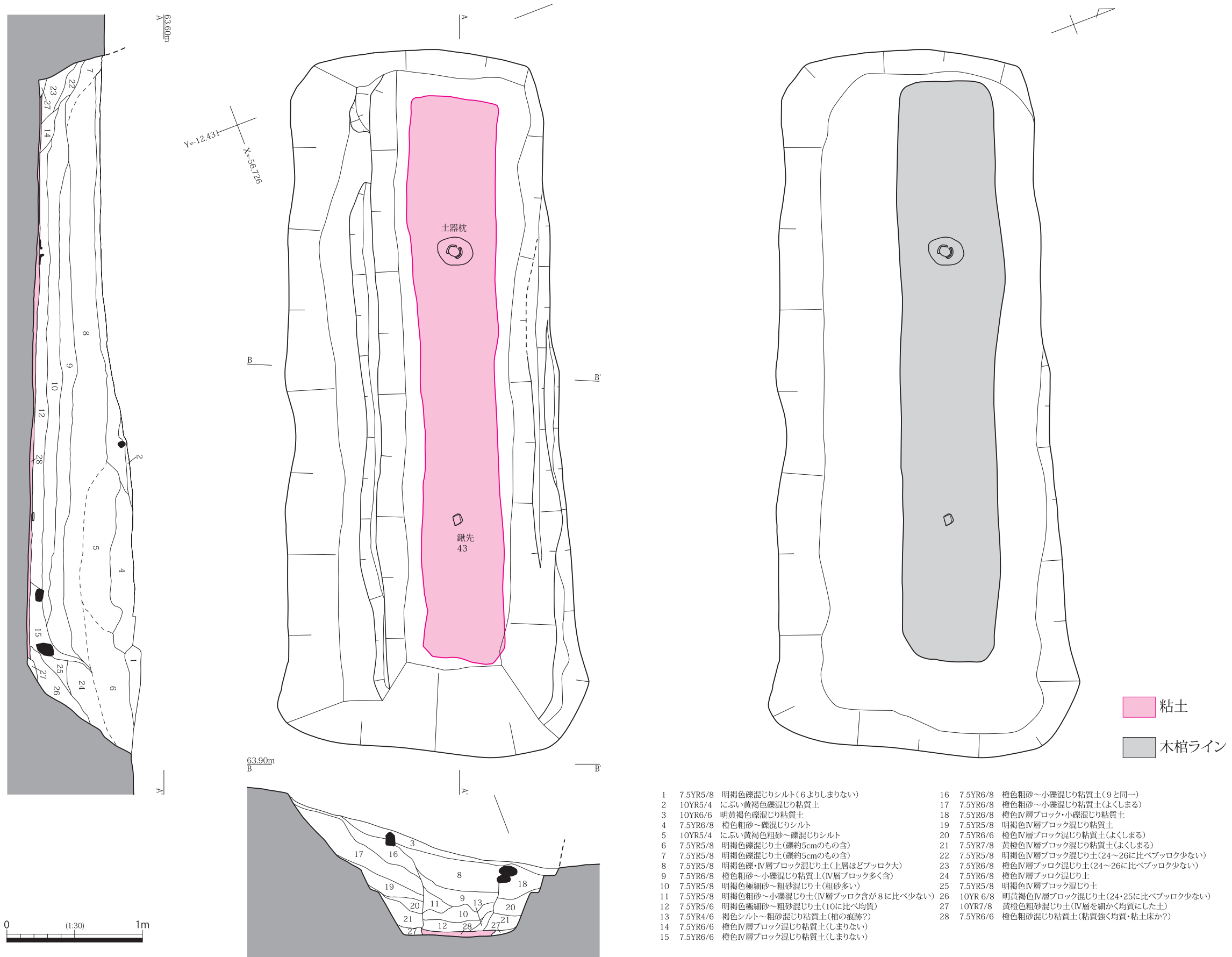
このような状況で木棺規模を復元すると、高さ0.3～0.4m、幅約0.6m、長さは粘土範囲を棺床とすると4.1m程度となるが、棺内はもう少し短いと考える。また、小口板が側板端より内側に寄ると仮定して副室のような施設の存在も念頭に入れ調査を進めたが、遺物の出土もなくわからなかった。

#### 枕と副葬品

棺床からは鼓形器台、鉄製の鍬先が出土している。

鼓形器台は棺中央寄り西側で出土した。土器そのものは水分による劣化が著しく、土に還元されているような状況で取り上げることもできなかったが、調査では土器の痕跡を丁寧に検出することに努めた。その検出状況からは床面に土器を正立していることが窺え、枕として使用されていることがわかった。

鍬先は頭位とは反対の棺中央より東側で出土しており、被葬者の足元付近に置かれたものと判断された。床面直上の出土で、装着部を下にし、刃先は北に向く。布巻き、柄の装着の痕跡は認められない。おそらく鍬先のみ副葬であろう。



- |    |          |                                |    |          |                                  |
|----|----------|--------------------------------|----|----------|----------------------------------|
| 1  | 7.5YR5/8 | 明褐色礫混じりシルト(6よりしまりない)           | 16 | 7.5YR6/8 | 橙色粗砂~小礫混じり粘質土(9と同一)              |
| 2  | 10YR5/4  | にぶい黄褐色礫混じり粘質土                  | 17 | 7.5YR6/8 | 橙色粗砂~小礫混じり粘質土(よくしまる)             |
| 3  | 10YR6/6  | 明黄褐色礫混じり粘質土                    | 18 | 7.5YR6/8 | 橙色IV層ブロック・小礫混じり粘質土               |
| 4  | 7.5YR6/8 | 橙色粗砂~礫混じりシルト                   | 19 | 7.5YR5/8 | 明褐色IV層ブロック混じり粘質土                 |
| 5  | 10YR5/4  | にぶい黄褐色粗砂~礫混じりシルト               | 20 | 7.5YR6/6 | 橙色IV層ブロック混じり粘質土(よくしまる)           |
| 6  | 7.5YR5/8 | 明褐色礫混じり土(礫約5cmのもの含)            | 21 | 7.5YR7/8 | 黄褐色IV層ブロック混じり粘質土(よくしまる)          |
| 7  | 7.5YR5/8 | 明褐色礫混じり土(礫約5cmのもの含)            | 22 | 7.5YR5/8 | 明褐色IV層ブロック混じり土(24~26に比べブロック少ない)  |
| 8  | 7.5YR5/8 | 明褐色礫・IV層ブロック混じり土(上層ほどブロック大)    | 23 | 7.5YR6/8 | 橙色IV層ブロック混じり土(24~26に比べブロック少ない)   |
| 9  | 7.5YR6/8 | 橙色粗砂~小礫混じり粘質土(IV層ブロック多く含)      | 24 | 7.5YR6/8 | 橙色IV層ブロック混じり土                    |
| 10 | 7.5YR5/8 | 明褐色極細砂~粗砂混じり土(粗砂多い)            | 25 | 7.5YR5/8 | 明褐色IV層ブロック混じり土                   |
| 11 | 7.5YR5/8 | 明褐色粗砂~小礫混じり土(IV層ブロック含が8に比べ少ない) | 26 | 10YR 6/8 | 明黄褐色IV層ブロック混じり土(24・25に比べブロック少ない) |
| 12 | 7.5YR5/6 | 明褐色極細砂~粗砂混じり土(10に比べ均質)         | 27 | 10YR7/8  | 黄褐色粗砂混じり土(IV層を細かく均質にした土)         |
| 13 | 7.5YR4/6 | 褐色シルト~粗砂混じり粘質土(棺の痕跡?)          | 28 | 7.5YR6/6 | 橙色粗砂混じり粘質土(粘質強く均質・粘土床か?)         |
| 14 | 7.5YR6/6 | 橙色IV層ブロック混じり粘質土(しまりない)         |    |          |                                  |
| 15 | 7.5YR6/6 | 橙色IV層ブロック混じり粘質土(しまりない)         |    |          |                                  |

第39図 19号墳 埋葬施設 平, 断面図 (1/30)

## 第4項 13号墳（第22・40～46・48・49図，巻頭図版7，図版26～29）

### 1. 墳丘と周溝（第40・41図，図版26）

#### 墳丘

13号墳は調査地西端で検出された長方形墳。調査範囲の都合上，墳丘の全体を検出することはできていない。復元される墳丘規模は尾根に沿う長軸が約21m，短軸が約18m。しかし，この墳丘規模の推定は曖昧である。これは以下で詳細を記述するが，14号墳との関係が大きく影響し，13号墳がアンバランスな墳形を呈しているためである。

13号墳は，南西から北東に延びる南支群と呼称した尾根上に立地する。尾根の最高所で頂部の広い場所には前方後円墳（14号墳）が築造され，13号墳は14号墳頂部から尾根北西に向かって徐々に狭くなる場所に選地されている。立地面での14号墳の優位性がわかる。13号墳のさらに北西にも尾根は延びるが，さらに尾根幅は狭くなり，近接した場所で古墳と認識される盛り上りはない。

古墳の整形については，14号墳の項と重複する部分もあるが，再度記述しておく。なお，平面形や周溝の状況等から判断して両墳の築造順は14号墳→13号墳と考えている。

南東辺は14号墳と共有する溝によって区画される。溝底部の立ち上がりから傾斜変換する墳丘上部までは旧地形を切土することによって仕上げ，周溝底面から墳丘端頂部までの高さは溝中央付近で約2.8m，北西端では約3.2mある。前述のとおり，周溝及びその上部の整形は14号墳築造時に掘削，完成したもので，13号墳築造時の南東辺にはほとんど加工は加えられていないと考えている。

北西辺は前述の通り調査地西端にあたり，墳丘裾は調査地外に延びる可能性が高い。しかし，現状を観察する限り，南東辺の対となる北西辺には尾根に直交するような溝を確認することができない。墳頂部北端部で，コーナーともみることができ比高差0.3m程度の下降する斜面を部分的に確認できるのみである。おそらく墳丘を明確に区画する溝は掘削していないが，墳丘として整える程度の整形が行なわれていたと判断している。

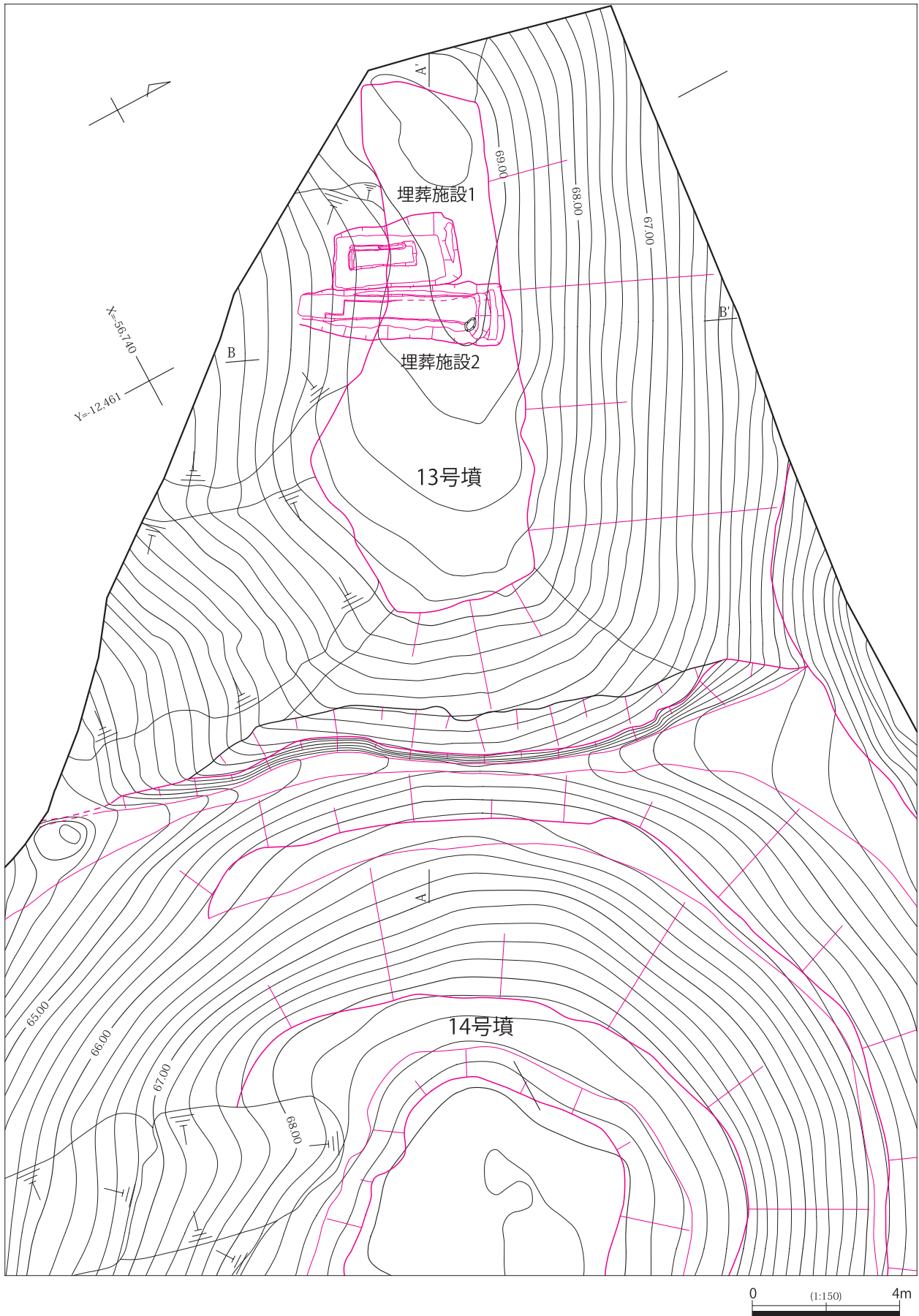
尾根に並行する墳丘面は，北東辺の残存状況は良好であるが，南西辺は後世の崩落が著しい。また，いずれの辺も調査地外にその墳端は延び，全体は検出されていない。

北東辺は墳丘北東コーナーから屈曲し，尾根地形に沿うように走る。この墳丘面は旧地形を有効に利用しており，面を平坦に揃える程度の加工で仕上げているものと推定した。ただ，その範囲については不明で，墳裾もはっきりしない。

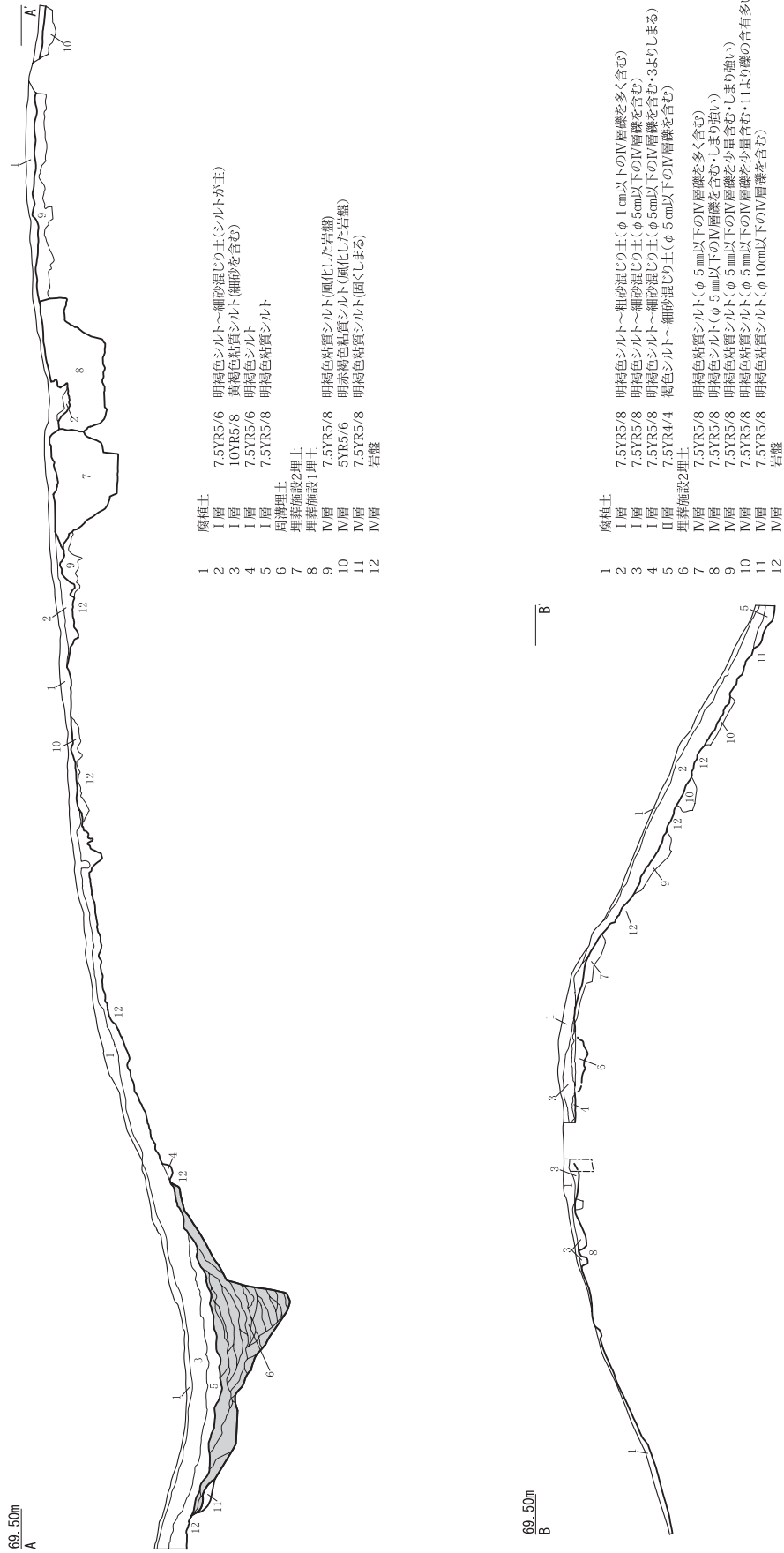
南西辺は，その多くが調査地外にあり崩落も著しいため，墳丘本来の姿を知ることは難しい。墳裾もはっきりしない。また，この南西辺に刻まれた崩落痕は，これほど規模は大きくないが，古墳築造時にすでに谷地形として存在し，この谷部分には盛土を施していた可能性もある。

墳頂部については比較的平坦な面が広がり，旧地形を平らに加工していることが窺える。平坦面の規模は残存状況の良好な場所で約14.0×6.5m。盛土については確認できなかったが，谷地形部以外は当初から施されていなかった可能性が高い。

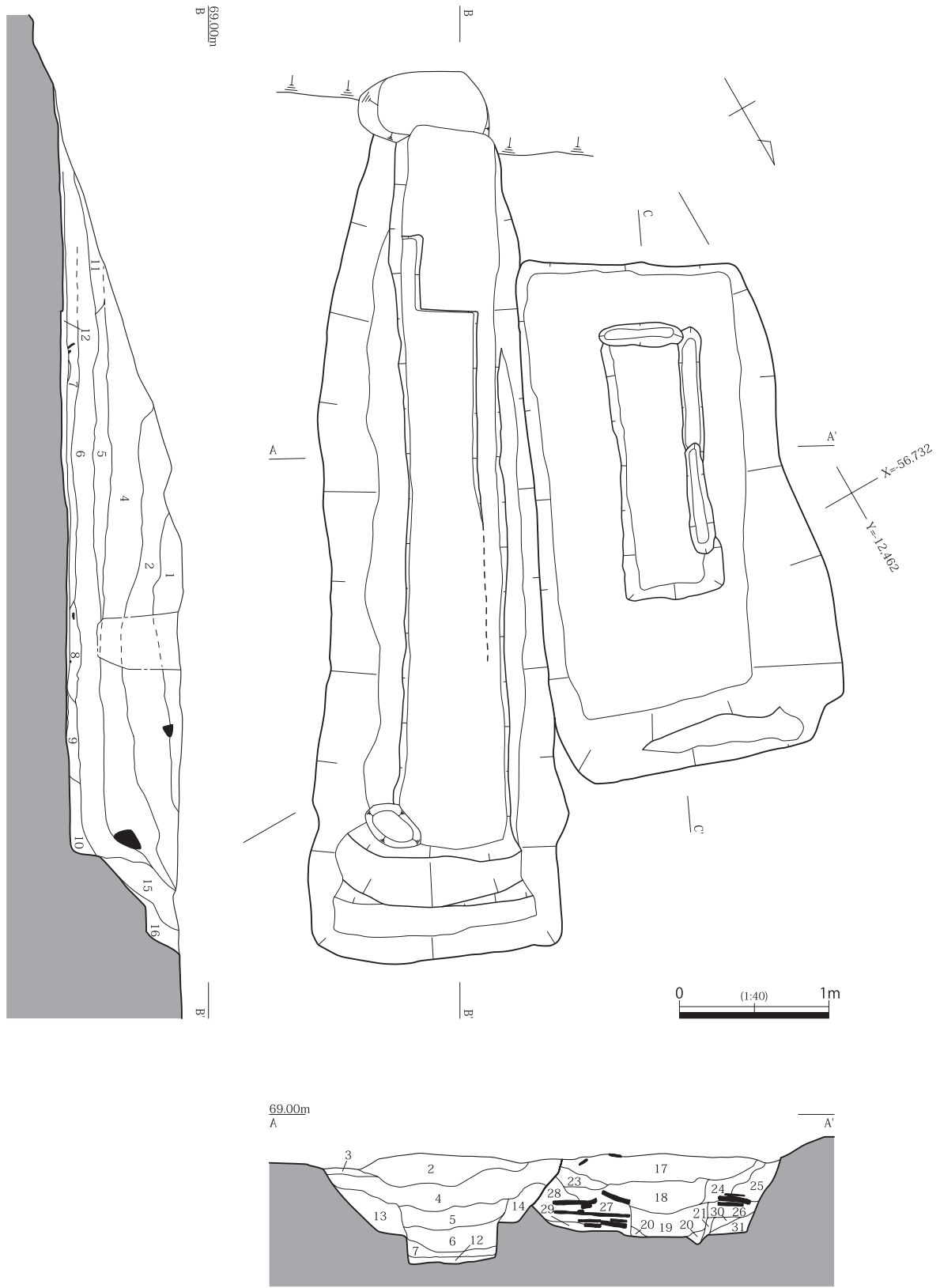
このように，13号墳は14号墳の周溝を最大限に利用して築かれた古墳であり，この周溝が影響して古墳全体の形がアンバランスとなっている。しかし，一方で東や南に広がる平地部から当墳を望むと，この共有する周溝により13号墳の南東面がより強調されて見え，14号墳築造当初から13号墳を構築することを意識していたかのようである。



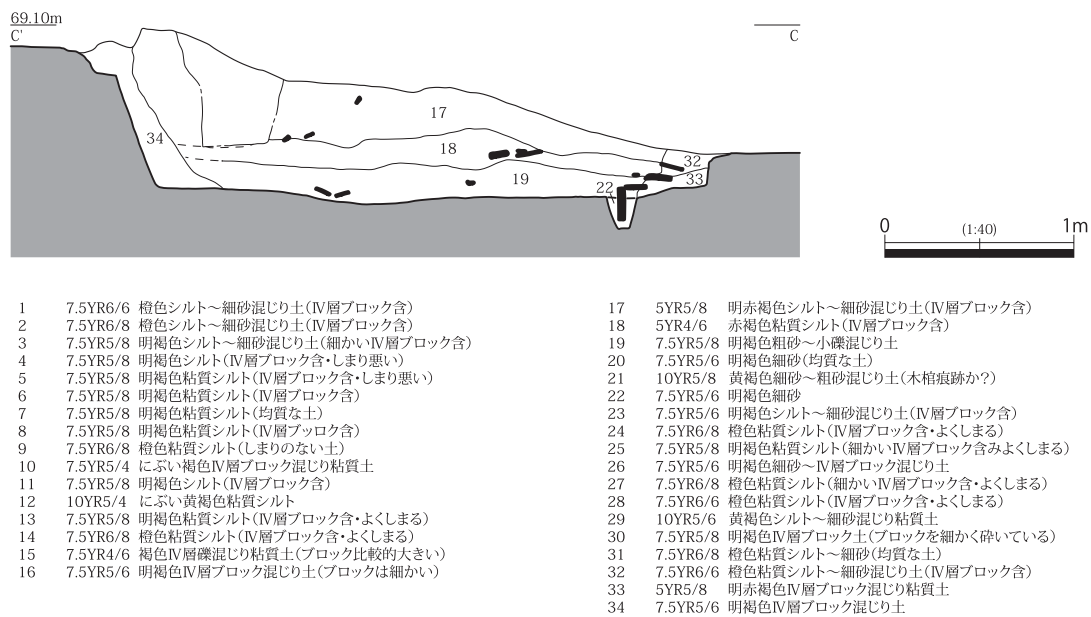
第40図 13号墳 墳丘 平面図 (1/150)



第41図 13号墳 墳丘 断面図 (1/100)



第42図 13号墳 埋葬施設1・2 平, 断面図 (1/40)



第43図 13号墳 埋葬施設1 断面図(1/40)

## 周溝

前述もしたが、当墳の周溝は14号墳後円部のものと共有する。堆積状況、遺物の出土状況を含めた詳細については14号墳の項で述べている。

## 2. 埋葬施設(第40～46・48・49図, 巻頭図版7, 図版26～29)

### 位置と検出状況

平坦部ほぼ中央に重複して2基の埋葬施設が造られる。主軸はS-25～30°-Wで墳丘長軸にはほぼ直交する。いずれも中央より西側は崩落により上部を消失する。

調査では、盛土、旧表土が残存していないため、まず墳丘検出面での検出を行った。その結果、岩脈や赤褐色シルトを基盤とするIV層が平面的に広がる墳頂部に、ブロック状となったIV層の広がりを面的に認識し、さらに遺構のラインが直線的でコーナーを有することから埋葬施設の掘方と判断した。また、検出された掘方ラインからは埋葬施設が縦列して重複していることが窺えた。

ただ、この段階では、平面的にどちらの埋葬施設が先行するかは判断できなかった。これは、両埋葬施設の掘方内の埋土が酷似しているため平面的な判別が難しく、さらにこの埋葬施設上に残る比較的大きな立木の根も大きな障害となったためである。

両者の重複関係は、墳頂部に設定した主断面に沿ったトレンチで確認した。その結果、第41・42図に示したように、西側のものが古く、東側ものが新しいと判明した。

築造順に西側のものを埋葬施設1、東側のものを埋葬施設2と命名した。

掘方規模は埋葬施設1が長辺3.5m前後、幅は重複しない北側で2.0m前後である。埋葬施設2は長辺5.5m前後、短軸は重複しない北側で1.7m前後である。平面的には埋葬施設2は埋葬施設1に比べ細長く、長大な組合式木棺を納めていることが予想された。一方、埋葬施設1からはトレンチ内から板石が出土し、石室や箱式石棺の存在が予想された。また、出土した石材が少片のため後世に攪乱されたことも考え、再度の掘方を平面的に観察したが、攪乱の痕跡は認識できなかった。

なお、埋葬施設1・2の南東側にはさらに空間も広がることから、この部分は再度、精査を行ったが、埋葬施設等の遺構は検出されなかった。

以下、各埋葬施設を詳説する。

埋葬施設1（第42～44図、巻頭図版7、図版26・27）

### 構造

掘方内に部分的に板石による石組みを構築し、その中に木棺を納める形態と推定される。あまり類例のない形態である。頭位を決める積極的な根拠はないが、石組小口が南西にのみ設置されていることや棺床面の高さを重視し、南西を頭位と考えている。

石組の詳細は第44図に示した。石組みは石室状に全体に構築されているわけではない。両側壁の一部と南小口側のみに施されている。南小口、西側壁は側板状に比較的大きな板石を立てその上部に数段板石重ねるように積み上げるが、東側壁は側板状の石はなく板石を積み上げて壁としている。また、東側壁では棺内に向かって落ち込んで傾斜したような状況が観察される板石もある。

このように、全体に石組みが構築されていないことから、どのような棺構造を推定できるのか調査では苦慮した。以下、調査経過を追いながら棺構造を詳述する。

調査では埋葬施設1・2の重複関係はトレンチで断面により確認していたが、平面的に把握されていなかったため、1・2とも掘方内埋土を徐々に掘り下げることから始め、平面的プランの検出に努めた。その結果、平面形でも埋葬施設1の掘方の東辺が埋葬施設2に壊されていることが確認された。また、この段階で板石が部分的に散在して出土する傾向が見られたため、板石を積み上げて天井部とし、天井部が落ち込んで壊れた状況も視野に入れて調査することとした。

掘り下げを進めると、南小口付近や東西長辺側の一部で、棺内側は面として整って板石が重なる状況が観察された。また、棺の中央にも小板石が散在して出土した。この状況から石室が壊されていることも考慮したが、断面観察では攪乱された状況は観察できず（第42・43図）、石組み部分はほぼ当初からの形を維持しているものと判断した。

また、棺内の散在した板石は上部からの落ち込みと推定し、天井部にも部分的に板石が置かれていた可能性を考えた。

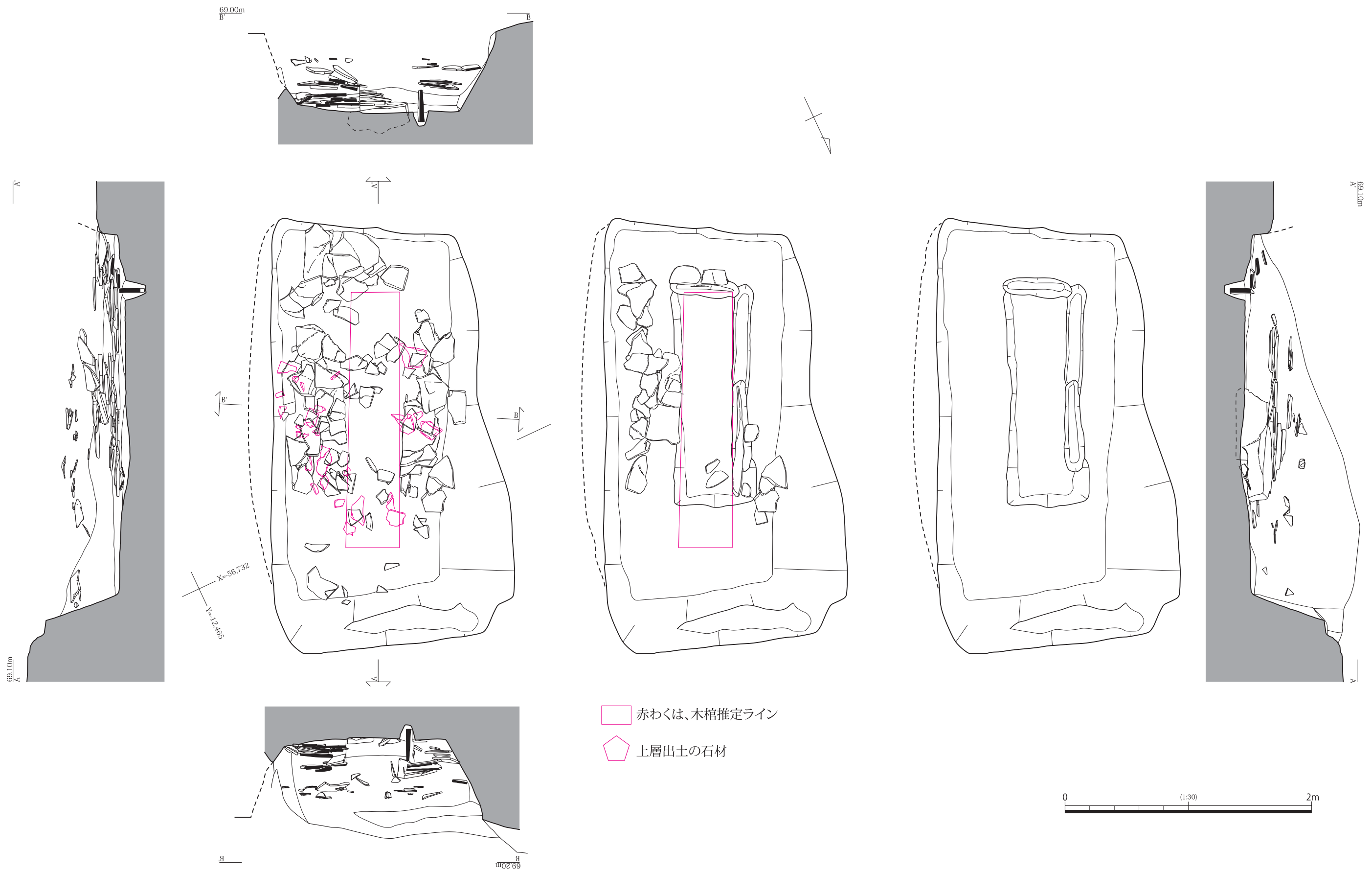
この後、石組みが残存する場所を基準に棺内の掘り下げを行ったが、南小口と西側壁では、まず石材を側板状に立てその上に板石を重ねていることが分かった。一方、東側はそのまま板石を重ねて壁面としている様子が看取された。この段階で枕や副葬品の出土も意識して調査を進めたが、鼓形器台の破片が数点出土した（第48図35・36）のみであった。この遺物の出土状況については後述する。

床面については、基盤層が露出するまで面的には認識できなかった。底面は南側が若干高く、北に向かって低くなり、中央からやや北よりが窪む。

石組みやその内部の構造の検討は、以上に述べたような面的な状況観察のほか、掘方内に設定した断面による観察によっても行った。その状況は第42～44図に示した。石組みの状況はこの断面図からもその構造がよくわかる。

石組み内部の埋土は、基盤層面直上まで粗砂から小礫が混じる土の堆積があり、この土は落ち込み土、床面はその下面と判断した。また、木棺の痕跡とも推定される層（21層）も観察され、埋葬施設1は木棺を据え、裏込めに板石を使用した特異な構造と考えた。しかし、石材を立て側板状とした箇所もある。一般的に木棺材は部材毎でそれぞれ一枚板と考えられるが、組合式木棺の側板の場合、





第44図 13号墳 埋葬施設 1 平、立面図 (1/30)

分割されていた可能性もある。当埋葬施設は、石材と木材を併用した構造かもしれない。ただ、いずれにしても決定的な証拠は見つけられていない。

石材と木棺を併用した構造をもつ可能性のある類似例は、板石を重ね合わせて天井部とした可能性が高い下味野48号墳（古墳時代中期）、風化した地山礫を側壁状に配置し、その中に木棺を納めたと推定される古海40号墳（古墳時代前期）、木棺と部分的に板石利用した可能性がある倭文5号墳（古墳時代前期）などがある。

棺の規模は推定復元で約2.1×0.4m、高さ約0.3～0.4m。幅については側壁の石材を基準に復元した。長軸は南側については小口石材を基準とし、北側については棺内掘下げ段階での平面的検出状況（図版27）や断面観察により復元した。高さについては側石材の状況から復元した。

なお、掘方完掘時には底面で小口石材や西側石材を据えた掘方の他、長方形のわずかな窪みを検出している。この窪みは北側を除きほぼ木棺のラインを反映していると考えている。

### 副葬品

棺内からは鼓形器台の破片数点が出土したのみで、副葬品と考えられる遺物は出土していない。鼓形器台（第48図35・36）は棺内中央付近で出土したが、出土層位は床面より遊離した崩落土内である。出土した破片を復元しても、枕に使用したような状況には復元されない。

出土層位を重視すれば、棺外にあったものが崩落に伴い落ち込んだと考えられるが、この土器がどのような状況で埋土の中に入ったかは不明である。

埋葬施設2（第42・45・46図、巻頭図版7、図版26・28）

### 構造

埋葬施設1に接して築造される。掘方を掘削し、裏込め土を施しながら長大な組合式木棺を納める形態。

掘方平面形は細長い長方形。検出時の規模は前述のとおり。深さは残存状況のよい北側で0.79m、底部の高低差は北側が若干高い。

掘方掘削の状況は長辺と短辺で異なる。長辺は逆台形に直線状に掘削し、段を造り出した後、下部を垂直に掘削するが、短辺は最上部で段を造り、その後傾斜をもって直線的に掘削し、傾斜変化させて下部はほぼ垂直に掘削する。木棺を据えるため、下部ほど丁寧に掘削していることが窺える。

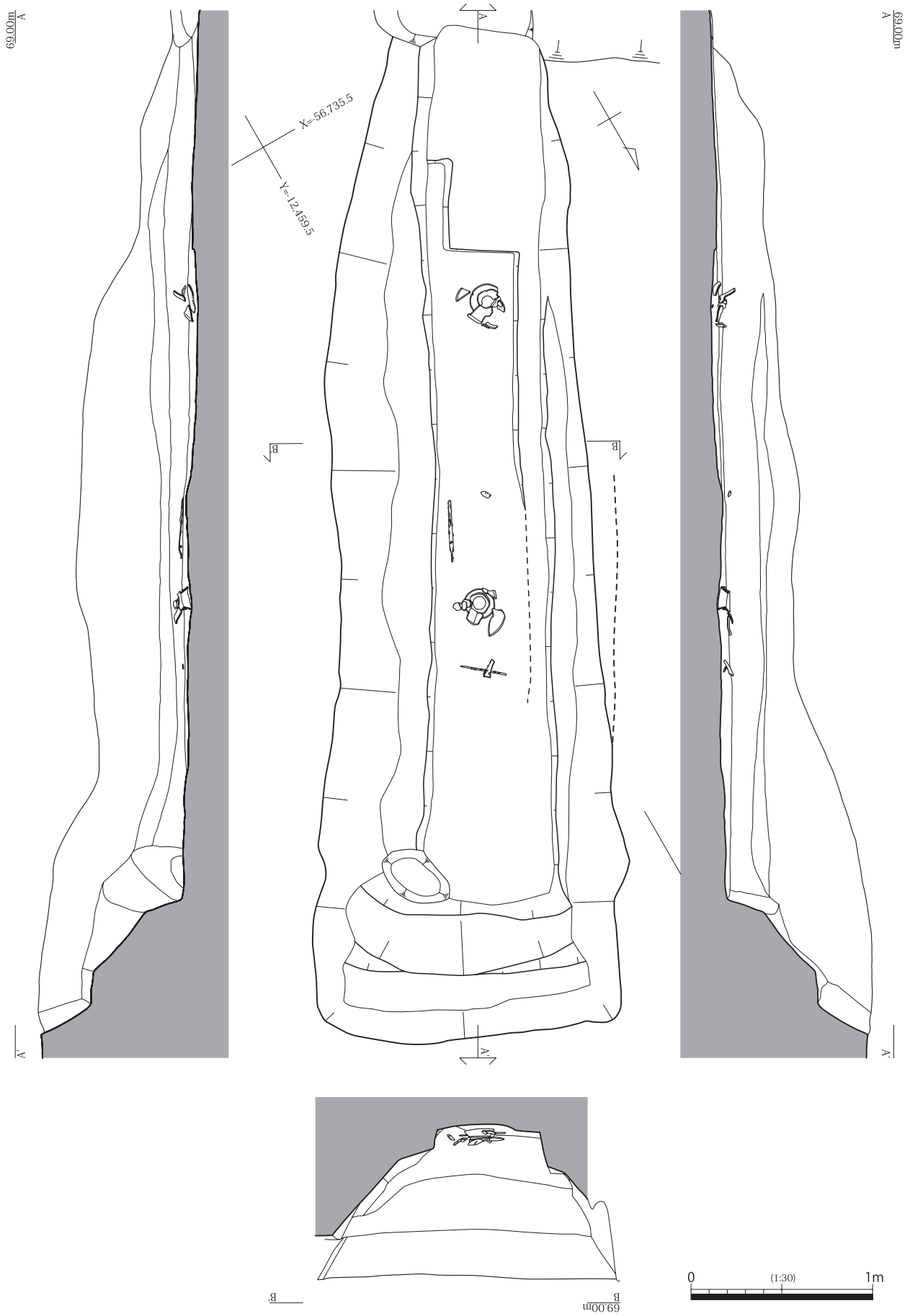
以下、調査経過を追いながら棺構造を詳述する。

調査では南側が崩落により上部が失われていたため、北側を中心に基盤層（IV層）がブロック状入る埋土の掘り下げを行なった。掘り下げを進めると、長辺部で上部から逆台形に掘削された掘方に水平に平坦面を造り出している部分が検出され、二段に掘方を掘削して木棺を納めていることが認識された。

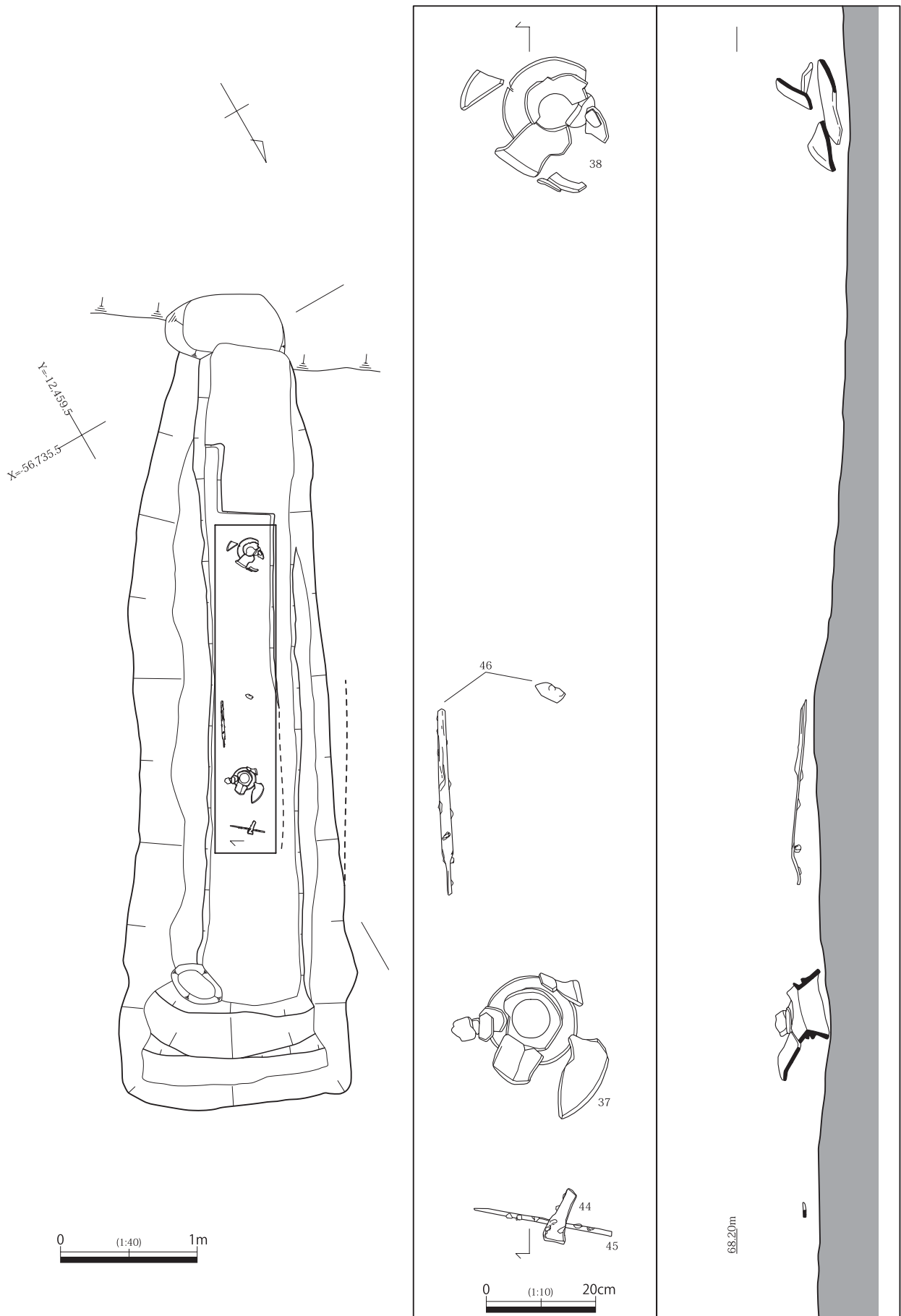
両小口側については、二段に掘削している状況が簡単に検出されなかったため、再度検出を試み、北側で裏込めと棺内埋土と推定されるラインを検出することができた。なお、この段階で断面を再観察した結果、棺の上端部は検出面より上の第42図13・14層上面であったことが確認され、13・14・15層は木棺の裏込め土と考えられた。

棺痕跡の検出により棺内埋土（5・6層）の掘り下げを開始した。

掘削を開始するとすぐに長側板側は垂直に落ち込むことが確認された。棺内に堆積した6層は、上層の5層に比べるとややしまりの強くなるが、IV層のブロックが混じり、棺上からの落ち込み土と推定した。この6層を除去途上で、第46図に示した2箇所土器の上部が検出された。いずれも短軸の



第45図 13号墳 埋葬施設2 平, 立面図 (1/30)



第46図 13号墳 埋葬施設2 遺物出土状況図 (1/10)

ほぼ中央に位置することから枕の可能性が高く、複数埋葬を視野に置いて調査を進めた。

6層を除去すると、IV層ブロックを含まない7層や12層などが確認された。堆積や遺物の出土状況から、この土は棺内の初期の堆積土と判断した。

この12層掘削時に、南小口部では側板と小口板の位置関係を知る上で重要な知見が得られた。

第42・45図、図版28にその状況を示した。側板端から内側で小口板を側板で挟み込むように据えていることが窺える。

また、西長辺側でも、側板を据えたと考えられるわずかな段が部分的に検出された。この段の位置に長側板を据えたと考えられ、垂直に掘った掘方二段目との隙間には裏込めを施したと推定される。ただ、断面ではその状況は認識できなかった（第42図断面図参照）。

北小口部については、南側のような状況が検出されなかったため明確にすることはできない。おそらく南側と同じような形態であろう。

床面は、枕として使用された鼓形器台や副葬品の出土状況などから判断した。副葬品の鉄剣（第49図46、図版29）は木質や布痕跡が残存し、この木質が残存する面を下にして出土している。布は茎や刃部に直接巻かれた状況が観察され、木質の上には布痕跡は観察されない。つまり、この鉄剣に残された木質は棺材の一部とされ、出土状況から考えて棺底材の可能性が高い。

この知見は鉄剣を取り上げ後、遺物の詳細観察時に得られたものであり、調査時には認識できていなかった。調査では基盤層を床面としたが、底板材の存在を考えると基盤層との間にその痕跡を示す層の存在が想定されるが認識できていない。さらに、基盤層のレベルは中央から南側がやや窪んでおり、棺底材を使用しているならやや違和感がある。調査では認識できなかったが、棺底を水平にするため若干の整地土を施している可能性もあろう。

以上のような調査成果から木棺の規模を復元すると、棺内規模で、約長軸3.1m、幅0.5m、高さ0.4mとなる。さらに当埋葬施設の構築手順を復元すると、①「掘方上部をまず逆台形に掘削し面を整え、さらに棺の大きさに合わせて直接棺を納める部分を垂直に掘って形を整える。」②「棺材を据えるため微調整の掘削を行い、まず長軸東側掘方に合わせて東側長側板と底板を据える。次に小口板を長側板で挟むようにして西側長側板を据え、垂直に掘られた掘方二段目との隙間に裏込めを施す。

③「側板上面付近まで全体に裏込めを施し、面を整える。」④「埋葬を行い、天井板で蓋をかぶせ、掘方全体を埋め戻す。」となる。

### 枕と副葬品

鼓形器台を枕として使用している。2箇所出土したので、複数埋葬であることがわかる。出土位置は第48図37が棺中央付近、38が南小口部付近。枕の位置からいずれも頭位は南と考えていた。

しかし、遺物の接合を行ったところ、口縁部を意図的に欠いた部分があることがわかった。この欠いた部分の向いた方向を頭位と考えると、38は南であるが、中央部の37は北となる。調査時の考えを改め、対向して埋葬されていると考え直した。以下38を頭位とする被葬者は南被葬者、37を頭位とする被葬者を北被葬者と呼称する。

副葬品には鉄剣、鉞、鉄鎌がある。

鉞（第49図45）と鉄鎌（44）は北被葬者の頭位の北側で出土した。鉞は刃部を西に向けて頭部に並行するように置かれ、鉄鎌は鉞の上で刃部先端を頭に向けた状況で出土した。鉞は身の中央付近で折り曲がるが、副葬前に意図的に折り曲げられた可能性が高い。

鉄剣（第49図46）は、北被葬者の上半左側で茎部を頭に向けて出土した。前述のように、出土した鉄剣の下面には木質が残存し、木棺の底板材が付着したものと考えた。鉄剣の刃先は折損するが、この折損した先端部が剣近くの棺中央付近で出土した。接合すると木質まで接合関係にあり、当初は完形品で鉄身に布を巻いた状態で副葬したものと考えられる。この鉄剣は南被葬者の足元に置かれたとも考えられるが、剣の柄となる部分を頭方向に向けると推定し、ここでは北被葬者に伴うものとした。副葬品の平面的な位置からはいずれも北被葬者に伴うようにみえるが、同時埋葬であり、両者の副葬品として捉えることも可能である。

また、この埋葬施設の被葬者は同時に埋葬されているが、埋葬が同時としても亡くなった時期が同時とは限らない。人骨等の出土がなく証明することはできないが、両者がより強い関係にあり、先に亡くなった人物は骨化した状況で埋葬された可能性もある。

## 第5項 出土遺物と築造時期

### 1. 14号墳の遺物（第47～49図、巻頭図版6、図版15・21・23）

#### 埋葬施設3（第47図、巻頭図版6）

##### 棺内遺物

棺内の頭部付近から出土した副葬品として、小型仿製内行花文鏡、勾玉、管玉がある。

**小型仿製内行花文鏡**（第47図、写真6・7）完形品であるが劣化が著しく、図化できなかった（註1）。内区の花文は6枚。外区には櫛歯文が、内区と外区の間には珠文が巡る。直径は8.0cm。鍔分がほとんどで鑄上り、文様の判別には不鮮明部分がある。検出時の状況については前述したとおりである。鈕は円形で断面は不整な蒲鉾形を呈する。

**勾玉**（第47図21、巻頭図版6）水晶製。全長2.75cm、幅1.2cm、厚さ0.85cm。尖孔は両側から行われている。

**管玉**（第47図22～31、巻頭図版6）11点出土しているが、1点は劣化が著しく図化できなかった。いずれも緑色凝灰岩製。大きさにより3種類に分けられる。

22～24は大形品。22は下端を欠損している。全長2.35cm、幅、厚さ0.75cm。埋土を篩にかけてが、欠損部分は確認できなかった。両側から穿孔されており、製作途中で欠損したものを製品として用いたものと推定される。穿孔径は0.25cm。色調は濃緑色を呈す。23は全長2.45cm、幅、厚さ0.65cm。両側から穿孔され、穿孔径は0.2cm。色調は22と類似する。24は全長2.25cm、幅、厚さ0.6cm。穿孔は両側から施され、穿孔径は0.2cm。色調は淡緑色で軟質の材が用いられている。

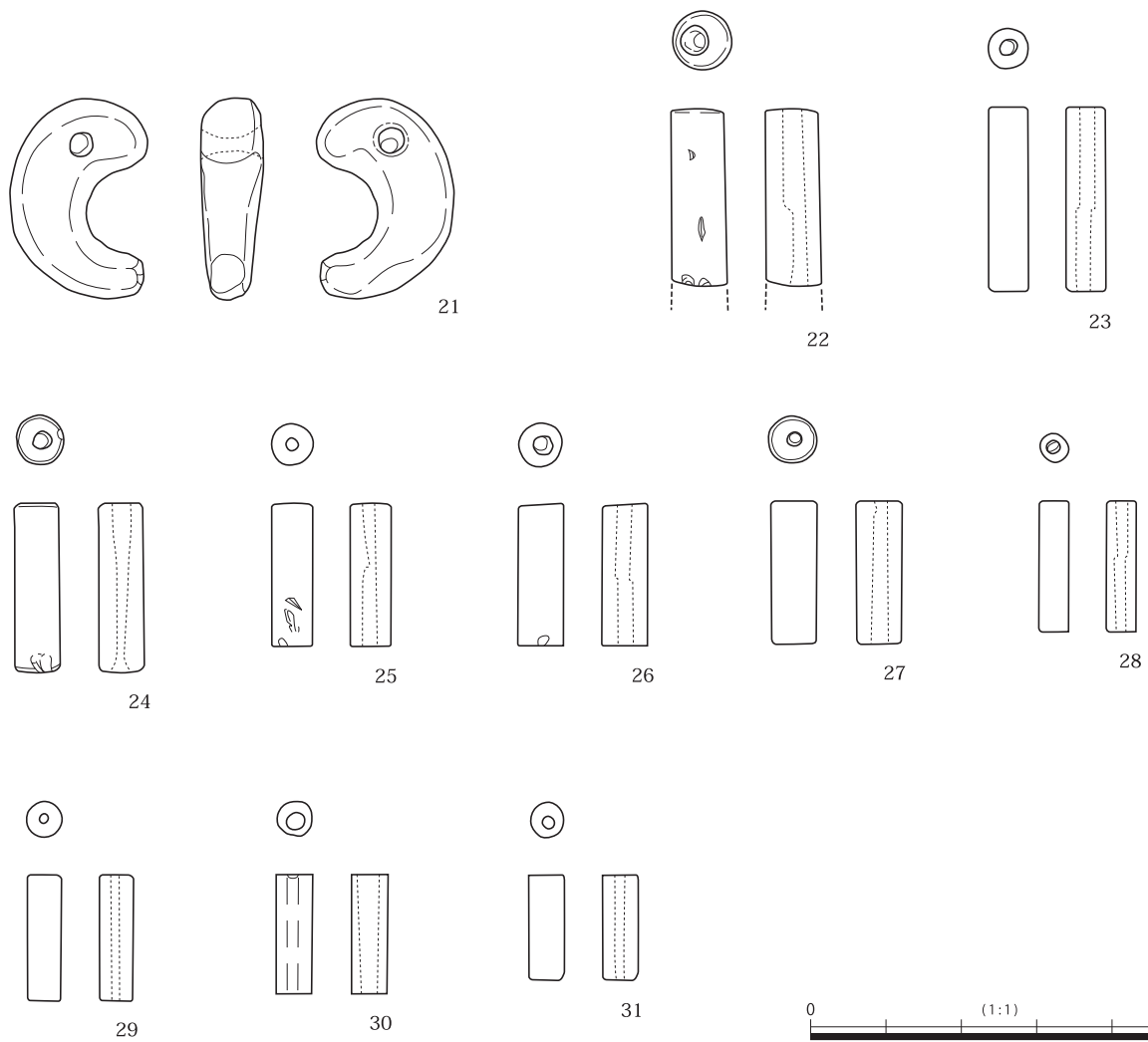
25～27は中型品。全長1.9cm、幅、厚さ0.55cm。両側から穿孔されており、穿孔径は0.15cm。色調は淡緑色。26は全長1.9cm、幅、厚さとも0.6cm。両側から穿孔されており、穿孔径は0.2cm。色調は淡緑色でやや白色を帯び、軟質の材である。27は全長1.9cm、幅、厚さとも0.6cm。両側から穿孔され、穿孔径は0.18cm。石材は26に類似する。

28～31は小型品。石材は28～31とも26と類似する。28は全長1.75cm、幅、厚さとも0.4cm。両側から穿孔され、穿孔径は0.1cm。29は全長1.7cm、幅、厚さとも0.45cm。穿孔の痕跡から片側からのみ穿孔された可能性がある。穿孔径は0.1cm。30は全長1.6cm、幅、厚さとも0.65cm。片側からのみ穿孔された可能性がある。表面には研磨作業の痕跡が残り、断面径は多角形となる。31は全長1.9cm、幅、厚さとも0.5cm。片側から穿孔された可能性があり、穿孔径は0.15cm。

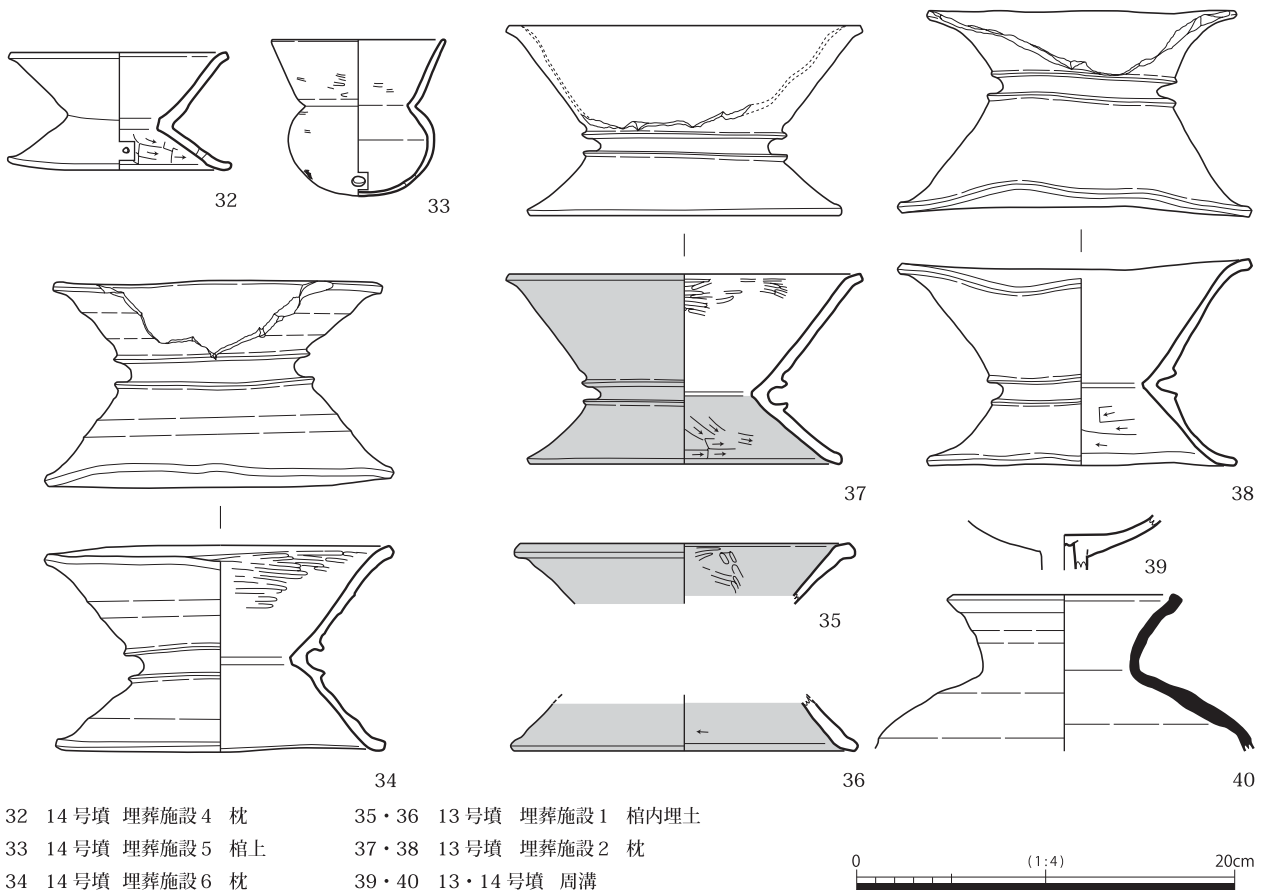


写真7 14号墳 埋葬施設3  
出土小型仿製内行花文鏡（部分）

写真6 14号墳 埋葬施設3  
出土小型仿製内行花文鏡  
直径8.0cm



第47図 14号墳 埋葬施設3 出土遺物（鏡，玉類1/1）



32 14号墳 埋葬施設4 枕  
 33 14号墳 埋葬施設5 棺上  
 34 14号墳 埋葬施設6 枕  
 35・36 13号墳 埋葬施設1 棺内埋土  
 37・38 13号墳 埋葬施設2 枕  
 39・40 13・14号墳 周溝

第48図 13号墳埋葬施設1・2，14号墳埋葬施設4～6，14号墳周溝 出土遺物（土器1/4）

埋葬施設4（第48・49図，図版21）

棺内遺物

枕として使用された可能性の高い鼓形器台，副葬品として鉈などがある。

土器（第48図32，図版21）小型の鼓形器台である。受部と脚台部の間に接合部が形成されず，稜を持たない小型品である。受部外面は丁寧なナデ調整を施す。明瞭な痕跡は確認できないが，内面にはミガキ調整の痕跡が僅かに認められ，ミガキ調整の後，ナデ調整を施したものと推定される。脚台部内面はケズリ調整の痕跡が残る。また，脚台部中央には，焼成前になされた穿孔が1箇所ある。

鉈（第49図41，図版21）刃部先端を欠損している。棺内埋土を篩にかけたが，欠損部分は確認できなかった。残存長17.8cm，幅0.7cm，残存刃部長0.9cm，茎部長16.8cm。重量は17.18g。刃部と茎部がほぼ同幅で連続する。刃部の裏すきは明瞭でない。表面中央に木質の残存が一部認められ，木柄の可能性はある。

不明鉄製品（第49図42，図版21）鑿か鉈と考えられるが，先端が欠損するため不明。鉈とするには刃部付近の厚みに疑問が残る，鑿にするには身部の断面が扁平で疑問が残る。長さ12.4cm，幅0.7cm，厚さ0.2cm。重量は11.48g。先端の欠損は古い。下端は先細りする。

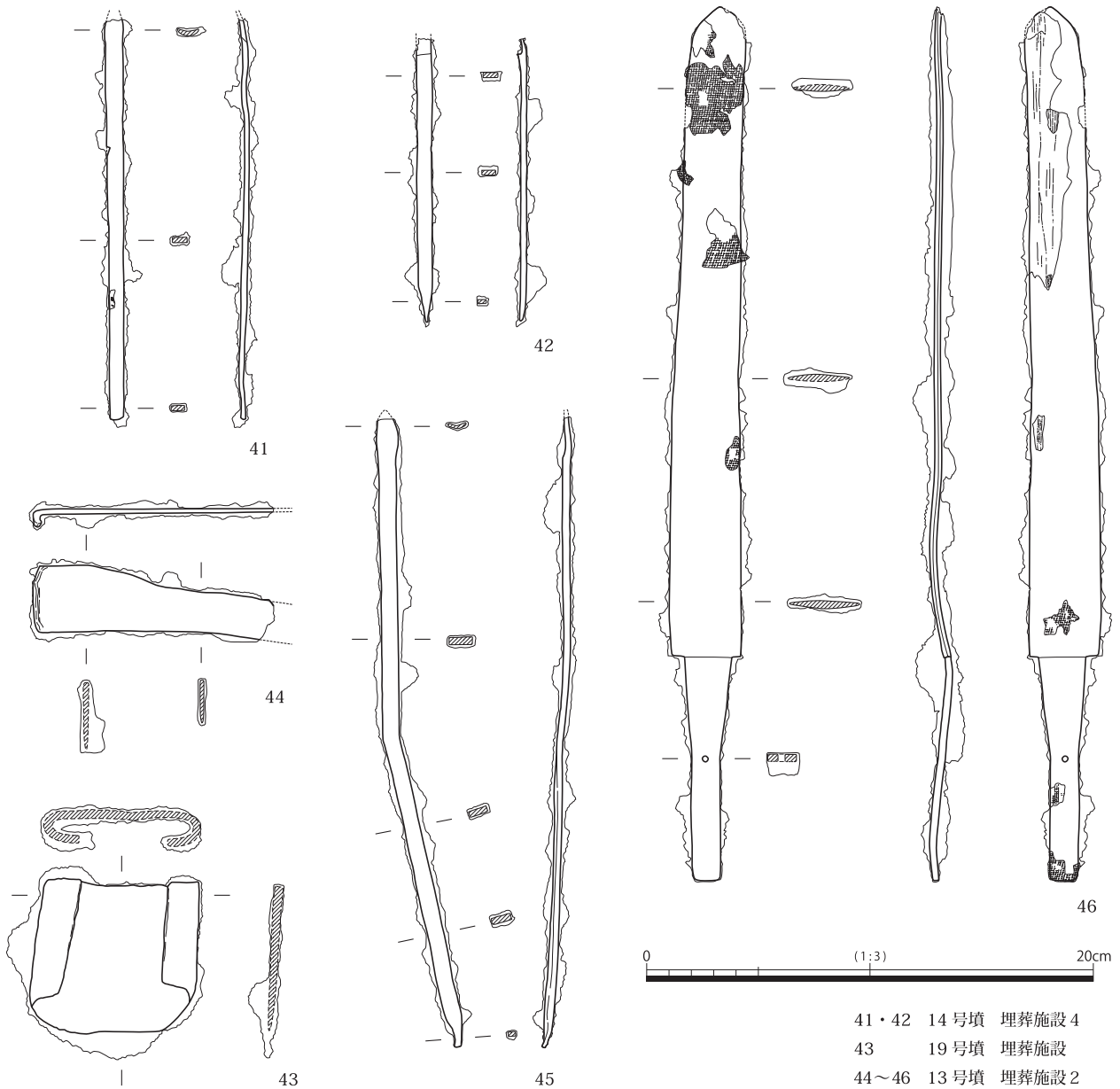
埋葬施設5（第48図，図版22）

棺上の遺物

棺上に供献されたと推定される小型丸底壺がある。

土器（第48図33，図版22）器面の残存状況は悪い。小型丸底壺の器形は開きの小さい口縁部から，





第49図 13号墳埋葬施設2, 14号墳埋葬施設4, 19号墳埋葬施設 出土遺物(鉄製品1/3)

頸部は稜をもって屈曲する。体部は球形よりやや胴部が張り、最大径は体部中央付近にある等の特徴がある。調整は口縁部外面に横方向のミガキが観察される。また、焼成後に底部付近が穿孔され、供献用の土器であることがわかる。

埋葬施設6 (第48図, 図版23)

棺内遺物

枕として使用された鼓形器台がある。

土器(第48図34, 図版23) 器面の残存状況は悪い。鼓形器台の器形は、受部と脚台部の高さの比率をみると、受部がやや高い。受部, 脚台部とも大きく外反し、口縁端部はやや面をもっておさめる。受部, 脚台部外面はナデ調整によって仕上げられるが、受部内面は横方向のミガキが観察される。脚台部内面はケズリ調整と推定されるが、器面は風化、剥落が著しく調整痕は不明瞭である。受部外面に一部赤色塗彩の痕跡をとどめる。脚台部の1/4程度を打ち欠いて枕とし、上下を反転して使用され

ている。

## 2. 19号墳の遺物 (第49図, 図版25)

### 棺内遺物

枕として使用された鼓形器台, 副葬品として鉄製鍬先がある。

**土器** 鼓形器台である。劣化が著しく遺物として取り上げることができなかった。

**鉄製鍬先** (第49図43, 図版25) 完形品で長さ7.45cm, 刃部長は5.8cm, 幅は6.5cm。重量は118.0g。板横長の方形素材の左右端を折り返し, 下端を刃部とする。刃部は基部から一定の厚さで続き, 次第に薄くなって刃先が鋭くなるが, 明瞭な切刃ではない。刃部中央はやや直線的となる。刃部の摩耗によるものと推定される。表面に木質等は付着しておらず, 抜き身で副葬された可能性がある。

## 3. 13号墳の遺物 (第48・49図, 図版27・29)

### 埋葬施設1 (第48図, 図版27)

#### 棺内遺物

**土器** (第48図35・36, 図版27) 棺内埋土からの出土。いずれも鼓形器台の破片で, 同一個体と考えられる。受部, 脚台部とも外反し, 受部は口縁端部で外側に広がる。端部は稜をともない, 面をもつ。受部外面は滑らかで, 丁寧なナデ調整が施されている。受部内面にはミガキ調整の痕跡が観察される。脚台部の外面はナデ調整, 内面はケズリ調整が認められる。受部, 脚台部ともに内外面に赤色塗彩が認められる。

### 埋葬施設2 (第48・49図, 図版29)

#### 棺内遺物

枕として使用された鼓形器台, 副葬品の鉄剣, 鉞, 鉄鎌がある。

**土器** (第48図37・38, 図版29) いずれも鼓形器台。14号墳埋葬施設6に比べると, いずれも受部が発達し脚台部が低くなる。37は受部の1/3を接合部付近まで打ち欠いて枕としたもの。受部, 脚台部は直線的に外側へ広がり, 受部口縁端はさらに外側へ広がる。接合部は稜をつまみだし, 内面には狭い平坦面をもつ。調整は受部, 脚台部外面に丁寧なナデ調整が施され, 受部内面は横方向のミガキ調整の痕跡が観察される。接合部外面は横方向のミガキ調整, 脚台部内面はケズリ調整が施され, 一部ナデの痕跡がみられた。受部外面, 脚台部の内外面に赤色塗彩の痕跡が認められる。38は脚台部の約1/4を接合部付近まで打ち欠いて枕としたもの。受部, 脚台部は大きく外反し, 端部でさらに外反する。外面はナデ調整と推定されるが, 器面は風化のため明瞭でない。受部内面も同様である。脚台部内面はケズリ調整の痕跡が観察される。37と異なり, 器面に赤色塗彩の痕跡は認められなかった。

**鉄剣** (第49図46, 図版29) 剣身の残りは良く, 剣身長29.0cm, 茎長9.5cm。重量は176g。身に明瞭な鑄はみとめられない。直角関で, 茎は茎尻のほうが狭い。目釘穴は茎中央に1つ認められる。布の痕跡は表面で剣身中央から切先, 裏面は茎尻から関付近にかけて部分的に認められる。

**鉞** (第49図45, 図版29) 先端を欠損しているが, 残りはよく全長28.7cm, 刃部長は推定で2.1cm, 茎部長は26.4cm。重量は44.36g。刃部の鑄は明瞭でないが, 裏すきが確認できる。茎尻はやや鉤状となる。茎部中央から折れ曲がり, 下半部はややねじれている。

**鉄鎌** (第49図44, 図版29) 刃部先端を欠損している。柄がほぼ直角につく直刃鎌である。残存長10.7cm, 幅3.0cm, 厚さ0.2cm。背側は刃部先端にむけて幅を減じていく。基部には折り返しが付き, 先端が右にくるように置いたとき, 上方に折り返される形となる。木質は残存していない。

## 周溝の遺物（第48図，図版15）

土器（第48図，図版15）39は高杯の杯部。外面は風化しているため調整は不明瞭。内面はナデか粗いミガキによって調整される。40は壺の口縁部から肩部。口縁部がラッパ状に開く形態。口縁部付近，肩部内面の最終調整は回転ナデによる。肩部外面はナデ調整の痕跡が残る。

### 4. 築造時期

13・14・19号墳の特徴を再度まとめ，築造時期について述べる。

#### 墳丘・埋葬施設・出土遺物の特徴

13・14・19号墳は古墳群の中で標高が高く，平野部からの眺望の良好な尾根上に選地される。14号墳は痩せ尾根地形の中で尾根幅を最も広く利用できる場所に後円部を選地しており，3基の中では有位な位置にある。

墳丘はいずれも地形を削り出し，部分的に盛土し墳丘を整形する点は共通する。14号墳は周溝掘削，旧地形の整形に伴う発生土を，盛土とする。19号墳は14号墳の眺望を妨げないよう部分的な盛土がなされたことが推定され，13号墳の盛土は明確でない。

埋葬施設は13・19号墳が墳丘中央に築かれ，13号墳は隣接して副次埋葬がある。14号墳は後円部墳頂壇状部に2基，前方部に2基，くびれ部，前方部前方平坦面に各1基の埋葬施設が築かれる。棺構造は割竹形木棺の可能性のある14号墳埋葬施設3，板石と土を組み合わせた裏込め構造の13号墳埋葬施設1を除けば，組合式木棺を備えたことが想定され，12・22号墳，17・18号墳と比べて長大な掘方を備えることが特徴である。土器枕には鼓形器台が転用され，当地域の古墳時代前期の特徴を反映している。

副葬品には鏡，玉類，武器，農工具有ある。このうち鏡，玉類は時期を考える上で手掛かりとなる。出土した仿製内行花文鏡は古墳時代前期後半に位置づけられる。また鉄製品は13号墳埋葬施設2で武器として鉄剣1振が出土しているほかは農工具有を主体とする。このことから古墳時代前期の副葬品組成を反映しているものと推定される。また，棺上に供献された小型丸底壺は布留2式に位置づけられ，その他の出土土器や副葬品の年代と矛盾しない。

#### 築造時期

調査では，14号墳が19・13号墳に先行して築かれたことを推定した。出土遺物からは個々の時期差を認識することが困難である。特に13・14号墳から出土した鼓形器台は時期的な差はほとんどなく，形式的な差として14号墳埋葬施設6から出土した鼓形器台が古くなると想定できる。出土した土器，鏡から前期後半を定点として押さえておき，前期中頃まで遡る可能性がある。

19・13号墳は，14号墳と同時期かあるいは若干後出するもので，前期後半の範疇におさまるものと考えている。

#### 註

- 1) 内行花文鏡は脆弱であったため，復元，保存処理を委託した。その処理に時間を要したため，実測および詳細な観察が行えていない。これに関する報告は今後行っていきたい。

## 第4節 17・18号墳の調査

### 第1項 概要（第10・11・51図，巻頭図版7・8，図版30～37）

#### 古墳が築造された尾根の特徴

17・18号墳は南支群の東端に位置する。

古墳が築造された尾根は，14号墳前方部から南東方向に延びるが急に細くくびれ，このくびれからはやや北東に向きを変え延びる。古墳が築かれる以前の旧地形で尾根頂部の高さをみると，14号墳の前方部平坦面（60.8m）からくびれに向かって徐々に低くなる（57.2m）が，向きを変えてからは高くなる（17号墳で57.6m，18号墳で57.4m）とともに，頂部の幅が広がる。この広がった部分に古墳が築かれる。

尾根斜面部は，谷に面する北斜面は頂部から急傾斜となるのに対し，本高弓ノ木遺跡が展開する平野部に向けて傾斜する南斜面は，頂部からやや緩やかに傾斜した部分がある。

本高弓ノ木遺跡付近との比高差約50mで，平野部からの眺望は良好である。特に南平野部からの眺望は良好で，調査前でも古墳と認識できた。

この尾根は18号墳からさらに北東に延びるが，急激に低くなる。この部分では，これまでの踏査によって2基の古墳が確認されている。

#### 調査前の古墳の状況（第9図）

17・18号墳の墳丘残存状況は極めて良好である。特に両墳とも周溝が良好な状況で観察され，尾根に直交する溝を掘削し，その掘削土を盛土とし墳丘を整形していることがわかった。墳丘についても17号墳の南西隅が崩落しその一部が失われているが，全体的にはそれほど流失していないと予想された。

墳形については，調査の結果両墳とも方墳であることが判明したが，調査前は，17号墳はややいびつであるが方墳，18号墳は西辺がやや直線的であるが円墳として考えていた。

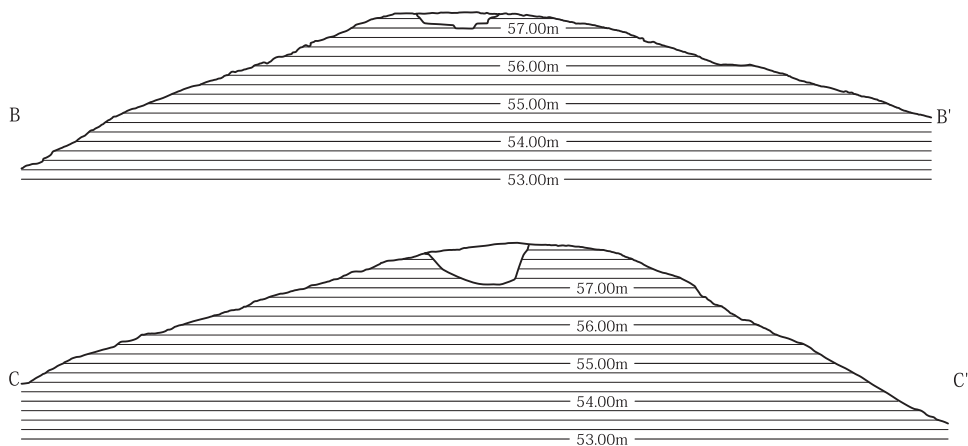
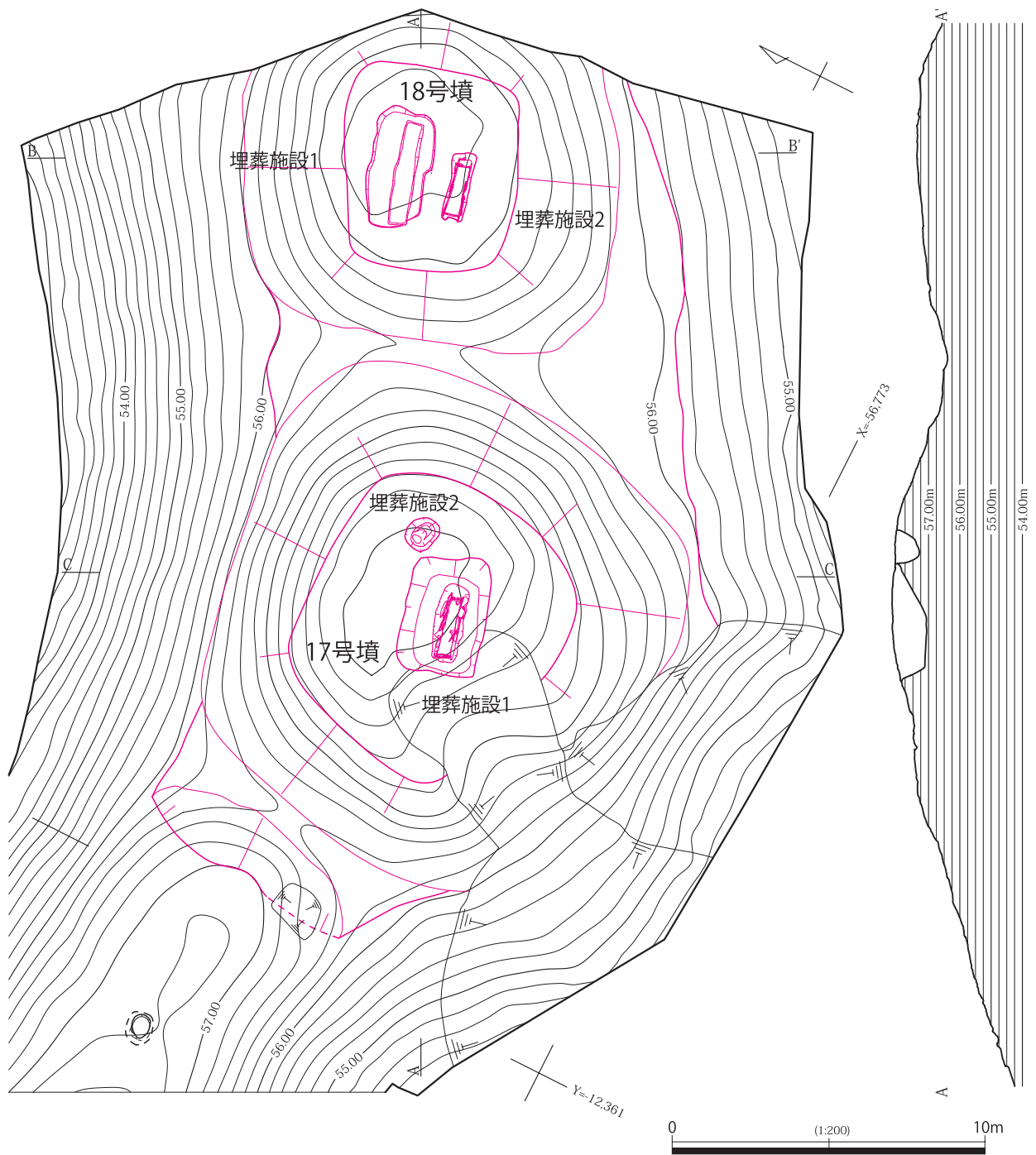
また，試掘調査結果によると，14号墳前方部から下降したくびれ付近で落ち込みが検出されており，この落ち込みを周溝とし，17号墳の西側のわずかな平坦部を古墳として捉え，20号墳と命名されていた。現地観察時もわずかであるが墳丘状の起伏として観察され，17号墳と周溝を共有し築かれた古墳として認識していた。しかし，調査の結果，試掘調査の落ち込みは深い土坑（40土坑）で，その上層部分を周溝として捉えていたことが判明した。また，埋葬施設もなく，17号墳の周溝により，視覚的に強調されて墳丘状に見えていたこともわかった。

#### 検出された古墳の関係性

各古墳の詳細については後述するが，ここではその関係性について述べておく。

2基の古墳はいずれも方墳で，周溝を共有して築かれている。第10図の全体図からその立地状況を概観しても，この2基が当古墳群の中でひとつのグループとして捉えることができ，その関係性の強さは容易に推定される。

規模は17号墳がやや大きい。2基の立地の状況を観察すると，17号墳は尾根が若干屈曲して頂部付近が広がる場所に選地されていることがわかる。少しでも大きな古墳を築造しようとする意識が読み取れ，大きさの上では17号墳の優位性が認められる。旧地形の高さは若干18号側が高いが大きな差ではない。また，盛土施工後の墳丘の高さは18号墳の頂部が削られているため不明であるが，ほぼ同じような墳高であったと推定している。



第50図 17・18号墳 墳丘 平, 断面図 (1/200)

築造の順については、平面的に読み取ることは難しく、周溝埋土の状況からも知ることはできなかつた。選地や規模的な視点のみからではあるが、ここでは17号墳が若干先行する可能性を指摘しておく。ただ、周溝内の堆積状況、埋葬施設等から出土した遺物からは極めて近い時期に築造、埋葬されたことが窺える。また、両墳とも複次埋葬があることから、埋葬を行うという行為は一時期併行していた可能性もある。

## 第2項 17号墳（第50～54・59・60図，巻頭図版7・8，図版30～34）

### 1. 墳丘と周溝（第50・51図，図版30・31）

#### 墳丘

17号墳は方墳である。東－西方向が14.9m，南－北方向が東辺で14.3m。墳頂部の標高は58.0mで、西周溝底面との高低差は約1.6m。

前述のように、17号墳は、尾根が屈曲し頂部が広くなるところを選地して、少しでも大きな墳丘を造ろうとする意図がみられる。墳丘は尾根頂部を直交方向に切断して周溝を掘削して、その発生土を盛土として利用することで形を整えている。

周溝を掘削する際、尾根が屈曲しているために、屈曲部を挟んで掘削された東西の周溝は平行しないことになる。そのため、東側周溝の南側を大きく西に開いて東辺を整え、北側も少し西に開いて北東隅の形状を整えている。尾根頂部を最大限に利用したことで、台形に近い方墳となっている。

南裾は崩落しているが、南東隅で墳裾が確認できる。北側では傾斜が急なため明瞭な傾斜変換を確認できなかったが、墳丘断面を観察すると、旧表土層を削った部分が確認できたため、ここを墳裾としている。

旧表土は、墳頂部から北側斜面の盛土の下で確認することができ、土地改変をせずに盛土を行っている。南側では旧表土は確認できず、墳形を整えるために、旧表土と基盤層をわずかに削ったことがわかる。

盛土は北側斜面から盛り始めており、墳裾から順にほぼ水平に積み重ねている。墳頂部の形状をより整った方形にしようとする意図があったのだろう。墳丘頂部で0.5mの盛土厚があった。

#### 周溝

西側周溝は、尾根筋に対してほぼ直交して掘削されている。断面形は逆台形で、周溝中央部で幅4.5m，外側肩からの深さは約0.5m。底面はほぼ平坦である。調査前の段階で明瞭に確認でき、土壌化していないにぶい黄褐色砂質シルトが0.2mほど堆積していた。埋土から遺物は出土しなかった。

東側の周溝については18号墳で詳しく述べるが、少し触れておく。前述のように、東側の周溝は単に尾根を切断するだけでなく、17号墳の墳形を整えるために周溝西肩を開くように地形改変を行っている。そのため、墳丘の南東には、18号墳との間に広めの平坦面が形成されている。また、北東隅のあたりにも、墳形を整えた際に小さい平坦面ができている。

### 2. 埋葬施設（第52～54図，図版31～34）

#### 位置と検出状況

埋葬施設は墳頂部平坦面に2基築かれる。中央部にある箱式石棺を埋葬施設1，北東にある土器棺を埋葬施設2とした。

埋葬施設1の掘方は隅円方形で、検出段階での平面規模は中央付近で長さ3.74m、幅3.53mあり、崩落により南西側の上部は消失している。主軸はW-18°-Sで、尾根筋に対して西が南に振る。埋葬施設2の掘方は楕円形で、長径0.55m、短径0.46m。長径方向はE-19°-Sで、尾根筋とほぼ並行する。

17号墳では、埋葬施設の掘方上面に灰黄褐色シルト（第51図 A-A'の13層、B-B'の8層）が堆積していた。II層に比べて均質でしまりが強く、周辺からの土の供給が想定されるような場所ではないので、埋葬後に上部を覆うように盛土したものと判断した。

この層を除去後、墳頂部の精査を繰り返し行ったが、盛土と掘方埋土が非常に似通ったものであったため、明瞭な掘方を検出することが難しい状態であった。

精査中、墳頂平坦面の北東部分で地面が陥没し、土器棺が存在することが判明した。周辺を改めて精査して埋葬施設2の掘方輪郭を確認した。

この段階で、これとは別に墳頂中央部ではおぼろげに掘方輪郭と思われるものが見え始めていた。そこで墳丘確認のトレンチや部分的なトレンチを利用しつつ、掘方を平面とともに断面で観察して埋葬施設1を確認した。

なお、墳丘確認トレンチを検討した結果、埋葬施設2が埋葬施設1の後に築造されたことが判明した。以下、各埋葬施設について詳説する。

埋葬施設1（第52・53図、巻頭図版7、図版31～33）

#### 構造

掘方の中央やや南寄りに箱式石棺を据える。掘方の深さは最も残存する北東部で検出面から1.08mで、底面は旧表土を掘り抜いてIV層に達する。

石棺は掘方底面に掘られた深さ0.12mの浅い溝に棺材を立てている。棺は内法で長さ1.74m、幅は西側0.42m、東側0.29m、高さ0.27m。石材は流紋岩質凝灰岩を使用する。掘方の埋め戻しには掘方を掘削した土をそのまま利用しており、総じてしまりが弱い。

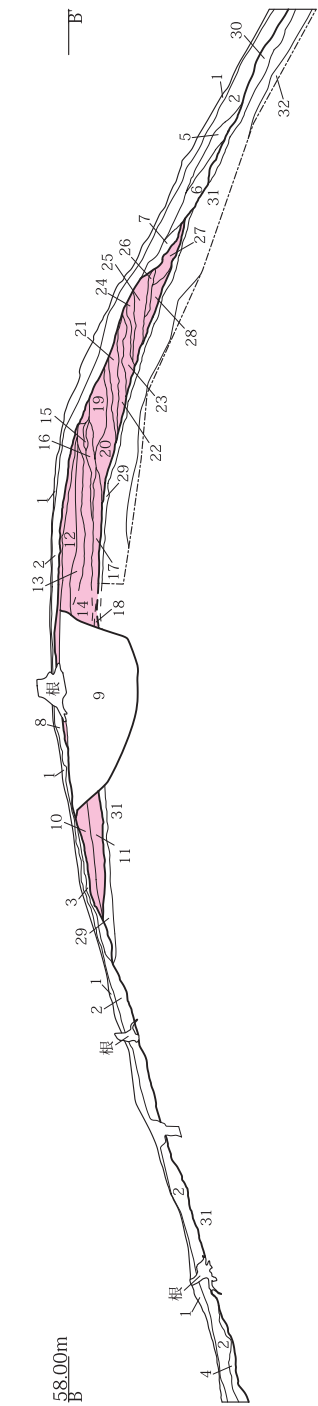
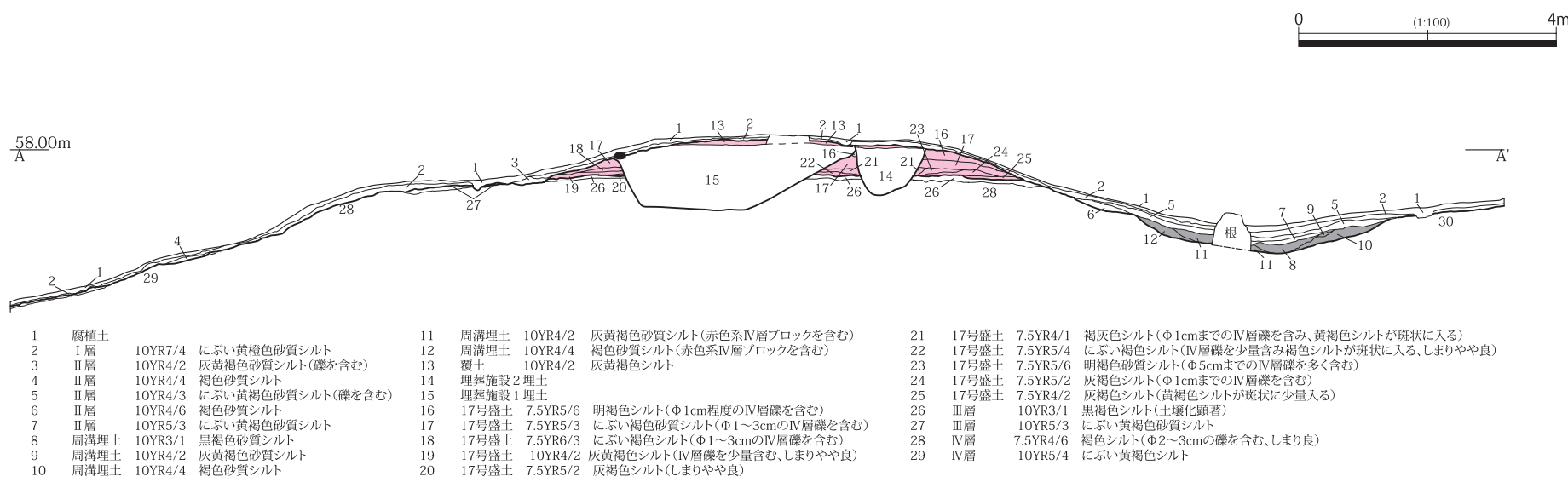
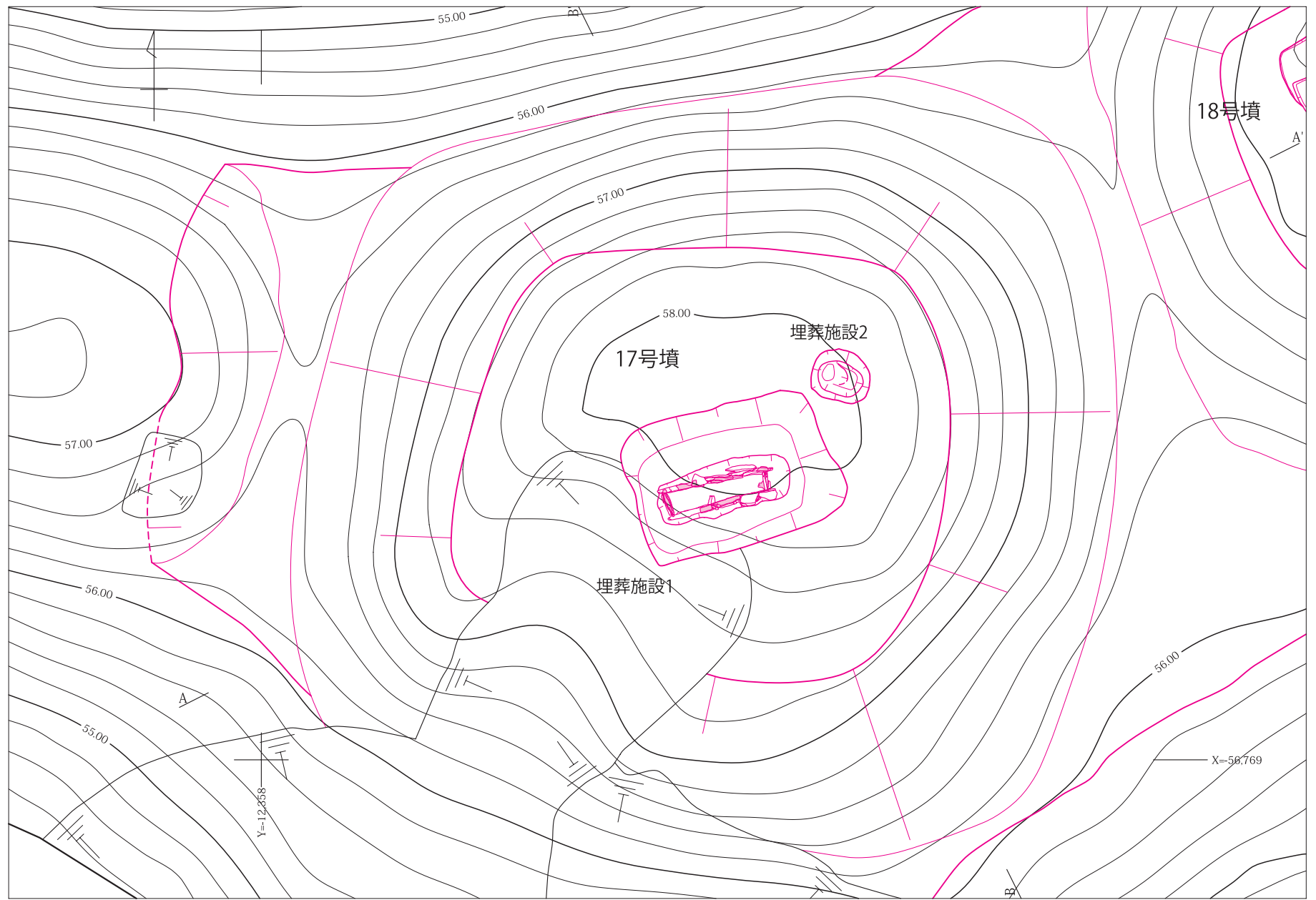
掘方を掘り下げていくと、人頭大の円礫がところどころで見つかった。当初これも埋葬施設に関連するものと考えたが、規則性がなく、IV層にも同じような礫を含んでいることから、埋土に混入しているものと判断した。

掘方を約0.3m掘り下げたところで蓋石が確認された。蓋石は厚さ0.10mほどの板石を17枚用いており、3段に積まれる。このうち下段と中段の石材は、棺の短辺方向が長くなるように意識して置かれている。これに対し、上段の石材は全体に小ぶりであり、すでに積まれた石材の隙間になるところを塞ぐ意識で置かれているようにみえる。また、蓋材同士の隙間になる所には、灰白色粘土（第52図8層）で目張りが施されていた。

蓋石を外すと、側石の上面で高さを揃えるために低い所に板石を小口積みにして調整していることが確認できた。また、目張りのための灰白色粘土が各所で施されていた（第53図赤アミ部分）。棺内部や蓋石内面に赤色塗彩などは確認できなかった。

棺裏込めと蓋石の前後関係については、最も下にある蓋石の中で東端と西端の石は石棺にほとんどかかっていないうえ、蓋石を載せる前に積まれた側石上面の板石が半分以上外側にはみ出した状態になっている。このことから、棺裏込めが棺上面まで行われた後に蓋石をのせた可能性が考えられる。

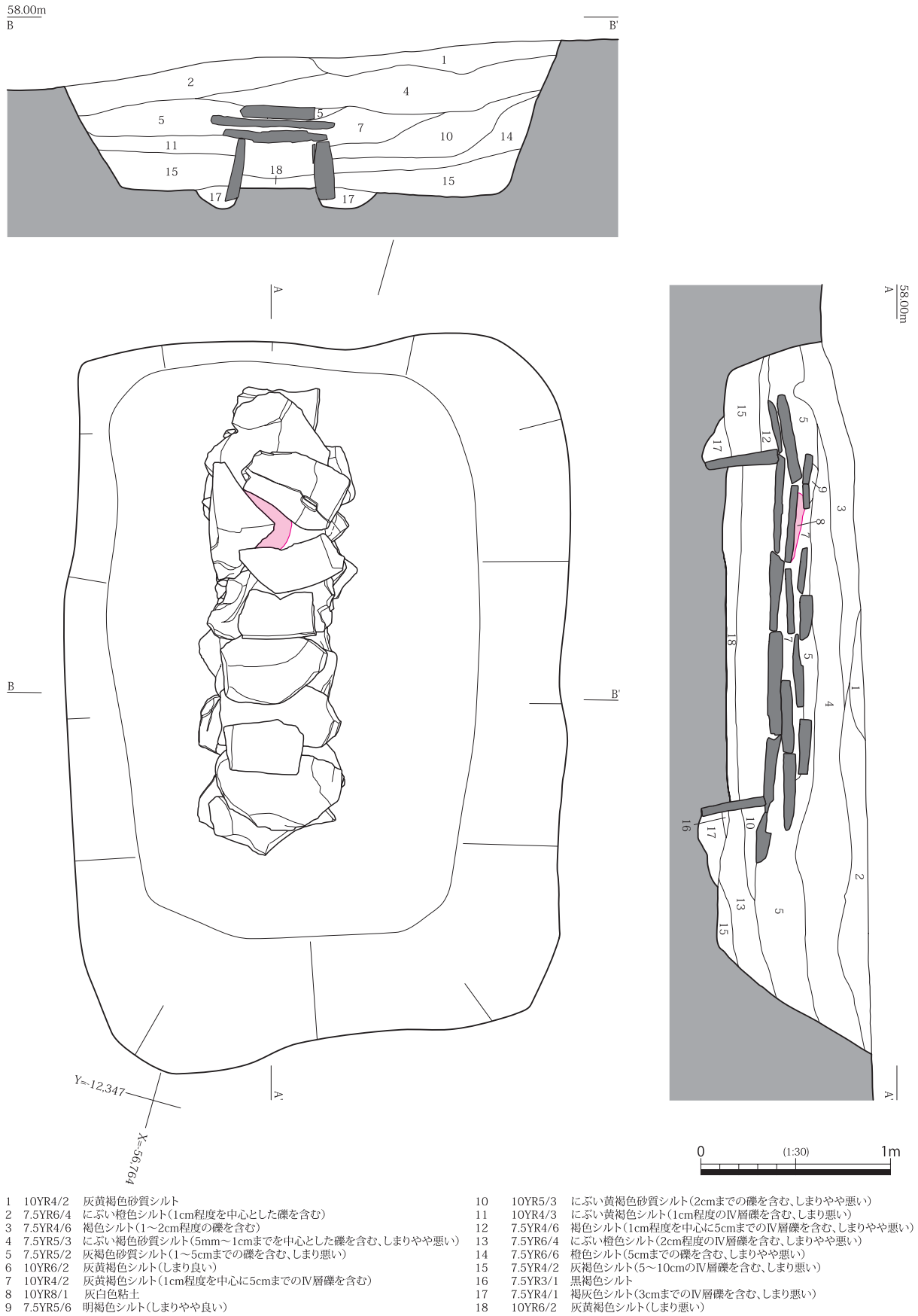
土層堆積では裏込めと棺上埋土との間で土質に大きな差がないものの、分層ラインで見ると南北断



墳丘盛土(A-A'の13・16～25層、B-B'の8・10～28層)  
 周溝埋土(A-A'の8～12層)

第51図 17号墳 墳丘 平, 断面図 (1/100)





第52図 17号墳 埋葬施設1 平, 断面図 (1/30)

面の10・11層上面、東西断面の12・13層上面がほぼ側石上面にあたってくる。おそらくはこの面まで裏込めを行った後で蓋石をしたのだろう。

棺内には流入土である18層がわずかに堆積するのみで、ほとんど空洞の状態であった。18層を掘り下げると、西側で風化礫が、東側で黄褐色礫混じりシルトのIV層が検出され、貼床などは確認されなかった。そのため、このIV層上面を棺床面と判断した。なお、棺内東側で灰白色粘土がみられるが、広範囲に広がるものではなく、むしろ盛りあがった状態になっているので、目張りに用いられた粘土が棺内に流入したものとみられる。

石棺は小口各1枚、側面各3枚の計8枚を据えることで基本形が形成されている。小口には厚さ0.06mほどの板材が使われており、その外側に西側で1枚、東側で2枚の小ぶりの板石が立てられている。側面の石材は厚さ0.1m程度の厚めの材が使われており、小口材を挟み込む形で立てられている。石材同士は重ね合わせを行っておらず、南面の石のつなぎ目辺りにやや大きな隙間ができています。そのため、小さな石材を棺の内側と外側にそれぞれ立てて隙間を塞いでいるが、西側の材は土圧によって内側に傾いていた。また、北面の東側の2枚のつなぎ目辺りは石材がやや薄く、そこを補うように外側に薄めな板石が付け足されていた。

この埋葬施設からは、枕などの頭位を示す遺物が出土していないが、棺の幅に両端で差がある。18号墳埋葬施設2でも幅に差があり、幅が広い側が頭位となっている。同じ時期の箱式石棺でみると、千代川西岸の倭文7号墳第2主体部や、鳥取市国府町の糸谷3号墳第3石棺墓などでも同様の傾向がある。そのため、この埋葬施設についても、幅が広い西側が頭位となる可能性が高いと考える。

鳥取平野周辺で古墳から見つかる箱式石棺は、その多くは広めの掘方を掘削した中に棺の大きさに合わせて細長く掘り、そこに棺材を据える形態である。18号墳埋葬施設2は上面が削られているがこれと同様の形態になると思われる。

石棺よりも大きめの掘方を全体に深く掘り込み、浅い溝に棺材を据える形態はあまり例がない。納められている石棺の形態がやや異なるが、千代川東岸の面影山33号墳第1主体部で比較的類似した構築方法を用いている。

### 副葬品

棺内西寄りの南壁際の床面で刀子と鉈が出土している。頭位を西とすると、被葬者の右側になり刀子は刃先を足側に向けていることになる。鉈は2つに折れた状態で見つかっているが、折って副葬したとするには破断面に折り曲げたような痕跡などがなく、自然劣化によって折れて、刃部が生物擾乱で移動したものと考えておきたい。

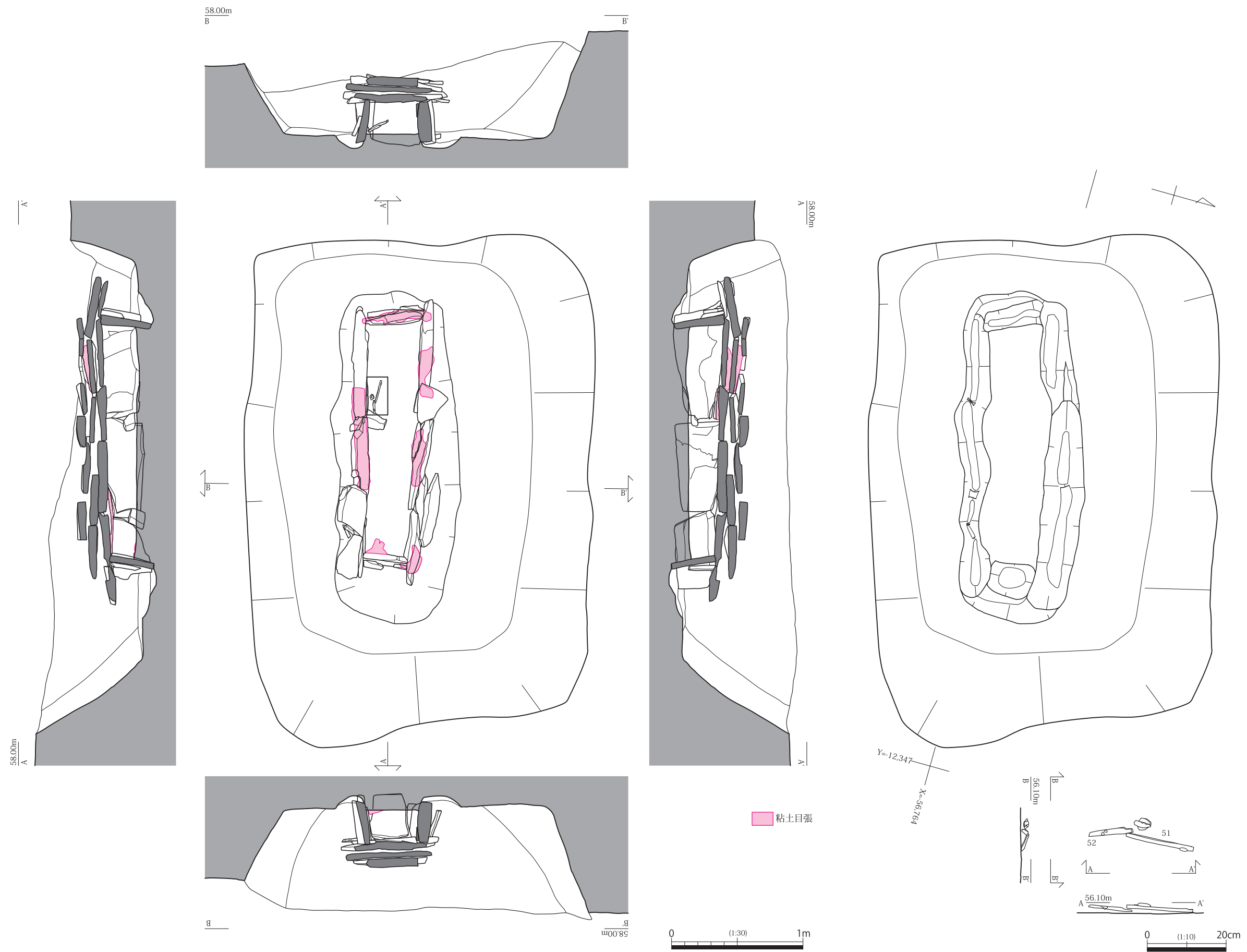
### 埋葬施設2（第54図、巻頭図版7・8、図版34）

楕円形の掘方に合口式の土器棺を納める。

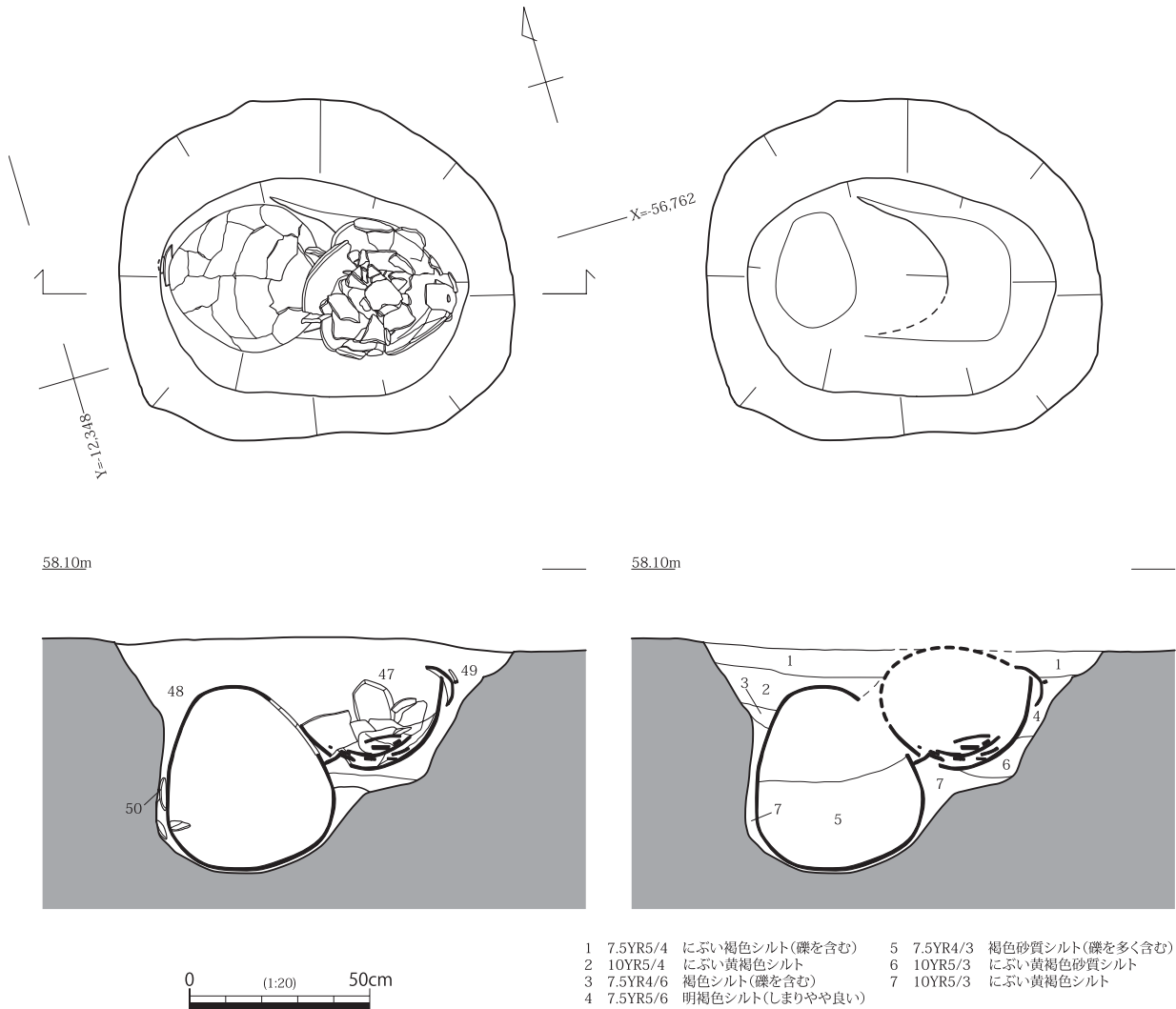
掘方の平面規模は前述したとおり。底面は西側が1段深く掘削されており、土器棺を東から西に傾けて納めることを意図して行ったことがわかる。検出面からの深さは西側で0.33m、東側で0.20m。

棺は壺2個体を合わせ口にしてある。このうち48は口縁部を打ち欠いており、この部分と47の口縁部が合わせられていた。また47は底部を打ち欠いており、高杯の杯部（49）で塞ぐ。

土層堆積を観察すると、棺は西側が掘方底面に接しているのに対し、東側は6・7層上に置かれていることがわかった。この層は上の埋土とは異なり比較的均質で、おそらくは棺を据える際に棺を合



第53図 17号墳 埋葬施設1 平、立面図 (1/30)



第54図 17号墳 埋葬施設 2 平, 断面図 (1/20)

調査の成果  
第IV章

わせた状態がずれないように調整したものと推測される。

棺を取り上げていた際、48の側面に穿孔があることが確認できた。また、底部の一部が欠けた状態であったが、内部にこの土器の破片が入っていたことから、底部には特に穿孔がないものと考えた。取り上げ後、7層を掘削していたところ、西壁に張り付いた状態で低脚杯（50）が出土した。現地では用途がわからなかったのだが、土器の復原過程で、48は底部も穿孔されていたことが判明した。このことから、低脚杯は西側の壺の底面の穴を塞ぐためのもので、掘方に据える際にはずれてしまったものと推測した。

### 第3項 18号墳（第50・55～58・60図，図版30・35～37）

#### 1. 墳丘と周溝（第50・55図，図版30・35）

##### 墳丘

18号墳は方墳で、南北11.9m，東西10.5m以上。検出時の墳頂部の標高は57.4mで、南側平坦面からの高低差は約1.4m。調査前は円墳と推定していたが、墳丘西裾，南裾が直線的になることから方墳と判明した。東辺は調査区外になる。

墳丘は尾根頂部に直交方向の周溝を掘削し、南側に平坦面を削りだして、その発生土を盛土として

利用することで墳形を整えている。北側斜面には不明瞭ながら傾斜変換を確認できる。東側は現況でほぼ平坦となっているが、おそらくは西側と同様に周溝を掘削したものと推測される。

旧表土が確認できるのは墳頂部北側の一部のみで、その上部に盛土（第56図16層）がわずかながら確認することができる。盛土の高さについては、埋葬施設の残存状態から本来あるべき掘方の深さを考慮すると、検出時よりも0.3～0.5m程度あったのではないかと推測される。

#### 周溝，平坦面

西側周溝は17号墳と共有するものであり、18号墳側の尾根筋に直交して掘削されている。幅は中央部で4.0m、調査時の墳頂部西縁からの深さは0.52mである。断面形は皿状であり、底面は中央部から南北に向かってやや傾斜する。周溝は南側で西に大きく開き平坦になっている。

埋土は5層に分けることができる。17号墳側の13・14層にはIV層ブロックを含んでおり、その特徴から盛土の崩落土が土壌化したものと思われる。一方、18号墳側の10・12層にはIV層ブロックを含んでいない。

周溝を検出したとき、IV層ブロックを含むものと含まないものを平面的に検出することができた。そのため、この堆積の差を時期差とみて、13・14層が堆積した後に再掘削して周溝を造り直したものと考えていた。ところが調査を進めていくと、2つの古墳に大きな時期差がなく、堆積状況を観察すると周溝の掘り直しを行った痕跡が認められなかった。そのため、周溝埋土の差は、周溝内への流入過程が17号墳側からか18号墳側からかの差であると判断した。10・12層は18号墳からの崩落土の土壌化したものと考えられる。

南側の平坦面はIV層を削り出して造られている。墳丘南西隅あたりで幅2.5mほどあるが、東に行くに従って狭くなり、調査区端辺りでは0.8m程になる。西側は周溝とつながっており、段差などは認められない。

#### 出土遺物

西側周溝南側の平坦な部分で土器片が点在した状態で出土した。多くは小片であったが、18号墳に近いところで高杯（第60図55・56）が出土している。

## 2. 埋葬施設（第56～58図，図版36・37）

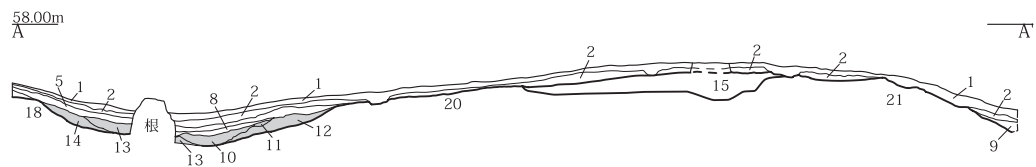
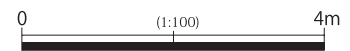
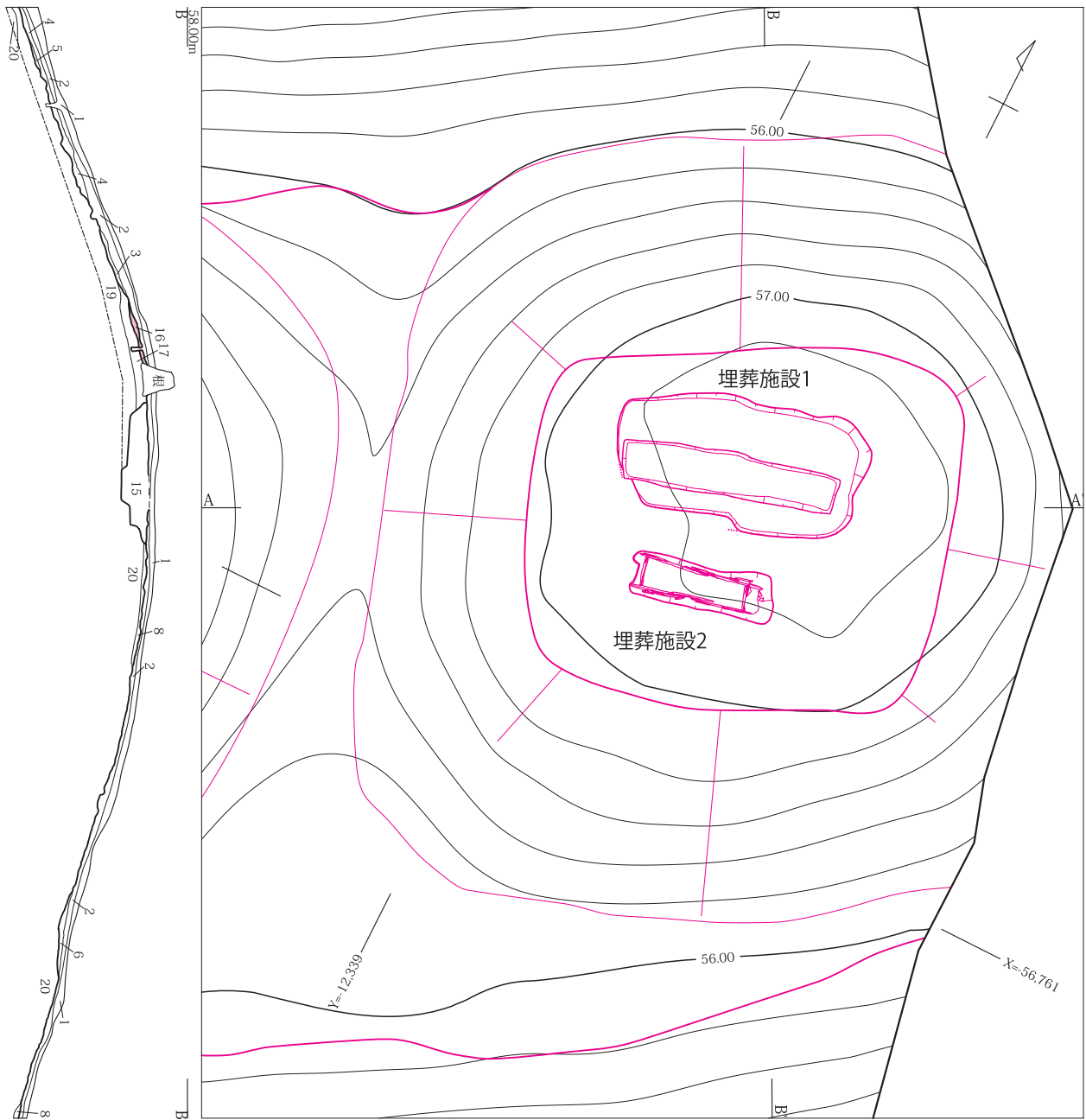
### 位置と検出状況

埋葬施設は、墳頂部の中央に2つの埋葬施設が並んで築かれる。掘方の規模の大きい北側のものを埋葬施設1、南側の箱式石棺を埋葬施設2とした。主軸は埋葬施設1でW-17°-S、埋葬施設2でW-14°-Sであり、尾根筋にほぼ並行する。

埋葬施設1は南西部が墳丘の流出によって失われており、検出時の法量は長さ3.91m、幅1.99mである。埋葬施設2は蓋石の範囲として長さ1.57m、幅0.78mである。

墳頂平坦面に堆積したII層を除去した段階で、埋葬施設2の蓋石が検出された。墳頂部の南側に寄っていたことから、北側に別の埋葬施設が存在することが想定され、わずかに残る旧表土上面で高さをそろえて精査を行った。その結果、IV層ブロックを含み、ややしまりが弱い土の広がりを確認できたことから、埋葬施設1を確認することができた。

先にも述べたが、箱式石棺は、周辺の調査事例から、石棺本体よりも一回り大きい浅めの1段目の掘方を持つことが多い。このことを念頭に置いて埋葬施設2の精査を行った。その結果、長さ2.28m、最大幅1.37mの範囲で掘方埋土の可能性のある土の広がり（図版35）を確認することがで



- |    |       |          |                          |       |          |          |                         |
|----|-------|----------|--------------------------|-------|----------|----------|-------------------------|
| 1  | 腐植土   |          | 16                       | 18号盛土 | 7.5YR4/4 | 褐色砂質シルト  |                         |
| 2  | I層    | 10YR7/4  | にぶい黄褐色シルト                | 17    | III層     | 10YR5/3  | にぶい黄褐色砂質シルト(土壌化)        |
| 3  | II層   | 7.5YR4/3 | 褐色砂質シルト                  | 18    | IV層      | 7.5YR4/6 | 褐色シルト(Φ2~3cmの礫を含む、しまり良) |
| 4  | II層   | 10YR4/4  | 褐色砂質シルト                  | 19    | IV層      | 10YR6/3  | にぶい黄褐色砂質シルト             |
| 5  | II層   | 10YR5/6  | 黄褐色砂質シルト                 | 20    | IV層      | 7.5YR5/8 | 明褐色シルト                  |
| 6  | II層   | 10YR4/6  | 褐色砂質シルト                  | 21    | IV層      | 10YR5/4  | にぶい黄褐色シルト(礫を多く含む)       |
| 7  | II層   | 10YR4/3  | にぶい黄褐色砂質シルト(礫を含む)        |       |          |          |                         |
| 8  | II層   | 10YR5/3  | にぶい黄褐色砂質シルト              |       |          |          |                         |
| 9  | II層   | 10YR3/1  | 黒褐色砂質シルト(礫を多く含む)         |       |          |          |                         |
| 10 | 周溝埋土  | 10YR3/1  | 黒褐色砂質シルト                 |       |          |          |                         |
| 11 | 周溝埋土  | 10YR4/2  | 灰黄褐色砂質シルト                |       |          |          |                         |
| 12 | 周溝埋土  | 10YR4/4  | 褐色砂質シルト                  |       |          |          |                         |
| 13 | 周溝埋土  | 10YR4/2  | 灰黄褐色砂質シルト(赤色系IV層ブロックを含む) |       |          |          |                         |
| 14 | 周溝埋土  | 10YR4/4  | 褐色砂質シルト(赤色系IV層ブロックを含む)   |       |          |          |                         |
| 15 | 埋葬施設1 | 墓壇       |                          |       |          |          |                         |

■ 18号盛土(B-B'の16層)  
■ 周溝埋土(A-A'の10~14層)

第55図 18号墳 墳丘 平, 断面図 (1/100)

きた。ところが、掘り下げていくと、この堆積はごく薄く、明確な掘方の立ち上がりを確認することができなかった。おそらくは墳丘が削られてしまったために、一段目がほとんど失われたものと考えられる。

以下、各埋葬施設について詳説する。

#### 埋葬施設1（第56図）

##### 構造

掘方南寄りの部分を一段掘り下げて木棺を据える形態。棺の痕跡が残っておらず、棺を据え付けた二段目の掘方の規模は長さ3.31m、幅0.64m、深さ0.12m。

掘方南西部では一段目の底面近くまで墳丘が削られていたため、検出時には二段目の南西隅が一段目の外側に出るような状態になっていた。

検出段階から、掘方中央近くに黒褐色シルト（1・2層）が筋状に見えていた。木棺が腐朽して陥没した土壌と思われる。

検出面から0.2mほどで一段目の底面に達し、二段目の輪郭が確認された。この段階で断面・平面で木棺痕跡がないか精査を行ったが検出することができなかった。ただ、縦断面を確認していると、掘方二段目の埋土に黒みがかかった9層と黄色みがかかった4・11層の2種類があることが確認できた。

掘方二段目の中は、高さを揃えながら徐々に掘り下げて木棺の痕跡がないか精査を試みたが、確認することができなかった。底面には11層が堆積している。断面で見ると中央部で確認できない部分があるので、棺底の貼り土ではないと判断された。

11層を掘り下げるとIV層に達する。底面はほぼ平坦で、長軸方向での傾斜はほとんどない。この面で精査をしたが、棺材を立てた痕跡はみられなかった。

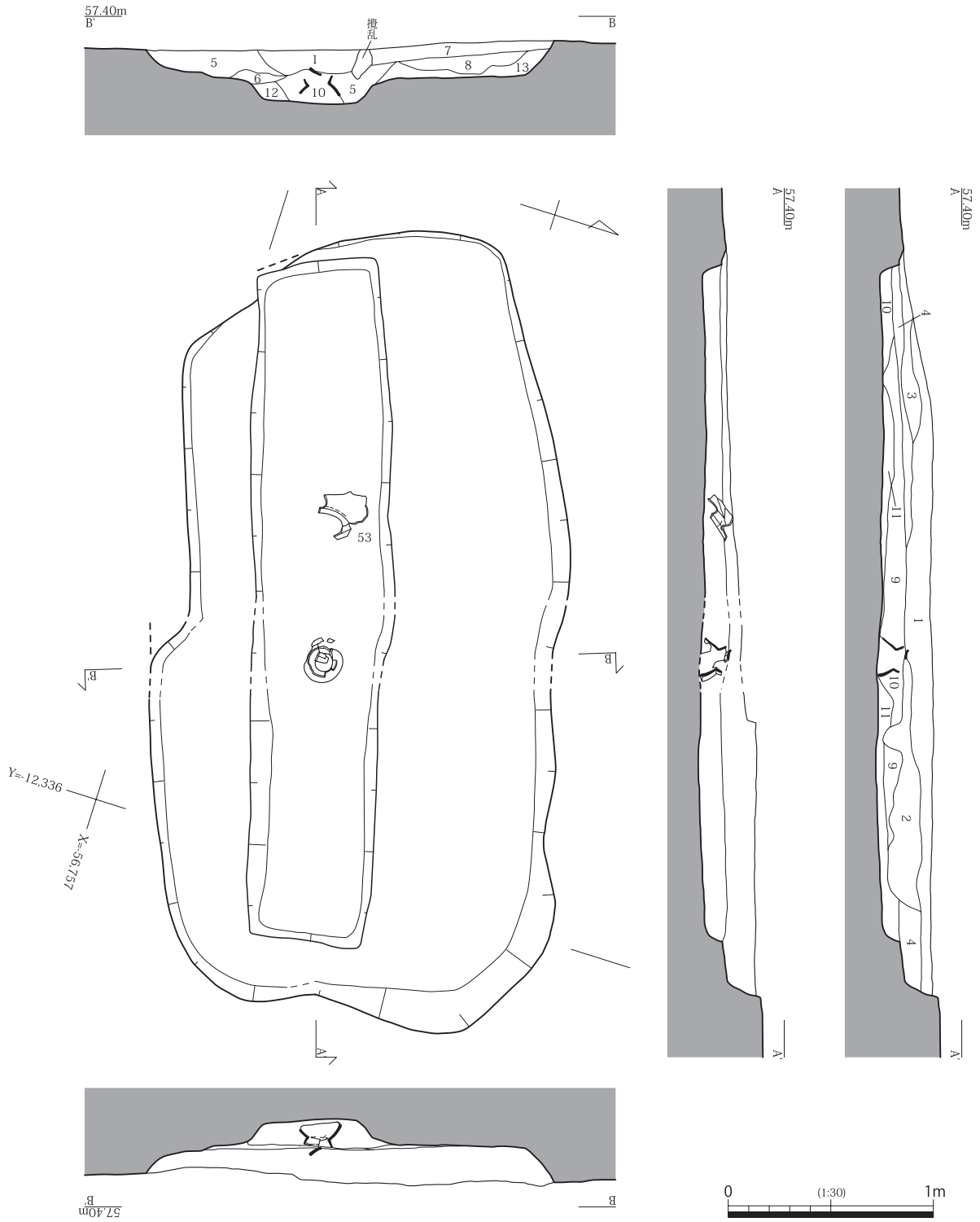
この埋葬施設では、棺の構造についての情報がほとんど得ることができなかった。掘方二段目内の埋土の差を積極的に評価するならば、西側の9層と11層の境目、東側の2層と4層の境目辺りで小口板を立てていた可能性が考えられるが、それ以上の手がかりがなく推測の域を出ない。

以上の状況から、広めに掘った掘方の底面に棺据え付けのために2段目を掘削し、ここに組合式木棺を据えたものと推定される。

##### 副葬品

掘方2段目の中央部で土師器甕、その西側に土師器壺が出土しているが、いずれも棺が陥没した土の中からのもので、床面から数cm浮いた状態で出土している。そのため棺上に供献されたものと推測される。棺内の副葬品はない。

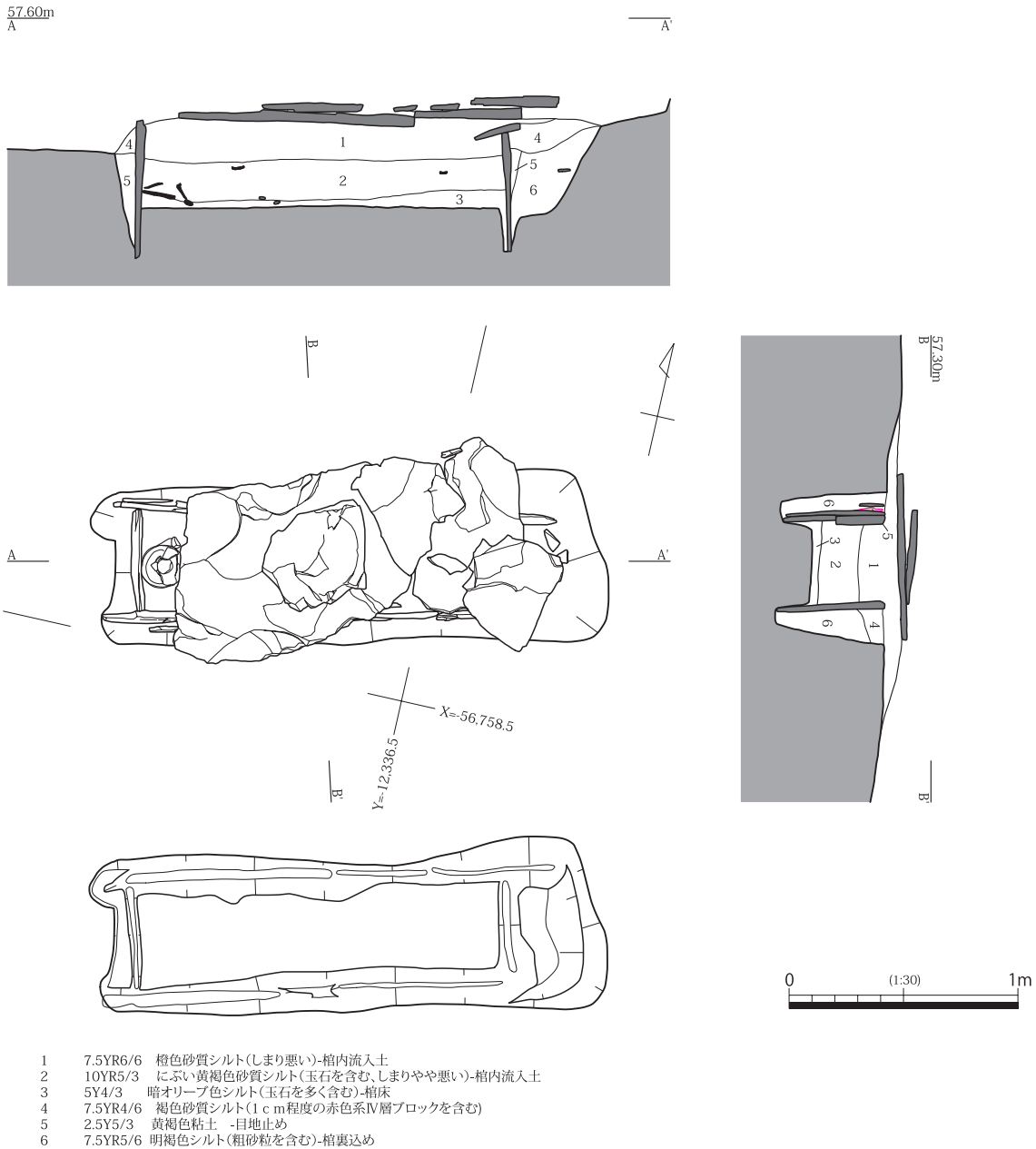
中央部の甕については劣化が著しく、取り上げをしたものの接合、復元はできなかったのでここで遺物の概略を記しておく。口縁はいわゆる単純口縁で、端部内面は肥厚していない。胴部外面にはヨコハケ調整が観察できた。胴部の下半分はなく、周辺から同一個体の破片がないことから、もともと下を打ち欠いた状態で供献された可能性がある。



- |   |          |                            |    |            |                               |
|---|----------|----------------------------|----|------------|-------------------------------|
| 1 | 7.5YR3/2 | 黒褐色シルト(2cmまでの礫を少量含む)       | 8  | 10YR3/3    | 暗褐色シルト(2cmまでの赤色系IV層ブロックを含む)   |
| 2 | 10YR3/1  | 黒褐色砂質シルト                   | 9  | 10YR3/2    | 黒褐色シルト(1cmまでの砂礫を少量含む)         |
| 3 | 7.5YR3/4 | 暗褐色シルト(黄灰色シルトブロックと炭を少量含む)  | 10 | 7.5YR4/6   | 褐色シルト(1cmまでの砂礫を含む)            |
| 4 | 10YR5/3  | にぶい黄褐色シルト(細礫を少量含む)         | 11 | 7.5YR7/4   | にぶい橙色シルト(細礫粒を含む)              |
| 5 | 7.5YR4/4 | 褐色シルト(中砂粒を含む)              | 12 | 7.5YR4/4~6 | 褐色シルト(粗~中砂粒を含む)               |
| 6 | 7.5YR4/6 | 褐色シルト(混和物はほとんど見られない)       | 13 | 7.5YR5/6   | 暗褐色シルト(粗砂粒を少量含み、暗褐色シルトが斑状に入る) |
| 7 | 7.5YR4/4 | 褐色シルト(2cm程度の赤色系IV層ブロックを含む) |    |            |                               |

第56図 18号墳 埋葬施設1 平, 断, 立面図 (1/30)





第57図 18号墳 埋葬施設2 平, 断面図 (1/30)

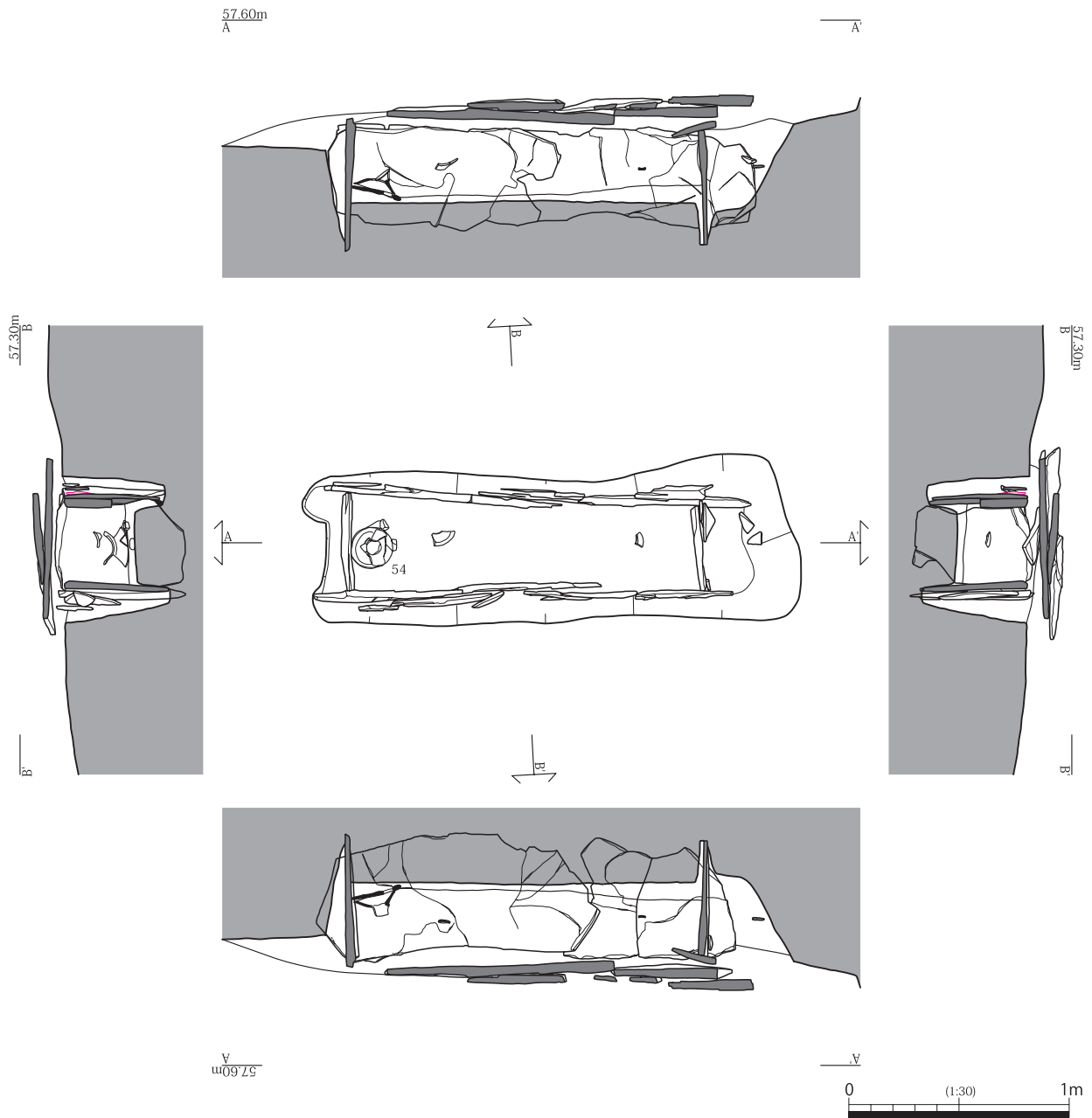
## 埋葬施設2 (第57・58図, 35～37)

### 構造

埋葬施設は箱式石棺。鼓形器台の土器枕によって西頭位であることがわかる。棺は内法で長さ1.56m, 幅は西側で0.46m, 東側で0.35m, 高さ0.43m。石材は流紋岩質凝灰岩を使用する。

前述したように, 本来は検出面よりも上に, 石棺よりも一回り大きい掘方があったと思われるが, 墳丘が削られているため確認できない。他の古墳の事例を見ると, 蓋石の0.3～0.5m程度上が本来の掘り込み面であったと推測される。

蓋石は5枚の板石で構成される。大きな板石を1枚置き, これに小振りな板石を組み合わせて棺を塞いでいる。西側の蓋石が失われていたこともあり, 棺内には流入土が堆積した状態であった。蓋石や石棺材の上面には目張りの粘土は確認できなかった。

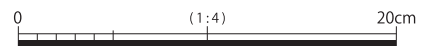
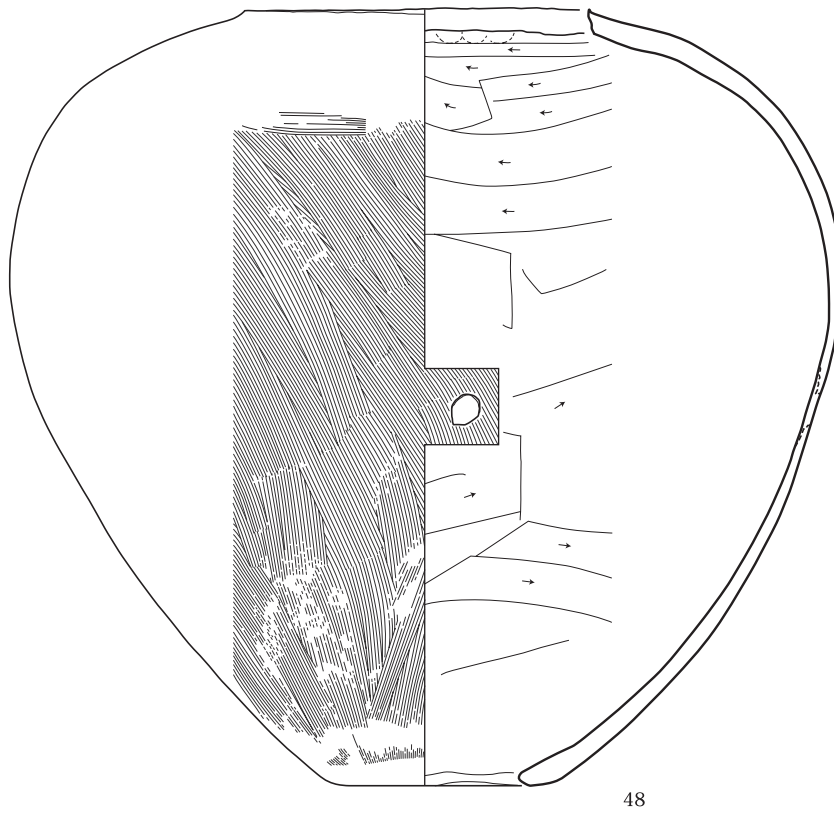
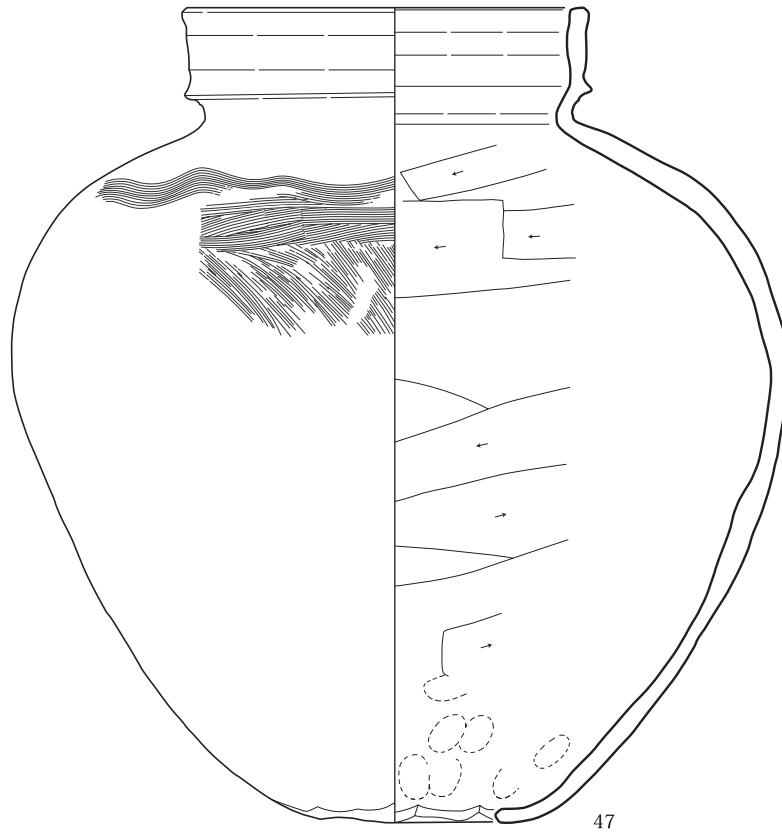


第58図 18号墳 埋葬施設2 平、立面図 (1/30)

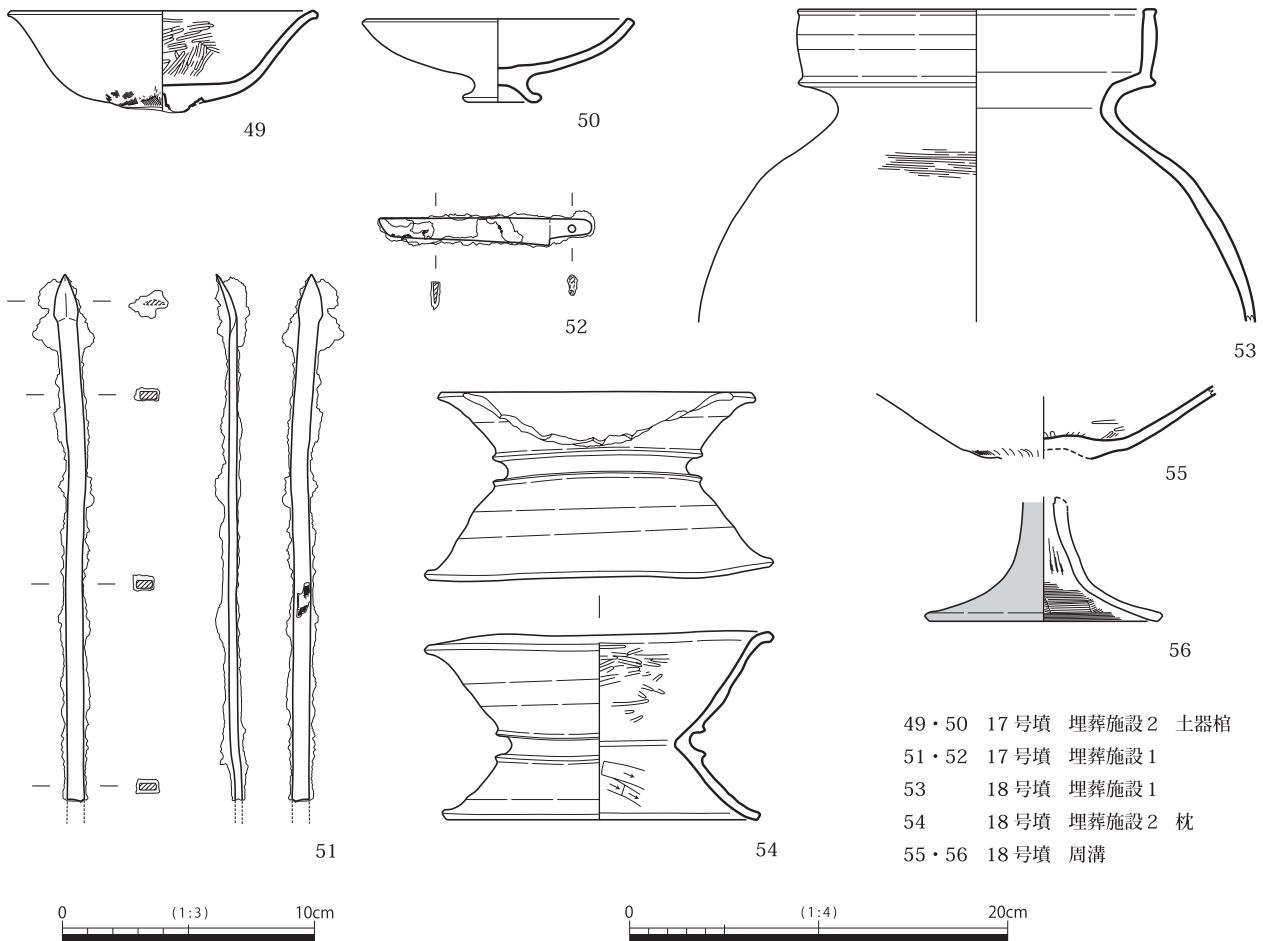
棺据え付けのための掘方は、中央部で長さ2.16m、幅0.62～0.75m、深さは東側で0.46m。そこに小口で深さ0.20m、側面で0.15m程度の溝を掘って石材を据えている。

石材は厚さ0.05m程度のものを使用しており、小口各1枚、側面各2枚の計6枚で基本形が構成されている。側面は小口材を挟み込んで立てられており、西（頭位）側の材を内側にするように重ね合わせをしている。北側面の石材の合わせ目や西側小口材外面には、黄褐色粘土による目張りを施している。その後、IV層ブロックを含む明褐色シルト（6層）で裏込めを行う。掘方掘削時に発生した土と思われ、しまりが強い。

棺底面には円礫を含んだ暗オリーブ色シルト（3層）を敷いている。円礫はIV層に含まれるものとは異なり、2cm程度の川原石が中心である。石の入り方には若干差があり、西側半分には多く含まれるが、東側にはあまり含まれていない。



第59図 17号墳 埋葬施設2 出土遺物（土器 S=1/4）



第60図 17号墳埋葬施設1・2, 18号墳埋葬施設1・2, 18号墳周溝 出土遺物(鉄製品・土器1/3・4)

### 枕と副葬品

棺内遺物は、土器枕として使用された鼓形器台が1点のみである。器台は棺底に置かれた板石の上ののせた状態で出土した。脚部を上にしており、頭をのせる部分を打ち欠いている。同一個体の破片が流入土内から出土しており、生物擾乱によって移動したものと想定される。

### 第4項 出土遺物と築造時期

#### 1. 17号墳の遺物(第59・60図, 巻頭図版8, 図版33・34)

##### 埋葬施設1 棺内遺物

鉈(第60図51, 図版33) 基部を欠いており, 残存長20.7cm。茎部に繊維痕跡が確認でき, 布などで覆っていた可能性がある。茎部が左に曲がっている。

刀子(第60図52, 図版33) 完存しており, 全長11.25cm。刃部に繊維痕跡が確認でき, 布で覆っていたと考えられる。茎部には目釘穴が1つある。

##### 埋葬施設2

土器棺として使用された壺と高杯, 掘方内から出土した低脚杯がある。

土器(第59図47・48, 第60図49・50, 巻頭図版8) 47・48は大型の壺。47は口縁部を強いヨコナデによって成形し, 端部はやや内傾する面を持つ。肩部には平行沈線による波状文を施す。胴部内面

はケズリの後ナデ調整を行う。底部は平底と思われるが、打ち欠かれている。48の胴部は焼成後に穿孔されており、口縁部から頸部は打ち欠かれている。49は高杯の杯部で、外面はハケ調整の後ミガキで仕上げているが、脚柱部と接合する部分ではハケメが残る。内面は丁寧なミガキで仕上げている。50は低脚杯で、表面の残存状況が良くないが、丁寧な仕上げがされている。

## 2. 18号墳の遺物（第60図，図版36・37）

### 埋葬施設1 棺上遺物

土器（第60図53，図版36）壺の口縁で、端部に水平な面をもち、屈曲部を強いヨコナデによって成形することで稜をより明瞭にしている。肩部には平行沈線がみられる。

### 埋葬施設2

土器枕として使われた鼓形器台がある。

土器（第60図54，図版37）外面はヨコ方向のナデによって仕上げられ、受け部内面は横方向のミガキによって仕上げられている。枕として使用された際には受け部を下にして、脚部の一部を打ち欠いて使用している。

### 周溝の遺物（第60図，図版34）

土器（第60図55・56）55は高杯の杯部で、脚柱部との接合時のハケメ状の工具痕跡が認められる。残存状態が悪いものの、外面には赤色塗彩が施されているようである。56は高杯の脚柱部で、外面に赤色塗彩を施す。脚部内面にはハケメ状の工具痕跡が残る。

### 築造時期

17・18号墳のある尾根は、14号墳に比べて標高が低いものの、尾根先端部に近く、周囲に遮蔽物が少なく眺望の良い地点である。この辺りは尾根頂部がやや広くなっており、少しでも墳丘を大きく造ろうとする意図が看取される。総じて、14号墳周辺に次いで古墳築造に適した地点を選んで2基の古墳は造られていることがわかる。

古墳築造においては、尾根頂部に直交する周溝を掘削したうえで、墳丘南側に平坦面を造り出しながら形を整えて、発生土を盛って比較的高さのある墳丘を構築している。

埋葬施設はそれぞれ2基確認しており、副次埋葬が行われていることがわかる。ただし、その様相はやや異なる。17号墳は墳頂部中央に埋葬施設1を構築する形で、埋葬施設2は墳頂部の端に造られている。一方、18号墳では2基の埋葬施設を並べて構築することを前提とした配置になっている。

埋葬施設は木棺、箱式石棺、土器棺が構築される。木棺は組合式木棺で、他の木棺を埋葬する施設と異なり、棺より一回り大きい掘方底面に棺を据えるために一段掘り下げる形態である。箱式石棺は各古墳で1基ずつ見つかっているが、構築方法が異なることは先に述べた。17号墳埋葬施設1の事例が少ないので、その差異の理由については不明である。

副葬品は、17号墳埋葬施設1で鉄製工具が2点出土したのみである。土器枕も、18号墳埋葬施設2で確認できるだけで、遺物がほとんど出土しないこともこの群の特色といえる。

時期を特定しうる資料は、17号墳埋葬施設2で使われていた土器と、18号墳の各埋葬施設で出土した土器群で、これらに大きな時期差を見出すことは難しく、近接した時期に2基の古墳が構築されたと考えらるべきであろう。時期としては、布留系の単純口縁の甕や直立する厚みのある二重口縁の壺が出土することから、古墳時代前期後半頃と考えられる。

## 第5節 その他の遺構

### 第1項 概要

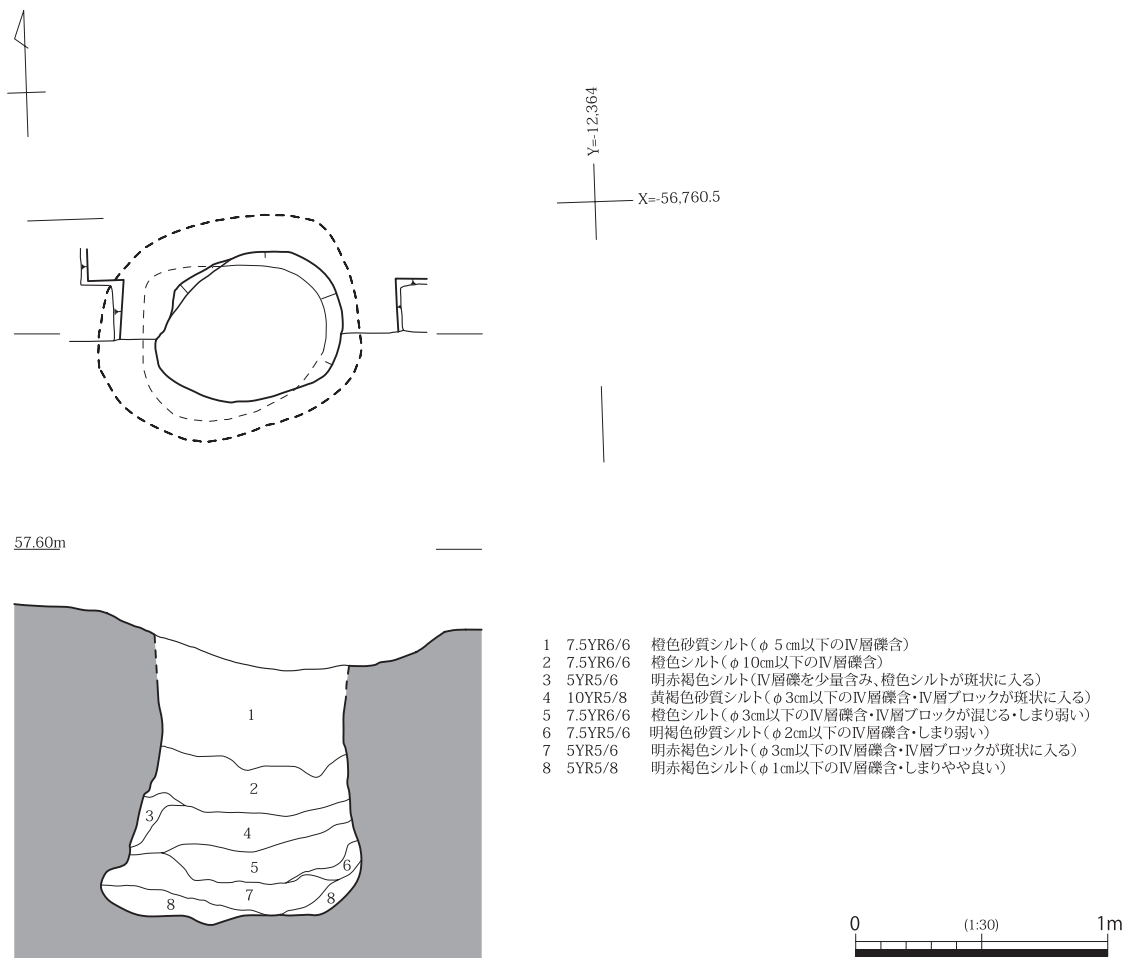
本高古墳群では、古墳以外に落とし穴と推定される土坑1基、ピット群を検出した。

#### 1. 40土坑 (第51・61図, 図版38)

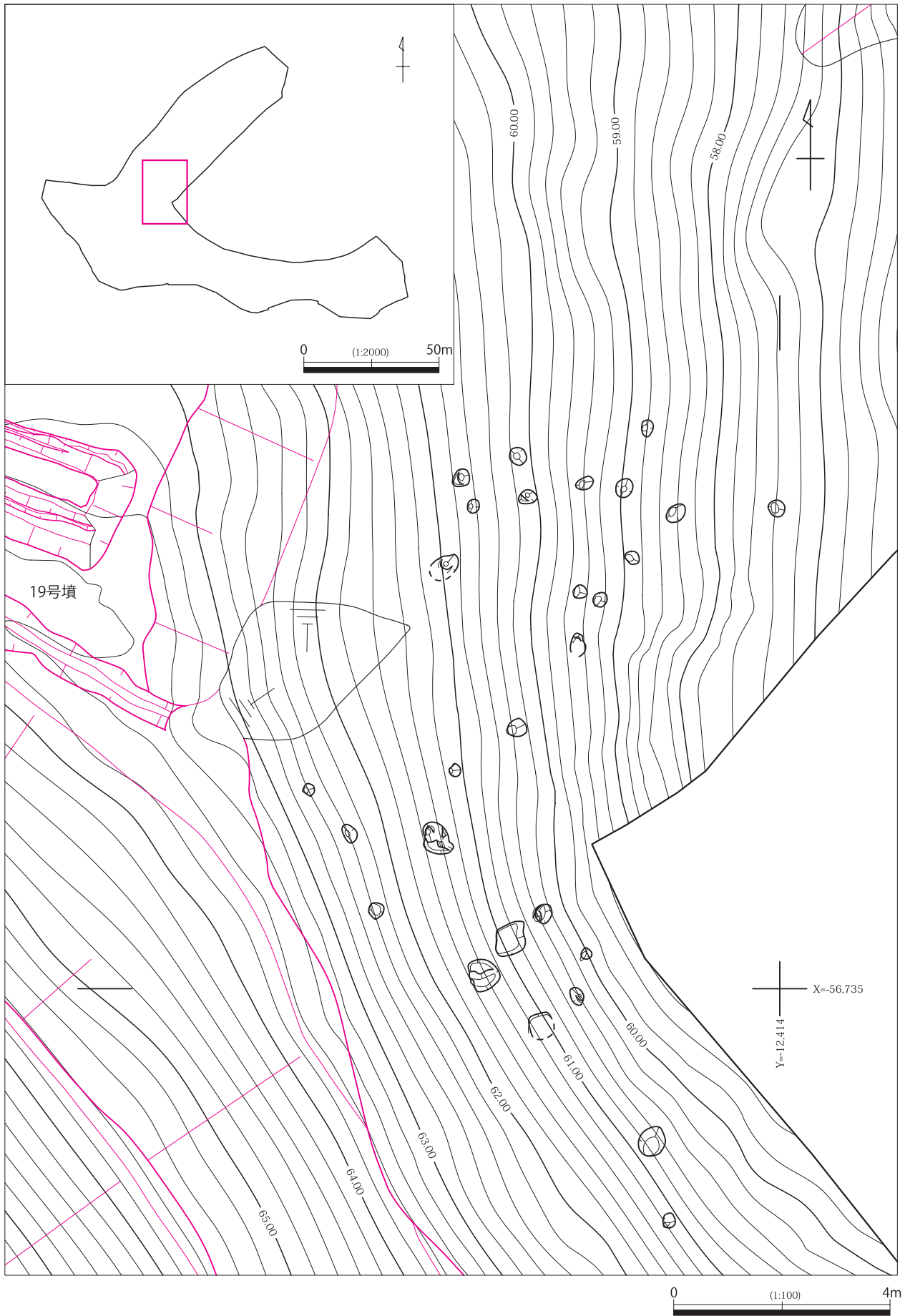
17号墳から東へ15mの尾根頂部にある(第51図)。掘方上端から底面にかけて広がる袋状の土坑。当初、試掘調査によって20号墳の周溝の存在が推定されていたが、調査の結果、周溝埋土ではなく、40土坑の埋土上部に認められた土壌化層であった。

規模は上端で長径0.64m、短径0.60m、底面は径約0.60mで不整な円形を呈する。

土坑の立地、形状から落とし穴と推定されるが、底面の中央に杭等を立てた痕跡は確認されなかった。埋土中から遺物は出土していない。



第61図 40土坑 平, 断面図 (1/30)



第62図 ピット群 平面図 (1/100)

2. ピット群 (第62図, 図版38)

北支群と南支群に挟まれた谷頭に位置する。Ⅲ層下面で検出し、ピットは総数28基。平面形は不整な円形を呈し、長径約70cm～20cm, 深さは30～40cmを平均とし、形態, 深度に規格性は窺えない。各ピット間の間隔も不規則で規格性は認められない。Ⅲ層およびⅣ層に色調が類似した土が埋土となっている。

第2項 遺構外出土遺物 (第64図, 図版38)

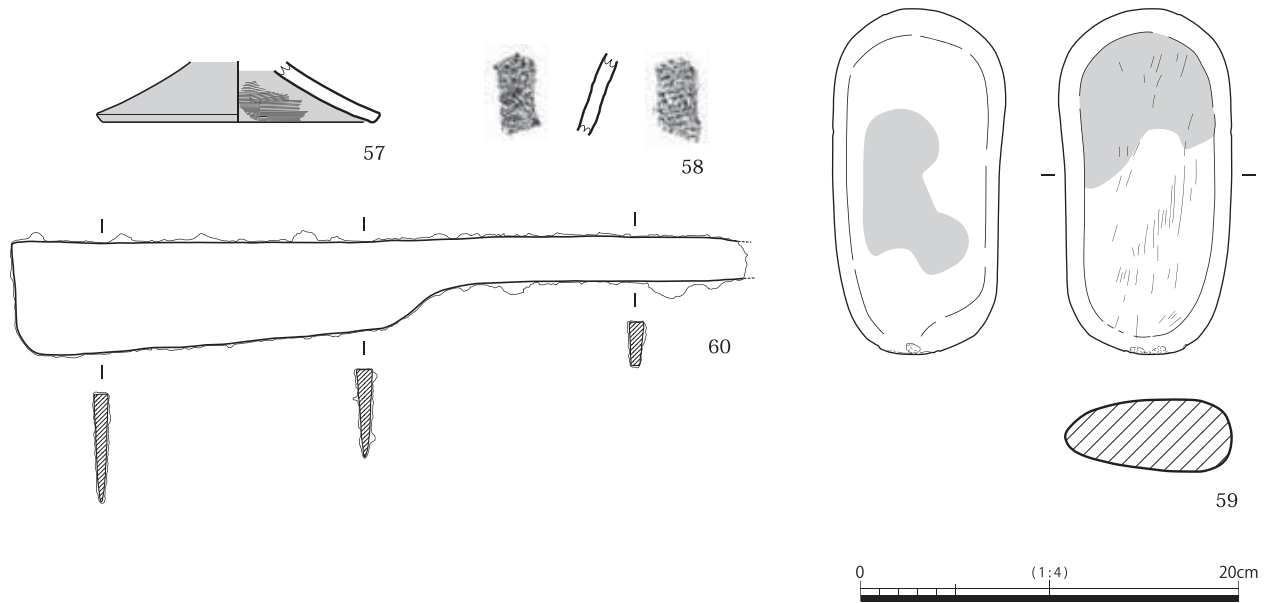
遺構外から出土した遺物として, 土師器高杯, 縄文土器片, 磨石, 鉞を提示した。当古墳群から出土した遺物は遺構に伴うものが大半で, 遺構から遊離した遺物はほとんど認められなかった。

57は土師器高杯の脚部。北支群の北西端でⅠ層掘り下げ中に出土したものの。口縁端部は面をなす。調整として内面にケズリ, 外面にナデの痕跡が観察され, 内外面を赤色塗彩する。

58は縄文土器の胴部片, 遊離した状態で出土し, 帰属層等は確認できていない。器面が風化しており, 明瞭でないが外面は条痕調整, 内面はナデによる調整痕と推定される。

59は磨石。19号墳の墳頂平坦面でⅠ層中から出土したものの。表裏面に磨面が観察され, 裏面には線状痕が認められる。

60は鉞。59と同様, 19号墳の墳頂平坦面, Ⅰ層中から出土したものである。



第63図 その他の出土遺物 (土器, 石器, 鉄製品 1/4)



## 第V章 総括

### 第1節 本高古墳群の展開

#### 第1項 はじめに

今回の本高古墳群の調査では、前方後円墳を含む計7基の古墳を検出し、貴重な資料を数多く得ることができた。ここでは、この7基の古墳の検討を行い、当古墳群の展開を考える。

検出された7基の古墳は、第IV章「調査の成果」や第66図に示したように、平面的に見ると以下の三群に分けられる。

A群（14・13・19号墳）——前方後円墳を中心に3基で構成される。築造時期は古墳時代前期。

B群（17・18号墳）——比較的高い墳丘を持つ方墳2基で構成される。築造時期は古墳時代前期。

C群（12・22号墳）——低墳丘の方墳2基で構成される。築造時期は古墳時代中期。

これら三群はそれぞれに特徴があり、各群を構成する古墳の被葬者は強い関係で結ばれていたことが容易に想像できる。

以下、各群や各古墳の特徴から概観する。

#### 第2項 古墳出土土器の検討（第64・65図、表1）

埋葬施設からは、土器枕に転用された鼓形器台、高杯等が出土し、古墳築造時期の比定が可能である。

以下、本高古墳群の埋葬施設出土土器について述べる。

A群の埋葬施設からは鼓形器台（32：14号墳埋葬施設4，34：同墳埋葬施設6，37・38，13号墳埋葬施設2），小型丸底壺（33：14号墳埋葬施設5）が出土している。

32は受部外面の下端，脚台部外面の上端に稜を持たない小型品。34は器形全体のプロポーションとして受部，脚台部の高さの比率がほぼ同じで，接合部は他のものより高さがあるため，古相を呈す。37・38はともに器形全体のプロポーションは受部が脚台部より高く，接合部の高さは34より低い。33は口縁部が外傾し，胴部は球形，器壁は薄い。

B群では甕（47，48：17号墳埋葬施設2，53：18号墳埋葬施設1），鼓形器台（54：18号墳埋葬施設2），高杯（49：17号墳埋葬施設2），低脚杯（50：17号墳埋葬施設2）が出土した。

47の口縁部は直立気味で，口縁部内面はナデ調整によってやや肥厚する。器壁は厚く，体部は肩が張る。外面肩部には波状文が付され，底部はやや平底気味，内面の指頭圧痕は底部付近にとどまる。48は口縁部の形態は窺えないが，47とほぼ同様の器形と推定できる。53は47と同様，口縁部は直立気味，口縁部内側は47ほどではないが，やや肥厚する。54はA群の37・38と類似した形態である。

C群の埋葬施設からは高杯（1：12号墳）が出土している。受部は直線的に外傾し，端部がやや外反する形態。

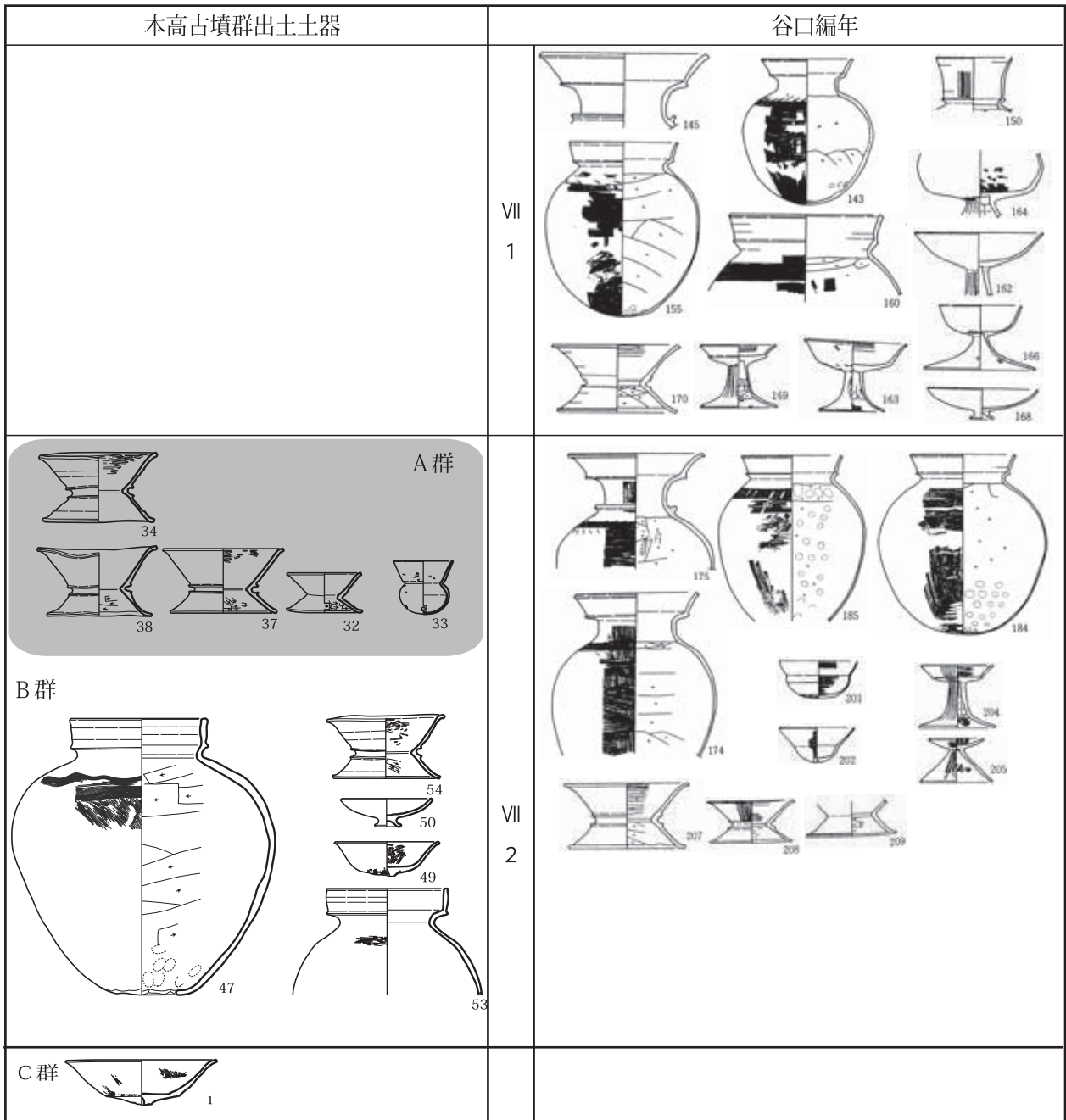
因幡地方の弥生時代後期から古墳時代初頭の土器変遷を示した谷口恭子は，集落遺跡で検出した一括性の高い遺構出土資料を指標に，壺，甕を中心とした形態や調整手法等の特徴から土器変遷を捉えた。その上で，弥生時代後期をV期，庄内式併行期をVI期，布留式併行期をVII期とし，さらにV期を5，VI期を3，VII期を2時期に細別した（註1）。

谷口が示した壺と甕の変遷については概ね首肯でき，鼓形器台の変遷についても急速に器形が小型

グループ	古墳名	埋葬施設		
A	14号墳	埋1	未調査(木棺?)	
		埋2	未調査(木棺)	
		埋3	割竹形木棺?	
		埋4	組合式木棺	
		埋5	組合式木棺	
		埋6	組合式木棺	
	19号墳		組合式木棺	
13号墳	埋1	石棺?(木棺)		
	埋2	組合式木棺		
B	17号墳	埋1	箱式石棺	
		埋2	土器棺	
	18号墳	埋1	組合式木棺	
		埋2	箱式石棺	
C	12号墳	埋1	組合式木棺	
	22号墳	埋1	組合式木棺	

●は棺外遺物

第64図 本高古墳群 埋葬施設関係出土土器



第 65 図 本高古墳群出土土器編年 (S=1:10)

表 1 出土土器を中心とした古墳(埋葬施設)の変遷

グループ	古墳名	前期中頃	前期後半	中期前半	中期中頃
			谷口編年VII-2		天神川編年VI期
A 群	14号墳		14-1・2 14-4 14-5 14-6		
	13号墳		13-2		
	19号墳		19		
B 群	17号墳		17-2		
	18号墳		18-1 18-2		
	12号墳				12
C 群	22号墳				22

化する傾向が窺える。しかし、変遷の基となっているのは、遺構単位の廃棄資料であり、遺構の切合関係に基づく新旧資料群の抽出、器台を含めた壺、甕以外の器種ごとの変遷過程等については検討の余地も残されている。

A群から出土した鼓形器台は、その形態的な特徴から、概ね谷口のⅦ-2期に相当し、また、小型丸底壺は布留2式（小若江北式）に相当する。時期的には同時期のものと捉えられ、古墳時代前期後半に位置づけられる。前述のとおり、B群出土資料のうち土器棺に用いられた壺についても、Ⅶ-2期の範疇に収まると考えているが、直口する壺の口縁部の形状を新しい様相と捉えるか、棺に供するために製作されたものの特徴と捉えるか、今後検討していく必要がある。

また、因幡では古墳中期の土器編年は整理されていないため、隣接する東伯耆の天神川編年を参考にすると、C群出土土器は天神川編年のⅥ期頃で、時期は古墳時代中期中頃と推定する（註2）。

出土土器の時期から各古墳および埋葬施設の変遷をみると、表1のような変遷をたどると考えた。

### 第3項 立地（第66図）

本高古墳群が展開する尾根は痩せ尾根で、古墳は尾根上に並ぶように構築される。

A群が選地された尾根の最高所周辺は、平野への眺望が優れているだけでなく、尾根幅も広い。古墳を築造するのに適した場所である。

A群の中でも前方後円墳の14号墳は、その中心である。尾根幅の最も広い場所を後円部として加工し、墳丘は旧地形を巧みに利用して築かれていることが窺える。さらに、平野への眺望は、A群の中でも後円部からの視通が群を抜いている。まず、最適地に「前方後円墳」が選地されたことが窺えよう。

13・19号墳は、14号墳に接するように衛星的に配される。やはり平野からの眺望が意識されているが、14号墳に比べるとその視通は劣る。

次に平野への眺望がよい場所に選地されているのはB群である。尾根幅は狭いが、なるべく古墳を大きく造る工夫がなされている。墳丘も墳裾周辺に平坦部を造り、盛土も高く施すことにより高さが強調された古墳となっている。古墳群南側の本高弓ノ木遺跡（註3）が展開する平野からも、B群の2基は明確に認識することができる。ただ、千代川周辺に広がる北東側平野への眺望は、A群と比べると標高が低く悪い。

一方、北支群に展開するC群は、南支群の北東側平野への眺望は可能であるが、本高弓ノ木遺跡が展開する平野は見ることができない。視通の利く方向は限られ、A・B群に比べ平野への眺望は明らかに劣っている。また、C群の2基の古墳はいずれも低墳丘墳で、おそらく近接した平野からも、古墳として認識することは難しい状況にあったと推定される。C群の展開する尾根幅は、B群と比較して広い。盛土はそれほど施されず、A・B群に比べ平野からの視覚的意識は低いと感じられる。

このように選地の状況を概観すると、まず、眺望や古墳を築造する旧地形において最も好条件の場所に前方後円墳を盟主とするA群の築造が始まり、その後、平野への眺望の効く場所から時期を追ってB群・C群の順で選地されていることが読み取れた。

また、今回の調査範囲だけでなく、もう少し広い範囲で概観するとどうであろう。

A群の西側は、さらに標高を増しながら尾根が伸びて行き、平野への眺望も良好である。しかし、この西側は尾根幅が狭く、14号墳クラスの前円部を築造するために適した場所は見当たらない。後円部の大きさや、後円部と前方部のバランスを考えた墳丘規模、古墳築造のための効率的な土木工

事の実施などを考え合わせると、平野への眺望だけでなく、多方面からこの場所が最も好条件を備えた場所であったことが窺える。前方後円墳だからこそA群はこの場所に選地されたのである。

なお、今回具体的な検討の対象としていないが、B群・C群の周辺状況を見ると、B群は17・18号墳の2基を確認したが、18号墳の東側には低いながらも古墳状の隆起が2箇所あり、2基以上で構成されていた可能性がある。しかし、さらにその東側は尾根が急峻に下降する状況が観察され、尾根の先端に向かって、これ以上古墳が展開する状況はみられない。B群は、尾根の先端部と言う眺望が効く場所を選地していることが窺えるが、地形的な制限から継続してこれ以上の古墳を築くことは難しい状況にある。

C群の状況は、B群とは異なる。C群が展開する北支群の尾根は、標高をあまり減じることなく、北東に延びる。この尾根上には、古墳状の隆起や周溝と推定される尾根に直交するような窪みが連続する様子が現況でも観察でき、さらに数基を単位とした古墳群が展開している可能性が高い。また、未調査のため明確ではないが、平野への眺望を考えると、尾根の先端部から古墳群が展開し、今回調査した12・22号墳が最も後出する群の可能性も否定できない。実際、A群とC群との間には不自然ともとれる位置的な空白と時間的な空白が存在する。想像の域をでないが、C群周辺では眺望の良い先端部から古墳が展開したと考えたい。

#### 第4項 墳丘と群の構成（第66図，表2）

ここでは各群の墳丘とその構成を概観する。

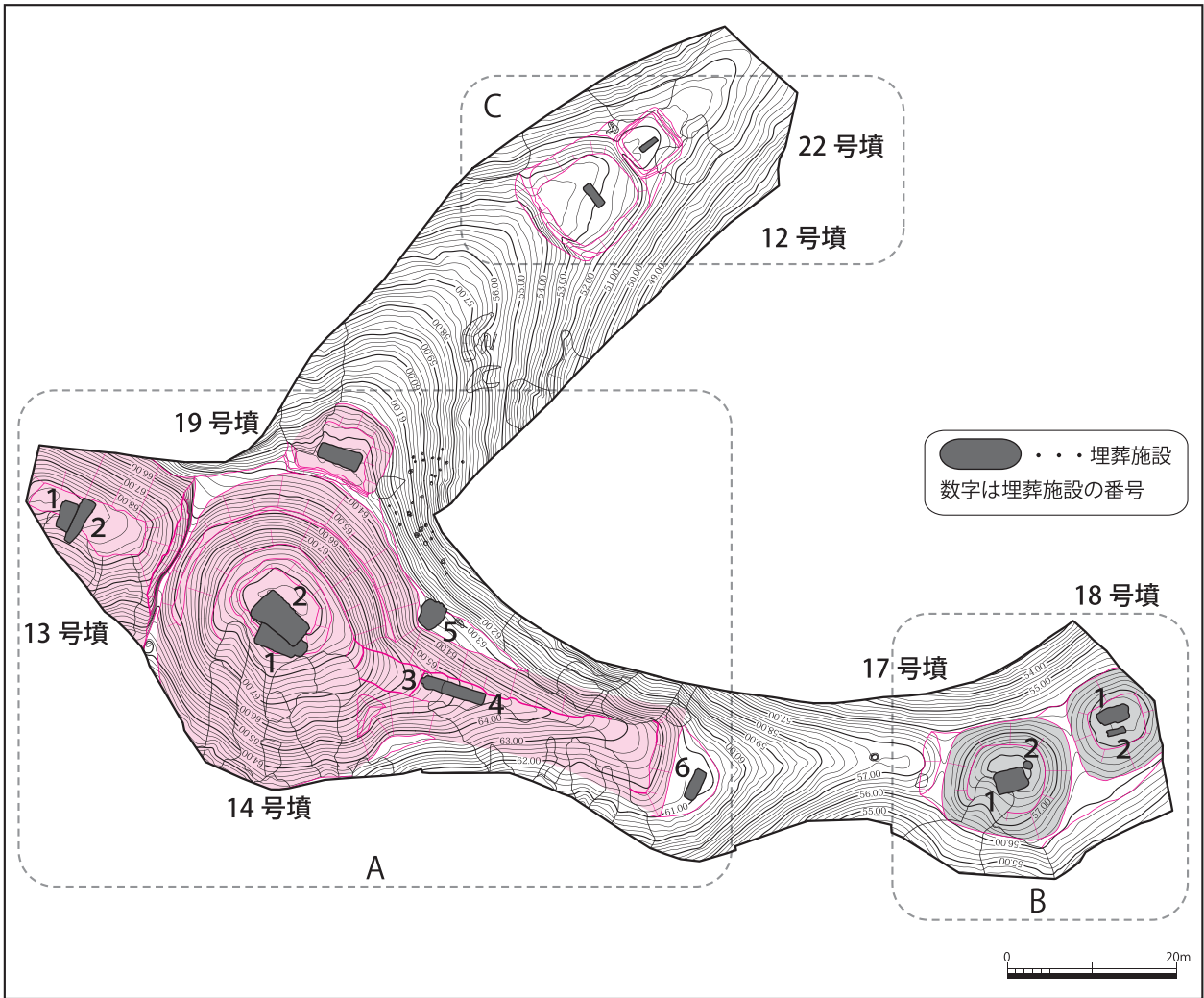
A群は、前方後円墳を中心に3基で構成される。前方後円墳については次節で詳細な検討を加えるため、ここではその概要を示す程度としておく。前方後円墳は全長63m、後円部径36m。後円部と前方部との長さの比率は約1：1である。後円部に比べ前方部は細く、前方部端はやや開く形状と推定される。

墳丘は、尾根筋を最大限に利用して築造される。尾根筋に沿って主軸をとり、尾根を大規模に切断、削り出すことによって後円部墳丘の整形を行い、同時に周溝も作り出す。前方部も基本的には削り出しによって整形が行われる。後円部と前方部端の一部には盛土が施されるが、当古墳は、そのほとんどが削り出しによって造られていると言っても過言ではない。また、削り出した土量も相当量になり、この廃土の一部は谷部に廃棄したものと推定している。実際、谷部の一部では墳丘築造時の造成土の可能性が高い地層が確認されている。

13・19号墳は、衛星的に前方後円墳（14号墳）に接するようにして築かれる。

このうち、19号墳は周溝の平面的状況から考えても、14号墳よりは新しく築造されたことが窺える。また、その位置関係からは14号墳に付随するようにもみえ、14号墳とより密接な関係が予想される。墳形は前方後円墳の墳端部に影響を受けたためか、いびつな方形を呈する。墳丘の整形はそのほとんどを削り出しによって行い、盛土はほとんど施されていない。そのためか墳高は低い。

13号墳もいびつな長方形墳である。14号墳との前後関係は、本書の「第四章 調査の成果」でも詳述しているが、14号墳と13号墳を隔する周溝の状況から14号墳→13号墳の順と判断している。13号墳の墳丘盛土の状況は明確ではないが、現況の墳丘頂部より高さのある盛土は施されていなかったものと推定している。ただ、14号墳の周溝掘削に伴い尾根を大きく切断するため、平野方向からの視覚的印象は強いものとなっている。



第 66 図 本高古墳群全体図

表 2 本高古墳群一覧表

	古墳	墳形	推定規模	埋葬施設	時期	棺内副葬品	備考
A	14号	前方後円	全長 63 後円部 30×33	6基 (木棺 2~6) (1 未調査)	前期中葉	埋 1 (棺内未調査) 埋 2 (棺内未調査) 埋 3 小型仿製鏡・ 勾玉・管玉 埋 4 鈿・ガラス小玉	埋 4 鼓形器台 埋 5 小型丸底壺 埋 6 土器枕 (鼓形器台)
	19号	方	11×8	1基 (木棺)		鍬先	土器枕 (鼓形器台)
	13号	方	20×19 以上	2基 (木棺)		埋 2 鉄剣・鉄鏃・鈿	埋 2 土器枕 (鼓形器台)
B	17号	方	15×14	2基 (箱式石棺・ 土器棺)	前期後半	埋 1 刀子・鈿	埋 2 土器棺
	18号	方	12×11	2基 (箱式石棺・ 木棺)		埋 1 壺 埋 2 土器枕 (鼓形器台)	
C	12号	方	12×11.5	1基 (木棺)	中期	鉄剣・鉄鏃・刀子	土器枕 (高坏)
	22号	方	5×5	1基 (木棺)		鉄剣	

推定規模の単位はm。「埋1」・・・埋葬施設1

このように、A群は立地上の理由かもしれないが、旧地形を削って整形を行うことにより、ほぼ墳丘を完成させ、盛土で最終的に整えるという特徴を持つ。築造順は前にも述べたが、選地や古墳間の状況から、まず14号墳が構築され、14号墳の墳端を意識、利用して13・19号墳が続いて造られたと推測している。さらに、13・19号墳に盛土がさほど施されないのは、14号墳「前方後円墳」が強く意識された結果かもしれない。また、前方後円墳である14号墳と13・19号墳には、墳形や規模に大きな格差があることは一目瞭然である。このような格差はB・C群では認められない。

B群は、ほぼ同規模の方墳2基で構成される。いずれの古墳も尾根を切断して周溝とし、その発生土を盛土として利用している。このうち残存状況の良好な17号墳は、盛土厚が1m弱あり、旧地表より掘削された周溝底からの高さは2m前後と、小規模墳のわりに高い墳丘を持ち、下方からの視覚的效果が意識されている。また、17・18号両墳が接する部分の周溝は、尾根両端部を大きく「撥状」に開いてコーナー部を明確に作り出し、墳裾部も平坦面を造り出すことにより明確に表現している。尾根地形に効率的な加工を施すことによって、墳丘を完成させていることが看取される。また、墳丘と埋葬施設との構築順であるが、17号墳では盛土を施し、墳丘完成後に埋葬施設が造られる。

C群は大小2基の方墳で構成されるが、A群のような大きな格差はない。周溝を掘削して、その発生土を盛土とする方法は、B群の17号墳と同様である。しかし、盛土はさほど高く施さず、どちらかというのと低墳丘墳と見ることができ、そのためか墳頂部は広い。盛土と埋葬施設の関係を見ると、C群では埋葬施設を構築した後、盛土を施すという順となり、B群と異なる。また、C群の2基はいずれも墳丘中心に単独で埋葬施設を配していることや、埋葬施設を完全に墳丘盛土で覆っていることを考え合わせると、古墳築造当初から追葬が意識されていない可能性が高い。

群構造の特徴をしてみると、B・C群のように周溝を共有し、規模の大小はあるが、同形態の墳丘で群を構成するのが一般的な在り方である。一方、A群は前方後円墳を中心とし、その周辺に小規模墳を衛星的に配する群構成であり、異質かつ卓越した存在と言える。

## 第5項 埋葬施設（第67図）

今回調査で確認された埋葬施設は合計15基である。このうち14号墳の後円部墳頂部に位置する2基は、保存のため掘方の検出等の部分的な調査に留めたが、他の13基は墓壙底まで完掘し、多くのデータを得ることができた。ここでは埋葬施設を概観し、その特徴を明らかにする。

埋葬施設の一覧表は第67図に示したが、大きく概観すると、次の六形態に大別される。

- 1 類－2mを大きく超える長大な組合式木棺
- 2 類－2m前後の組合せ式木棺
- 3 類－割竹形木棺
- 4 類－木棺と石組みを併用するもの
- 5 類－箱式石棺
- 6 類－土器棺

以下、その詳細を記す。

1 類の形態はA群の14号墳埋葬施設4・6、13号墳埋葬施設2、19号墳、B群の18号墳埋葬施設1が該当し、中には長軸長が3mを超えるものも含まれる。大型の掘方の中に裏込め土を施しながら木棺を納める形態のものが一般的であるが、14号墳の埋葬施設4は、前方部の狭い場所に選地され

グループ	古墳名	埋葬施設	
A	14号墳	埋1	未調査(木棺?) 
		埋2	未調査(木棺) 
		埋3	割竹形木棺 
		埋4	組合式木棺 
		埋5	組合式木棺 
		埋6	組合式木棺 
	19号墳	組合式木棺 	
	13号墳	埋1	石棺?(木棺) 
		埋2	組合式木棺 
	B	17号墳	埋1
埋2			土器棺 
18号墳		埋1	組合式木棺 
		埋2	箱式石棺 
C	12号墳	埋1	組合式木棺 
	22号墳	埋1	組合式木棺 

埋葬施設は1/150, 土器棺は1/100

第67図 本高古墳群 埋葬施設



たためか掘方にほぼ接するように木棺を納めている。その深さは、A群のものはいずれも深く、B群の18号墳の埋葬施設1は上部が削れているものの浅いと推定している。

2類の形態は、A群の14号墳埋葬施設5、C群の12・22号の埋葬施設が該当。C群の2基は二段に掘方を掘削するがその深度は1の形態に比べ浅い。木棺は下段掘方に接するように納めている。

A群の14号墳埋葬施設5は掘方下段が極端に深く、棺を深い場所に納める。

3類の形態は、A群14号墳の前方部に造られた埋葬施設3が該当する。底部の形状から割竹形木棺の可能性が高いとした。この棺の据えられた位置も総じて深い。

4類の形態、木棺と石組みを併用したものは、A群13号墳埋葬施設1が該当する。石組みと木材を併用する例は全く同形態ではないが、鳥取平野でも前期に属する倭文古墳群（註4）など、類似例がみられる。ただしその数は少ない。

5類の形態、箱式石棺はB群の17号墳埋葬施設1、18号墳埋葬施設2で採用され、他では採用されていない。鳥取平野における箱式石棺の採用は、古墳時代中期以降に活発となるが、篠田古墳群（註5）や倭文古墳群（註6）など数は少ないが、前期から採用される例もある。

6類の形態、土器棺は1例のみである。17号墳埋葬施設2が該当する。

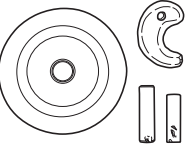
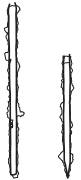
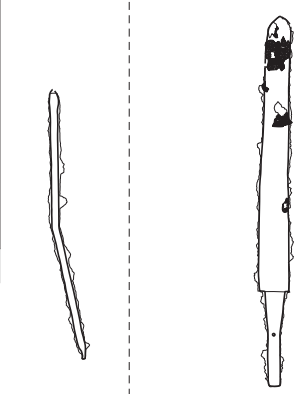


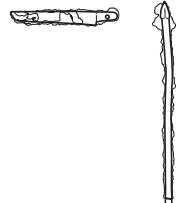

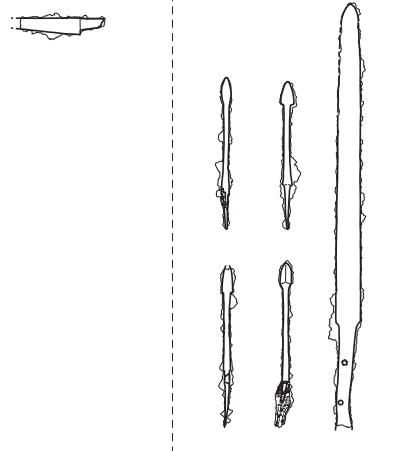
このように棺形態別にその採用古墳を概観すると、その特徴が明らかとなる。

A群では長大な組合式木棺が主に採用され、棺は深い位置に納められることを特徴とする。この形態は、鳥取平野でも多くの前期古墳に採用される。また、14号墳後円部に築かれた埋葬施設1・2もこの形態と考えているが、その掘方や棺の規模（埋葬施設2の棺痕跡から推定、第68図参照）からは、この2基が他を卓越した存在であることが窺える。また、14号墳では、変形ではあるが、割竹形木棺の可能性のあるものもある（埋葬施設3）。後でも述べるが、この棺は後円部に最も近接した場所に選地され、副葬品も鏡や装飾品のみで構成されるなど、異質な存在である。

B群は、箱式石棺の採用がその特徴である。鳥取平野における箱式石棺の状況を概観すると、前述もしたが、その採用は、古墳時代前期中葉から後半には始まるものの、その数は少ない。数が増加するのは中期以降である。本高古墳群の場合、比較的早い段階での採用である。本高古墳群ではB群のみ採用され、ほぼ時期が重なるように築造されたA群では採用されていない。被葬者の出自が影響していたものか。

中期に築造されるC群の2基は、平均的な規模の木棺を採用する。また、墳丘上の埋葬施設は1基で、墳丘の中央に選地する。A・B群の前期古墳にみられる副次埋葬は行われていない。中期でも副次埋葬の類例は多く知られている。単次埋葬は当古墳群の特徴かもしれないが、2基しか調査されておらず、その詳細は不明である。

なお、前方後円墳の14号墳は、埋葬施設の数や配置も他の古墳とは異なった状況を示している。後円部に築かれた2基の他、前方部に2基、墳丘裾に2基、計6基の埋葬施設が築かれるが、これは他の古墳には見られない様相である。後円部に築かれた2基が中心主体部であることは言うまでもなく、周辺の衛星的に配された4基はその位置関係から、中心主体とより強い関係にあることが容易に想像される。さらに、14号墳周辺に築かれた13・19号墳もその関係性の強さは、繰り返し述べているように、埋葬施設の構造の共通点からも窺うことができる。

グループ	古墳名	埋葬施設	鏡・玉類	農・工具	武器	
A	14号墳	埋1	未調査(木棺?)			
		埋2	未調査(木棺)			
		埋3	割竹形木棺			
		埋4	組合式木棺	※ガラス小玉		
		埋5	組合式木棺			
		埋6	組合式木棺			
	19号墳	組合式木棺				
	13号墳	埋1	石棺?(木棺)			
埋2		組合式木棺				
B	17号墳	埋1	箱式石棺			
		埋2	土器棺			
	18号墳	埋1	組合式木棺			
埋2	箱式石棺					
C	12号墳	埋1	組合式木棺			
	22号墳	埋1	組合式木棺			

第68図 本高古墳群 埋葬施設出土副葬品

## 第6項 副葬品（第68図）

今回検出した7基の古墳から出土した副葬品の一覧は第69図に提示したが、その数は少ない。ここでも、各群の特徴を明らかにする。なお、14号墳後円部の中心埋葬施設は、未調査のため実態が不明である。

A群の副葬品の中で注目されるものに、鏡がある。

鏡が副葬される埋葬施設は、14号墳埋葬施設3唯一である。鏡は、仿製の小型内行花文鏡である。また、埋葬施設3からは、水晶製の勾玉や緑色凝灰岩製の管玉が出土している。出土位置からはおそらく、被葬者の首に架けられたものと推定している。一方、武器や農工具などの鉄製品の副葬は行われていない。埋葬施設3は、副葬品の様相からは宗教的な色彩の強い被葬者像が浮かび上がり、埋葬施設の選地された位置関係から14号墳の中心埋葬者により近い存在であったことが推定できる。また、埋葬施設に他には見られない割竹形木棺を採用したことも、このようなことが影響しているかもしれない。

14号墳で、他に装飾品が副葬された例は埋葬施設4にみられる。ガラス小玉(1点)と鉄製農工具(鉈・鑿?)が副葬される。埋葬施設3・4はいずれも前方部に築かれた埋葬施設である。一方、墳丘周辺に築かれる埋葬施設5・6には、副葬品は副えられない。明らかに、墳丘上とその周辺の埋葬施設には格差が認められる。

一方、14号墳周辺の古墳に構築された埋葬施設の状況を概観すると、その様相は若干異なる。装飾品の副葬は見られず、19号墳では鉄製農具の鍬先、13号墳の埋葬施設2には鉄剣、鉄鎌、鉈が副葬される。14号墳周辺での武器の副葬は、この13号墳埋葬施設2のみである。14号墳の前方部やその周辺の被葬者とその性格の差異が反映したものであろうか。

A群から出土した副葬品の内容は、決して豊富とは言えない。しかし、これは14号墳後円部の中心被葬者に対し強い結びつき持つ周辺被葬者の状況である。A群の盟主が眠る埋葬施設1・2については未調査のため詳細は不明であるが、埋葬施設3など周辺埋葬施設の状況からは、鏡や装飾品のほか、武器、農工具など鉄製品の副葬が予想される。鳥取平野に展開する前期古墳とくらべても遜色はなく、むしろA群は豊富な副葬品を持つ一群であると推定される。

その他、A群の中で注目される点がある。14号墳埋葬施設5の棺上に供えられたと推定される底部を先穿した小型丸底壺の出土である。小型丸底壺の出土から、畿内系葬送儀礼の部分的な導入が推定でき、前方後円墳の導入だけでなく、他要素でも畿内との関係が窺える。

A群と築造時期が部分的に並行するB群では、17号墳埋葬施設1に農工具の刀子と鉈が副葬されるのみである。この在り方は同時期、同規模の古墳において一般的な様相であり、A群が副葬品の内容でも卓越した存在であることがわかる。

築造時の遅れるC群では様相が異なる。12号墳では鉄剣、鉄鎌、刀子が、22号墳では鉄剣が副葬され、武器関係の副葬が顕著となる傾向がある。当期における盟主的な古墳ではないが、狭小地域の首長層の一般的な様相と理解している。

その他、副葬品の中で鉈等を意図的に折り曲げて副葬するものがみられる。A群でその傾向が顕著にみられる。なお、この行為は古墳時代前期だけでなく、中期古墳にもみられ、古墳副葬時にはよくみられる行為である。また、古墳埋葬時だけでなく集落内で廃棄される場合も意図的に折り曲げた例もある(註7)。

## 第7項 まとめにかえて ～ 本高古墳群の展開 ～

以上、築造時期、立地、墳丘、埋葬施設、副葬品の様相を概観したが、最後に本高古墳群の展開について簡単にまとめておく。

今回調査した本高古墳群の中で、前方後円墳の14号墳は当地域の盟主墳となるのは明らかである。時期的にこの古墳の築造は、古墳時代前期中葉末まで遡る。この前方後円墳の前身となる古墳については、当古墳群や近接する宮谷古墳群の中にある可能性もあるが不明である。立地面でみると14号墳より遠望の効く場所に選地された古墳もあるが、前方後円墳の存在は確認されていない。

前方後円墳の選地を考えると、眺望、規模を得るため旧地形を利用した墳丘築造の特徴などから、この場所が最適所であることは前に述べた。その後の展開については、周辺尾根にも多数の古墳が存在するが、詳細な展開を示すことは難しい。限られた今回の調査状況から探ると、眺望の効く場所から数基を群単位として尾根稜線上に展開していったものと推定している。ただ、どの時期まで築造時期が連続したかについては、現在のところ明確にすることはできない。周辺の古墳群などを概観すると、後期まで連続する古墳群もあり、宮谷古墳群も含めた当古墳群もその可能性は高いと言える。

被葬者像については、群の構成やその特徴が参考となる。

当古墳群は、数基で群単位を形成して展開することは繰り返し述べた。その中で、前方後円墳を中心に構成されるA群が卓越していることは、前述の各要素からも明らかである。しかし、各群は明確に時期が連続して辿れるわけではない。部分的に築造時期の並行する可能性が高いものがある。

A群とB群の関係である。出土土器から古墳の築造はA群の前方後円墳が先行し、B群の17・18号墳は、14号墳の周辺に位置する13・19号墳と並行あるいは近い時期に築造されたと考えている。しかし、両群には明確な格差が認められる。B群はA群のような卓越した存在ではなく、当期に一般的にみられる小規模な在地型の古墳である。

鳥取平野の古墳は、その多くが前期から後期を通じ、集落が展開する平地が眺望できる尾根上に築かれるのが一般的で、各古墳群は密接な関係をもつ地域集団の集合体によって形成されていると推定している。

このような環境の中での卓越した存在のA群。その中でも、中心となる前方後円墳（14号墳）の被葬者はおそらく当地域の大首長層であり、前方後円墳の採用は、畿内との強い結びつきを示唆するものである。一方で在地系の古墳で構成されるB群。B群は、この前方後円墳の被葬者を頂点として築かれた地域勢力を構成する一集団の首長層と推定できる。前方後円墳の被葬者との間には大きな階層差が存在し、その階層差が立地、墳形や規模、副葬品の様相に現れていると考えている。なお、前述の当地域とは、その立地的な関係から千代川下流域西岸勢力と考えている。

また、同じ西岸には本高古墳群の他にも近接して営まれる宮谷古墳群、前方後円墳の時期は不詳であるが、その存在が知られている下味野古墳群（註8）や、横枕古墳群（註9）などが展開する。さらに鳥取平野南部や湖山池周辺にも六部山古墳群（註10）や、里仁古墳群（註11）などの前方後円墳を含む古墳群が展開している。

これら前方後円墳を含む古墳群の動向は、直接的に鳥取平野における地域首長層の実態とその動向を示唆するもので、この実態と動向を探る一環作業として「前方後円墳」本高14号墳の位置づけを次節で行う。

## 第2節 本高14号墳の歴史的評価

### 第1項 はじめに

本高14号墳は、調査成果から前期中葉まで遡りうる山陰最古級の前方後円墳であることが明らかとなった。しかし、墳丘の外表施設として葺石をもたず、埴輪も樹立していない。これまで山陰地方において最古級とされた馬ノ山4号墳のように、突如として大型墳が築造され、竪穴式石室や豊富な副葬品を備えたいわゆる「定型化」した姿とは異なっている。

ここでは、本高14号墳における様々な要素を比較検討し、因幡における前方後円墳の出現と歴史的評価について述べていきたい。

### 第2項 築造過程と墳丘の復元

#### 1. 墳丘の現状（第69図）

墳丘全体の遺存状況は、良好とはいえない。検出した墳丘の大部分は基盤層（IV層）が露出し、地形改変の影響も相まって、墳丘構築時の地表、旧表土は盛土の直下等部分的にしか確認できなかった。地形の改変は墳丘南側半分で顕著に認められ、浸食、地滑りの影響により、墳丘ラインはくびれ部以外は不明瞭である（第69図上）。

一方、墳丘北側半分は前方部半ばから前端にかけて地滑りの影響が認められるものの、後円部は等高線が円弧を描く。またくびれ部から前方部半ばにかけて多少地形は乱れているが、墳丘の旧状を良好に保持している。

盛土は後円部と前方部の一部で確認できた。後円部の盛土箇所は墳頂壇状部、そして南西斜面に広がる墳丘裾までの範囲である。南西斜面には谷地形があり、そこは墳丘整形時に盛土されている。前方部の盛土は前端で確認でき、その厚さは約0.2m。盛土は部分的で流出している可能性がある。そのため、築造時の前方部前端はさらに高いと推定できる。

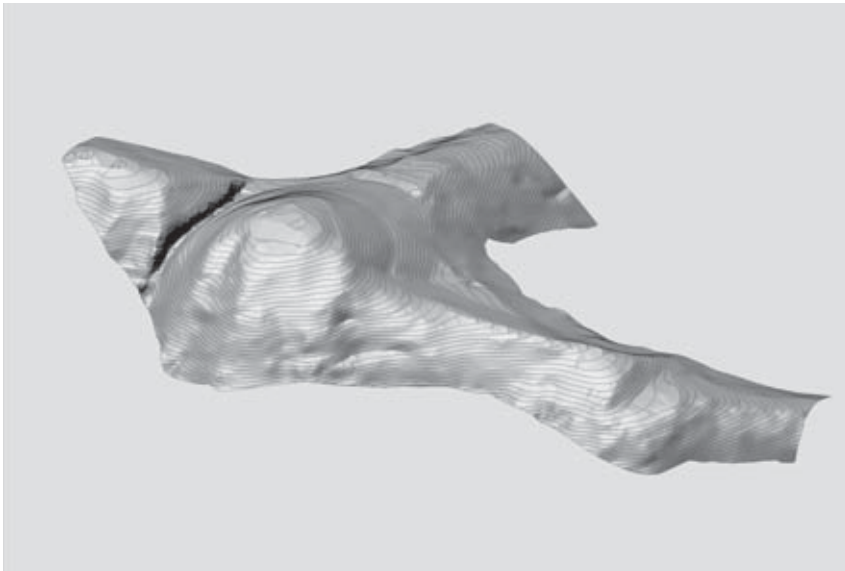
#### 2. 墳丘の築造過程（第69図）

本高14号墳は、旧地形から墳丘を削り出して整形され、整形に伴う発生土が一部盛土されている。後円部の西側は周溝を掘削することによって丘尾切断を行い、前方部前端は斜面と平坦面を築いて墳丘を画する。

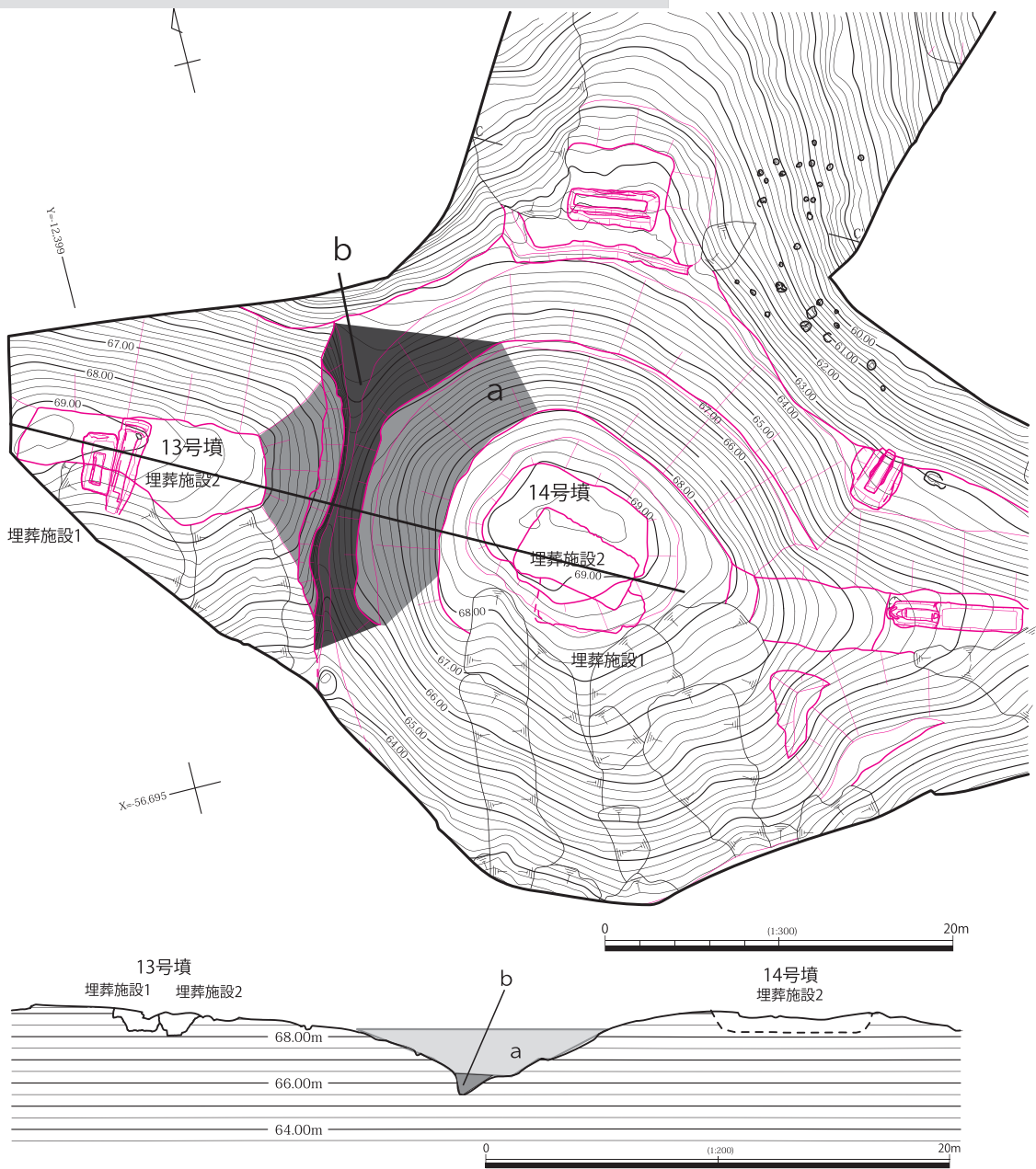
後円部は、墳丘北側を中心に旧地形を削り出して整形されているが、南側は崩落、浸食によって地形が改変された箇所を除けば、等高線は円弧を描くようにも見受けられる。周溝に接する南西斜面は盛土によって整形されている。一方、後円部南側では盛土の存在が確認できないが、南西斜面から一連で盛土されたことも考えられる。

「第IV章 調査の成果」でも述べたように、後円部南西斜面の盛土の分布状況から、周溝の掘削作業と盛土作業を一連の工程で行うことが可能であり、合理的に考えると、周溝掘削で生じる発生土が南西斜面に盛土されたと想定した（第69図下）。

さらに周溝の断面形状をみると、周溝外側にあたる13号墳の墳丘南東斜面に傾斜変換が認められ、傾斜変換の上部の斜面は整形角度 $26^{\circ} \sim 30^{\circ}$ 、下部は整形角度約 $60^{\circ}$ となる。上部は緩やかだが、下部の整形角度から14号墳の丘尾切断が急角度で行われた様子が読み取れる。これに対する14号墳後円部側の斜面は、テラスを境に上段、下段にわけると、上段は斜面の角度が $30^{\circ}$ 前後、下段もほぼ同じ角度で整形されている。後円部の整形角度と、周溝の外側（13号墳側）上部の整形角度がほ



14号墳 墳丘三次元 鳥瞰図



第69図 14号墳 墳丘三次元 鳥瞰図および周溝，墳丘の築造

ぼ等しいことから、後円部西側の墳丘整形作業は、周溝の掘削作業と一連の作業工程内にあり、少なくとも以下の二段階で作業が行われたものと推定する。

第1段階 周溝と後円部テラスまでの掘削（a）→傾斜変換点上部

第2段階 後円部テラスから周溝底面までの掘削（b）→傾斜変換点下部

第1段階の掘削（a）では、後円部の円弧を確保する作業が主である。

本高14号墳後円部は、地形を最大限生かして整形されている。墳丘の対称性を考慮して正円を確保するためには、13号墳側の尾根をさらに削りこむことが必要であるが、掘削はそこまで及んでいない。周溝の南北端には谷地形が続いており、谷地形に挟まれている。周溝は谷地形によって尾根幅が狭くなった場所を選んで掘削されたと想定している。

なお、第1段階の整形範囲は、後円部北側斜面の整形角度が墳丘西側斜面のそれとほぼ同じである。また、後円部南側については、作業単位の目安となるテラスが検出できず、盛土の存在も考えられるため、現状から作業範囲等は窺えない。南西斜面の盛土範囲までであろうか。

第2段階の掘削（b）は、円弧の形状を整える作業が主である。

周溝の北側は、斜面をさらに削り込むことによって「ハ」の字形に広げる。この部分は、千代川側の平野部から14号墳を眺望したときに、14号墳の後円部を際立たせる視覚的効果を生んでいる。南側ではこの周溝拡張は不明瞭であり、北側からの眺望が意識されたことを強く窺わせる。

また、前方部は、前端の斜面およびその東側に広がる平坦面、南北のくびれ部を中心に旧地形を削り出して整形し、この作業の発生土が、前端で墳丘の盛土として利用されたと考える。

しかし、発生土は全てが盛土されたのではない。北側くびれ部平坦面に接する北側斜面には旧表土が残存し、その上部にⅣ、Ⅲ層の偽礫を多く含んだ地層が重層的に堆積する。この堆積層は、墳丘盛土が流出したものではなく、地山整形に伴う発生土のうち、盛土に利用されなかったものを斜面へ廃棄したものと考えた。

なお、後円部壇状部の整形と埋葬施設の構築の手順については、「第IV章 第3節」で述べたとおり、以下のように推定する。

- ① 埋葬施設1掘方をⅢ層（旧表土）から掘り込む。
- ② 埋葬後埋め戻しを行い、上部に盛土し壇状部を形成する（註12）。
- ③ 墳頂壇状部構築後、埋葬施設2が上面から掘り込まれ、埋め戻し後、再度壇状部を整形する。

### 3. 墳丘の復元（第70図）

以上を踏まえて墳丘復元を試み、二つの復元案を作成した。いずれの案も、墳丘構築過程の整合性等を十分勘案しつつ、復元作業を行っている。

墳丘の復元については、遺存状況の良好な墳丘北側のラインを基準とする。

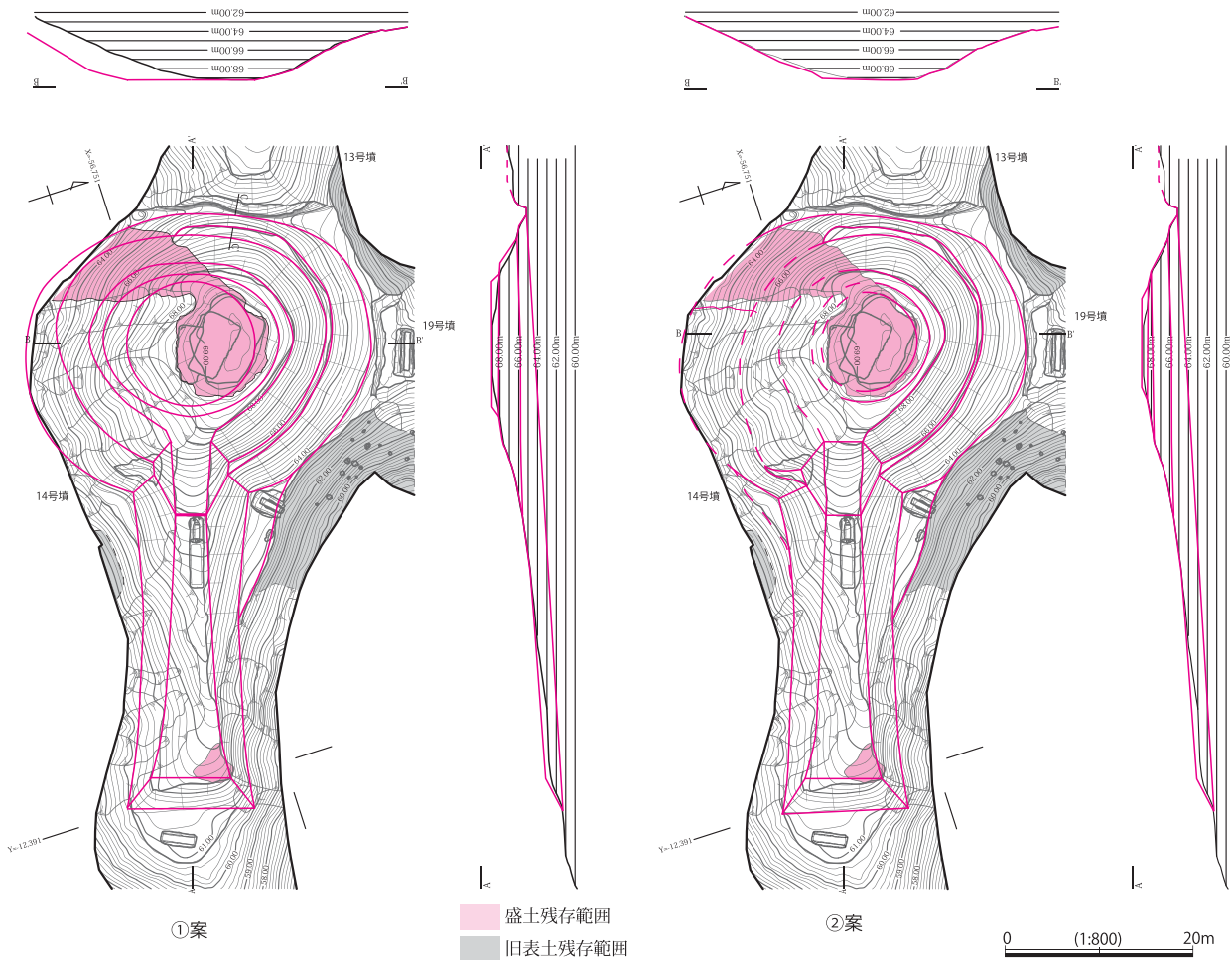
墳丘北側は各所のラインを前方部端へ延長することで復元でき、南側墳丘ラインは北側ラインを主軸線で折り返すことで復元可能と考えた。

なお、墳丘主軸線は、後円部の中心埋葬施設である埋葬施設1の中軸と、前方部前端上面の中軸を目安として設定した。

【①案】 主軸線で折り返した対称性を基準に平面形を復元した。

墳丘各部の数値は以下のとおりとなる。

復元全長 63.4m



第70図 14号墳復元案

- 後円部 復元下段長径 36.9m
- 復元上段長径 21.8m
- 墳頂平坦面 復元長径 14.0m
- 高さ 4.6m
- 前方部 復元長 33.8m
- 復元幅 13.7m

案では北側墳丘の遺存状況を重視したが、復元平面をもとに対称的な墳丘の構築するためには、後円部南側で最大約3m盛土する必要がある。後円部周辺の整形、周溝の掘削に伴う発生土だけでは、この盛土量は確保できないと考える。

【②案】 ①案に墳丘の流失状況などの調査所見を加えて、平面形を復元した。

各部の計測値は以下のとおりである。

- 復元長 63.5m
- 後円部 復元下段長径 36.3m
- 復元上段長径 18.0m
- 墳頂平坦面 復元長径 10.6m
- 高さ 4.6m
- 前方部 復元長 34.0m



## 復元幅 13.8m

この復元案では、本来の地形に即して後円部を整形したことが前提である。後円部の南側は崩落や浸食の影響が及んだ箇所を除けば等高線は弧を描いており、墳丘裾は南側くびれの傾斜変換線から等高線をもとに類推されるラインを想定した。後円部中段のラインは後円部西側のテラスから南側くびれに至るラインを墳丘裾と同様に弧に沿って描いている。墳頂部南側のラインも同様の手法から類推している。

また、墳頂壇状部については、残存している北側のラインを弧状に巡らすことによって推定した。

この結果、前方後円墳として墳丘は対称形にならない。

以上、2つの復元案を提示したが、後円部南側墳丘にどの程度の量の盛土がなされたか、復元主軸に対する左右の対称がどの程度企図されたのか、が重要なポイントとなる。これらを検証するためには、墳丘南側の谷（調査地外）に流れた墳丘流出土量を確認するしか術はない。

繰り返しとなるが、後円部南側は、崩落、浸食の影響を受け、墳丘が流出している可能性は極めて高い。一方で、後円部南側で墳丘にテラスの痕跡が確認できなかったことを考慮すると、墳丘南側の整形は省略されたとも想定でき、墳丘の復元としては②案の可能性が高いと考える。

### 4. 復元された墳丘の特徴と築造企画

本高14号墳は全長63mと周辺に展開する古墳の中では、比較的大規模な墳丘であり、畿内等、他地域の前方後円墳との間に何らかの築造企画が共有されていた可能性も当然考慮される。

後円部の形状には、議論の余地が残されているものの、当墳は、墳丘形態の特徴として①くびれ部が非常に締め狭い、②後円部二段、前方部一段、③前方部が細長く延び、前方部前端でやや広がる、④後円部のテラスが前方部に連続しない、⑤後円部と前方部の長さの比率が約1：1となる等の点があげられる。

①、③の特徴は出現期の前方後円墳に顕著に認められ、これらの特徴を有する前方後円墳を畿内で探せば、桜井茶白山古墳やメスリ山古墳など桜井茶白山系列とされる一連の古墳系列に当たる（註13）。また、④の特徴は箸墓の復元案とも共通している（註14）。総合的にみると、墳形は前期でも古相の特徴を有していると考えてよかろう。

## 第3項 鳥取平野における前期古墳の動向（表3）

### 1. 古墳の要素

鳥取平野周辺の尾根上には数多くの古墳が確認され、そのほとんどは群を形成している。近年、道路建設に伴って多くの古墳群が発掘調査され、前期古墳の情報も徐々に増加しつつある。特に、千代川西岸の尾根上に展開する前期古墳の調査は進んでおり、以前の調査事例と併せて、古墳前期の様相を地域全体で考えていく段階となっている。前期古墳の様相を把握する作業は、鳥取平野における本高14号墳築造の背景やその位置づけを考える上で重要と思われる。

これまで鳥取平野の前期古墳について、発掘調査成果をもとに、墓制の特徴やその変遷について、いくつか指摘されている（註15）。北 浩明、岩垣 命は鳥取平野周辺の前期から後期の古墳群について、「墳形」、「墳丘構築」、「墓壇」、「埋葬施設」を基軸に墓制を概観し、前代から受け継いだ「在地的」、「伝統的」な要素と、「外来的」、「先進的」な要素が混ざり合いながら変化していく様相を述べた（註16）。

ここでは北、岩垣が指摘した伝統的な墓制に加わる「外来的」、「先進的」とされた要素のうち、次の①円墳、②箱式石棺の導入に加え、③埴輪の導入を軸に、鳥取平野の前期古墳を概観する。

### ①円墳の導入

円墳の導入は、「千代川西岸北部」が前期前葉と早く、その他の地域ではやや遅れる。同地域の服部古墳群では、同一丘陵において連続する3基の古墳があり、17号墳（方墳）→18、19号墳（円墳）と移行する（註17）。「千代川西岸南部」の篠田古墳群（註18）では、前期前葉から後葉にかけて11号墳（円墳?）・7・8・9・10号墳（方墳）→5・6号墳（円墳）へと移行し、「鳥取平野南東部」の広岡古墳群（註19）では、前期後半に築造された76～78号墳（方墳）と、隣接する尾根頂部に築造された79～82号墳（円墳）が時期を重複して併存する。

前期における円墳導入の契機ははっきりとしないが、畿内等、他地域との交流の中で導入されたものといえる。

### ②箱式石棺の導入

箱式石棺の導入が認められる地域は、「千代川西岸北部」、「千代川西岸南部」、「鳥取平野南部」、「同平野南東部」である。

導入当初は木棺を中心埋葬施設とし、副次埋葬として箱式石棺を用いた例が多く、導入は概ね前期中葉以降とされる。木棺を採用しながら、石棺と同構造を意識した例は、前期前葉の服部古墳群に認められる。円墳である18、19号墳の中心埋葬施設は木棺が想定され、小口部分には板石を立て、石棺を意識した形態が認められる。一方、方墳である17号墳の中心埋葬施設には小口部分に板石が認められない。墳形が方墳から円墳に移行する過程で、石棺を意識した棺形態が出現したことが窺える（註20）。

副次埋葬施設に箱式石棺を導入した例には、「千代川西岸北部」の本高18号墳、釣山34号墳、「千代川西岸南部」の倭文7号墳、篠田6・11号墳、「鳥取平野南部」の広岡79・82号墳があり、いずれも前期後半に位置づけられる（註21）。また、箱式石棺を中心埋葬施設に採用した例は、前期後半に「千代川西岸北部」の本高17号墳、「千代川西岸南部」の倭文7・8号墳、「鳥取平野南東部」の面影山33・34号墳に認められる（註22）。

これらのうち、本高17号墳、釣山34号墳を除けば、円墳に採用されていることから、円墳の導入と同様、他地域から影響を受けて箱式石棺を導入したものと考えられる。

### ③埴輪の導入

鳥取平野周辺で埴輪が出土した事例は少なく、地域的にみると「千代川西岸南部」、「鳥取平野南部」に限定される。出土事例中、「千代川西岸南部」の倭文5号墳で棺に利用されたものが前期後半で最古段階とされる（註23）。また、墳丘上の樹立が想定される古墳は、いずれも前方後円墳で、六部山3号墳、古郡家1号墳となる（註24）。特に、六部山3号墳から出土した埴輪は、普通円筒埴輪の上部がすぼまり、短い口縁部を持つ因幡地方に独特な形態で、「因幡型円筒埴輪」とされる（註25）。

以上、円墳、箱式石棺、埴輪の3つを墓制に取り込まれた新しい要素として、鳥取平野の前期古墳におけるこれらの導入状況を概観した。新規要素のうち円墳の導入は、前期前葉から「千代川西岸北部」、やや遅れて前期後半には「湖山池周辺」を除き、各地域で古墳群ごとに導入されている。箱式石棺の導入は本格的には前期後半以降、「千代川西岸北部」、「同南部」、「鳥取平野南部」が先行して導入したことが確認できた。

表3 鳥取平野における前期古墳群と要素

地域		湖山池周辺					
		南西部			南東部		
古墳時代	前葉						
	前期						
	後葉						
		吉岡古墳群	松原古墳群	倉見古墳群	桂見古墳群	里仁古墳群	

地域		湖山池周辺					
		南西部			南東部		
古墳時代	前葉						
	前期	方形			方形		
	後葉		木棺		円形	木棺	

地域		千代川西岸					
		北部			南部		
古墳時代	前葉						
	前期						
	後葉						
		徳尾古墳群	古海古墳群	本高古墳群	横枕古墳群	篠田古墳群	倭文古墳群
		釣山古墳群	服部古墳群				

地域		千代川西岸					
		北部			南部		
古墳時代	前葉						
	前期	方形			方形		
	後葉	円形	木棺	箱式石棺	円形	木棺	箱式石棺

地域		鳥取平野					
		南部			南東部		
古墳時代	前葉						
	前期						
	後葉						
		美和古墳群	六部山古墳群	面影山古墳群	糸谷古墳群		
			広岡古墳群				

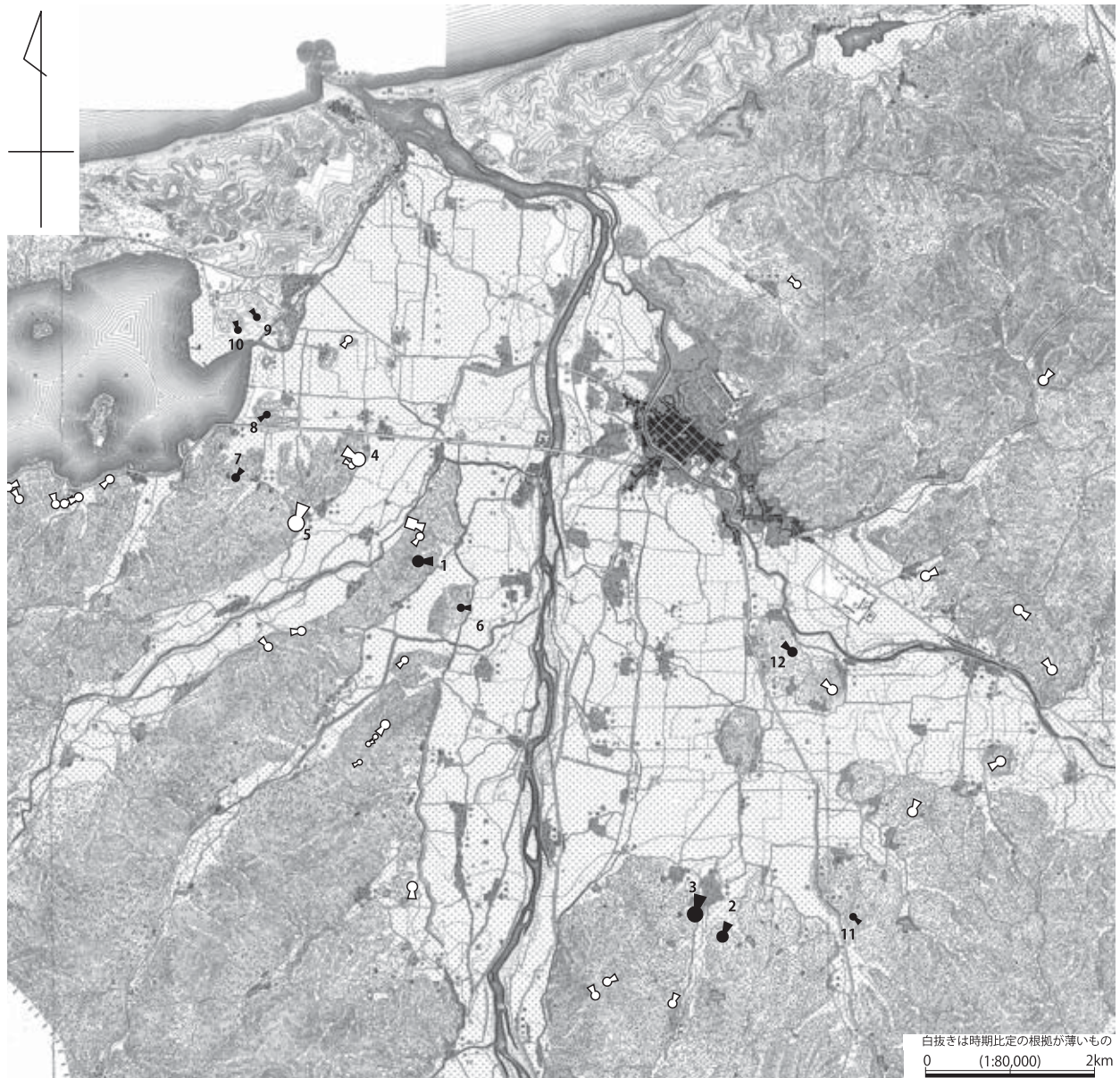
地域		鳥取平野					
		南部			南東部		
古墳時代	前葉						
	前期	方形			方形		
	後葉	円形	木棺	箱式石棺	円形	木棺	箱式石棺

また、埴輪は棺としての導入ではあるが、前期後半に「千代川西岸南部」、「鳥取平野南部」が先行する。これら新規要素導入は、畿内を含めた他地域との地域間の交流の中で導入され、円墳が先行し、やや遅れて箱式石棺が埋葬施設に採用される。

2. 鳥取平野における前方後円墳の出現 (第71図, 表4)

因幡地方の前方後円墳の出現と展開については中原 斉の研究がある(註26)。中原は、因幡では畿内などの先進地域より前方後円墳の出現は遅れて、千代川東岸の六部山3号墳から始まると推定した。さらに、六部山3号墳の系譜は、小さな谷を隔てて西側に築かれた古郡家1号墳へと続き、この時期において因幡地方全体を掌握するような広域の首長権が確立されたとする。以後、鳥取平野南部では大型前方後円墳の築造は一時途絶え、千代川西岸の里仁29号墳や楠間1号墳、古海36号墳へと大型前方後円(方)墳の系譜が移り、後期に入ると千代川の東西で50m級の前方後円墳が継続して築造されるとともに、桂見6号墳や釣山2号墳などのように全長20～30mの比較的規模の小さな前方後円墳が周辺の丘陵に築かれるようになる。

因幡地方で最古とされた六部山3号墳と本高14号墳との直接的な対比は困難であるが、個別の属



第 71 図 鳥取平野の前方後円墳分布

白抜きは時期比定の根拠が薄いもの  
 0 (1:80,000) 2km  
 大日本帝國陸地測量部 明治三十三年発行を引用、一部改変

表 4 鳥取平野の主な前方後円墳

No.	古墳名	全長 (m)	標高 (m)	比高 (m)	時期	No.	古墳名	全長 (m)	標高 (m)	比高 (m)	時期
1	本高 14 号墳	63	69	60	前期中頃	7	桂見 6 号墳	24.5	22	20	後期
2	六部山 3 号墳	63	30	10	前期後半	8	布勢古墳	約 59	30	25	後期
3	古郡家 1 号墳	92	40	30	前期後半～ (中期初頭)	9	三浦 1 号墳	36	20	15	後期
4	里仁 29 号墳	81	40	30	中期	10	大熊段 1 号墳	約 45	30	20	後期
5	梶間 1 号墳	92	30	20	(中期)	11	海蔵寺 4 号墳	25	60	50	後期
6	釣山 2 号墳	26.4	70		後期	12	面影山 11 号墳	約 26.5	50	40	後期

※『前方後円墳集成 中国・四国編』, 各発掘調査報告書を参考に作成

性をみると、本高14号墳は六部山3号墳より古く位置づけられる可能性を持つ。本高14号墳の周辺埋葬施設から出土した小型丸底壺が布留2式に位置づけられることから、中心埋葬施設はこれより遡る可能性がある。中心埋葬施設の構造については両墳とも不明な点が多いが、墳丘に認められる属性をみると、六部山3号墳では埴輪が採集されていることから、墳丘上に樹立された可能性をもち、周辺埋葬施設には埴輪棺が用いられている。本高14号墳では、埴輪を用いていない。埴輪の樹立、周辺埋葬施設に埴輪が用いられたことを後出する要素とみれば、本高14号墳は六部山3号墳より古くなる可能性が強い。

一方、これまで認識されていた六部山3号墳と、新たに確認された本高14号墳の存在によって、千代川東、西岸で前期から前方後円墳が築造されていたことが明らかとなり、千代川の東西勢力のうちどちらかが卓越する状況ではないと考えられるようになった。

また、鳥取平野における前方後円墳の出現は、定型化した前方後円墳が突然現れるのではなく、本高14号墳のように埴輪、葺石などの属性が欠落した形でまず導入されることが明らかとなり、この地域における前方後円墳導入過程を考える上で意義ある成果を得た。

#### 第4項 まとめにかえて—因幡における前方後円墳の導入—（第72図、表5）

前節では調査を行った本高古墳群全体の検討を行い、本節では、その中でも盟主墳となる本高14号墳に焦点を絞って検討を行ってきた。これまでの作業から本高14号墳については、以下のことを明かにできた。

- ① 周辺埋葬施設から出土した土器は前期後半に位置づけられ、中心埋葬施設構築の時期はこれより遡り、前期中葉末頃に遡る可能性をもつ。
  - ② 墳丘は柄鏡形ないし撥形で、前方部が細長く、その形態は古相を示す。
  - ③ 墳丘には埴輪、葺石を伴わないことから、六部山3号墳より古くなる可能性が強い。
- これらを踏まえて、本高14号墳の歴史的な位置づけを考えてみたい。

まず、時期的な併行関係を辿る上で、14号墳出土土器のうち、小型丸底壺（布留2式併行）は重要である。同型式の土師器が出土した松本1号墳（島根県三刀屋町 註27）は、前方後円墳集成の3期に位置付けられており、本高14号墳を当てはめると表5のようになる。即ち、本高14号墳は山陰地方でも最古級の前方後円墳となる。②で明らかとした墳丘の特徴もこれを傍証する。

③から、因幡における導入初期の前方後円墳は、葺石や埴輪を備えていないことが窺える。墳形という要素のみ採用した点を、因幡地方における導入期の前方後円墳の特徴と捉えることが可能である。

また、出雲で最古級の前方後円墳とされる廻田1号墳（前期末）では、埴輪の樹立が認められるものの、葺石を備えていない（註28）。時期的には本高14号墳より下るものの、出雲でも、導入期に当たる前方後円墳が葺石等の前方後円墳としての属性を全て備えていない点は注目される。

さらに、因幡地方への前方後円墳導入の背景には、第3項で確認したように前方後円墳出現前から続く交渉が素地としてあったことも軽視できない。

前方後円墳体制を唱えた都出比呂志は、葺石などの属性を備えない前方後円墳を畿内の政治中枢からみた序列の中で、下位に位置付けられる首長の墓と推定した（註29）。

古墳時代前期の畿内中枢を中心とする前方後円墳体制の階層性の中では、本高14号墳の被葬者を必ずしも重視できる位置に比定し得ないとしても、前方後円墳という墳形が、因幡地方において畿内

表5 山陰地方の主な前方後円墳（前期）

古墳時代	共通編年	地域編年	石見	出雲	伯耆	因幡
前期	前半	1期				
		2期				
	後半	3期	■松本1号(50)	国分寺(60) 馬ノ山4号(100) 尾尻(30) 宮内狐塚(30) 浅井11号(45)	本高14号(63) 六部山3号(63)	
		4期	大元1号(88)	大寺1号(50) 廻田1号(58)	古郡家1号(92)	

■は前方後円墳 ※『前方後円墳集成 中国・四国編』, 各発掘調査報告書を参考に作成

との関係を周囲に強く印象付けるには十分なものと考えられよう。その姿から因幡地方において前方後円墳として他の属性まで必要ではなかったか、あるいは、畿内中枢から属性の一部を備えない形でしか前方後円墳の築造が許容されなかったか、という社会的あるいは政治的背景が象徴的に示唆される。

本高14号墳は因幡地方の前方後円墳導入を考えるうえで、極めて重要な位置を占めているということができよう。

註

- 1) 谷口はⅦ-1期からⅦ-2期の壺・甕の変化、胴部が球胴から長胴化する傾向、口縁部上端部が平坦面をもつようになる傾向、底部内面の指頭圧痕が徐々に体部の上半に上がる傾向を指摘しており、松井 潔の変遷観もほぼこれに沿う。  
谷口恭子2000「因幡における弥生後期から庄内式併行期の土器について」『庄内式土器研究』XXII, 庄内式土器研究会  
松井 潔1997「東の土器, 南の土器—山陰東部における弥生時代中期中葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態—」『古代吉備』第19集, 古代吉備研究会
- 2) 牧本哲雄1999「第9章 第1節 古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ 園第6遺跡』財団法人 鳥取県教育文化財団
- 3) 鳥取県埋蔵文化財センターが平成20年度, 当財団で平成21年度から調査。古墳時代前期の遺構が確認されており, 本高古墳群との関係が注目される。
- 4) 山田真宏編2004『倭文所在城跡・倭文古墳群』財団法人 鳥取市文化財団
- 5) 藤本隆之編2004『篠田古墳群』財団法人 鳥取市文化財団
- 6) 前註4
- 7) 鳥取市内の古墳では篠田6号墳(鉦), 横枕25号墳(鉄剣)などに類例がある。  
前註5

- 谷口恭子編2003『横枕古墳群Ⅱ』財団法人 鳥取市文化財団  
集落の廃棄例では大阪府寝屋川市讃良郡条里遺跡などで確認されている。  
(財)大阪府文化財センター 2008『讃良郡条里遺跡Ⅶ』財団法人 大阪府文化財センター
- 8) 藤本隆之編2002『下味野古墳群Ⅰ』財団法人 鳥取市文化財団  
谷口恭子編2004『下味野古墳群Ⅱ 下味野童子山遺跡』財団法人 鳥取市文化財団
- 9) 山田真宏, 神谷伊鈴編2002『横枕古墳群Ⅰ』財団法人 鳥取市文化財団  
谷口恭子編2003『横枕古墳群Ⅱ』財団法人 鳥取市文化財団  
前田 均編2007『横枕古墳群Ⅲ』財団法人 鳥取市文化財団
- 10) 梅原末治1922『因伯二国における古墳の調査』鳥取県  
亀井照人1972「第三章 古墳時代とその文化 第三節 因幡国の古墳群」『鳥取県史1』鳥取県
- 11) 中原 斉編1985『里仁古墳群』財団法人 鳥取県教育文化財団
- 12) 検出段階で埋葬施設1周囲の状況から, 壇盛土は検出範囲よりも広く施されていたと推測できる。
- 13) 澤田秀美2000「第3章 考察 第1節 墳丘形態からみた美作諸古墳の編年的位置付け」『美作の首長墳』株式会社 吉備人出版
- 14) 白石太一郎, 春成秀爾, 杉山晋作, 奥田 尚1984「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集, 国立歴史民族博物館
- 15) 谷口恭子2003「まとめ」『横枕古墳群Ⅱ』財団法人 鳥取市文化財団  
北 浩明, 岩垣 命2009「第5章 総括」『松原古墳群Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター
- 16) 前註15
- 17) 谷口恭子編2001『服部墳墓群』財団法人 鳥取市文化財団
- 18) 前註5
- 19) 鳥取市遺跡調査団1989『広岡古墳群発掘調査概要報告書—広岡76・77・78・80・81・82号墳の調査—』鳥取市遺跡調査団
- 20) 前註17
- 21) 前註4, 5, 19  
山田真宏, 谷口恭子編1992『釣山古墳群発掘調査概報Ⅱ』鳥取市遺跡調査団
- 22) 稲浜隆志1996『面影山古墳群発掘調査報告書』財団法人 鳥取市教育福祉振興会
- 23) 前註4
- 24) 前註10
- 25) 「因幡型円筒埴輪」は丹後地方に分布する「丹後型円筒埴輪」との類似性が指摘され, 丹後型埴輪の成立に因幡型埴輪が影響を与えた可能性も考えられている。こうした背景には日本海の海上交通を介した関係が存在したと推定されている。  
東方仁史編2008『因幡・伯耆の王者たち』鳥取県立博物館
- 26) 中原 斉1994「因幡における前方後円墳の出現と展開」『前方後円墳の出現を巡って』両丹考古学会
- 27) 出雲考古学研究会編1991『松本古墳群』出雲考古学研究会  
松山智弘2002「土器から見た出雲における前期古墳」『山陰の前期古墳』2002第30回山陰考古学研究集会事務局

- 28) 島根県古代文化センター，島根県埋蔵文化財調査センター編2003『出雲地方における前方後円墳の出現とその時代』島根県教育委員会
- 29) 都出比呂志2005「第10章 前方後円墳の誕生」『前方後円墳と社会』株式会社 塙書房

参考文献

- 近藤義郎編1991『前方後円墳集成 中国・四国編』株式会社 山川出版社
- 近藤義郎編2000『前方後円墳集成 補遺編』株式会社 山川出版社



## 第Ⅵ章 結語

平成21年5月から始まった本高古墳群の発掘調査では、山陰最古級の前方後円墳を含めた古墳の展開を明らかにすることができた。

今回の調査で特筆すべきは、前方後円墳の存在である。しかし、前方後円墳の存在が周知されていたわけではなく、調査当初は、後円部が円墳として認識されていたにすぎなかった。伐木前に本高古墳群の状況を確認した時には、立木によって周囲の見通しは利かなかったものの、後に後円部となる円形の盛り上がりや、周溝の痕跡が他の古墳より際立っていたことは確かだった。

前方後円墳の可能性が初めて考えられたのは、伐採後の現地確認のため、再び踏査を行った時のことである。群内に展開する各古墳の場所を現地で確認し、調査地北端に至った時、振り返って南方向を望むと、「これ、前方後円墳かもしれんわ！」と岡戸が叫んだ。なるほど、東西に延びるその輪郭は前方後円墳の側面観を強く窺わせ、その存在を初めて意識することとなった。平成21年4月6日のことである。

しかし、立地する尾根は極度に痩せており、かろうじて北側くびれ部の形状が前方後円墳を意識させる程度であった。しかも、墳丘の各所には小さな谷や抉れた崩落地形がいたるところにあり、にわかには前方後円墳と断定するには至らなかった。

調査では、後円部側から墳丘検出作業を進め、前方後円墳の当否を検証する作業を繰り返し行なった。その過程で後円部中段のテラス、対称的な位置にあるくびれ部を検出したことにより、前方後円墳だ、という確信を初めて得ることができた。

続けて埋葬施設の調査では、北側くびれ部に構築された埋葬施設から小型丸底壺が出土し、これによって鳥取県内でも最古級の前方後円墳であることが明らかとなった。

そこから本高14号墳が、当地域の歴史を考える上で重要な位置を占める前方後円墳との評価に至るまで、そう時間を要しなかった。当墳の中心埋葬施設は、国土交通省と14号墳の現地保存を協議することになったため、完掘せず、部分的な調査に留めたのだが、そこに葬られた人物は、千代川西岸地域の大首長層で、畿内との強い結びつきを持っていたことが類推されたからである。

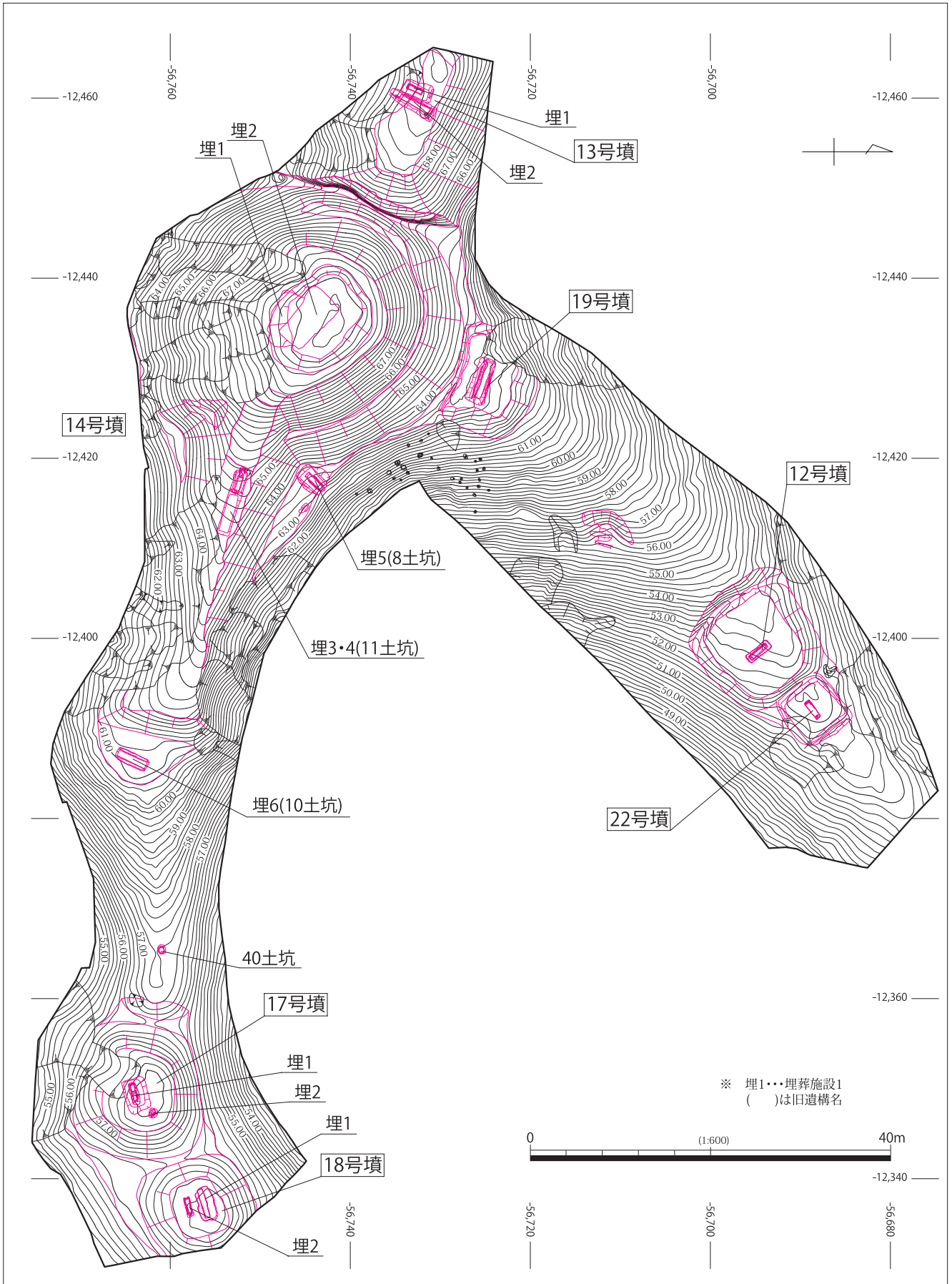
結果として、本高14号墳は保存されることに決定した。このことは関係各位の英断の賜であり、誠に喜ばしい。

1,600年間、ひっそりと本高の地に眠っていた本高古墳群は、鳥取県の発展を期待する道路建設に伴って、再び姿を現すこととなった。本書では、調査担当者として本高古墳群を評価してきたが、地域の歴史研究を発展させ、鳥取県の歴史を明らかにしていくためにも、現段階の評価をさらに高め、地域の古墳時代像を解明して行くことが、1,600年も眠っていた被葬者に対する敬意も含めて必要なことだと考えている。

因幡で初めて築造された前方後円墳。当時の人々が仰ぎ見た姿を、現在のわれわれが再び仰ぎ見ている。



# 写真図版



第72図 本高古墳群全体図 (1/600)



1 調査地遠景（調査前，南西から）



2 調査地遠景（調査後，南西から）



1 古墳群調査状況（俯瞰：写真上が北）



2 北支群 調査状況（北東から）



1 12・22号墳 墳丘検出状況（北東から）



2 12・22号墳 墳丘検出状況（南東から）

図版4



1 12号墳 墳丘土層断面（北から）



2 12号墳 墳頂部調査状況（南西から）



1 12号墳埋葬施設 棺痕跡検出状況（南東から）



2 12号墳埋葬施設 棺内遺物出土状況（北西から）



3 12号墳埋葬施設 鉄剣出土状況（東から）



4 12号墳埋葬施設 土器枕, 鉄剣出土状況（西から）



5 12号墳埋葬施設 鉄鎌出土状況（北東から）



6 12号墳埋葬施設 刀子出土状況（南西から）





1 12号墳 埋葬施設出土遺物



2 12号墳埋葬施設 出土土器



3 12号墳周溝 出土土器



1 22号墳 墳丘, 周溝検出状況  
(南西から)



2 22号墳 墳丘検出状況  
(南から)



3 22号墳 調査状況  
(南西から)

図版8



1 22号墳 周溝遺物出土状況  
(南東から)



2 22号墳 周溝出土遺物



3 22号墳 周溝土層断面  
(東から)



1 22号墳埋葬施設 検出状況（南西から）



2 22号墳埋葬施設 棺内遺物出土状況（北東から）



3 22号墳埋葬施設 鉄剣出土状況（北東から）



4 22号墳埋葬施設 出土鉄剣



1 14号墳 墳丘（調査前，北から）



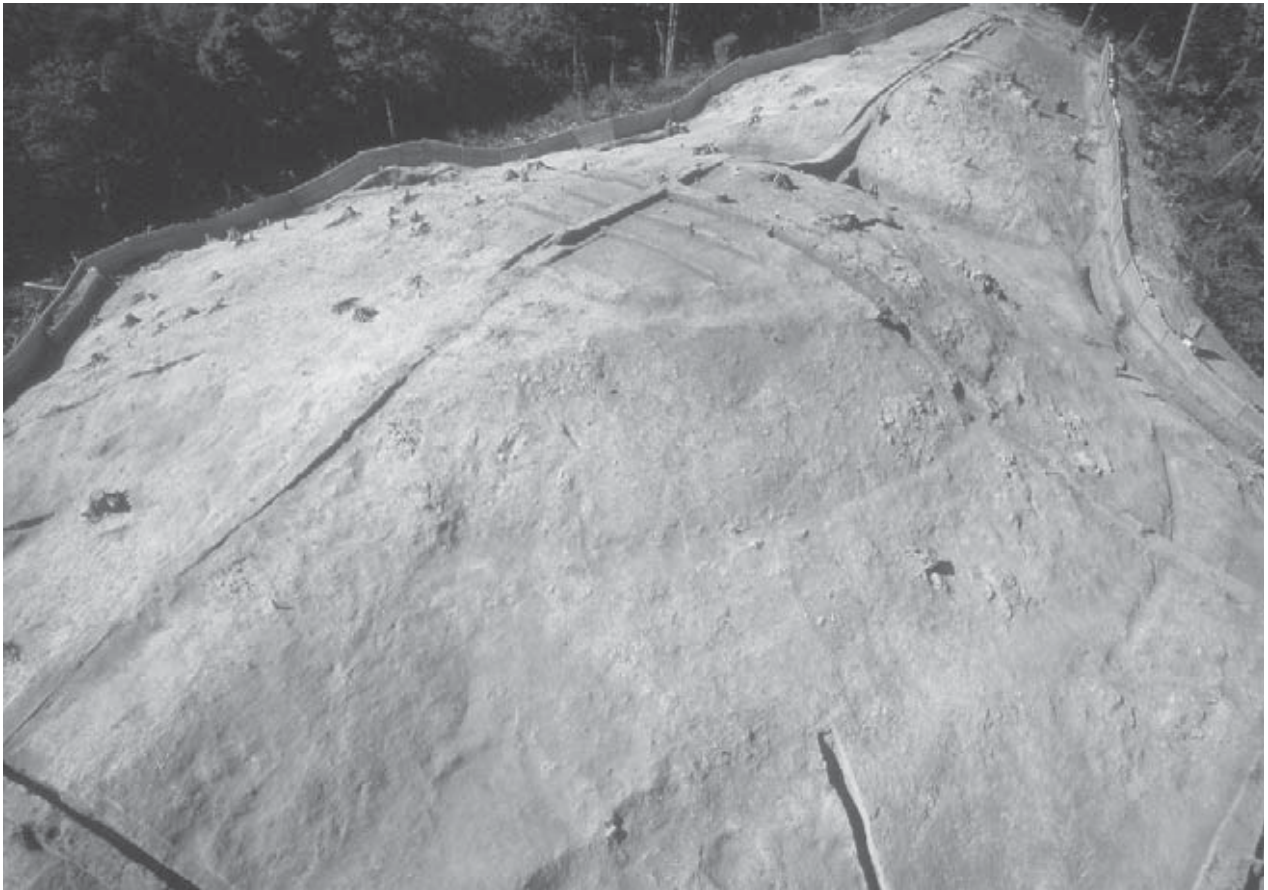
2 14号墳 墳丘検出状況（北から）



1 14・19・13号墳 調査状況（俯瞰：写真上が南）



2 14号墳 墳丘検出状況（北東から）



1 14号墳 後円部検出状況（北東から）



2 14号墳 前方部からみた後円部（東から）

1 14号墳 墳頂壇状部  
検出状況（東から）



2 14号墳 北側くびれ部検出  
状況（南東から）



3 13・14号墳 周溝および後円  
部検出状況（南西から）





図版14



1 13・14号墳 周溝土層断面  
(南から)



2 13・14号墳 周溝北側  
検出状況 (南東から)



3 13・14号墳 周溝南側  
検出状況 (東から)



1 13・14号墳 周溝 (南から)



2 13・14号墳 周溝出土遺物



3 14号墳 前方部 北側斜面土層断面 (北西から)



4 14号墳 前方部前端 盛土, 旧表土 (東から)



5 14号墳 前方部 前端斜面土層断面 (南から)



1 14号墳墳頂壇状部 検出状況（南東から）



2 14号墳埋葬施設1・2 調査状況（俯瞰：写真上が西）



1 14号墳埋葬施設1・2 調査状況（南東から）



2 14号墳埋葬施設2 棺内埋土検出状況（北西から）



3 14号墳埋葬施設2 土層断面（北から）



4 14号墳埋葬施設2 土層断面（南東から）



1 14号墳前方部 埋葬施設調査状況（俯瞰：写真上が西）



1 14号墳埋葬施設3・4  
調査状況（東から）



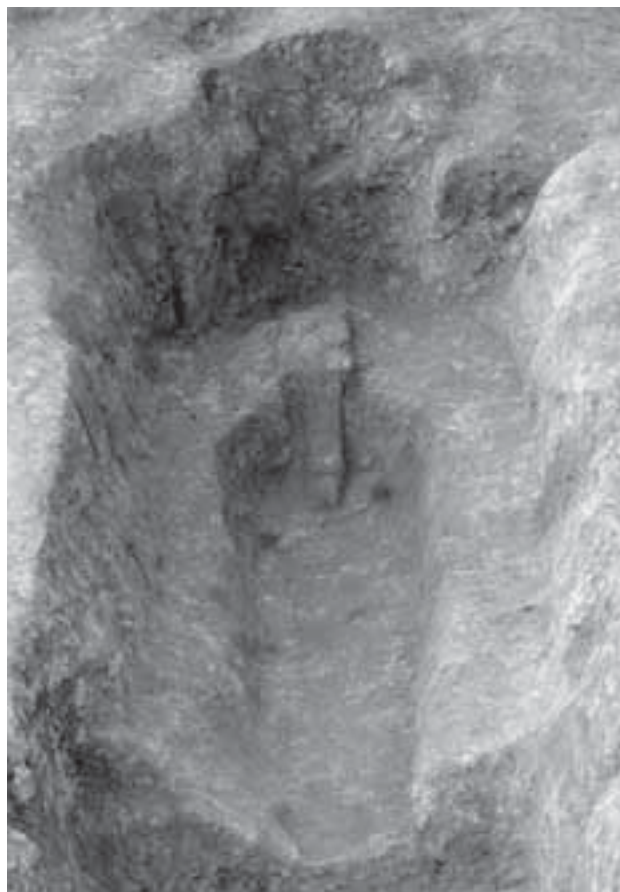
2 14号墳埋葬施設3 棺内埋土土層断面（北西から）



3 14号墳埋葬施設4 棺内埋土土層断面（北西から）



1 14号墳埋葬施設3 棺内埋土検出状況（東から）



2 14号墳埋葬施設3 遺物出土状況（東から）



3 14号墳埋葬施設3 小型仿製内行花文鏡，玉類出土状況（東から）



1 14号墳埋葬施設3 管玉出土状況（南東から）



2 14号墳埋葬施設3 小口痕検出状況（東から）



3 14号墳埋葬施設4 完掘状況（東から）



4 14号墳埋葬施設3 完掘状況（東から）



5 14号墳埋葬施設4 鉄製品出土状況（南東から）



6 14号墳埋葬施設4 土器出土状況（南東から）



7 14号墳埋葬施設4 出土遺物





1 14号墳埋葬施設5 完掘状況（北東から）



2 14号墳埋葬施設5 灰層検出状況（北東から）



3 14号墳埋葬施設5 出土土器

33



4 14号墳埋葬施設5 土器出土状況（南西から）



1 14号墳埋葬施設6 棺内調査状況（北東から）



2 14号墳埋葬施設6 掘方完掘状況（北東から）



5 14号墳埋葬施設6 出土土器

3 14号墳埋葬施設6 土器出土状況  
（俯瞰：写真上が南西）

4 同上（北東から）



1 19号墳 墳丘検出状況（南西から）



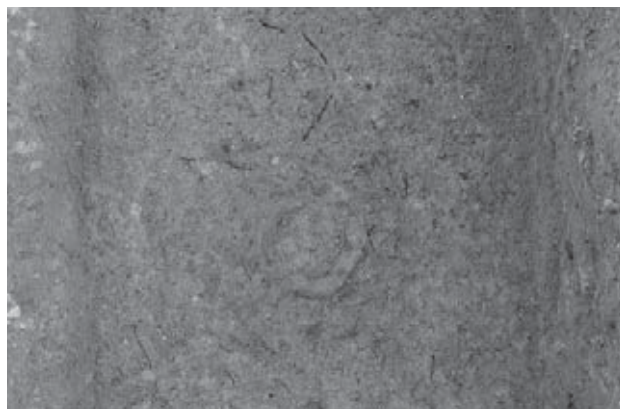
2 19号墳埋葬施設 棺痕跡検出状況（西から）



3 19号墳埋葬施設 棺内調査状況（西から）



1 19号墳埋葬施設 掘方完掘状況（西から）



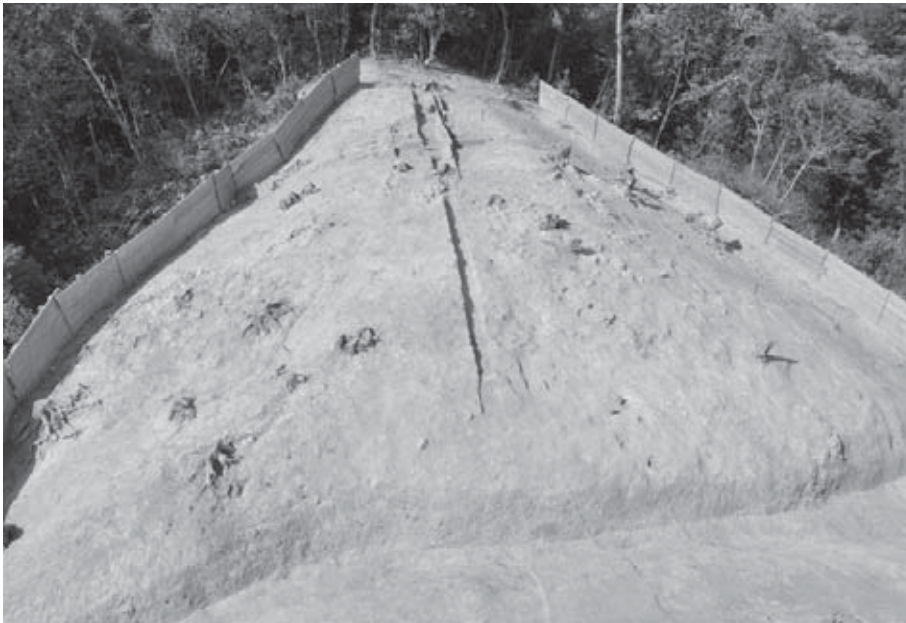
2 19号墳埋葬施設 棺痕跡, 遺物出土状況（西から）



3 19号墳 棺内出土鉄製品



4 19号墳埋葬施設 完掘状況（北から）



1 13号墳 墳丘検出状況  
(南東から)



2 13号墳埋葬施設1・2  
調査状況 (南西から)



3 13号墳埋葬施設1  
板石検出状況 (南西から)



1 13号墳埋葬施設1 板石下部検出状況（南西から）



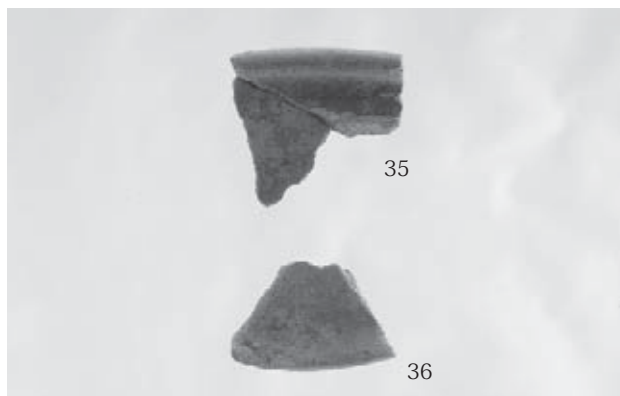
2 13号墳埋葬施設1 南辺小口（西から）



3 13号墳埋葬施設1 掘方完掘状況（南西から）



4 13号墳埋葬施設1 遺物出土状況（南西から）



5 13号墳埋葬施設1 出土土器



1 13号墳埋葬施設2 棺内  
遺物出土状況（南西から）



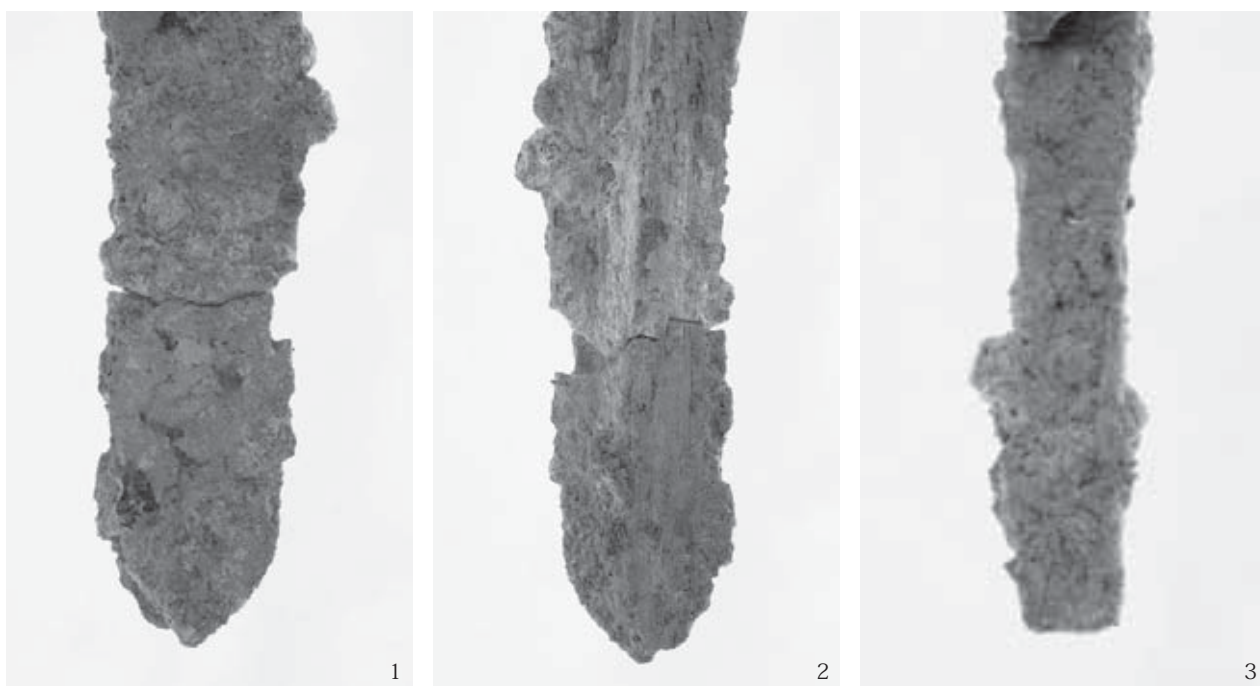
2 13号墳埋葬施設2 棺内  
遺物出土状況（西から）



3 13号墳埋葬施設2  
南小口痕検出状況（南西から）



1 13号墳埋葬施設2 出土遺物



13号墳埋葬施設2 出土鉄剣 (1:切先表, 繊維痕, 2:切先裏, 木痕跡, 3:柄, 目釘穴, 繊維痕)





1 17・18号墳 墳丘検出状況（北から）



2 17・18号墳 墳丘検出状況（西から）

1 17号墳 墳丘検出状況  
(東から)



2 17号墳 墳丘土層断面  
(南東から)



3 17号墳埋葬施設1 箱式石棺  
検出状況 (東から)





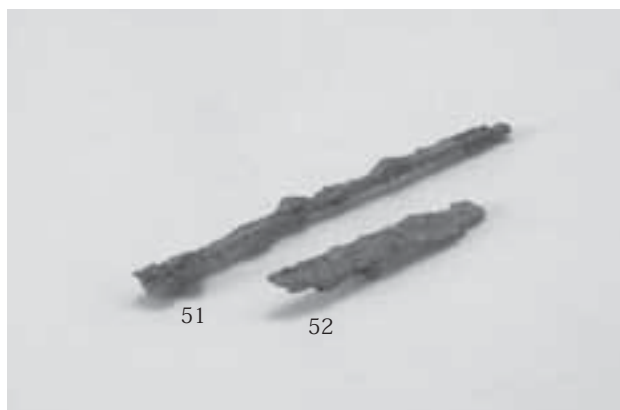
1 17号墳埋葬施設1 蓋石除去状況（東から）



1 17号墳埋葬施設1 棺内調査状況（東から）



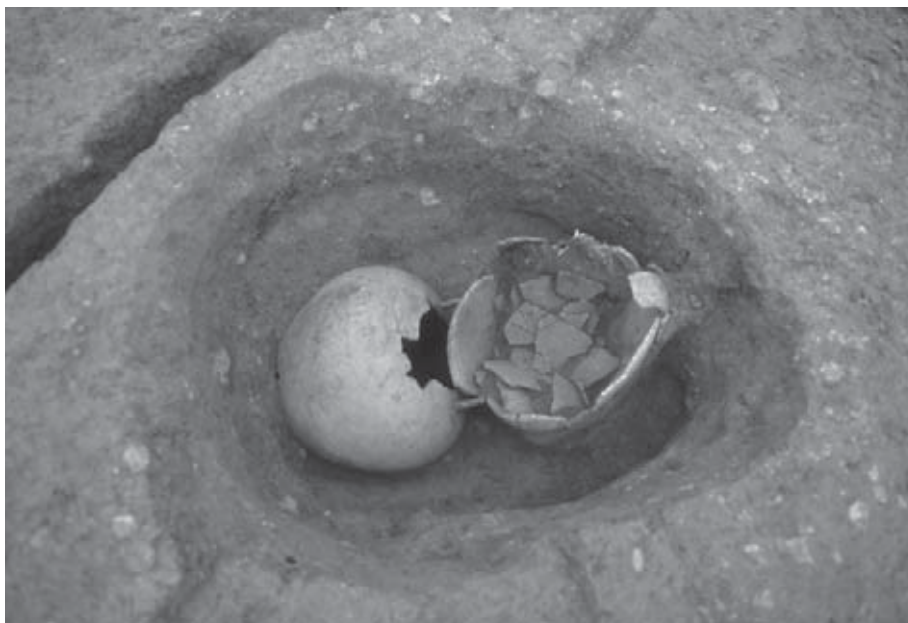
2 17号墳埋葬施設1 遺物出土状況（北東から）



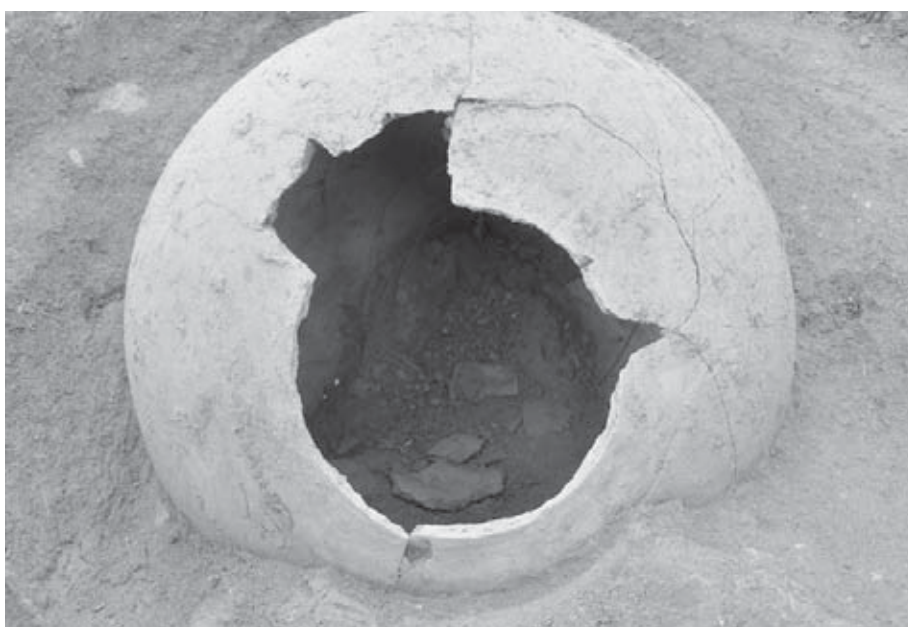
3 17号墳埋葬施設1 出土鉄製品



4 17号墳埋葬施設1・2 調査状況（北東から）



1 17号墳埋葬施設2  
土器棺検出状況（南から）



2 17号墳埋葬施設2  
土器棺内（東から）



55

3 17号墳 周溝出土土器



56

4 17号墳 周溝出土土器



1 18号墳 墳丘検出状況（西から）



2 18号墳埋葬施設1・2 検出状況（西から）



1 18号墳埋葬施設1・2 調査状況（西から）



2 18号墳埋葬施設1 棺内短軸土層断面（北東から）



3 18号墳埋葬施設1 土器出土状況（北東から）



4 18号墳埋葬施設1 土器出土状況（南から）



5 18号墳埋葬施設1 出土土器



1 18号墳埋葬施設2 蓋石検出状況（西から）



2 18号墳埋葬施設2 棺内検出状況（東から）



3 18号墳埋葬施設2 土器出土状況（東から）



4 18号墳埋葬施設2 出土土器



5 18号墳埋葬施設2 完掘状況（東から）

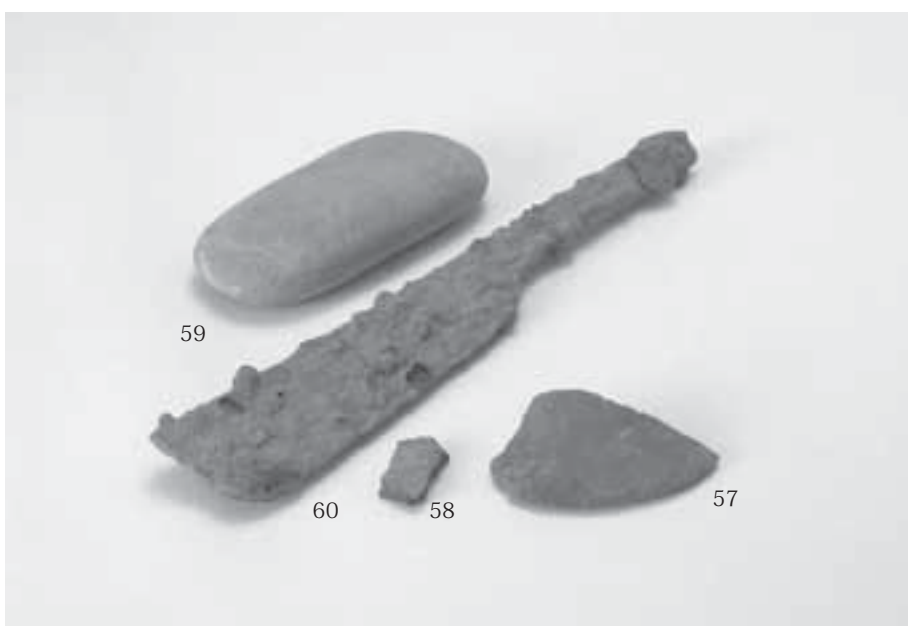




1 40土坑完掘状況  
(南から)



2 ピット群完掘状況  
(俯瞰：写真上が南)



3 遺構外出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	もとだかこふんぐん							
書名	本高古墳群							
副書名	一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	IV							
シリーズ名	鳥取県文化財調査報告書							
シリーズ番号	21							
編著者名	岡戸 哲紀, 大川 泰広, 田中 正利							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団調査室							
所在地	〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地 TEL (0857) 51-7552							
発行年月日	西暦2010年（平成22年）9月13日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとだかこふんぐん 本高古墳群	とっとりけんとっとりし もとだか 鳥取県鳥取市本高 神子ヶ谷ノ一509-1  とっとりけんとっとりし ふるみ 鳥取県鳥取市古海 清水谷1032-1 釜ヶ谷1020	31201	3-0142	35° 29' 19"	133° 11' 47"	20090501 ) 20091222	4720㎡	一般国道9号（鳥取西道路）改築事業
			）					
			3-0144					
			3-0385					
			3-0387					
3-0399								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
本高古墳群	古墳	古墳時代前期～中期	古墳 土坑	7基 1基	土師器, 須恵器, 鉄製品, 青銅製品, 玉類		山陰地方最古級の大型前方後円墳（全長63m）	
要約	千代川西岸の尾根上には、多数の古墳が存在している。今回の調査では、古墳時代前期から中期にかけて築かれた7基の古墳を確認した。本高古墳群は、尾根における選地、埋葬施設の特徴、副葬品、出土遺物等から3つのグループに分かれる。中でも注目されるのは古墳群の中心的存在である前方後円墳（14号墳）で、全長63m、平面形は前方部が細長く伸びる柄鏡形を呈している。築造時期は出土した土器等から古墳時代前期中葉末に遡る可能性をもつ。これは、山陰地方でも最古級に位置づけられ、本地方における前方後円墳の出現、古墳の展開を考えるうえで重要なものといえる。そのため、14号墳は国土交通省との協議により現地保存されることになった。							

鳥取県文化財調査報告書21

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

鳥取県鳥取市

もと      だか      こ      ふん      ぐん  
**本      高      古      墳      群**

発行 2010年9月13日

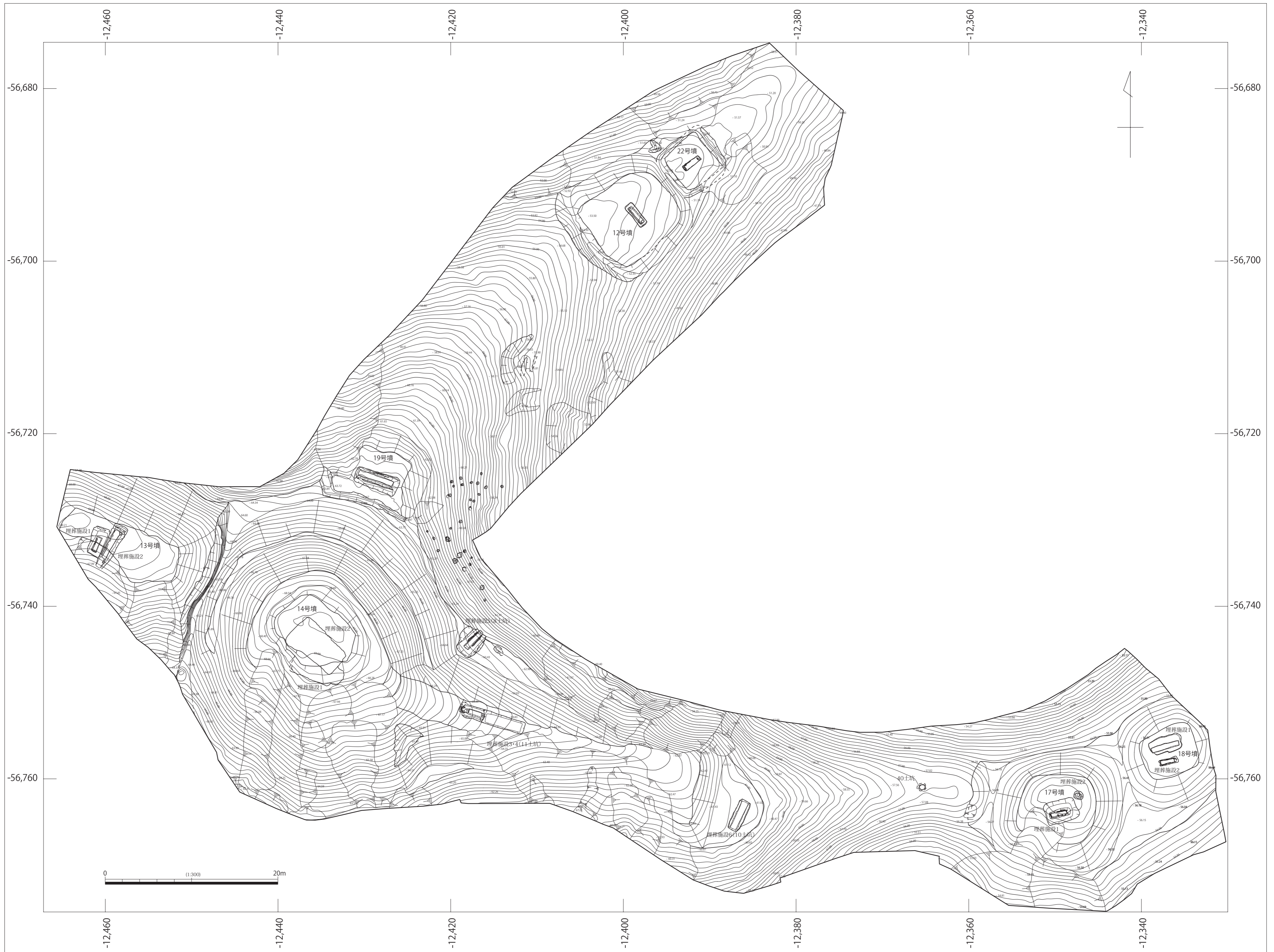
編集 財団法人 鳥取県教育文化財団

発行者 鳥取県教育委員会

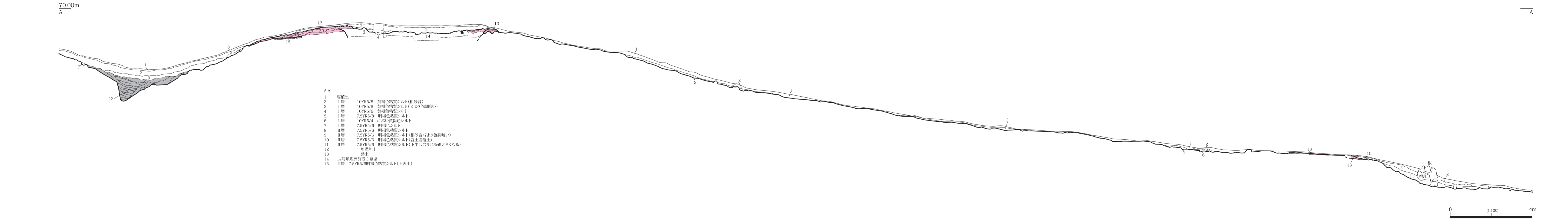
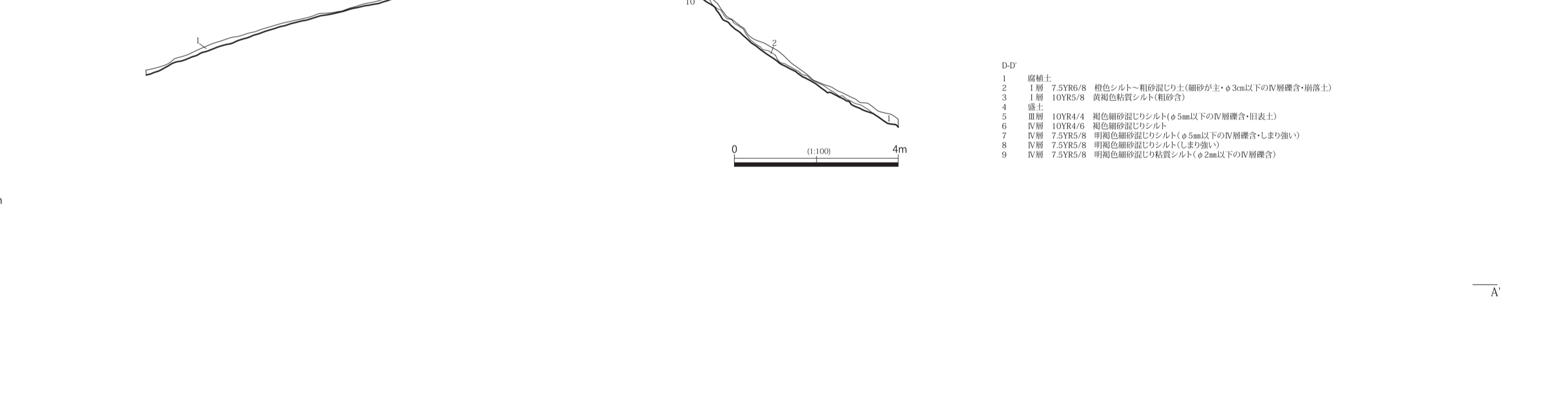
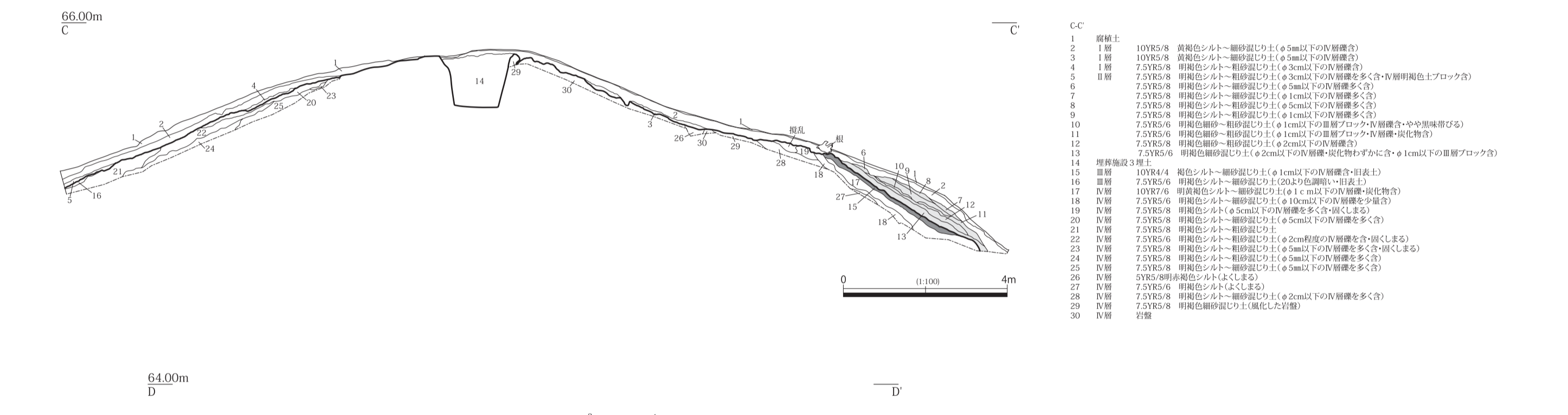
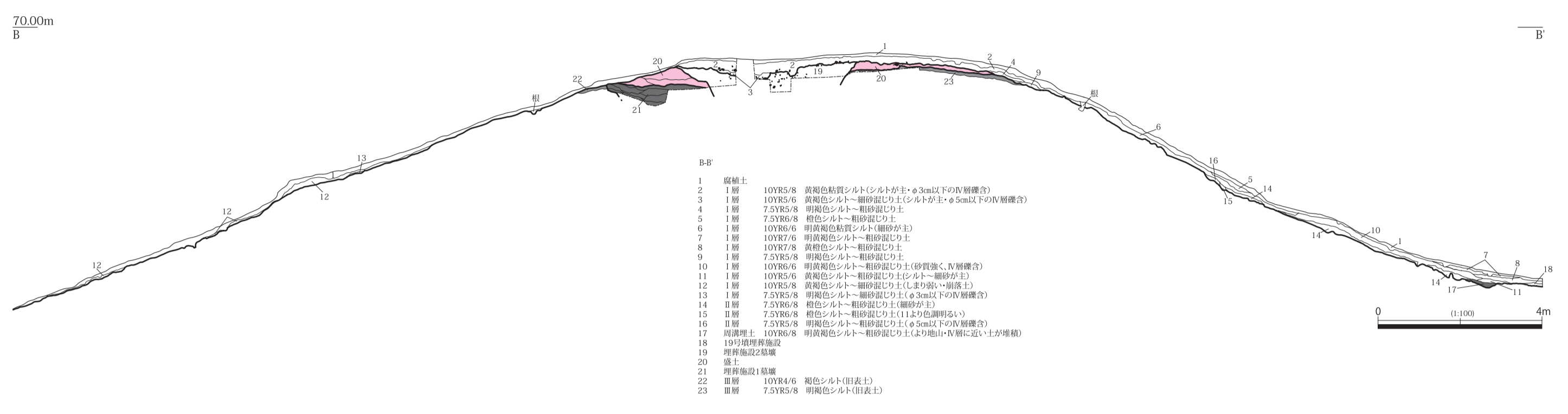
〒680-8570 鳥取市東町1丁目271番地

電話 (0857) 26-7525

印刷 株式会社 矢谷印刷所



付図1 本高古墳群全体図(1/300)



付図2 14号墳 墳丘 平, 断面図(1/200・100)